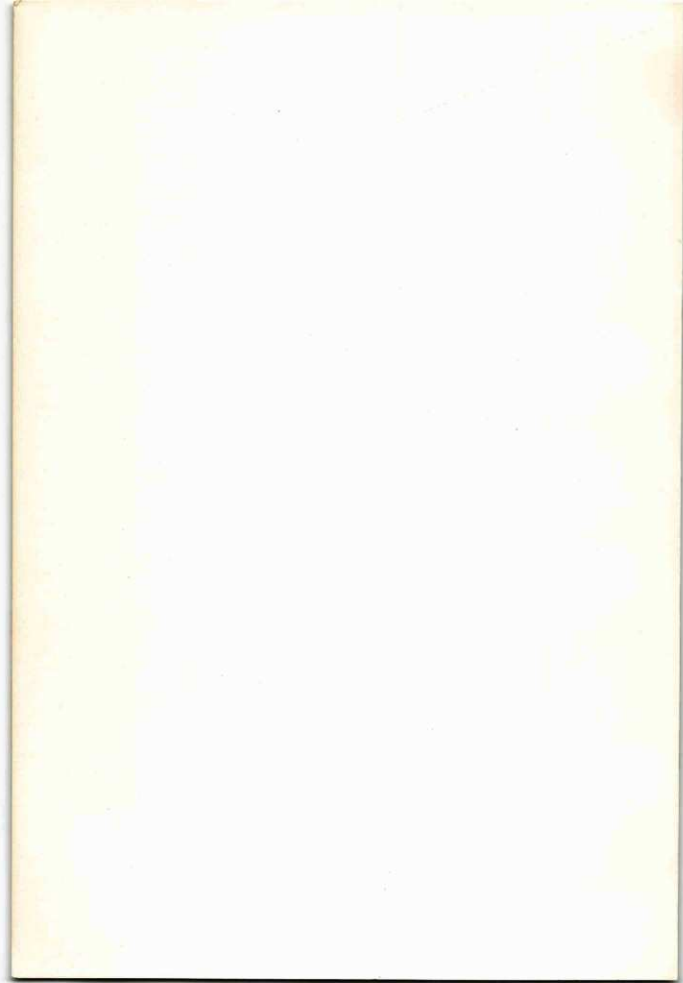


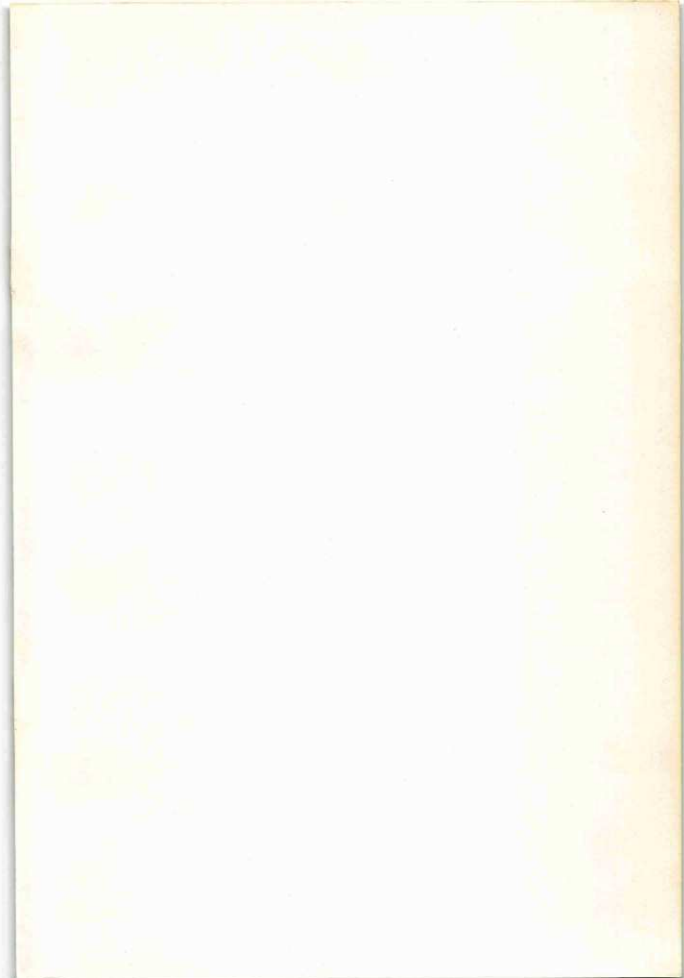
美沢川流域の遺跡群Ⅷ

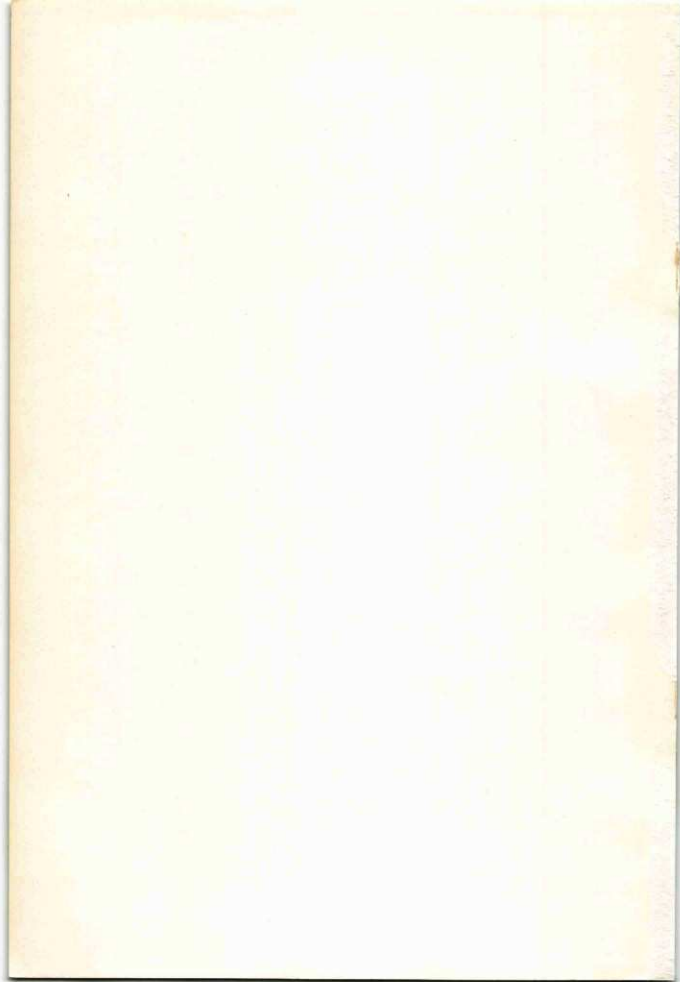
—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭和 59 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





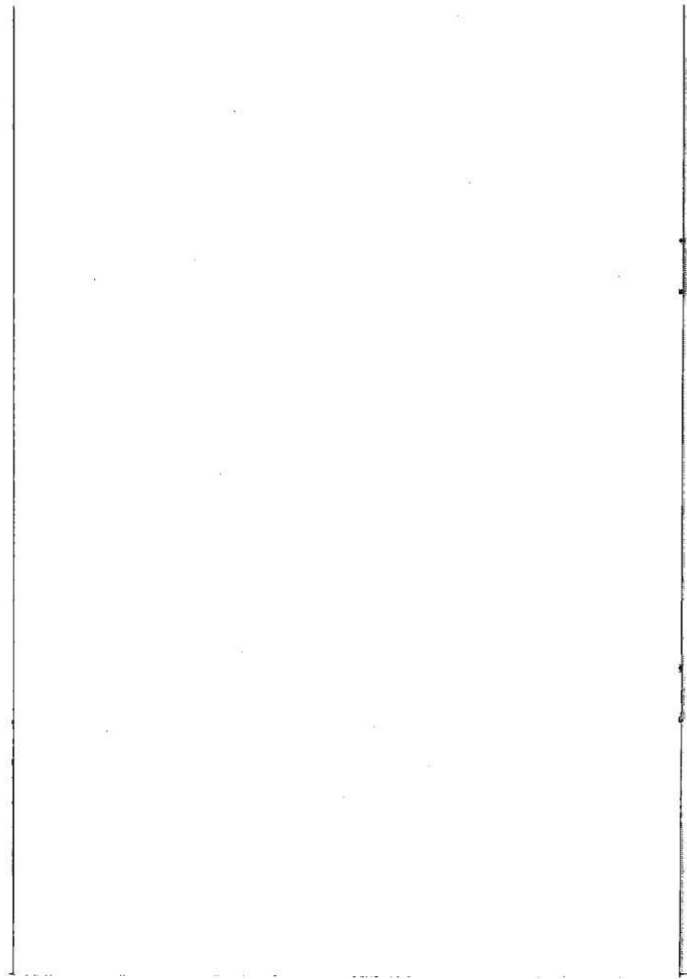


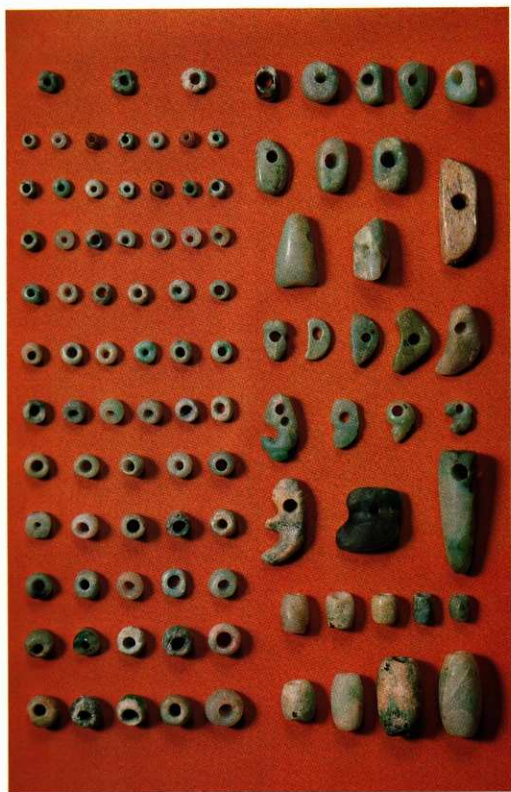
美沢川流域の遺跡群Ⅷ

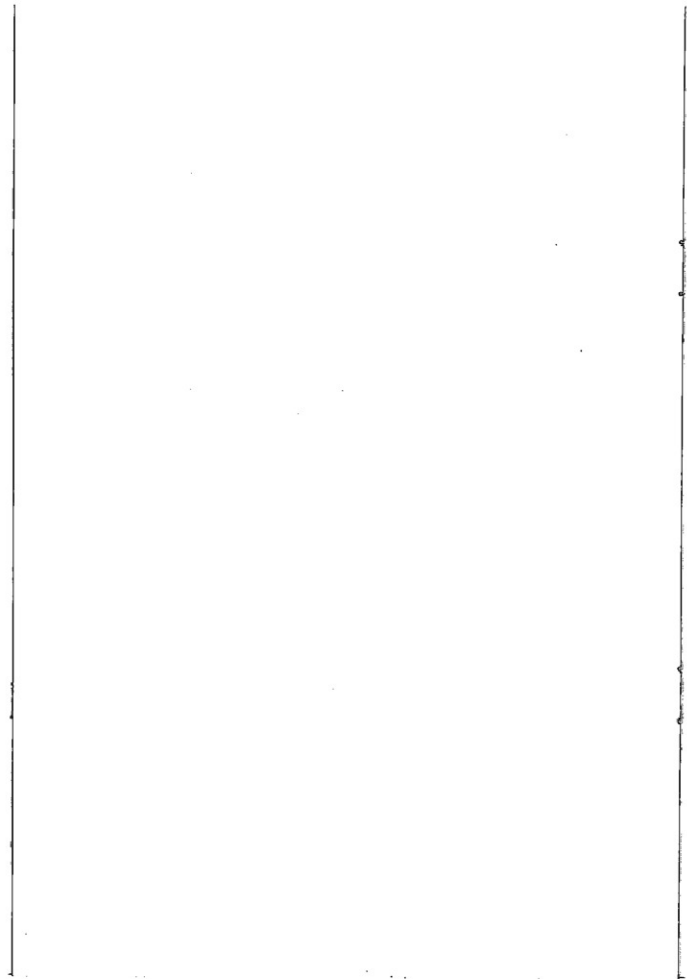
—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

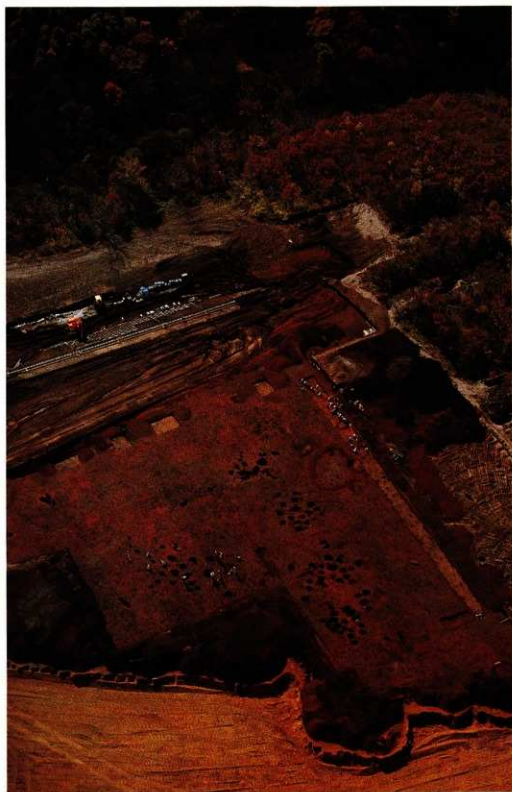
昭和 59 年 度

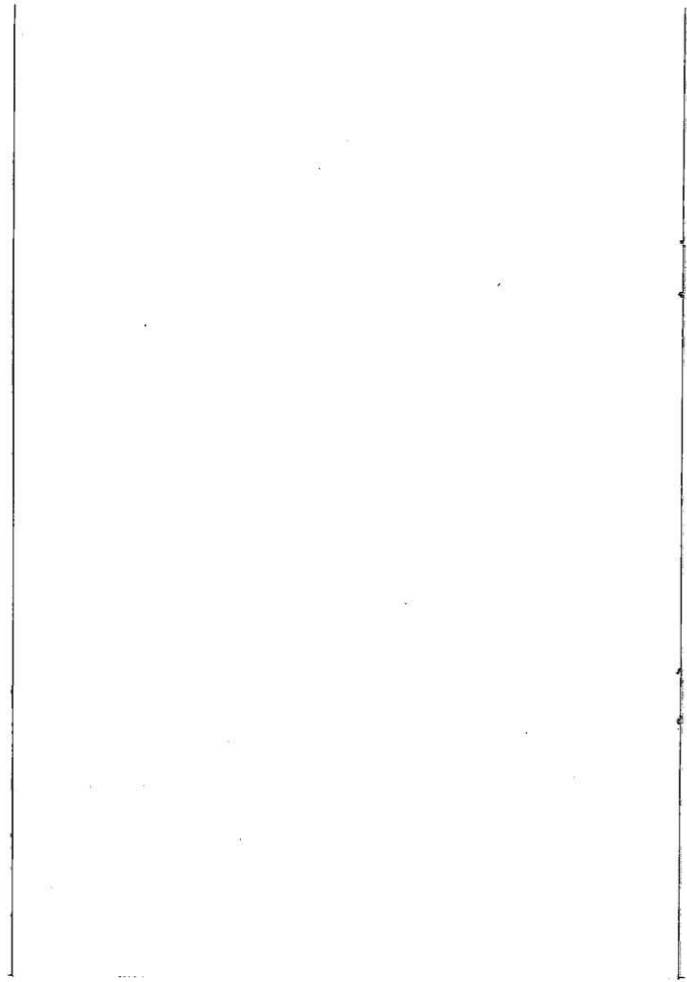
財団法人 北海道埋蔵文化財センター









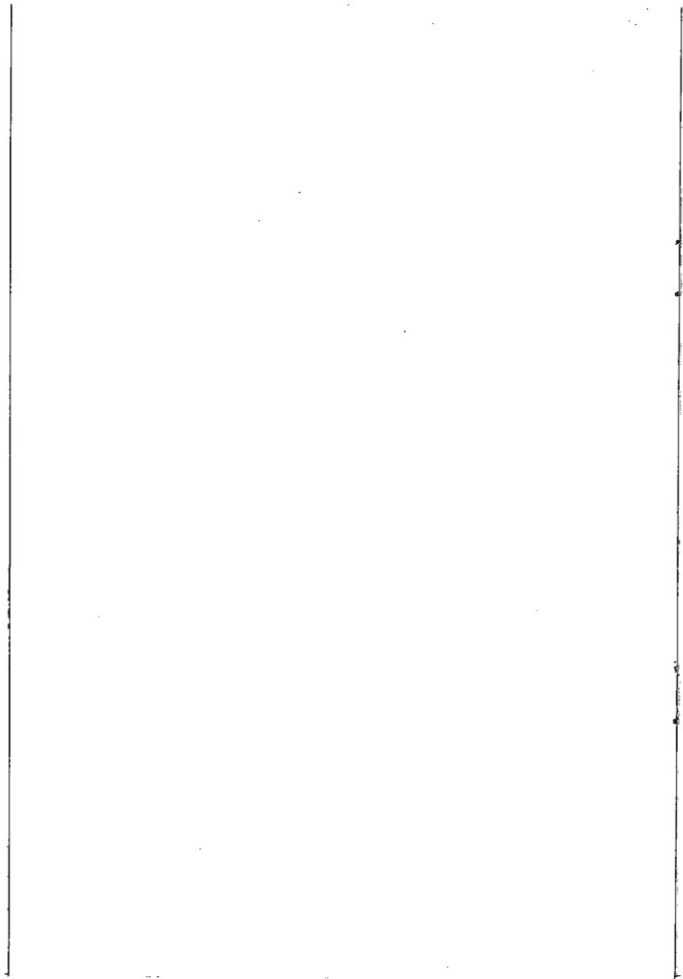


例 言

1. 本書は、昭和59年度に実施した新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施し、本書は調査を担当した調査部調査第1班が作成した。文責は文末に記す。
3. 放射性炭素による年代測定は、京都産業大学山田治氏に依頼した。
4. 黒曜石水和層年代の測定は、帯広畜産大学近堂祐弘氏に依頼した。
5. 調査にあたって、つぎの人びと・諸機関のご協力をいただいた。

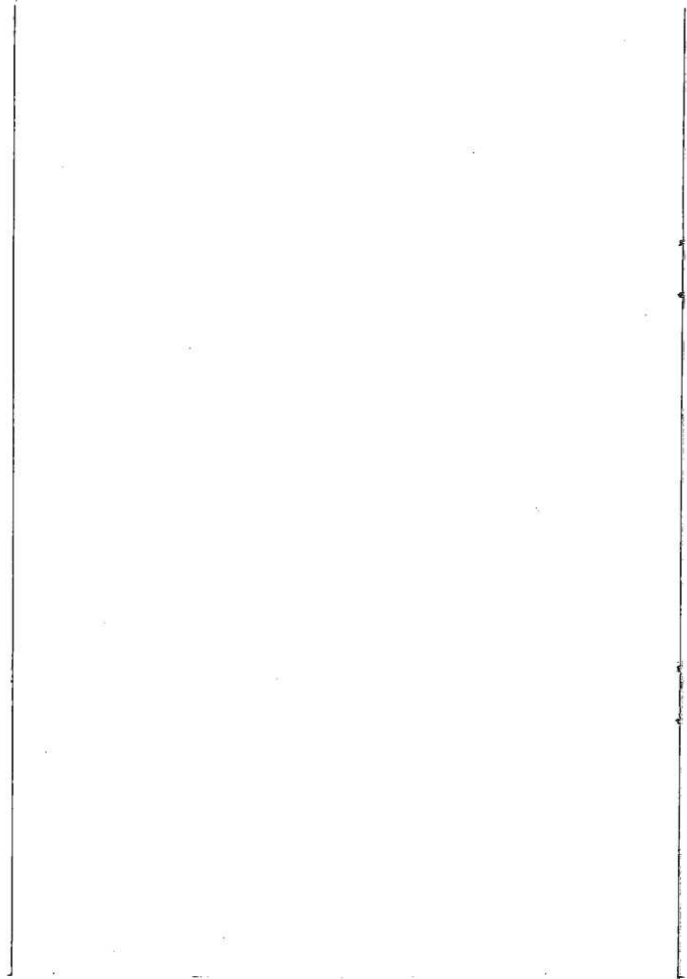
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、北海道大学理学部地質鉱物学教室、札幌医科大学第二解剖学教室、北海道開拓記念館、新潟県教育庁文化行政課、糸魚川市教育委員会、千歳市教育委員会、苫小牧市埋蔵文化財センター、穂別町、赤松守雄、乾芳宏、大谷敏三、笠巻製装男、古原敏弘、近藤祐弘、佐藤一夫、清水雅男、菅原康次、谷岡康孝、田村俊之、辻秀子、寺村光晴、中島栄一、野村崇、三野紀雄、矢野牧夫、山田悟郎、渡辺順

(敬称略、順不同)
6. 整理作業終了後の資料は、北海道教育委員会が保管する。

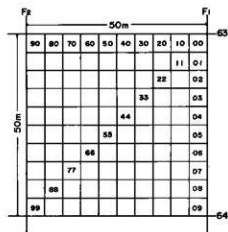


目 次

例 言	1
目 次	3
記号等の説明	5
遺物の分類	7
I 調査の概要	11
1 調査要項	11
2 調査体制	11
3 遺跡群の立地と環境	13
4 昭和59年度の調査対象遺跡	17
5 調査結果の概要	18
II 美々4遺跡の調査	19
1 概 要	19
2 第I黒色土層の遺構と遺物	22
(1) 遺 構	22
(2) 遺 物	35
3 第II黒色土層の遺構と遺物	44
(1) 遺 構	44
(2) 遺 物	159
4 旧石器時代遺物の確認調査	182
付1 美々4遺跡出土の黒曜石片の水和層年代	185
付2 美々4遺跡出土木炭の液体シンチレーション炭素年代	185
III 美々5遺跡の調査	187
1 概 要	187
2 第I黒色土層の遺物	189
3 第II黒色土層の遺構と遺物	192
(1) 遺 構	192
(2) 遺 物	195
IV 若干の考察	207
1 美々4遺跡における区画墓の変遷について	207
2 美々4遺跡出土の「三日月形石器」について	214
3 美々4遺跡出土の玉について	218
写真図版	227



記号等の説明



①発掘区について

空港建設用地内の分布調査（『美沢川流域の道跡群』昭和50年度 千歳市教育委員会）で用いた50mメッシュを5×5mに100等分して、00～99とした。

②発掘区の基線方向について

発掘区の南北基線は、座標北に対して西偏7°22' 38"である。

③道標の略号および番号について

Hは住居跡、PおよびXは土壌、TはTピットを表わす。番号は原則として検出順である。

ただし、美々4道跡の第II黒色土層発見の土壌は101からである。

④土層の名称について

下記の略称を使用する。

Ta-a層(a)	樽前a降下軽石層
Ta-b層(b)	樽前b降下軽石層
I黒層(I黒)	第I黒色土層
Ta-c1層(c1)	樽前c1降下軽石層
Ta-c2層(c2)	樽前c2降下軽石層
II黒層(II黒)	第II黒色土層
Ta-d1層(d1)	樽前d1降下軽石層
Ta-d2層(d2)	樽前d2降下軽石層
III黒層(III黒)	第III黒色土層
En-aローム層(EnL)	恵庭a降下軽石の風化したローム質粘土層
En-a層(EnP)	恵庭a降下軽石層
SpB層(Sf)	支笏軽石流堆積物

⑤土層の説明について

道標の覆土は、色調と上記土層の混在状態を示す。混在状態は次のように表現する。

A+B	AとBがほぼ等量まじる。
A>B	AにBが少量まじる。
A>>B	AにBが微量まじる。

⑥岩石名の略号について

Apl. アブライト	And. 安山岩	Aga. メノウ	Aga-Sh. メノウ質頁岩
Ba. 玄武岩	Bl-Sch. 黒色片岩	Che. 珪岩	Gni. 片麻岩
Gr-Mud. 緑色泥岩	Gr-Sch. 緑色片岩	Jad. 硬玉	Mud. 泥岩
Obs. 黒曜石	Per. カンラン岩	Sa. 砂岩	Sch. 片岩
Ser. 蛇紋岩	Sh. 頁岩	Sl. 粘板岩	Ta. 滑石
Tu. 凝灰岩			

⑦遺構の記載について

規模は、確認面での長軸長×短軸長/床(底)面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深、で表わす。(単位m)

平面形は、床(底)面の形状で判断した。

遺物は、覆土出土のものも含めて記載する。なお図示した遺物の計測値等は、次の順序で示す。

土器 器高×口径×底径 (単位cm)

石器等 最大長×最大幅×厚さ(単位cm)、重量(単位g)、材質

⑧図版について

図版は原則として下記の縮尺で作成してある。例外については、その都度スケール、方位を示す。

遺構図 住居跡 1:60、これ以外は 1:40 土器実測図 1:4

土器拓影 1:3 石器実測図 1:2

なお、遺構図は発掘区基線の北(西偏7°22'38")を上にして示してある。

⑨遺物の分類について

出土遺物は、7～9ページに示す基準により分類した。

なお、本文中の石器の分類記号は、0:石核・剥片、X:礫を除き、大分類(I～VI)は省略した。

遺物の分類

(1) 土 器

I 群 縄文時代早期の土器

- a 類 いわゆる貝殻文土器群および条痕文土器群（今回の調査では出土していない）
- b 類 格条体圧痕文、組紐圧痕文、燃糸文、縄文等のある土器群
 - b-1 類 東釧路Ⅲ類に相当するもの
 - b-2 類 コッタロ式に相当するもの
 - b-3 類 中茶路式なかりやうに相当するもの
 - b-4 類 東釧路Ⅳ類に相当するもの

Ⅱ群 縄文時代前期の土器

- a 類 いわゆる縄文尖底土器
 - a-1 類 いわゆる縄文土器およびこれに伴うとみなされる羽状縄文土器
 - a-2 類 中野式土器およびこれに類するもの
- b 類 円筒土器下層式土器、植苗式およびこれに類するもの

Ⅲ群 縄文時代中期の土器

- a 類 円筒土器上層式土器
- b 類 円筒土器に後続する土器群
 - b-1 類 天神山式に相当するもの
 - b-2 類 柏木川式に相当するもの
 - b-3 類 トコロ6類および煉瓦台式に相当するもの

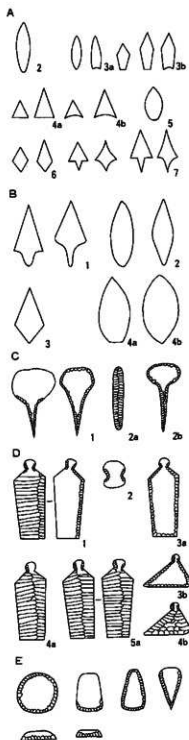
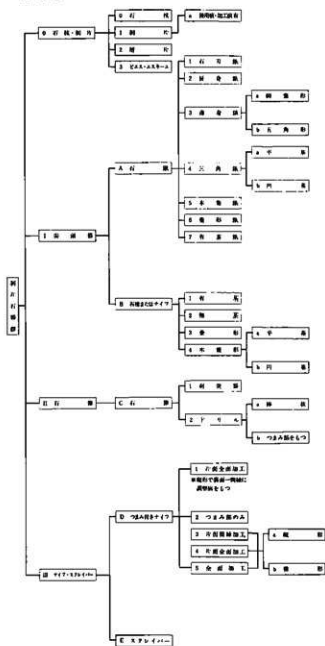
Ⅳ群 縄文時代後期の土器

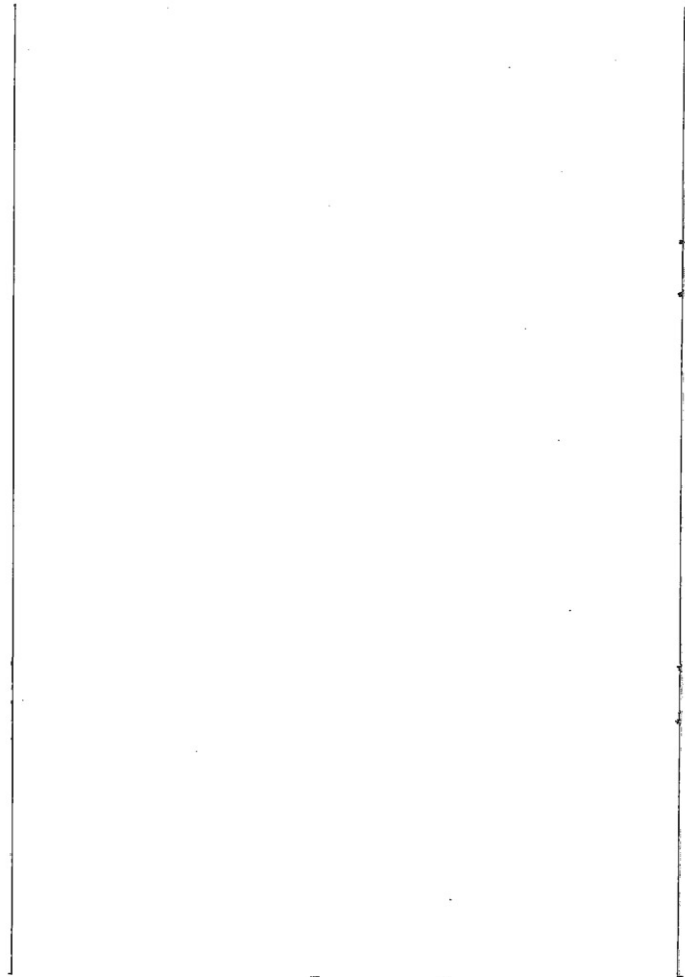
- a 類 余市式および入江式に相当するもの
- b 類 船泊上層式、手籠式、ホッケマ式に相当するもの
- c 類 堂林式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期の土器

- a 類 大洞B式およびBC式に相当するもの
従来はⅣ群c類に含まれていたJX-3・P-106（道教委『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ 昭和53年度）で代表される土器群は、突瘤文・爪形文の組合せをもつ深鉢や三叉文等の付された壺・浅鉢等と破片で判別することは困難であったため、便宜上一括して本類に含める。
- b 類 大洞C₁式およびC₂式に相当するもの
- c 類 大洞A式に相当するものおよびタンネトウL式土器

(2) 石 器





I 調査の概要

この調査は、北海道開発局札幌開発建設部が建設を進めている新千歳空港の用地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の緊急調査で、本年度は第9年次にあたる。

1 調査要項

事業名 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査
 事業委託者 北海道開発局札幌開発建設部
 事業受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター
 調査遺跡

道教委登録番号	遺跡名	所在地	調査面積	備考
A-03-89	美々2遺跡	北海道千歳市美々 988-6212カ	10,906 [㎡]	日黒層以下調査終了。今後は報告しない
A-03-88	美々4遺跡	" 988- ほか	5,180	
A-03-97	美々5遺跡	" 988-3412カ	6,544	
	計		23,630	

調査期間 準備 昭和59年4月12日～5月6日

現地調査 5月7日～10月31日 室内調査 11月1日～昭和60年3月26日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 中村 龍一
 調査部長 竹田 輝雄
 調査第一班長 森田 知忠
 文化財保護主事 青柳 文吉(発掘担当者)
 " 遠藤 香澄
 " 野中 一宏
 " 田中 哲郎
 嘱託 森 秀之
 " 石川 朗
 測量技師 大利 俊男
 写真技師 伊野 正之



図1 遺跡の位置 (この地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図・千歳を複製したものである)

3 遺跡群の立地と環境

新千歳空港の建設用地は、札幌と苫小牧とのほぼ中間にあたる千歳市の南方にあり、現空港と国道36号線とに挟まれたところに位置している(図1)。用地は、北と西を現空港に接し、これと平行する南北に細長い範囲で、広さは、現空港との共有部分も含めておよそ710haである。用地の中央には、千歳・苫小牧両市の境界にもなっている美沢川が西から東に流れ、南端は、勇払原野からつづく湿原に面している。

この地域は、西方約30kmのところにある支笏カルデラを噴出源とする火山砕屑岩台地の東縁にあたり、地表は、更新世の恵庭岳、完新世の樽前山等の放出物によって厚く覆われている。台地は、札幌～苫小牧低地帯に面し、これに向って東に緩やかに傾斜しており、西から東に流路をとる、ほぼ平行な幾筋もの谷によって刻まれている。美沢川も、このような谷のひとつで、低地帯南部を貫流する美々川の一支流となっている。美々川は、千歳市街地の南、現空港の東方に源を発し、美沢川と合流の後、全国有数の野鳥の棲息地として知られるウトナイト沼に注ぎ、勇払川、安平川と合して苫小牧市東郊で太平洋に達している。

札幌～苫小牧低地帯南部は、冷温帯系の広葉樹と、亜寒帯系の針葉樹の混交する、汎針広混交林帯に属している。しかしながら、たび重なる火山噴出物の降下のためか、植生復活の早い広葉樹が卓越し、ことに美沢川周辺では、開拓以後に植栽されたものを除けば針葉樹はみられない。また、この地域には、現在も大規模な湿原が発達しており、縄文海進時のころには、海

表1 新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地調査の推移

所在地	遺教委登録No	遺跡名	51年度	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	昭和60年度以降	計
美沢川遺跡群	千歳市 A-03-89	美々2遺跡									10,906		10,906
	〃 A-03-98	美々3遺跡									10,678		10,678
	〃 A-03-88	美々4遺跡	1,160		美々遺跡(移口)	7,150				5,475	6,180	9,299	30,284
	〃 A-03-97	美々5遺跡	300		6,628	752	8,450				6,544		22,674
	〃 A-03-96	美々6遺跡			5,000		3,450						8,450
	〃 A-03-95	美々7遺跡			5,000		2,400					3,210	10,610
	〃 A-03-94	美々8遺跡						11,900	3,875			19,785	35,560
	〃 A-03-87	美々9遺跡								5,000			5,000
	苫小牧市 J-02-70	美沢1遺跡	790	7,840	11,300		2,340						22,270
	〃 J-02-80	美沢2遺跡		10,560									10,560
フシベツ	〃 J-02-81	美沢3遺跡	1,750				3,480					31,020	36,250
	〃 J-02-73	美沢4遺跡				23,760							23,760
	〃 J-02-82	美沢5遺跡				6,800							6,800
		計	4,000	18,400	27,928	31,312	27,270	11,900	3,875	11,475	23,630	73,992	233,782

※ 昭和59年9月17日現在(第6次調整)

■ 調査未了

■ 調査面積約240m。但し面積累計から除外。

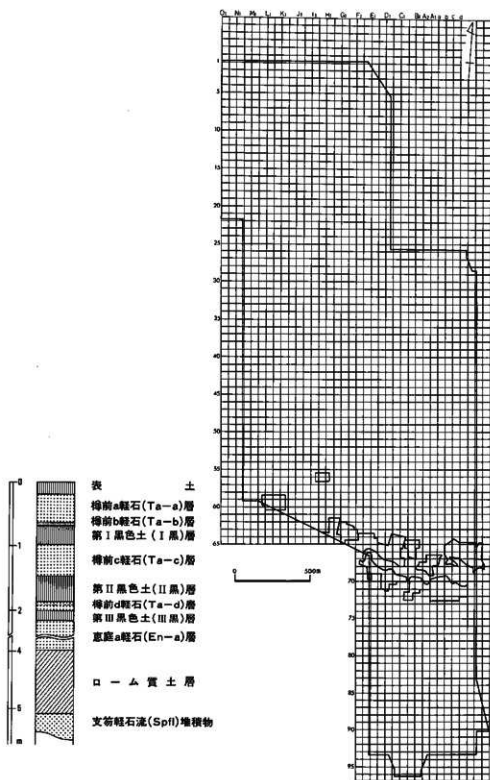


図2 用地内の遺跡分布と土層図

水が入りこみ入江が潟湖のような景観であったと考えられている。縄文時代前期の内陸性貝塚として名高い美々貝塚は、美々川と美沢川との合流点から、本流を3kmほどさかのぼったところにある。ヤマトシジミを主体とし、縄文尖底土器を出土するこの貝塚は、このような環境のもとで形成されたものである(千歳市教委『美々貝塚』昭和50年度)。

新千歳空港用地内の埋蔵文化財包蔵地の分布調査は、建設計画の具体化に伴い、昭和49・50年度に千歳市教育委員会によって実施され、20数万㎡の分布が明らかにされている(千歳市教委『美沢川流域の遺跡群』昭和50年度)。それによれば、包蔵地は、用地中央の美沢川の両岸地区と、南端の湿原に面した台地上の2か所に偏在し、それぞれ機密な分布域を形づくっている(図3)。これらについて、私たちは、前者を「美沢川遺跡群」、後者を「フレベツ遺跡群」と呼ぶことにしている。

両遺跡群の発掘調査は、昭和51年度に北海道教育委員会によって着手され(道教委『美沢川流域の遺跡群』I～III 昭和51～53年度)、昭和54年9月、財団法人北海道埋蔵文化財センターの設立を機に当センターに継承されて現在に至っている(道埋文『フレベツ遺跡群』昭和54年度および『美沢川流域の遺跡群』IV～VII 昭和55～58年度)。これまでの発掘調査の推移は表1に示したとおりである。

本年度調査した、美々2・4・5遺跡は、ともに美沢川左岸の台地縁から斜面にかけて立地する縄文時代を中心とする遺跡である。層序は図2に示すとおり、上位から表土、樽前山降下軽石a(Ta-a)層、Ta-b層、第I黒色土(I黒)層、Ta-c層、II黒層、Ta-d層、III黒層、恵庭岳降下軽石a(En-a)層、ローム質粘土層、支笏軽石流域堆積物(Spf)で、主たる遺物包含層は、I黒層とII黒層である。これらのうち、Ta-a層とTa-b層は歴史時代の火山灰で、古記録からそれぞれ1739(元文4)年および1667(寛文7)年の噴出物と考えられている。

Ta-c層は、上下両面から大洞A式並行とされるタンネトウシ式土器が出土することから、縄文時代晩期末葉の降下物であることが明らかである。Ta-d層には、かつて8980±160y.B.P.(GaK-2208)の年代が与えられていたが、苫小牧市有珠川2遺跡で下位から吹切沢式類似の貝殻文土器が出土した(道教委『有珠川2・植苗3遺跡』昭和53年度)ことによって、8,000年前程度の降下物とみなされるに至っている。また、美々4遺跡のIII黒層から、黒曜石製の大型両面調整石器を(『美沢川流域の遺跡群』IV)、隣接の美々5遺跡および右岸の美沢1遺跡で、En-a層下のローム質粘土層から尖頭器様石器を含む石器群を検出したことがある(『美沢川流域の遺跡群』III)。

4 昭和59年度の調査対象遺跡

(1) 調査の経緯

本年度の調査対象遺跡は、当初、美々5遺跡の一部と、美々2遺跡で、前者は6,544㎡、後者は13,750㎡であった。なお、前者は用地問題の解決をまって、昭和58年度に範囲確定がなされた遺跡である。

一方、美々4遺跡の昭和58年度の調査結果からは、遺構・遺物の分布が、当初の範囲を超えて用地内に広がることが想定されていた。また、隣接地区で、新たに用地問題が解決したことから、改めて道教委による分布調査が実施された。その結果、遺跡の拡大は明らかとなり、工事の急がれる部分6,180㎡を本年度の調査対象とすることになった。また途中で、美々2遺跡の調査対象面積は、10,906㎡に変更された。

こうした経過の中で、美々2遺跡の調査は完了せず、来年度以降に継続されることになった。

(2) 調査結果の概要

美々4遺跡の本年度調査実施地区は、昨年度の調査地区に隣接している（遺埋文『美沢川流域の遺跡群』Ⅶ 昭和58年度）。

Ta-c層を挟んだ腐植土層（第I・第II黒色土層）から、縄文時代の遺構と遺物が検出された。第I黒色土層からは、墓墳を含む40個の土壇と土器、石器が検出された。土器の大半はクヌエトウL式で、地方化した大洞A式が若干含まれる。

第II黒色土層からは住居跡、墓墳、Tピット、焼土等が検出された。このうちもっとも多かったのは墓墳で、124個を数える。これらの大半は台地上で発見されており、数個から20数個がまとまりを成し、群を形成していることがとらえられた。調査の結果、後期中葉の所産であることが分かり、後期末に盛行する岡堤墓の発生を解明する上で重要である。

住居跡は3軒検出され、このうちの2例は後期初頭に位置づけられる。Tピットは台地平坦部から斜面にかけて6個検出された。

出土土器は17,122点で、このうち6割は後期に分類される。その中でも墓群形成の時期である中葉のもの（IV群b類）が多く、分布も墓群周辺に濃密である。

第I・第II黒色土層の調査終了後、Ta-d₂層下位の第III黒色土層およびEn-a層下位のローム質粘土層において遺物の確認調査を実施した。トレンチを設定しての調査であったが、前者から黒曜石のチップ10点、後者からフレイク1点が出土した。水層による年代測定の結果はそれぞれ約12,000年、18,000年である。

美々5遺跡の本年度調査地区は、美沢川を臨む台地縁辺から50～70mほど隔てた平坦部で、面積は6,544㎡である。

調査の結果、調査地区の南端に5個の土壇が検出された。出土した遺物は、縄文時代早期から晩期にかけての土器と、これに伴う石器等である。

（森田 知忠）

II 美々4遺跡の調査

1 概 要

美々4遺跡は、美沢川左岸の標高23m前後の台地とこれに続く斜面に位置し、包含層の一部は美沢川岸の低地および現河床下にも広がっている。本遺跡は過去4次にわたって調査が行われ、住居跡、墓、Tピットなど多数の遺構と90万点にのぼる遺物が発掘されている。

昭和58年度の調査では、50年の分布調査で確定された線引きの外にも本遺跡が広がっている

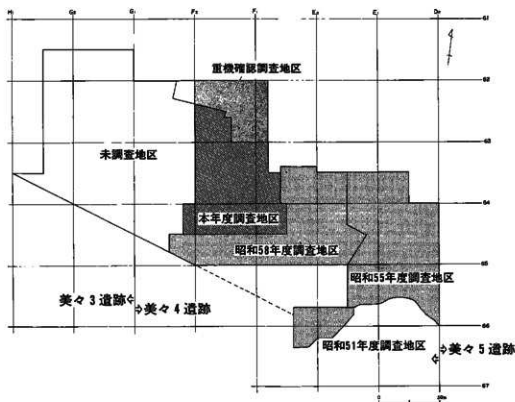


図4 美々4遺跡の調査地区

ことが明らかになった。この地域は新空港用地内であるため、工事に先立って本年6月に北海道教育委員会社会教育部文化課による分布調査が実施された。その結果、当初の予測どおり縄文時代の遺構、遺物が確認されたため、発掘調査が必要な部分（4,910㎡）と、なお広がりも予測される隣接地域に対して重機による確認調査を必要とする部分とが設定された。

後者においては、バックホウで数本のトレンチをあけて遺構、遺物の検出に努めたところ、土壌が密に分布していることがわかった。そのため再度工事原因者と文化課との間で調整が図られ、新たに1,270㎡が発掘分として追加された。したがって本年度の最終的な発掘対象面積は6,180㎡である。

現地調査を行なった期間は8月1日から10月31日までで、このうち確認調査は文化課の協力を得て8月20日から31日までの間で実施した。確認調査では6個の土壌と、その周辺から若干の遺物が検出されている。これらについても本書中に併せて報告する。

室内作業は8月1日から昭和60年3月23日まで行なった。

本年度の調査地区は、かつて周墳墓が検出された台地縁辺部の北西に隣接する地域で、これに続く平坦部および斜面を含んでいる。

遺跡は縄文晩期末葉に降下した、厚さ50cmほどの火山灰（Ta-c層）を挟んだ上下の腐植土層中に広がっている。下位の腐植土層（第II黒色土層）については、発掘調査地区全体の6,180㎡を、上位の腐植土層（第I黒色土層）については、主に斜面の2,925㎡について調査した。また、重機による確認調査地区では、主としてII黒層を対象とした。

I黒層の調査では40個の土壌と縄文晩期末葉の土器片、これに伴うと思われる石器等が検出された。40個の土壌のうち2個は墓および墓の可能性があるので、これら以外のものは用途不明である。土壌の多くは斜面を浅く刻む沢沿いの地区から集中して検出されている。昨年度の調査でも同じ沢沿いから用途不明の同様な遺構が検出されており、本年度のものもこれと一連のものと考えられる。

遺物は浅い沢の東側に多く分布し、西側は少なく、沢から離れるにつれてまばらとなる。出土点数は土器片3,303点、石器等572点である。

II黒層からは住居跡3軒、墓124個、Tピット6個、その他用途の不明な土壌3個、焼土4か所が検出された。住居跡は2軒が台地上に、1軒は斜面にある。前者はII黒層上面ですでにくぼみとして、その存在が予測されていたもので、伴出遺物から後期初頭に位置づけられる。後者は時期不明で、規模が小さく、特殊な遺構かもしれない。

土壌墓の多くは台地平坦部から縁辺にかけて集中して作られている。これらはそれぞれ数個～20数個から成る「群」を形成している。重機による確認調査部分で検出された土壌墓を含めると6か所の「群」の存在が認められる。

遺物の調査区のほぼ全域から出土しているが、とくに台地縁辺から斜面にかけて分布が濃い。出土数は土器片17,122点、石器等13,540点である。土器のうち6割が後期に分類され、そのなかでも中葉（IV群b類）のものが圧倒的に多い。晩期、中期がこれにつき、前期の土器はわず

かである。

I・II黒層の調査後、III黒層およびEn-a層下のローム質粘土層において遺物の確認調査を行った。その結果、III黒層からは黒曜石のチップ10点、ローム質粘土層からは黒曜石のフレイク1点が見つかった。周辺の拡張を行なったが、これ以外の発見はなかった。(青柳 文吉)

表2 英々4遺跡遺構・遺物一覧

	名称・分類	I 黒層	II 黒層	名称・分類	I 黒層	II 黒層	名称・分類	I 黒層	II 黒層
遺構	住居跡		3	土壇墓	2	7	焼土		4
	土壇墓群		6	Tピット		6			
	(墓壇)		117	その他の土壇	38	3			
土器	IIa-2		15	IIIb-3		1,287	Vc	3,300	2,202
	IIb		19	IVa		248	合計	3,303	17,122
	IIIa		356	IVb		8,961	遺構内出土	111	2,345
	IIIb-1		13	IVc	3	1,615			
	-2		43	Va		2,363			
石器	石鏃A3b		2	D		2	砥石K1		1
	3	1		スクレイパーE	58	38	破片		28
	4a		7	石斧F1		4	台石・石皿M		1
	b		7	2a		4	破片		6
	4	1	3	b		15	石鏃 N 破片		5
	5		3	c		5	打削器 (IV) 破片	2	250
	6	1	1	e	2	10	研磨器 (V) 破片		2
	7	35	131	2		10	石核 00	7	14
	A	2	27	F		34	剥片 01	245	5,028
	石棒またはナイフB1		15	破片		2	使用痕・加工痕有剥片 1a	18	57
	2		3	たたき石G1	2	4	屑片 2a	148	6,677
	4b		1	2	1	11	礫 XO	9	108
	B		16	3	2	8	礫片 1	29	912
	石鏃C1	2	3	4	1	3	石製品	1	9
	2a		2	G	2	39	土製品		4
	つまみ付きナイフD1		1	破片	2	1	合計	572	13,540
その他	3a		2	礫器H		1	遺構内出土	30	1,540
	3		6	すり石J1	1				
	4a		1	4		1			
	5a		2	破片		13			

2 第I黒色土層（I黒層）の遺構と遺物

I黒層からは、40個の土壌と、V群c類を主とする土器片、および石器等が出土した。

(1) 遺 構

検出された遺構は土壌のみである。土壌は、P-1、1個を除きすべて調査地区の東半に存在していた。この土壌群は、分布から2つのグループに大別することができる。すなわち、E₂-64-63区を中心として斜面にある9個からなる一群と、調査地区を北東から南西へ横切る浅い沢に沿って集中する31個の一群である。後者は、昭和58年度の調査で発見された土壌群に連なるものである。

個々の土壌はいずれも平面形が円形ないし楕円形で、規模は径1m前後である。切り合い関係のあるものは少ない。ただし、沢部分にある土壌群については、Ta-c層が流失してしまっているところもあり、ほとんどがII黒層上面で検出された。このため、上面部分の形状・規模についてはよくわからない土壌が多い。構築時期は、確実に共存する遺物がないためははっきりしない。しかし、I黒層から出土した土器は、遺構の構築時にII黒層から掘りあげられたと思われるものを除けば、すべてV群c類であることから、年代は縄文時代晩期末と考えてよさそうである。なお、調査途中で遺構でないことがわかったP-2～6は欠番になっている。

1) 墓および墓の可能性のある土壌

該当するものは2個ある。このうち遺体が確認された土壌はP-26のみで、P-7は覆土の状態から墓の可能性があると推定したものである。

P-7

Ta-c層上面で確認。覆土は黒色土とTa-c層の混土層で、明らかに埋め戻されたものであり、墓である可能性が高い。各層は炭化物を多く含有していた。墳底はII黒層を掘り込んでつくられ、凹面をなしている。

位置 E₂-64-82

平面形 円形

規模 1.38×1.20/0.60×0.54/0.54

覆土 I 暗褐色 (I黒+c₁)

II 黒褐色 (I黒+c₁)

III 黒色 (II黒>c₁)

IV 暗褐色 (c₁>I黒+II黒)

V 灰褐色 (c₁>II黒)

VI 黄褐色 (c₁)

VII 茶褐色 (c₂)

遺物 覆土 土器 Vc: 3。

2) その他の遺構

用途のよくわからない土壌を一括した。これらの土壌は伴出遺物がなく、覆土も自然堆積・埋め戻しのいずれとも判断がつかなかった。しかし、前述のように土壌群の分布に強い偏在性が認められることは、将来それらの用途を特定する何らかの手がかりになると思われる。

以下、各土壌をP-1を除き、沢に沿って分布する一群と、その東側にある一群の2つに分け、それぞれまとめて説明する。

P-1

Ta-c₁層上面で確認した。すり鉢状の断面形を呈する。遺物はない。

P-8~11・18・20~45

沢に沿って集中する土壌群である。P-8~10・18は、Ta-c₁層上面で確認できた土壌で、いずれもII黒層に掘り込まれている。P-10・11にはテラス状の段がある。P-18の壁は、Ta-c層の崩落のため外反していた。P-20~45は、II黒層上面で発見した土壌である。II黒層への掘り込みの度合いによって、墳底部が浅皿状に残るもの(P-21~25・28・29・38~44)と立ち上がりが比較の明瞭にとらえられるもの(P-20・30~37・45)がある。墳底部はまるく、壁との境界が不明瞭なものが多い。

P-12~17・19

調査地区の南東隅で検出された一群である。すべてTa-c₁層上面で確認された。P-13~15・19の4つの土壌はつながっているが、本来の切り合い関係にあるのはP-14とP-19である。P-14が古くP-19が新しい。他はP-13周囲のTa-c層の自然崩落によるものと思われる。P-12はわずかにII黒層に掘り込まれている。P-16・17はTa-c₂層を墳底としている。P-17は平面形が楕円形で、すり鉢状の断面形を呈していた。

遺構出土の遺物

土壌からは総計141点の遺物が出土した。遺物はすべて覆土から得られたもので、底面出土のものはまったくない。土器片は細かく割れたものが多く、復元できたものはない。石器類も石鏃・スクレイパー等の道具はわずかで、ほとんど剥片である。出土状況は散漫で、意識的に配置・埋納されたとは考えられない。これらはおそらく、土壌周囲に散乱した遺物が流れ込んだものであろう。事実、P-16とP-17から出土した土器片が接合し(図10、P-17-2)、P-13出土のものと包含層出土のものが接合している(図9、P-13-1)。P-25(図11、P-25-1)、P-31(図12、P-31-1)から出土したIV群の土器片は、II黒層から引きあげられたものである。P-13からは滑石製の玉が出土している(図9、P-13-5)。これは、出土状況からみて遺構に関係するものではないようである。

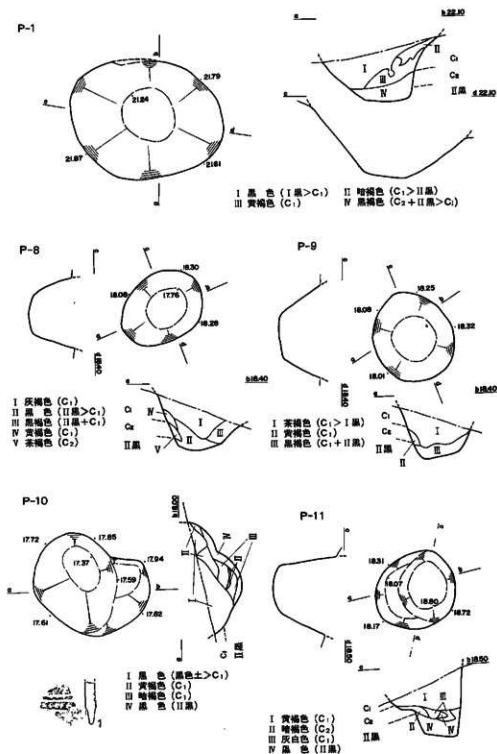


図8 P-1・8・9・10・11と遺物

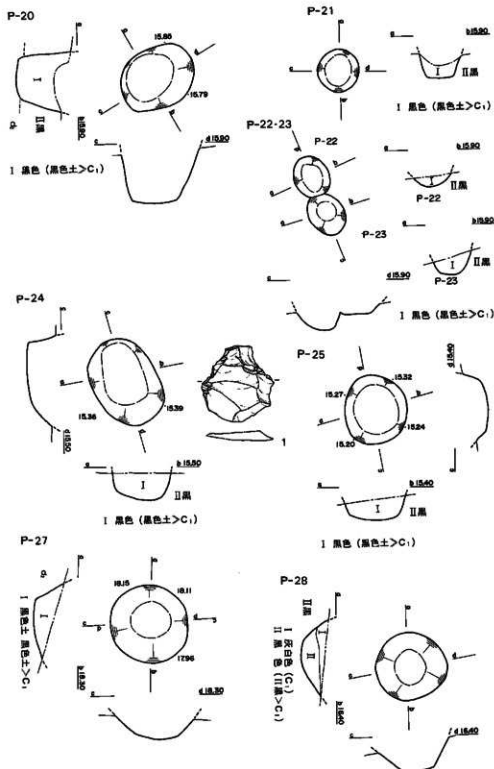


図11 P-20・21・22・23・24・25・27・28と遺物

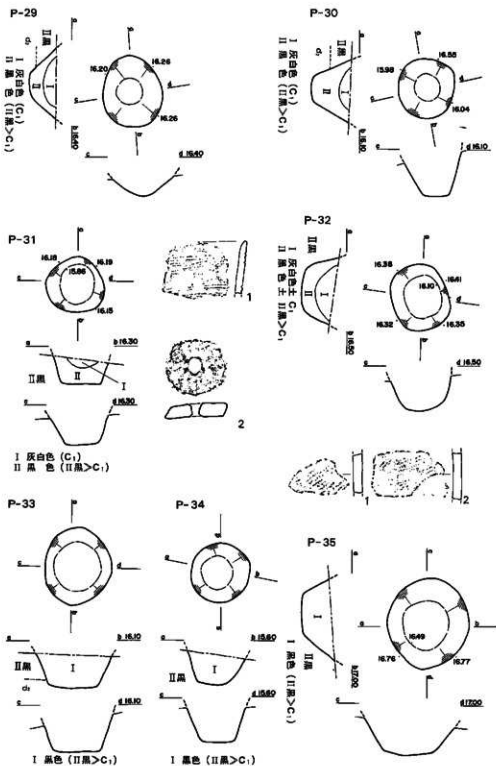


図12 P-29・30・31・32・33・34・35と遺物

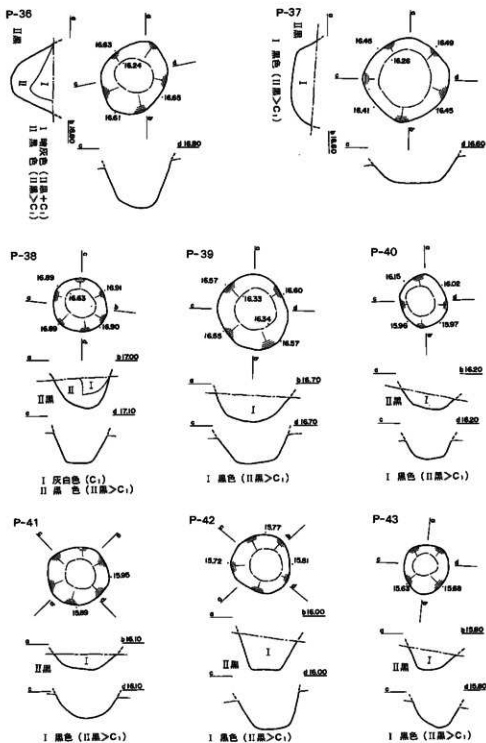


図13 P-36・37・38・39・40・41・42・43

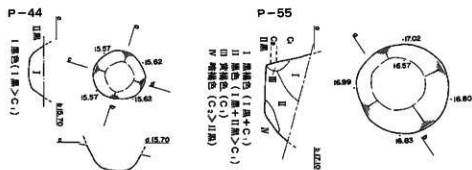


図14 P-44・45

表3 遺構一覧

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	備考
			確認面	底面	最大深		
P-1	E ₂ -64-82	円形	1.70×1.27	0.60×0.58	0.88		
P-7	"	"	1.38×1.20	0.60×0.54	0.54		墓
P-8	"	楕円形	0.94×0.72	0.46×0.38	0.50	N-131°-W	
P-9	"	円形	1.00×0.86	0.50×0.46	0.46		
P-10	"	不整形円形	1.18×1.20	0.50×0.32	0.42		
P-11	E ₂ -64-81	楕円形	0.90×0.80	0.50×0.42	0.76	N-165°-W	
P-12	E ₂ -64-63	"	0.93×0.74	0.33×0.25	0.45	N-185°-W	
P-13	"	円形	0.68×(0.58)	0.34×0.29	0.39		P-19と切り合う
P-14	"	"	1.06×0.70	0.46×0.42	0.46		P-15と切り合う
P-15	"	楕円形	1.03×0.82	0.68×0.54	0.30	N-57°-W	P-14と切り合う
P-16	E ₂ -64-64	"	0.85×0.78	0.48×0.38	0.43	N-180°-W	
P-17	E ₂ -64-54-64	"	1.40×0.91	0.52×0.32	0.49	N-25°-W	
P-18	E ₂ -64-83	円形	1.15×1.20	0.50×0.46	0.50		
P-19	E ₂ -64-63	"	(0.64)×0.60	0.34×0.27	0.54		P-13と切り合う
P-20	F ₁ -64-04	楕円形	0.82×0.62	0.53×0.45	0.56	N-60°-E	
P-21	"	円形	0.43×0.45	0.34×0.30	0.24		
P-22	"	楕円形	0.40×0.42	0.32×0.21	0.10	N-70°-W	P-23と切り合う
P-23	"	円形	0.42×0.40	0.20×0.20	0.23		P-22と切り合う
P-24	"	楕円形	0.94×0.70	0.65×0.44	0.38	N-16°-W	
P-25	"	円形	0.62×0.78	0.52×0.48	0.20		
P-26	E ₂ -64-62-72	楕円形	1.08×0.90	0.90×0.60	0.60	N-64°-E	墓
P-27	E ₂ -64-81	円形	0.82×0.82	0.38×0.42	0.24		
P-28	E ₂ -64-94	"	0.72×0.76	0.38×0.32	0.24		
P-29	"	"	0.74×0.64	0.28×0.28	0.29		
P-30	"	"	0.62×0.60	0.26×0.26	0.42		

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	備 考
			確認面	底 面	最大深		
P-31	E ₂ -64-93	円 形	0.60×0.62	0.36×0.42	0.30		
P-32	"	"	0.70×0.66	0.44×0.40	0.37		
P-33	E ₂ -64-94	"	0.80×0.70	0.50×0.50	0.35		
P-34	"	"	0.60×0.62	0.34×0.33	0.30		
P-35	E ₂ -64-93	"	0.86×0.96	0.48×0.52	0.32		
P-36	"	"	0.82×0.67	0.42×0.36	0.44		
P-37	"	"	0.90×0.93	0.62×0.56	0.25		
P-38	E ₂ -64-83	"	0.60×0.58	0.34×0.30	0.31		
P-39	E ₂ -64-93	"	0.80×0.78	0.47×0.45	0.26		
P-40	"	"	0.56×0.50	0.34×0.30	0.21		
P-41	"	"	0.66×0.66	0.34×0.32	0.18		
P-42	E ₂ -64-94	"	0.62×0.66	0.36×0.36	0.36		
P-43	"	"	0.54×0.50	0.24×0.28	0.21		
P-44	"	"	0.52×0.56	0.32×0.30	0.16		
P-45	E ₂ -64-93	"	1.00×0.94	0.58×0.56	0.40		

表4 遺構出土遺物一覧

遺構 番号	発掘区	名 称	分類	数	遺構 番号	発掘区	名 称	分類	数	遺構 番号	発掘区	名 称	分類	数
P-7	E ₂ -64-82	土 器	Vc	3	P-16	E ₂ -64-64	スライバー	E	1	P-26	E ₂ -64-62	フレイク	01	2
P-8	"	"	"	1	"	"	フレイク	01	2	"	"	すり石	J	1
P-12	E ₂ -64-63	"	"	16	P-17	E ₂ -64- ⁵⁴ ₆₄	土 器	Vc	9	P-31	E ₂ -64-93	土 器	Wc	1
"	"	剥 片	01	6	"	"	剥 片	X1	2	"	"	"	Vc	1
P-13	"	土 器	Vc	10	P-18	E ₂ -64-83	土 器	Vc	17	P-32	"	"	"	3
"	"	フレイク	01	1	P-19	E ₂ -64-63	"	"	2	"	"	"	Wc	14
P-15	"	土 器	Vc	4	P-21	F ₁ -64-04	礎	X0	1	"	"	礎 片	X1	1
"	"	フレイク	01	1	P-24	"	土 器	Vc	1					
P-16	E ₂ -64-64	土 器	Vc	9	P-25	"	フレイク	01	1					

表5 掲載遺物一覧

遺構 番号	図番号	発掘区	分類	数	遺構 番号	図番号	発掘区	分類	数	遺構 番号	図番号	発掘区	分類	数
P-10	1	E ₂ -64-82	Vc	1	P-16	1	E ₂ -64-64	Vc	1	P-25	1	F ₁ -64-04	Wc	1
P-12	1	E ₂ -64-63	"	1	"	2	"	"	1	P-31	1	E ₂ -64-93	"	1
P-13	1	"	"	1	P-17	1	E ₂ -64- ⁵⁴ ₆₄	"	1	P-32	1	"	Vc	1
"	2	"	"	1	"	2	E ₂ -64-64	"	2	"	2	"	"	1
P-15	1	"	"	1	"	2	E ₂ -64- ⁵⁴ ₆₄	"	4					
"	2	"	"	1	P-18	1	E ₂ -64-83	"	1					

遺物	図面番号	図面	名 称	分類	大 き き (cm)	重 (g)	材 質	遺物	図面番号	図面	名 称	分類	大 き き (cm)	重 (g)	材 質
P-12	2	F1-64-65	スライパー	E	3.0 × 3.7 × 0.5	4.9	Obs.	P-16	4	E1-64-64	スライパー	E	5.5 × 3.1 × 1.4	14.0	Obs.
P-13	3	"	"	"	4.6 × 1.7 × 0.5	5.6	"	P-17	3	E1-64-65	石 鏃	A7	2.4 × 0.8 × 0.2	0.4	"
"	4	"	石 鏃	C0	3.0 × 3.2 × 1.6	14.5	"	"	4	"	石 鏃	F	11.8 × 6.1 × (1.0)	(118.0)	Mal.
"	5	"	点	"	0.8 × 0.2 × 0.8	0.4	G1-54b	P-20	1	F1-64-64	フレイタ	04	"	2.7	Obs.
P-15	3	"	U フレイタ	Obs	3.3 × 1.8 × 1.1	6.1	Obs.	P-21	2	E1-64-65	土 器 片	"	3.0 × 3.3 × 0.8	7.5	"
P-16	3	F1-64-64	石 鏃	C1	(3.7) × (2.3) × 0.5	(3.4)	Sk.								

(2) 遺 物

I 層からは、土器片3,303点と石器等572点が出土した。出土分布は、調査地区の南東部、すなわちF1ライン以東、64ライン以南に偏っており、総点数の約92%の遺物がこの範囲から出土した。とくにF1-64-73・74に稠密である。これは土器・石器、あるいは分類別、器種別にかかわらずなく、遺構の分布と一致している。

1) 土器 (図15-18)

土器は、ほとんどが縄文時代晩期末葉のV群c類である。他に遺構構築の際、II層層から引きあげられたと思われる後期末のIV群c類が数点出土した。VI群, VII群はない。

図16-1~3は、深鉢形土器の口縁部破片である。器面調整、焼成ともに良好で精良なつくりである。

図15-1・2, 図16-4~20, 図17-21~32, 図18-33~47は、黄褐色の色調を呈し、焼成は中位で硬質の土器である。器形は深鉢形もしくは浅鉢形とおもわれるが、破片ではいずれとも判断のつかないものが多い。地文の縄文は単節の斜縄文で、LRの例が多いようである。

図16-4~6は口縁部に3本の縄線文をめぐらしたもので、内傾する口唇上にも縄文が施されている。図16-9・10には指頭で横位、斜位に粗っぽい沈線が引かれている。口縁内面にも縄文がある。図16-7・8・11~13は地文の縄文のみの例で、口唇の断面形が切り出し形になるものである。図16-8を除いて口唇内面にも施文がみられる。図16-14の平坦な口唇上には一条の沈線がある。図16-15は浅鉢形土器の破片で、補修孔があげられている。図16-16~20, 図17-21・22は、口唇内面に縦位の縄線文を密に施したものである。図17-23は口唇内面に横位と縦位の交差する縄線文が施文され、その下に刺突がめぐっている。図17-24・25の、わずかに外反する口唇上には縄の押圧がある。図17-26~28は口唇上的一对の突起をもつもので、図17-27には焼成前の貫通孔が、図17-28には横位の縄線文がそれぞれ口縁部にみられる。図17-29~32は浅鉢形の土器で、大波状の口縁をもつものとおもわれる。図18-33~36も浅鉢形の土器らしい。口縁の内側に縄文、縄線文、棒の押圧、刺突等の変化に富んだ文様が施されている。図15-1と図18-37は口縁部に指頭で幅広の沈線を設けたものである。図15-1は小型の鉢形土器で、内面に炭化物が付着している。図18-39~47, 図15-2は、口縁部に数条の平行沈線が圍繞するグループで、深鉢形の土器とおもわれる。沈線は、へら状または棒状の施文具を用いたもので、刺突列をとまうものが多い。図18-48には不規則な沈線が、図15-2には3条の蛇行する沈線が縦位に施されている。

表6 掲載土器一覧

(実測図)

番号	名称	分類	発掘区	大 き さ (cm)				備 考
				器 高	口 径	底 径	底 厚	
1	浅鉢	Vc	E2-64-82・92・93	10.2	12.18	底	8.6	
2	深鉢	#	E2-64-64	(24.5)	32.6	——		

(拓本)

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	Vc	E2-64-74	17	Vc	E2-64-73	33	Vc	E2-64-73
2	#	E2-64-74・84	18	#	E2-64-64	34	#	F1-63-79
3	#	E2-64-74	19	#	E2-64-74	35	#	E2-64-74
4	#	#	20	#	E2-64-64	36	#	F2-64-01
5	#	#	21	#	F1-64-04	37	#	E2-64-64
6	#	E2-64-64	22	#	E2-64-74	38	#	E2-64-63
7	#	E2-64-73	23	#	E2-64-73	39	#	F1-63-79
8	#	#	24	#	E2-64-64	40	#	E2-64-63
9	#	E2-64-74	25	#	#	41	#	E2-64-73
10	#	E2-64-53	26	#	E2-64-63	42	#	F2-64-
11	#	E2-64-63	27	#	E2-64-64	43	#	E2-64-54
12	#	#	28	#	E2-64-63	44	#	F1-64-82
13	#	#	29	#	E2-64-63・74	45	#	F2-64-00 F1-64-79
14	#	E2-64-74	30	#	E2-64-74	46	#	E2-64-73
15	#	E2-64-64	31	#	E2-64-54	47	#	E2-64-63・73・74
16	#	E2-64-63	32	#	E2-64-62			

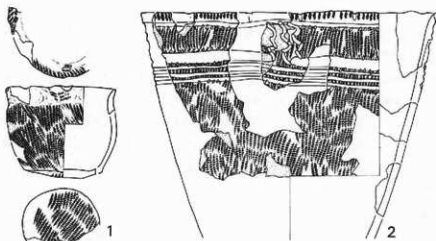


図15 1黒層出土の土器

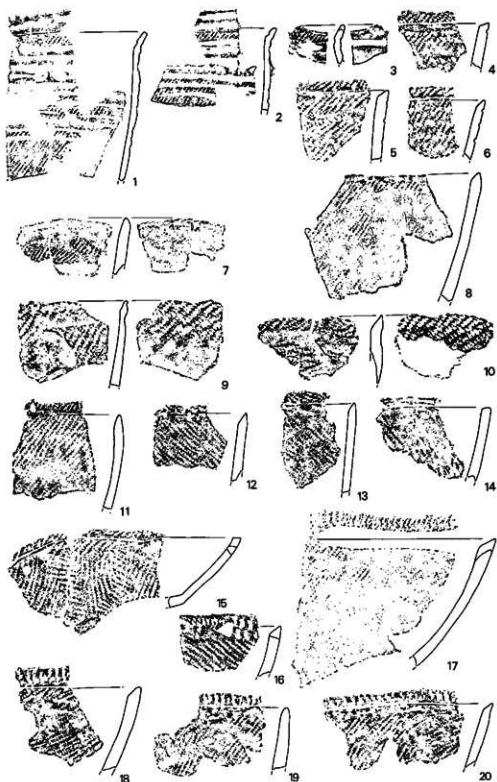


図16 I Ⅰ層出土の土器

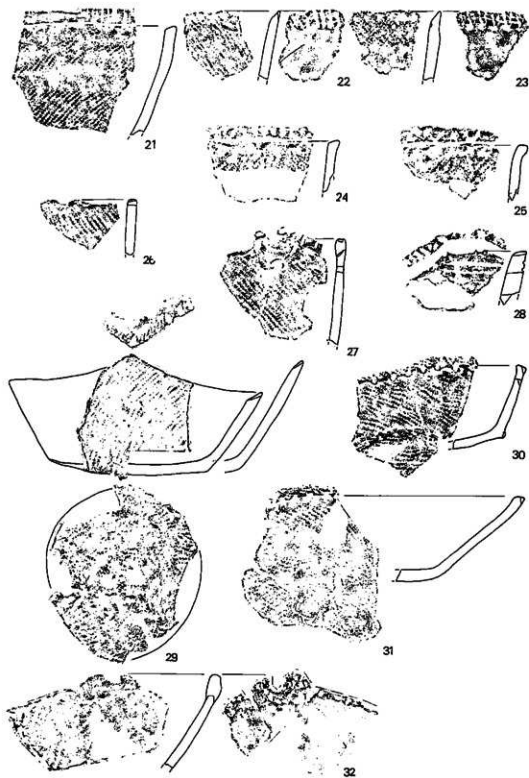


図17 I 層出土の土器

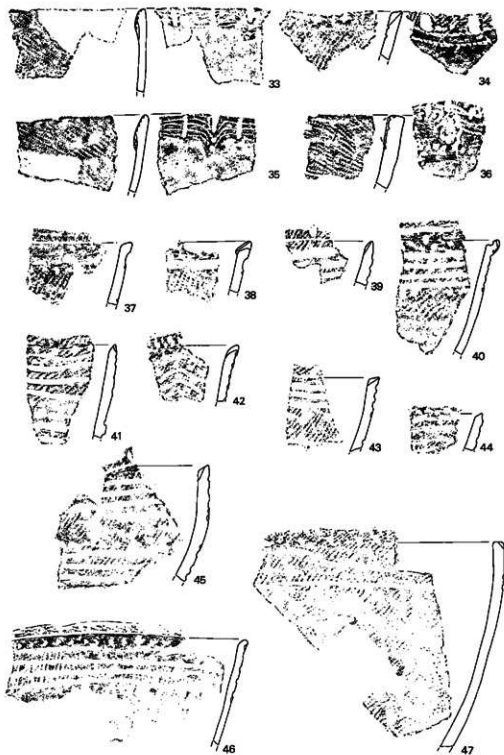


図18 I 層出土の土器

2) 石器 (図19~21)

石器等の73%は、石核、剥片類で占められている。また、石器は剥片石器がほとんどで、礫石器は少ない。さらに、剥片石器のなかではスクレイパー類が50%と卓越しており、礫石器の少なさと合わせて、遺跡の性格を示唆するものと思われる。

石核(1~32): 剥片石器の34%を占めている。有茎のA7類(1~30)が最も多い。二次調整が粗雑で、長さが2cm前後の小型のものがほとんどである。30のみやや大型で、調整も比較的に急である。31・32は無茎で、ていねいな調整が施されている。31は基部が斜めに作り出されており、やや特異な例といえよう。32の基部は湾入している。

石核(33): 頁岩製で単独の尖頭部をもつものである。先端が磨滅して光沢を帯びている。

ナイフ・スクレイパー類(34): 剥片石器の半数がこの類であった。不定形の剥片の周縁に調整を加えて刃部を設定したものである。片面調整で腹面に一次剥離の際の打面と、その時に生じた打瘤を残すものが多い。ただし、37・40・44・47・50・57などでは、片方の側縁には背面側に、別な側縁には腹面側に刃部の2次調整を錯向して施す「くせ」がみられる。41と42は黒曜石の原石を用いたもので、両側縁が使用によって刃こぼれしている。58~62は円形で、縄文時代の「ラウンド・スクレイパー」に似たものである。58は受熱によって光沢を失っている。63は安山岩製で、2次調整のほとんどない粗雑な刃器である。

石核(64): 一部に原石面を残すもので、背面に不規則な剥離痕がある。71は、凹レンズ状の原石の周辺に不規則な剥離をもつものである。

石斧(65・66): 2点出土した。いずれも破損品である。

たたき石(67~70): 67と68は石英質の円礫を用いたもので、67は半割されている。69の側縁にはわずかにたたき痕が認められる。70は大型礫の両側縁と背面の一部分にたたき痕がある。

石製品(72): 1点出土した。滑石製で大きな孔がけられた玉である。(森 秀之)

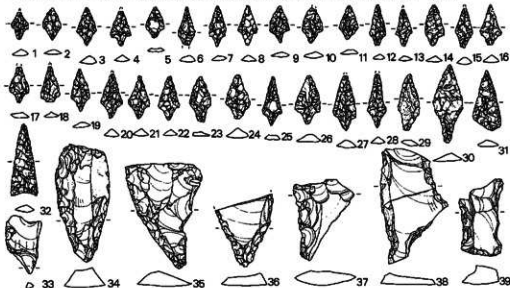


図19 I 黒層出土の石器

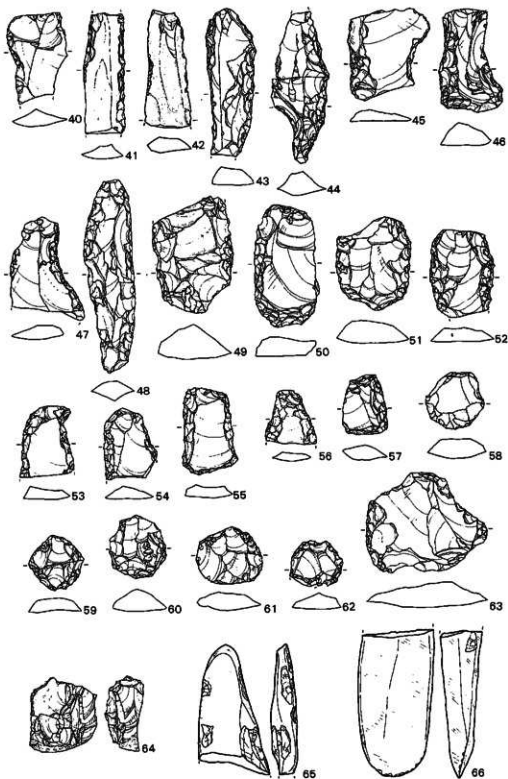


図20 I 黒層出土の石器

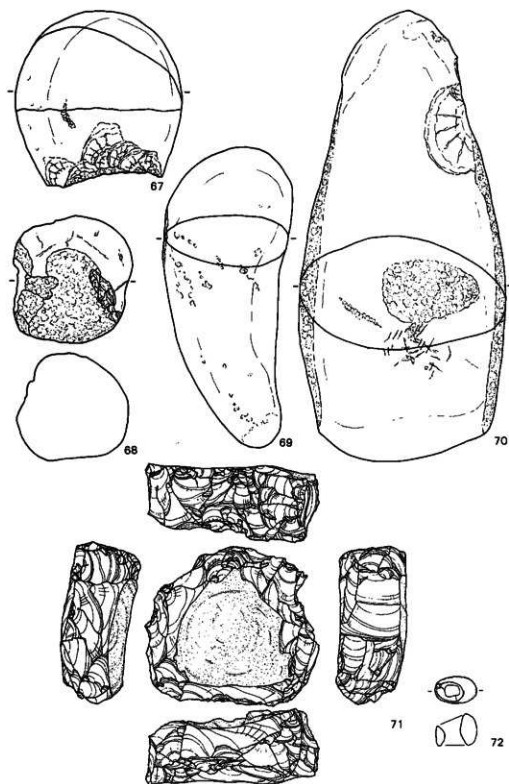


図21 I 層出土の石器等

表7 掲載石器一覧

番号	名称	分類	発掘区	大きさ(cm)	重量(g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	大きさ(cm)	重量(g)	材質
1	石 槌	A7	Er-64-64	1.4 × 0.9 × 0.3	0.3	Obs.	37	ステレイパー	E	Er-64-63	4.4 × 3.1 × 0.8	6.7	Obs.
2	#	#	Er-64-62	1.7 × 0.9 × 0.2	0.3	#	38	#	#	Er-64-74	6.0 × 3.4 × 0.5	9.8	#
3	#	#	Er-64-73	2.0 × 1.0 × 0.4	0.5	#	39	#	#	#	4.0 × 2.3 × 0.9	6.4	#
4	#	#	Er-64-64	1.8 × 1.1 × 0.3	0.4	#	40	#	#	Er-64-63	(4.6) × 3.0 × 1.2	(12.4)	#
5	#	#	Er-64-63	1.6 × 1.0 × 0.2	0.3	#	41	#	#	Er-64-73	(6.3) × 2.1 × 0.8	(15.1)	#
6	#	#	#	2.1 × 0.9 × 0.3	0.4	#	42	#	#	Er-64-64	(6.1) × 2.4 × 0.9	(15.2)	#
7	#	#	Er-64-64	(2.0) × 0.9 × 0.3	(0.4)	#	43	#	#	Er-64-63	7.8 × 2.7 × 1.2	23.7	#
8	#	#	Er-64-62	2.1 × 1.0 × 0.3	0.4	#	44	#	#	Er-64-64 ⁶⁴ ₆₅	(7.9) × 3.0 × 1.2	(24.4)	#
9	#	#	Er-64-63	1.9 × 1.0 × 0.2	0.3	#	45	#	#	Er-64-60	4.7 × 4.4 × 0.8	19.3	#
10	#	#	Er-64-74	(1.9) × (1.1) × 0.3	(0.4)	#	46	#	#	Er-64-63	5.6 × 3.2 × 1.3	22.6	#
11	#	#	Er-64-64	1.8 × 1.0 × 0.2	0.4	#	47	#	#	Er-64-74	(5.5) × 3.9 × 0.9	(14.2)	#
12	#	#	Er-64-74	(2.1) × 0.9 × 0.3	(0.35)	#	48	#	#	Er-64-63	10.1 × 2.9 × 1.1	30.5	#
13	#	#	Er-64-63	1.9 × 0.8 × 0.2	0.3	#	49	#	#	Er-64-64	(6.1) × 4.2 × 1.7	(40.5)	#
14	#	#	Er-64-74	2.1 × (0.9) × 0.3	(0.4)	#	50	#	#	Er-64-63	6.4 × 3.4 × 1.1	28.7	#
15	#	#	Er-64-63	(2.1) × 0.9 × 0.3	(0.45)	#	51	#	#	Er-64-64	4.9 × 3.5 × 1.2	26.0	#
16	#	#	#	2.1 × 1.1 × 0.4	0.5	#	52	#	#	Er-64-63	(4.6) × 3.4 × 0.9	(19.0)	#
17	#	#	Er-64-74	(1.9) × 1.0 × 0.3	(0.4)	#	53	#	#	Er-64-64	(3.6) × 2.9 × 0.9	(8.3)	#
18	#	#	Er-64-63	(1.9) × 1.0 × 0.25	(0.4)	#	54	#	#	Er-64-63	(3.7) × 2.8 × 0.8	(8.0)	#
19	#	#	#	2.3 × 1.0 × 0.3	0.5	#	55	#	#	Er-64-64	4.5 × 2.6 × 0.7	9.5	#
20	#	#	Er-64-64	2.3 × 1.1 × 0.4	0.7	#	56	#	#	Er-64-73	(2.8) × 2.7 × 0.5	(4.3)	#
21	#	#	Er-64-74	2.2 × 1.1 × 0.3	0.6	#	57	#	#	Er-64-63	3.2 × 2.4 × 0.8	7.5	#
22	#	#	#	2.3 × 1.1 × 0.3	0.6	#	58	#	#	Er-64-73	2.9 × 3.1 × 1.1	10.3	#
23	#	#	Er-64-64	(2.4) × 1.1 × 0.2	(0.5)	#	59	#	#	Er-64-63	2.8 × 2.9 × 0.8	5.3	#
24	#	#	#	2.3 × 1.3 × 0.5	1.2	#	60	#	#	Er-64-64	3.3 × 3.0 × 1.4	13.8	#
25	#	#	#	2.6 × 1.0 × 0.2	0.4	#	61	#	#	#	3.0 × 3.5 × 0.9	9.4	#
26	#	#	Er-64-50	2.6 × 1.3 × 0.35	0.9	#	62	#	#	Er-64-63	2.4 × 2.8 × 0.8	5.5	#
27	#	#	Er-64-73	2.9 × 1.2 × 0.4	1.0	#	63	#	#	Er-64-74	6.4 × 5.2 × 1.1	41.8	Ba.
28	#	#	Er-64-74	(2.8) × 1.0 × 0.4	(0.7)	#	64	石 槌	00	Er-64-62	3.9 × 3.5 × 1.8	22.8	Obs.
29	#	#	#	3.0 × 1.2 × 0.4	1.1	Sl.	65	石 斧	F2e	Er-64-70	(7.0) × 3.7 × 1.2	(41.2)	Med.
30	#	#	#	4.1 × 1.6 × 0.4	1.8	Obs.	66	#	#	Er-64-74	(7.8) × 4.0 × 1.8	(80.0)	Gr-Sch
31	#	A	Er-64-55	(3.2) × 1.5 × 0.4	(1.3)	#	67	た た き 石	C3	Er-64-73	8.9 × 8.8 × (4.2)	(40.0)	Chc.
32	#	A4	Er-64-52	3.8 × 1.4 × 0.3	1.1	#	68	#	#	#	6.7 × 6.2 × 5.9	343	#
33	石 槌	C1	Er-64-64	3.1 × 1.8 × 0.5	2.9	Sh.	69	#	G1	Er-64-72	15.7 × 6.8 × 2.8	480	Sa.
34	ステレイパー	E	#	6.2 × 2.8 × 1.3	21.0	Obs.	70	#	G2	Er-64-73	24.0 × 10.9 × 6.1	2,200	Gr-Med
35	#	#	Er-64-63	5.8 × 4.0 × 1.0	17.4	#	71	石 槌	00	Er-64-81	8.3 × 9.2 × 3.6	340	Obs.
36	#	#	Er-64-64	(3.7) × 3.1 × 0.7	(5.8)	#	72	石 槌 品		Er-64-64	2.2 × 1.8 × 1.4	6.0	Ta.

3 第II黒色土層(II黒層)の遺構と遺物

II黒層からは、住居跡3軒、墓墳124個、用途不明の土壇3個、Tピット6個などの遺構と、縄文時代後期が主体をなす土器(IV群)、石器等計30,562点が検出され、基からは多くの玉の出土をみた。

(1) 遺 構

1) 住居跡

標高23mほどの台地南辺の平坦部から2軒(H-1・2)と、標高約20mの斜面部から1軒(H-3)の計3軒が検出された。台地上のH-1・2は、床面からの出土土器(IV群a類)から、後期初頭に位置づけられる。H-3は、遺物の出土がまったくなく、構築時期は特定できない。

H-1

台地平坦部に位置する。Ta-c層除去後II黒層上面で楕円形の大きな浅い窪みとして捉えられたものである。II黒層上面近くから掘り込まれ、床はTa-d₂層直上に作られ平坦である。床面から多くの小ピットと、浅皿状の土壇が検出された。小ピットの多くは壁に沿うように分布しているが、この中から本住居跡に伴う柱穴は特定できなかった。炉跡はない。

西壁寄りの床面からIV群a類の土器片と石斧が出土した。

位置 F₁-63-73・74・83・84・85 平面形 不整な卵形

規模 9.90×7.00/9.70×6.80/0.35

覆土 I 黒色(II黒) II 黒褐色(黒色土>d₂)

III 黒色(黒色土+d₁>d₂)

遺物 床面 土器IVa:21。石器B:1, F:1, OI:2。

8 B 2.8×1.7×0.4 0.7 Obs. 9 F 9.1×4.1×1.4 105 Gr-Mud.

覆土 土器IIIb-3:2, IVb:124。石器 A7:4, B:3, D:1, E:1, V:6, OIa:3, OI:26, X1:2。

1 IVb (13.3)×—×— 2 A7 3.1×2.0×0.4 1.0 Obs.

3 A7 3.1×1.9×0.4 0.8 Obs. 4 A7 2.8×1.7×0.4 0.7 Obs.

5 A7 (2.8)×1.7×0.6 (2.6) Obs. 7 B 5.9×3.6×1.1 20.6 Obs.

8 B (3.1)×4.1×1.3 (14.3) Obs.

H-2

この住居跡は、標高23mほどの台地の南端部にあり、H-1から南東方向に4.5m離れたところに位置し、前者同様II黒層上面の窪みとして確認された。掘り込み面は、II黒層中のTa

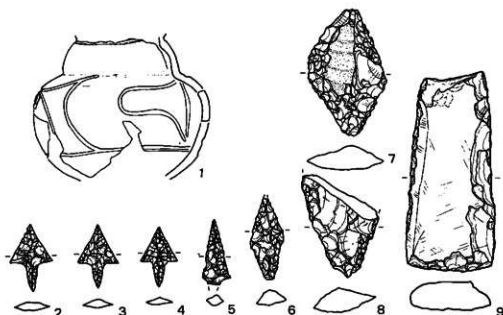


図24 H-1の遺物

-d₁層に近い部分と考えられ、Ta-d₂層を10cmほど掘り込んで床面としている。床面には、凹凸がある。また、住居跡中央には、たたき石・台石片や礫を東西方向に2列配した石組炉がある。この炉は、床を掘り込んだあと、黒色土を充填してつくられたもので、床面レベルよりやや高い位置に礫が配置されている。多くの小ピットのうち、壁に沿ってめぐるものについては柱穴と考えられるが、その他については特定できない。

床面からは、IV群a類の土器片2点が出土している。なお、覆土I層中でIV群c類の深鉢1個体分の出土をみたが、生活面をとらえることはできなかった。

位置 F1-63-66・67・76・77

平面形 不整円形

規模 5.20×4.50/4.65×4.30/0.30

長軸方向 N-59°-W

覆土 I 黒色 (II黒>d₁)

II 黒色 (II黒>d₁)

III 黒褐色 (II黒+d₁)

IV 茶褐色 (II黒+d₂)

V 黒色 (II黒>d₂)

遺物 床面 土器IV a: 4。石器G: 1, M: 5, O1a: 1, O1: 12, X0: 11, X1: 4。

1・2 Nb

6 O1 4.5×2.5×0.4 9.0 Obs.

覆土 土器III b-1: 1, III b-3: 1, IV b: 93, Va: 1, Vc: 3。石器A7: 1, C2a: 1, G1: 1, IV片: 1, O1a: 5, O1: 42, O2: 48, X0: 4, X1: 2。

3 IVc 23.7×20.2×7.3

4 A7 (2.6)×1.1×0.3 (0.8) Obs.

5 C2a 4.2×1.2×0.7 3.5 Obs. 7 G1 12.7×6.2×2.4 265 Sa.

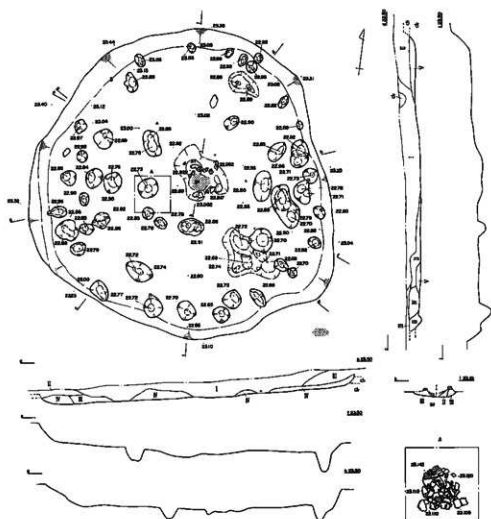


図25 H-2

H-3

標高約20mの斜面に位置する。Ta-dz層上面でやや胴の張った方形プランが確認された。床面は斜面上位の北側でEn-aルーム層中、南側でTa-dz層中に作られている。覆土はI・II層のほかはII黒層の混入度が少ない。竪穴を取り囲むように小ピットが8個検出されたが、本住居跡に伴うかは不明。覆土VII層から微量の炭化物が得られた。遺物は出土していないので構築時期は特定できないが、形態や覆土の状態から前期に属する住居跡とも考えられる。

位置 F1-63-19

平面形 すみ丸方形

規模 $3.00 \times 2.40 / (2.50) \times (2.25) / 0.35$

覆土 I 黒褐色 (II黒>d₁+d₂)

II 灰褐色 (II黒>d₁+d₂)

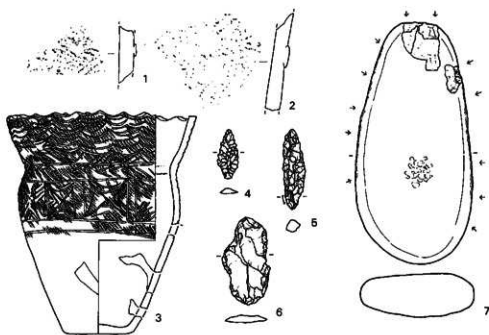


図26 H-2の遺物

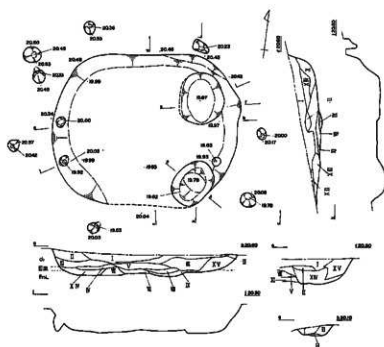


図27 H-3

II 美々4遺跡の調査

- | | |
|--|---|
| III 灰赤褐色 ($\text{II黒} + \text{EnL} > d_2$) | IV 暗灰黄色 ($\text{III黒} > \text{EnL}$) |
| V 黄灰色 (EnL) | VI 灰黄色 ($\text{EnL} + \text{III黒}$) |
| VII 淡灰色 ($\text{III黒} > d_2$) | VIII 暗灰色 ($\text{III黒} > \text{II黒} + d_2$) |
| IX 暗灰色 ($\text{III黒} > \text{II黒} + d_2 + \text{EnL}$) | X 暗赤褐色 ($\text{II黒} > d_2 > d_1$) |
| XI 灰色 ($\text{III黒} + d_2$) | XII 赤黄色 (d_2) |
| XIII 淡黒褐色 ($\text{II黒} > d_1 + d_2$) | XIV 灰赤褐色 ($\text{EnL} + \text{III黒} > d_2$) |
| XV 赤褐色 ($d_1 + d_2 > \text{II黒}$) | |

表 8 住居跡一覧

名 称	位 置	平面形	規 模 (m)			備 考
			確認面	床 面	最大深	
H-1	F1-63-73-74-83-84-85	不整な卵形	9.90×7.00	9.70× 6.80	0.35	
H-2	F1-63-66-67-76-77	不整円形	5.20×4.50	4.65× 4.30	0.30	
H-3	F1-63-19	すみ丸方形	3.00×2.40	(2.50)×(2.25)	0.40	

2) 墓

本調査地区から、124個の墓および墓の可能性のある土壌が検出された。そのほとんどは、台地縁辺に近い平坦部に集中している。これらは散在するのではなく、いくつかの墓が集まってのまとまりとして把握することができる。ここではこのまとまりを「土壌墓群」、「墓群」あるいは単に「群」と呼ぶことにする。

土壌墓群

分布状況から6か所の群に大別することが可能である。本書ではこれらを第1群～第6群

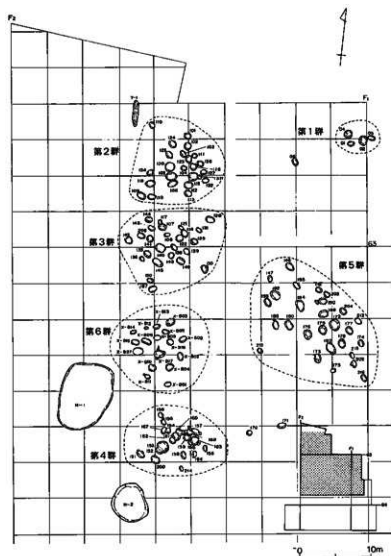


図28 土壌墓群配置図

とした。検出された墓墳数は、第1群4個、第2群24個、第3群25個、第4群20個、第5群27個、第6群17個である。

第2・3・6・4群は北から南へ列をなすように並んでおり、南端の第4群は台地縁辺部に位置している。また、第1群と第5群は調査地区東寄りの小沢が台地を浅く刻み、わずかな傾斜をなす部分に位置している。列をなす4か所の群は、直線距離にして約50mの中に配置されている。群間は近接しており、とくに第2・3群間は2mほどの空間が存する程度である。第5群は第6群の東側にあり、約10m隔たっている。また、第1群は第2群の東側、第5群の北側に位置し、それぞれから15mほど離れている。

群を構成する墓墳の平面形は楕円形または円形で、前者が圧倒的に多数を占める。墓墳の長軸は、ほとんどが東西か北西～南東方向に向けられている。規模は底面で長径1m、短径70cm前後のものが多く、掘り込み面から墳底までの深さは1mを越えるものは少なく、70～90cmの間におさまるものが大半である。

遺体の残存状況から判断できた埋葬体位はすべて屈葬である。墳底面に残された頭部の球形の空隙や四肢骨の断片等から判断される頭位は、北から西の間である。単葬墓が主であるが、遺体の残存状況から2体合葬と考えられる例もあり、また、規模から判断して、遺体が残っていない墓墳のなかにも、合葬を推測させるものがある。群内の墓墳は互いに近接して作られているにもかかわらず、重複する例は一般に少ない。しかしながら群によっては重複率の高いものもあり、第4群には6例11個、第3群には2例4個の重複がある。

副葬品を伴う墓墳は33個あり、土器、石鏃、玉が用いられている。玉のみが副葬された例が28個と圧倒的に多く、墓1個あたり1～3点が副葬されるものが多い。そのほかは、石鏃と玉

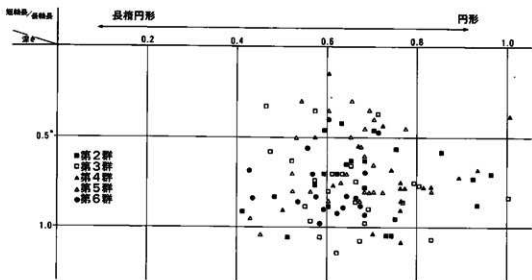


図29 土墳墓の長短比と深さの相関

が副葬された例が1個、石銭のみが2個、土器を伴うものが2個である。

このように定まった区域に墓をつくり、結果として墓群を形成するものに、縄文時代後期末葉に墓年される周墳墓がある。周墳墓は、あらかじめ堅穴を構築して排土を周囲にめぐらし、その底面に平面形が楕円形で、深く、規格のよくそろった墓壇を配置するものである。本調査地区から検出された墓群には、周墳墓のように明瞭な施設は認められなかった。しかしII黒層上面で、第6群には周囲に幅数m、高さ約20cmで環状の盛り上がりか確認され、第4・5群では、中央部が周辺よりややくぼんだ状況を呈していた。これらのことから、墓域確定のための何らかの作業が行われた後に、埋葬が行われたものと判断せざるを得ない。これらの区画墓群の形成された時期は、副葬された土器および周辺の遺物からみて、周墳墓に先行する後期中葉である。

(青柳 文吉)

第1群

台地縁から約40m隔てた平坦部で、4個の土壇墓が近接して検出され、これを第1群とした。本群の立地するところは、東側に斜面を浅く刻む沢があるため、これに向ってわずかに傾斜している。

本群は重機による確認調査地区で発見されたため、II黒層中および遺構上部の状況はとらえられていない。遺構確認面はTa-d₂層上面である。

土壇平面形はほぼ円形を呈するもの(P-02・04)と、楕円形のもの(P-01・

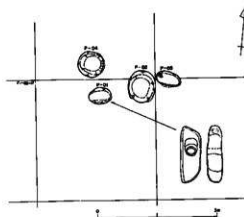


図30 第1群

表9 第1群土壇墓一覧

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	地上施設	副葬品	備考
			確認面	底面	最大深				
P-01	F1-62-07	楕円形	0.95×0.65	0.90×0.38	0.40	N-79°-E		玉: 1	
P-02	F1-62-06-07	円形	1.25×1.18	0.78×0.75	0.50	—			
P-04	F1-62-06	"	1.05×1.03	0.68×0.63	0.53	—			
P-05	E2-62-96-97	楕円形	1.03×0.56	1.00×0.45	0.63	N-83°-W			

05) 土壌がある。後者の長軸方向は、ほぼ東西方向を指す。P-01では西壁寄りの墳底から玉が検出された。遺体は認められなかったが覆土の状況等からみて墓と判断される。P-02・04・05からは遺体、遺物とも検出されなかったが、覆土、壁、底面の状況から墓と判断して差し支えない。(青柳文吉)

P-01

墳底はEn-a層中にあり、平坦である。墳口付近の覆土は堅くしまっている覆土全体はTa-d₂層とEn-a層との混在した状態であるため、埋め戻されたものと判断される。墳底のほぼ中央部から玉が1点出土した。

位置 F₁-62-07

規模 0.95×0.65/0.90×0.38/0.40

副葬品 玉: 1. 1 4.7×1.7×1.24 15.0

覆土 I 黒褐色 (II黒+d₁>EnL)

III 黒色 (II黒)

V 暗茶褐色 (d₂>II黒+EnL)

VII 黒色 (II黒>d₂)

IX 暗灰褐色 (III黒)

平面形 楕円形

長軸方向 N-79°-E

II 黒褐色 (II黒+d₁+EnL)

IV 暗黄褐色 (EnL>II黒)

VI 黄褐色 (EnL>II黒)

VIII 暗黄褐色 (EnL>II黒+d₁)

X 黒褐色 (II黒+d₂)

P-02

墳底はEn-a層中にあり、平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土はTa-d₂、En-aの混在した状態を呈している。

位置 F₁-62-06・07

規模 1.25×1.18/0.78×0.75/0.50

覆土 I 灰黄褐色 (EnL)

III 黒褐色 (II黒+d₁+EnL)

V 黄褐色 (EnL>d₂)

VII 茶褐色 (d₂>II黒)

IX 暗茶褐色 (d₂>II黒+EnL)

XI 黄茶褐色 (EnL>d₂)

平面形 円形

II 黒褐色 (II黒>d₂+EnL)

IV 黒色 (II黒)

VI Vと同じ

VIII 黒色 (II黒ブロック状)

X 暗黄茶褐色 (d₂+EnL+II黒)

P-04

墳底はEn-a層中にあり、平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、墳口付近西側でややオーバーハングしている。

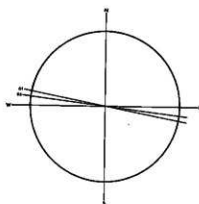


図31 長軸方向

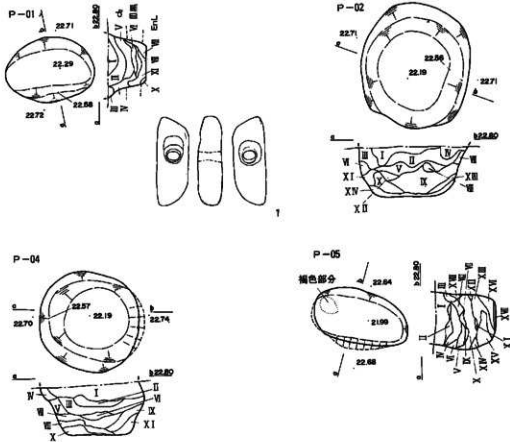


図32 P-01・02・04・05と遺物

位置 F1-62-06

平面形 円形

規模 1.05×1.03/0.68×0.63/0.53

- | | |
|-----------------------------------|---|
| 覆土 I 黒褐色 (II黒>d ₂) | II 赤茶褐色 (d ₂ >EnL) |
| III 黒茶褐色 (II黒>d ₂) | IV 黒色 (II黒) |
| V 暗黄茶褐色 (II黒+d ₂ +EnL) | VI 赤褐色 (d ₂) |
| VII 黒褐色 (II黒+EnL>d ₂) | VIII 橙色 (d ₂ >EnL) |
| IX 黄茶褐色 (EnL>d ₂) | X 暗褐色 (II黒+d ₁ >d ₂) |

P-05

坑底はEn-a層中にあり、平坦である。覆土上部は踏み固められたように堅くしまっている。坑底西側に褐色を呈する部分が認められた。遺体の腐蝕により形成されたものか、あるいはベンガラが散布されたことによるものか判然としない。

位置 Ez-62-96・97

平面形 楕円形

規模 1.03×0.56/1.00×0.45/0.63

長軸方向 N-83°-W

- | | |
|--------------------------------|-------------|
| 覆土 I 黄褐色 (EnL>d ₂) | II 黒色 (II黒) |
|--------------------------------|-------------|

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| III 暗黄褐色 ($EnL + II$ 黒) | IV 黄褐色 ($EnL > d_2$) |
| V 暗茶褐色 ($d_2 > II$ 黒) | VI 黒褐色 (II 黒 $> d_2$) |
| VII VIと同じ | VIII 暗黄茶褐色 ($d_2 + EnL + II$ 黒) |
| IX 黒茶褐色 (II 黒 $> d_2$) | X 明橙色 ($EnL > d_2$) |
| XI 黒色 (II 黒) | XII 茶褐色 (d_2) |
| XIII 黄褐色 ($EnL > d_2$) | XIV 暗橙色 ($EnL + II$ 黒 $+ d_1$) |
| XV 暗茶褐色 ($d_2 > II$ 黒 $+ EnL$) | XVI 黄褐色 ($EnL > d_2$) |
| XVII 暗褐色 ($d_2 + EnL > II$ 黒) | XVIII 暗黄褐色 ($EnL + II$ 黒) |

第2群

第2群は、南北約15m、東西約12mの範囲に24個の土壇を集中して構築したもので、南北に連なる4つの墓群のうち最も北側に位置している。隣接する第3群とは境界が接近しているが、なお若干の空隙があり明瞭に区別できる。24個の土壇のうち10個から人骨が検出され、墓であることを確認した。ほかの14個についてもおそらく墓と思われる。

第2群は、重機による確認調査のトレンチで発見された。このトレンチは、墓群の中央部を南北に縦断する形で設定され、8個の土壇が、このトレンチ内でTa-d₂層上面まで削平された状態で確認された。P-101-106・111・123がそれである。また、P-112・113・115・116

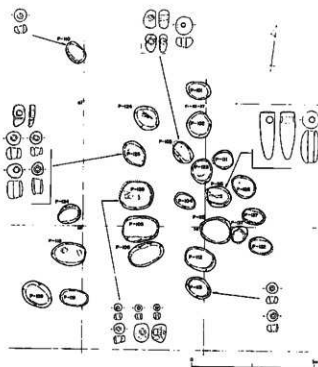


図33 第2群

・120・124～126の8個の土壌も、このトレンチで上面を一部削られている。これとは別に、分布調査のテスト・ピットがTa-ds層中位まで掘られている。テスト・ピット内にあったP-110は壁の上半部が削平された状態で確認されたものである。さらに25%調査をおこなったF1-62-68区でも、P-118・119の2個の土壌をTa-ds層上面まで削平した時点で確認した。

以上のように土壌は、溝口部を失ったため掘り込み面がわからないものが多い。掘り込み面が確認できたものに関しては、すべてTa-di層上面であった。第2群では土壌の上面に礫が伴うものではなく、柱穴様の小土壌も発見されていない。

土壌の覆土はすべて人為的な埋め戻しによるもので、自然堆積のものではなかった。覆土の最上層にはEn-a層が堆積している場合が多い。これは、土壌が掘り込まれているII黒層やTa-di層と対照的な色調なので、遺構を平面で確認するうえで大きな手がかりとなった。このような堆積状態は、掘りあげた土を埋め戻す過程で偶然にそうなったとも考えられるが、あるいは、視覚的效果を意図して選択的に埋め戻したのかもしれない。覆土は、下部へ掘り進むに従って粘性を帯び、はじめとしている。時には臭気を伴うことすらあった。

人骨が検出された10個の土壌のうち、形状を観察できた4個の土壌では、その姿勢はすべて屈葬であった。頭位は、頭蓋や副葬品の位置から西であることが確認されている。P-109・116・118・120・124・126では、頭蓋骨に相当する部分に、ドーム状の空洞が認められた。抜歯等の身体変工については観察していない。

副葬品はあまり顕著ではなく、壊底部では石製の玉が唯一のものである。遺体の頸部から出土した例が2例あった。玉は24個中6個の土壌から出土し、25%の出現率である。ベンガラはない。このほか、覆土中に切片石器が集積されていた土壌が1例あった。

土壌上面では、遺構確認以前に包含層の遺物をすべて取りあげたため、個々の土壌に対応する遺物はよくわからない。ただグリッド別の遺物出土状況から勘案してIV群B類の土器分布が土壌分布と一致するようである。

土壌の平面形は、P-102・127・137がほぼ円形で、他は楕円形を呈する。楕円形の土壌の長軸は、N-45°-WからN-105°-Wの間で概ね東西方向にある。振幅はまばらで特に傾向はない。土壌は規模から長軸1～0.8m、短軸0.5～0.8m、深さ0.9～1mの範囲にあるグループと、長軸1.2～1.5m、短軸0.6～1.1m、深さ0.9～1mのより大型のグループに区別できる。後者に属するものは5個で、前者が多数を占める。

各土壌は密集しているにもかかわらず、切り合いは皆無であった。前代の掘り込みを避ける

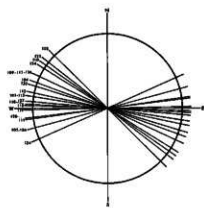


図34 長軸方向

という規制が働いていたのかもしれない。配列は、5個の土壌がP-124, 125, 120, 105, 106の順に北から南へほぼ一直線に並んでおり、この5個の土壌をあたかも中心軸のようにして、若干の間隔をおいて東側に14個、西側に4個の土壌が構築されていた。ただし、これらが意識的な配列かどうかはよくわからない。土壌の規模・長軸・出土遺物等と、配列との相関関係についてもとらえることができなかった。

第2群の時期については確実な証左はないが、他の墓群と同様IV群b類の時期と思われる。

(森 秀之)

表10 第2群土壌墓一覧

名 称	位 置	平面形	規 模 (m)			長軸方向	地上施設	副葬品	備 考
			確認面	底 面	最大深				
P-101	F1-62-46-56	楕円形	1.05×0.70	0.80×0.60	0.56	N-81°-W			
P-102	F1-62-47-57	円 形	1.06×1.00	0.86×0.80	0.87	—			
P-103	F1-62-57	楕円形	0.93×0.72	0.98×0.40	0.91	N-45°-W		玉：3	
P-104	"	"	0.89×0.62	0.78×0.48	0.70	N-70°-W			
P-105	F1-62-57-58	"	1.26×1.08	1.52×0.78	1.05	N-105°-W			西頭位
P-106	F1-62-58	"	1.44×0.93	1.36×0.65	0.83	N-105°-W			"
P-108	F1-62-68	"	1.28×1.02	0.96×0.65	0.78	N-65°-W			"
P-110	F1-62-56-66	"	0.93×0.79	0.64×0.40	0.42	N-55°-W		玉：1	
P-111	F1-62-47	"	0.79×0.76	0.86×0.56	0.63	N-98°-W			
P-112	F1-62-48-58	"	1.30×0.90	1.14×0.73	0.65	N-78°-W			
P-113	"	"	1.10×0.80	0.84×0.59	0.46	N-65°-W		玉：2	
P-115	F1-62-47-48 -57-58	"	1.32×1.12	1.20×0.87	1.04	N-81°-W			西北頭位
P-116	F1-62-47	"	1.00×0.86	0.95×0.60	0.75	N-88°-W		玉：2	西頭位
P-118	F1-62-58-68	"	1.40×0.96	1.23×0.74	0.88	N-87°-W			西頭位
P-119	"	"	1.15×0.68	1.02×0.60	0.70	N-91°-W			
P-120	F1-62-57	"	1.36×1.11	1.30×1.10	0.57	N-97°-W		玉：5	西頭位
P-123	"	円 形	1.00×0.88	0.82×0.75	0.73	—			
P-124	"	楕円形	1.14×0.93	0.92×0.68	1.03	N-58°-W			西北頭位
P-125	"	"	1.13×0.85	1.00×0.68	0.62	N-52°-W		玉：5	
P-126	F1-62-47	"	1.07×0.86	0.96×0.72	0.95	N-65°-W			西頭位
P-127	"	"	0.94×0.68	0.88×0.46	0.70	N-85°-W			
P-132	F1-62-48	楕円形	1.01×0.70	0.91×0.54	0.46	N-73°-W			
P-134	F1-62-67	"	0.95×0.74	0.88×0.50	0.76	N-114°-W			
P-137	F1-62-48	円 形	0.67×0.66	0.50×0.48	0.70	—			

P-101

墳底は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。平面形は整った楕円形である。遺物はない。

位置 F₁-62-46・56

平面形 楕円形

規模 1.05×0.70/0.80×0.60/0.56

長軸方向 N-81°-W

覆土 I 黒色 (II黒)

II 暗赤褐色 ($d_2 + EnL > II黒$)

III 明黄褐色 (EnL)

P-102

墳底は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。平面形は不整円形である。遺物はない。

位置 F₁-62-47・57

平面形 不整円形

規模 1.06×1.00/0.86×0.80/0.87

覆土 I 暗黄褐色 ($d_2 + EnP + III黒 > II黒$) II 暗黄褐色 (EnL + III黒 $> d_2$)

III 黒色 (II黒)

IV 明黄褐色 (EnL)

P-103

墳底は平坦で、平面形は第2群のなかでは最も長幅比の小さい楕円形である。壁は急角度で立ち上がる。長軸北西端の壁はオーバーハングしている。墳底面西寄りて玉が3個出土した。玉の周囲には、15×9cmの範囲で棚状の人骨が認められた。

位置 F₁-62-57

平面形 楕円形

規模 0.93×0.72/0.98×0.40/0.91

長軸方向 N-45°-W

副葬品 玉: 3 1 1.80×1.12×0.78 2.5 2 1.80×1.68×1.06 5.9

3 1.82×1.28×1.00 3.5

覆土 I 明黄褐色 (EnL $> d_2 + II黒$)

II 黒褐色 (II黒 + EnL)

III 明黄褐色 (EnL)

P-104

覆土の上層部分にはEn-a層が堆積していた。墳底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は整った楕円形である。遺物はない。

位置 F₁-62-57

平面形 楕円形

規模 0.89×0.62/0.78×0.48/0.70

長軸方向 N-70°-W

覆土 I 明黄褐色 (EnL $> d_2$)

II 黒褐色 (II黒 $> EnL + d_2$)

P-105

Ta-d₂層上面で、円形のEn-a層と、それをドーナツ状にとりまく黒色土が検出され確認は容易であった。覆土はセクション図にあるように、各層下方へたわんでいる。これは、遺体の腐蝕と土圧によって落ち込んだものと思われる。ただし、土壌上面が削平されているのでII黒層上面がくぼんでいたかどうかはわからない。墳底はわずかに凹面をなしている。壁は長軸の両端でオーバーハングするほかは、ほぼ垂直に立ち上がる。P-105は第2群中、最大規模の土墳である。墳底部から保存の悪い人骨が検出された。遺物はない。

位置 F₁-62-57・58

平面形 楕円形

規模 1.26×1.08/1.52×0.78/1.05

長軸方向 N-105°-W

埋葬体位 西頭位

覆土 I 明黄褐色 (EnL)

II 黒色 (II黒)

III 黒褐色 (II黒+EnL>d₂)IV 暗黄褐色 (EnL>d₂)

V 黒褐色 (II黒>EnL)

VI 暗黄褐色 (EnL>d₂)

P-106

覆土の上層部分にはEn-a層が堆積しており、Ta-d₂層上面での確認は容易であった。墳底は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。長軸西壁の上部がややいびつになっていた。平面形は楕円形であるが、P-103にたいで長軸比の小さい楕円形である。墳底部には棚状の人骨が広範囲に認められた。人骨の規模形状から、合葬の可能性もあるがよくわからない。西頭位とおもわれる。遺物はない。本土墳墓はP-105の南側に隣接し、墳口部では10cm程度しか離れていない。

位置 F₁-62-58

平面形 楕円形

規模 1.44×0.93/1.36×0.65/0.83

長軸方向 N-105°-W

覆土 I 明黄褐色 (EnL)

II 黒色 (II黒>EnL)

III 暗黄赤茶褐色 (d₂+EnL>II黒)

IV 明黄褐色 (EnL)

P-109

25%調査の際にTa-d₁層上面で確認した。これが遺構の掘り込み面に相当するとおもわれる。覆土は、最上層にEn-aローム土がレンズ状に堆積し、他の各層は下方へたわんでいる。墳底はわずかに凹面をなしている。壁は急角度で立ち上がり、墳口部ではやや外反する。Ta-d₂層の壁は風化した感じでもろい。墳底部から棚状の頭骨と歯牙片を検出した。遺物はない。

位置 F₁-62-68

平面形 楕円形

規模 1.28×1.02/0.96×0.65/0.78

長軸方向 N-65°-W

埋葬体位 西頭位

覆土 I 明黄褐色 (EnL>EnP+II黒)

II 灰茶褐色 (EnL>EnP+d₂)III 橙色 (d₂>II黒)IV 灰褐色 (EnL>II黒+d₂)V 黒褐色 (II黒>EnL>d₂)VI 茶褐色 (EnL+d₂+II黒)VII 黄褐色 (EnL>d₂+EnP)VIII 灰黄褐色 (EnL>d₂>EnP)IX 灰茶褐色 (EnL>d₂>EnP)

X 黒色 (II黒)

P-110

覆土にはEn-a層がレンズ状に堆積しており、Ta-d₂面での確認は容易であった。墳底は平坦で、壁は40cm程度しか立ち上がりが残っていないが急角度に立ち上がる。墳底から玉が1個出土した。本土墳墓は第2群の集中域から位置的にやや離れており、単独の土墳墓の可能性もある。

位置 F₁-62-56・66

平面形 楕円形

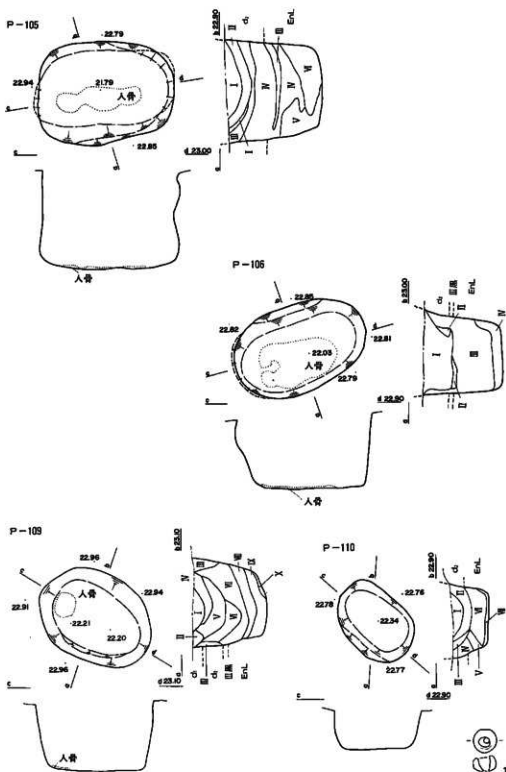


図36 P-105・106・109・110と遺物

規模 0.93×0.79/0.64×0.40/0.42

長軸方向 N-55°-W

副葬品 玉: 1. 1-1.20×1.20×0.85 2.1

覆土 I 明黄褐色 (EnL>d₂)II 黄褐色 (d₂>EnL)III 黄褐色 (EnL>d₂)IV 灰褐色 (II黒+d₂+EnL)V 灰茶褐色 (II黒>d₂+EnL)VI 黒褐色 (II黒>d₂)

VII 黒色 (II黒)

P-111

Ta-d₁層上面で確認した。これが、遺構の掘り込み面に相当するとおもわれる。確認面で土壌の平面形が予想できなかったため、セクション位置がやや不適切になった。覆土は汚れた感じの混土層で、粒状のTa-d₂層が全層に混入していた。墳底はわずかに凹面をなしており、平面形は整った楕円形である。短軸両側の壁は、ほとんど垂直に立ち上がるが、長軸両端では、オーバーハングしていた。遺物は出土していない。

位置 F1-62-47

平面形 楕円形

規模 0.79×0.76/0.86×0.56/0.63

長軸方向 N-98°-W

覆土 I 茶褐色 (II黒+EnL>d₂+EnP)II 明茶褐色 (EnL>d₂+EnP)III 明茶褐色 (EnL>d₂+EnP)IV 黄色 (EnL>d₂)V 黒色 (黒色土>d₂)VI 茶褐色 (d₂>黒色土)VII 黄褐色 (EnL>d₂)VIII 灰褐色 (黒色土>d₂+EnL)

P-112

覆土の最上層部分には、En-a ロームがレンズ状に堆積していた。墳底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、長軸西側の壁は、わずかにオーバーハングしている。遺物はない。なお、P-112は大部分Ta-d₂層上面まで傾平されていたが、一部II黒層が保存されていた部分があった。発掘の過程で、墳底面から壁の立ち上がりを墳口部へ追っていたところ、II黒層とTa-d₁層の境界にEn-a層が貫入しているのを発見した。これは排土の一部が埋め戻されず、土壌の周辺に堆積していたものと考えられる。このことからP-112の掘り込み面はTa-d₁層上面であることがわかった。

位置 F1-62-48・58

平面形 楕円形

規模 1.30×0.90/1.14×0.73/0.65

長軸方向 N-78°-W

覆土 I 明黄褐色 (EnL)

II 黒色 (II黒)

III 黒褐色 (II黒>EnL+d₂)IV 暗赤褐色 (d₂>II黒)

P-113

P-112の上面精査時に、南側に隣接するP-113を発見した。覆土は一層のみで、黒色土とTa-d₂層を主とした混土層であった。En-a層をわずかに掘り込んで墳底としている。第2群のなかでは比較的浅い。墳底は平坦で、その南側の壁際から玉が2個出土した。他に比べ出土位置がやや特異である。

位置 F₁-62-48・58

平面形 楕円形

規模 1.10×0.80/0.84×0.59/0.46

長軸方向 N-65°-W

副葬品 玉: 2. 1 0.90×0.90×0.55 0.7 2 0.90×0.90×0.55 0.6

覆土 I 黒褐色 (II黒>d₂+EnL)

P-115

土壌の上面は、斜めに削られていた。覆土の上層部分には、En-a ロームが堆積しており、平面での確認は容易であった。本土墳墓は長軸長が1.2mに達する大型のもので、掘り込みも1mを超えている。規模としてはP-105に次ぐものである。墳底は平坦で、長軸両端の壁がオーバーハングするほかは、ほとんど垂直に立ち上がる。墳底面には保存の悪い糊状の人骨が広範囲に認められた。合葬の可能性もあるがよくわからない。遺物はない。

位置 F₁-62-47・48・57・58

平面形 楕円形

規模 1.32×1.12/1.20×0.87/1.04

長軸方向 N-81°-W

覆土 I 黄色 (EnL)

II 黄褐色 (EnL>d₂)III 灰黄褐色 (EnL>d₂+II黒)IV 黒褐色 (II黒>d₂>EnL)

V 黄色 (EnL)

P-116

覆土の最上層にはEn-a層がレンズ状に堆積しており、平面での確認は容易であった。覆土の各層は下方へ、逆アーチ状にたわんでいる。遺体が腐蝕した後、土圧によって落ち込んだものと思われる。墳底は平坦で、壁は長軸の西端壁がオーバーハングするほかは急角度で立ち上がる。南側の壁は墳口部でやや外反していた。墳底部から人骨を検出した。頭蓋の部分は空洞になっていた。遺体の頭部に相当する部分から玉が2個出土している。

位置 F₁-62-47

平面形 楕円形

規模 1.00×0.86/0.95×0.60/0.75

長軸方向 N-88°-W

埋葬体位 西頭位横臥屈葬

副葬品 玉: 2. 1 1.93×1.93×3.70 23.0 2 5.43×1.70 28.2

覆土 I 黄色 (EnL+EnP>d₂)II 黄褐色 (EnL+EnP>d₂)III 灰褐色 (II黒+d₂)IV 茶褐色 (II黒>EnL+EnP+d₂)V 灰褐色 (EnL>EnP+II黒+d₂)

VI 灰色 (II黒+EnL)

P-118

覆土最上層にはEn-aロームが堆積しており、プランの確認は容易であった。墳底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は整った楕円形を呈する。墳底部から人骨を検出した。保存状態はよくない。頭蓋の部分は空洞になっていた。遺物はない。

位置 F₁-62-58・68

平面形 楕円形

規模 1.40×0.96/1.23×0.74/0.88

長軸方向 N-87°-W

埋葬体位 西頭位

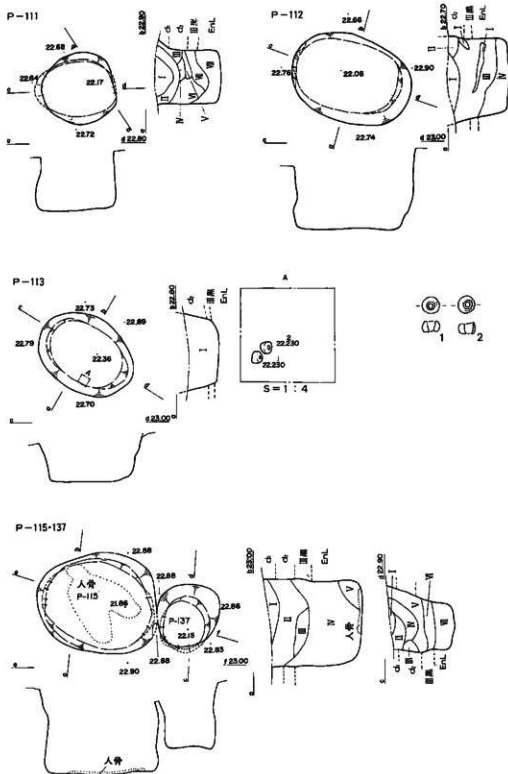


図37 P-111・112・113・115・137と遺物

- | | |
|--------------------|-----------------------------|
| 覆土 I 明黄褐色 (EnL) | II 黒色 (II黒>EnL) |
| III 暗黄褐色 (EnL>II黒) | IV 黒色 (II黒>d ₂) |

P-119

覆土の最上層にはEn-a層が堆積していた。墳底は、西側にわずかに傾斜している。壁はほとんど垂直に立ち上がる。遺物はない。

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| 位置 F ₁ -62-58・68 | 平面形 楕円形 |
| 規模 1.15×0.68/1.02×0.60/0.70 | 長軸方向 N-91°-W |
| 覆土 I 暗黄褐色 (EnL>II黒+d ₂) | II 黒色 (II黒>d ₂) |
| III 明黄褐色 (EnL) | IV 黒褐色 (II黒+EnL) |
| V 明黄褐色 (EnL>d ₂) | |

P-120

墳底は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。西側から北側にかけての壁はオーバーハングしている。墳底部に保存の悪い人骨があった。西頭位で、頭蓋骨の部分には空洞が認められ、その周辺から5個の玉が出土した。P-112と同様、排土とみられるEn-a ロームが、掘り込み面のTa-d₁層上面に堆積していた。

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 位置 F ₁ -62-57 | 平面形 楕円形 |
| 規模 1.36×1.11/1.30×1.10/0.57 | 長軸方向 N-97°-W |
| 埋葬体位 西頭位 | |
| 副葬品 玉: 5. 1 1.87×1.55×1.47 5.5 2 1.10×1.03×0.76 1.5 | |
| 3 0.74×0.74×0.62 0.5 4 0.77×0.75×0.60 0.6 | |
| 5 0.64×0.60×0.68 0.45 | |
| 覆土 I 黄褐色 (EnL+d ₂ +II黒) | II 暗黄色 (II黒>EnL) |
| III 橙色 (d ₂ >EnL) | IV 黒褐色 (II黒+d ₂) |
| V 明茶褐色 (EnL>d ₂ +II黒) | VI 灰褐色 (EnL>d ₂ +III黒) |
| VII 黄褐色 (EnL>d ₂ +II黒) | |

P-123

P-123は第2群の土壌のなかではやや特異である。平面形は整った円形で、覆土中から立石が出土した。立石は土壌内に完全に埋没しており、覆土の状況から人為的に埋められたことは明らかである。覆土はしまりがよく、乾いた感じで本遺跡の墓特有の湿り気がない。さらに壁の周囲からは炭化材を検出した。この炭化材は、厚さ約2mmの桎目板様のもので、あたかも壁を包んでいるかのようなものであった。原形のまま検出に成功したのは、全体の4分の1程度である。この炭化材からは¹⁴C年代測定の結果、3460±35y.B.P.の数値が得られている(付2参照)。立石の取り上げ後、墳底面を精査したが、遺体を検出することはできなかった。土壌の規模から考えて、立石とともに遺体を埋葬するのは困難とおもわれる。

- | | |
|--------------------------|--------|
| 位置 F ₁ -62-57 | 平面形 円形 |
|--------------------------|--------|

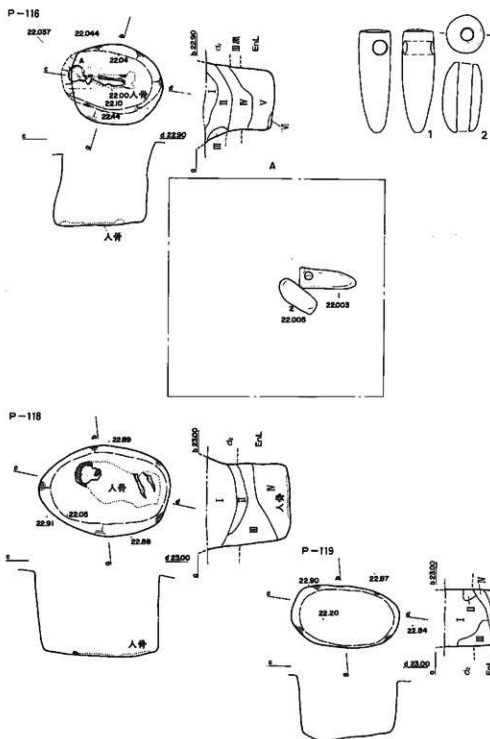


図38 P-116・118・119と遺物

規模 1.00×0.88/0.82×0.75/0.73

覆土 I 黒色 (II黒>EnL) II 灰黄色 (EnL>d₂+III黒)
 III 灰褐色 (EnL>d₂+II黒) IV 灰茶褐色 (EnL+II黒>d₂)
 V 黄褐色 (EnL>d₂) VI 黒色 (II黒)

遺物 加工礫: 1. 図76-1, 50.0×25.0×7.5 2.6kg And.

安山岩製である。断面は偏平な六角形で、側縁には調整が加えられている。

P-124

Ta-di層上面で確認した。これが遺構の掘り込み面と思われる。覆土上部にはEn-a層が堆積しており、平面での確認は容易であった。覆土の下部は粘性を帯びた黒色土で、土層のEn-a層と色調は対照的である。墳底は平坦で、壁はほとんど垂直に立ち上がる。墳底部から比較的保存の良い人骨を検出した。頭蓋部分には空洞が認められた。遺体は樹脂で固めて取り上げた。遺物はない。

位置 F1-62-57

平面形 楕円形

規模 1.14×0.93/0.92×0.68/1.03

長軸方向 N-58°-W

埋葬体位 西頭位横臥屈葬

覆土 I 灰褐色 (EnL+II黒) II 黄色 (EnL>EnP>d₂)
 III 黄褐色 (EnL>d₂+EnP) IV 暗黄褐色 (EnL>EnP+II黒>d₂)
 V 黒褐色 (II黒>d₂+EnL) VI 黒色 (黒色土>d₂)

P-125

Ta-di層上面で確認した。これは遺構の掘り込み面に相当するとおもわれる。墳底は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。掘り込みは第2群のなかでは比較的浅い。墳底の北西部から玉が5個集中して出土した。遺体は検出されなかったが、玉の配列はその着用の状態をよくあらわしている。

位置 F1-62-57

平面形 楕円形

規模 1.13×0.85/1.00×0.68/0.62

長軸方向 N-65°-W

副葬品 玉: 5. 1 2.20×1.25×0.53 2.8 2 1.25×1.16×1.55 4.0
 3 1.20×1.18×0.90 2.1 4 1.43×1.35×1.26 3.7
 5 1.60×1.42×1.78 6.8

覆土 I 灰褐色 (II黒>EnL+d₂+EnP) II 黒褐色 (II黒>d₂)
 III 黄灰色 (EnL>d₂+EnP) IV 黄褐色 (EnL+d₂>II黒)
 V 褐色 (d₂>II黒) VI 黒色 (II黒>EnL+EnP+d₂)
 VII 灰褐色 (EnL>d₂+III黒) VIII 黄色 (EnL>d₂+II黒)

P-126

確認面はTa-di層上面で、これが掘り込み面に相当する。覆土の上部にはEn-aロームが堆積していた。墳底は平坦で、壁はほとんど垂直である。平面形は卵形に近い楕円形である。墳底

に保存の良くない頭蓋骨があった。この部分は空洞になっていた。遺物はない。

位置 F1-62-47

平面形 楕円形

規模 1.07×0.86/0.96×0.72/0.95

長軸方向 N-65°-W

埋葬体位 西頭位

覆土 I 暗灰黄色 (EnL>EnP+III黒)

II 灰黄色 (EnL>EnP+III黒>II黒)

III 黒灰色 (EnL+II黒>d₂)

IV 黒褐色 (II黒>EnP+d₂)

V 黒褐色 (II黒>d₂)

VI 暗黄色 (II黒+EnP+d₂)

P-127

Ta-d₁層上面で確認した。これが遺構の掘り込み面に相当すると思われる。覆土は大半が En-a ロームを中心とする混土層であった。墳底は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。西壁は、わずかにオーバーハングしている。覆土上面の黒土層中からつまみ付きナイフが1点出土した。遺物は土壌に伴うものではない。

位置 F1-62-47

平面形 楕円形

規模 0.94×0.68/0.88×0.46/0.70

長軸方向 N-85°-W

覆土 I 灰褐色 (EnL+II黒>d₂)

II 明灰褐色 (EnL+II黒>d₂)

III 黄褐色 (EnL>d₂)

IV 黄褐色 (EnL+II黒>d₂)

V 黒褐色 (II黒>d₂+EnL)

VI 黄褐色 (EnL>d₂)

遺物 D4a: 1。図76-2, 8.9×2.3×0.5 11.1 Sh.

頁岩製でやや風化している。2次調整はあまり入念ではない。側縁に刃こぼれがみられる。

P-132

Ta-d₁層上面で確認した。これが掘り込み面に相当すると思われる。墳底は En-a 層をわずかに掘り込んで作られている。P-132は第2群のなかでは最も浅い土壌であった。壁は長軸の両側でオーバーハングするほかは急角度で立ち上がる。覆土第I層から、石鏃1点と使用痕のある剥片が18点出土した。土壌に伴うものかどうかよくわからない。

位置 F1-64-48

平面形 楕円形

規模 1.01×0.70/0.91×0.54/0.46

長軸方向 N-73°-W

覆土 I 黒色 (II黒>d₂)

II 黄褐色 (EnL>II黒+d₂)

III 黒色 (II黒)

IV 暗黄褐色 (EnL+II黒>d₂)

V 灰褐色 (d₂>EnL)

VI 灰褐色 (EnL+d₂)

遺物 A7: 1, 01a: 18。

図76-3 A7 3.3×1.9×4.5 1.7 Obs.

4 01a 3.5×2.6×1.0 6.3 Obs.

5 01a 2.3×3.0×1.1 8.2 Obs.

6 01a 3.0×3.0×8.0 9.3 Obs.

7 01a 4.2×2.5×9.0 7.8 Obs.

8 01a 4.3×2.6×0.6 6.5 Obs.

9 01a 4.4×2.8×0.8 10.4 Obs.

10 01a 4.0×2.8×0.5 5.2 Obs.

11 01a 4.1×2.7×0.6 4.6 Obs.

12 01a 4.0×2.8×7.0 6.0 Obs.

13 01a 2.8×2.2×0.6 3.7 Obs.

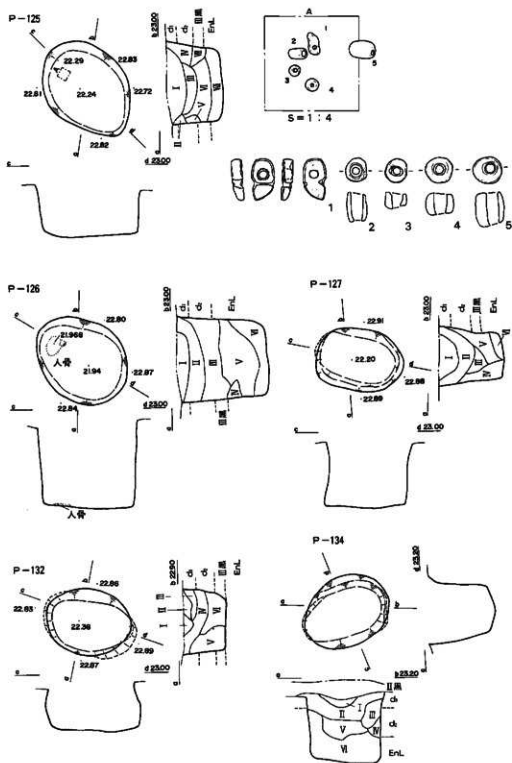


図40 P-125・126・127・132・134と遺物

14	01a	2.2×2.9×0.6	2.7	Obs.	15	01a	4.0×2.9×0.8	7.8	Obs.
16	01a	4.1×2.0×0.4	4.5	Obs.	17	01a	3.5×2.0×0.6	4.6	Obs.
18	01a	4.0×2.9×0.8	7.8	Obs.	19	01a	4.1×2.3×0.5	3.4	Obs.
20	01a	5.5×1.9×4.0	4.1	Obs.	21	01a	4.8×2.0×3.0	2.7	Obs.

3は、有茎でかえしのあるA7類の石鏃である。加工痕のある剥片は、4～7が片面調整のもので、他は片面調整のものであった。片面調整の剥片は腹面にバルブをもつ例がほとんどである。いずれも縁辺が使用によって刃こぼれしている。

P-134

Ta-d₁層上面で確認した。第2群のなかでは掘り込み面を最も明瞭にとらえることができた例である。セクション図にあるように、Ta-d₁層上面から土壌が掘り込まれている。覆土の上層部分には、En-a₁ロームが堆積していた。墳底部はやや凹面をなしている。壁は長軸の両端ではわずかにオーバーハングする。短軸両側では、ほとんど垂直に立ち上がり、墳口部で若干反する。遺物はない。

位置 F1-62-67

平面形 楕円形

規模 0.95×0.74/0.88×0.50/0.76

長軸方向 N-114°-W

覆土 I 黒色 (II黒)

II 灰色 (EnL>II黒)

III 灰褐色 (EnL>d₂+II黒)

IV 黒褐色 (II黒>d₁>d₂)

V 橙色 (d₂>II黒)

VI 茶褐色 (EnL+d₂+II黒)

VII 黒褐色 (II黒>d₂+EnL)

P-137

Ta-d₁層をわずかに掘り下げた時点で確認した。周辺の土壌と同様にTa-d₁層上面が掘り込み面とおもわれる。墳底はEn-a₁層を掘り込んでおり、やや凹凸がある。壁は南側の壁がオーバーハングするほかは、ほとんど垂直に立ち上がる。P-137は、直径50～60cmの円形の小土墳で、規模から考えて遺体を埋葬するのは困難であろう。P-115にきわめて近接しているが、墳底部の切り合いはない。新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

位置 F1-62-48

平面形 円形

規模 0.67×0.66/0.50×0.48/0.70

覆土 I 黒色 (II黒>d₂)

II 黒褐色 (II黒>EnL+d₂)

III 灰褐色 (II黒>EnL)

IV 茶褐色 (EnL+II黒>d₂)

V 黄褐色 (EnL>II黒+d₂)

VI 黄褐色 (EnL>d₂)

第3群

調査地区西側の標高約23mの台地上にあり、南北約11m、東西約12mの範囲に25個の土壌が分布している。北側の第2群と南側の第6群の中間に位置し第2群の南部にあるP-109・119の間には2～3mほどの空隙がある。25個の土壌は互いに1～2mの間隔を保っていて、重複する例は2例だけである。長軸方向・規模・平面形が類似する土壌が北東-南西方向にほぼ等間隔で2列並んでいる（P-149・138・122・144、P-148・139・129・181・121）が、意図的に配列されたものかどうかは判然としない。掘り込み面が確認できた数個の土壌はいずれも、当時の生活面よりも下層と考えられるTa-d₁面から掘り込まれており、周辺よりもII黒が薄いこととあわせて、墓域構築以前にII黒層をある程度削平した可能性がある。明瞭な施設は検出されなかったが意識的に区画し墓域を作り、計画的な埋葬を行なったと考えられる。

平面形は円形のP-141を除けばすべて楕円形である。P-142は墳口の平面形は不整形円形であるが墳底は楕円形である。墳底の長軸長と短軸長の比をみると、P-141が1.0を示すほかは、0.45～0.8の間にあり、0.6～0.7の間に14個が集中する。本群の土壌のうち墳底の規模が最小のものは、P-121で長軸長0.64m×短軸長0.40m、深さ0.70m。最大のものはP-140で長軸長1.35m×短軸長1.04m、深さ1.06mで平均的な規模は長軸長0.9m短軸長0.6m前後、深さは0.8mほどである。墳底の長軸長が1.5mをこえるものはない。深さが1mをこえるものは、P-140のほかはP-143・144・145がある。特に、確認面がTa-d₁面、Ta-d₂面などさまざまであるために、単

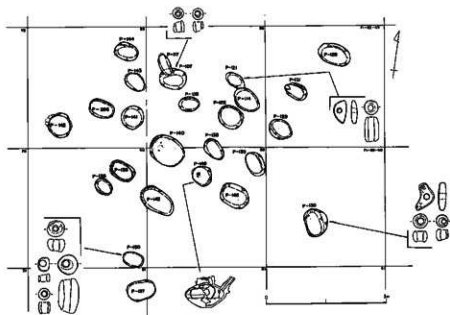


図41 第3群

に深さを比較することは無意味であるが、縄文時代後期末葉の周堤墓の土壌と比べると相当浅いことがわかる。

墳底面は、P-117がEn-aローム層の直上にあるほかは、En-aローム層中で、ほとんどが平坦で土のしまりがない。多くの土壌の壁は垂直に立ち上がり墳口部でやや外反する。P-130は短軸方向の外反がほかの土壌よりも大きい。P-131・142の壁は長軸方向の墳底でややオーバー・ハングする。

円形のP-141を除く24個の土壌の長軸方向は、ほぼN-24°-W-N-92°-Wの間に集中してお

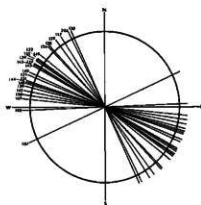


図42 長軸方向

り、この範囲から大きくはずれるのは、P-187(N-115°-W)1個のみである。覆土の堆積状態をみると、自然堆積と思われる土壌はない。覆土は本群中最も浅いP-117が、黒色土・Ta-dzの混じる黒褐色土でほぼ埋められているほかは、En-aロームを主とする黄褐色土と、黒色土・Ta-dzから成る黒褐色土の互層となるものが多い。ほぼ半数の土壌の墳口部には黄褐色土が充填されるかレンズ状の堆積を伴っている。この堆積状態が意図的に行なわれたものかは判然としない。また、覆土上層は土がたわむように堆積しており、遺体の腐蝕により土層が落ち込んだものと考えられる。

遺体の検出された土壌は6個で、頭位がきらかになったのはP-131・140の2個である。いずれも北西頭位。比較的保存状態がよかったのはP-131のみで、埋葬体位は横臥屈葬。そのほかは灰白色の腐状の痕跡が残っているだけである。P-140は2体合葬で、2か所から頭骨と歯が出土している。いずれも横臥屈葬と思われる。このほかの土壌も、規模・平面形から考えて屈葬の可能性が高い。

7個の土壌の覆土・墳底から遺物が出土した。埋め戻しの際混入したか、流れ込みによると考えられる土器片が出土した2個(P-129・145)を除き、5個(P-107・121・130・149・150)は土壌に伴うもので副葬品と考えられる。副葬品は土器と玉である。P-149には、墳口北西部の覆土上部に、IV群B類の手鋸式の注口土器が倒立で押しつぶされたような状態で埋納されていた。土層の観察から、一たん埋め戻した後、掘り込んで土器を埋めた可能性も考えられる。本群唯一の土器が副葬されていた墓である。4個の土壌からは玉が出た。P-121とP-150は、墳底面の規模が長軸長80cm以下の非常に小さい土壌であるが、玉が出たことから墓と判断された。それぞれに副葬されていた玉の数は、2～4個で、出土位置はP-150を除き墳底の北西部やや内寄りのところである。2個重なりあったり(P-130)、並んだ状態(P-107・121)で出土している。遺体は検出されていないが北西頭位を示すものであろう。

P-150では、覆土上層から2個、墳底北西隅から2個の玉が出土している。埋葬状態が判然

としなが、規模が極端に小さいことから、蹲葬のような埋葬体位も考えられ、玉は上半身に着装されていたものかもしれない。

P-130では、北・西・南をとり囲むように、それぞれ50～70cm離れた位置から3個の柱穴様の小ピットが検出された。いずれもTa-ds面で確認されたもので、径20cm前後、深さはそれぞれ33cm、28cm、28cmである。櫓のような施設とも考えられる。また、1～2m離れた位置から細長い柱状の礫が2個検出された。これらの相互関係は不明である。ただし礫は、アブライトと砂岩でX-817の周囲の配石と石質・形状とも共通する。(遠藤香澄)

表11 第3群土壌墓一覧

名称	位 置	平面形	規 模 (m)			長軸方向	地上施設	副 葬 品	備 考
			確 認 面	底 面	数値				
P-100	F1-62-59	楕円形	1.10 × 0.92	0.79 × 0.48	0.70	N-84°-W		玉: 2	P-107を切る 人骨の一部検出
P-108	"	"	0.86 × 0.64	0.69 × 0.47	0.97	N-92°-W			人骨の一部検出
P-114	"	"	1.16 × 0.74	1.00 × 0.65	0.66	N-58°-W			P-104と重複 骨の一部検出
P-117	"	"	(0.85) × (0.50)	(0.85) × (0.39)	0.32	N-32°-W			P-104に切られる
P-121	"	"	0.90 × 0.60	0.84 × 0.40	0.70	N-67°-W		玉: 2	P-104と重複
P-122	"	"	1.07 × 0.92	0.88 × 0.70	0.77	N-54°-W			人骨の一部検出
P-123	F1-62-49	"	1.37 × 0.95	1.09 × 0.65	0.74	N-75°-W			
P-129	"	"	0.97 × 0.80	0.83 × 0.63	0.85	N-56°-W			灰土層 土器IVb:10 人骨の一部検出
P-130	F1-63-40	"	1.14 × 0.94	1.12 × 0.53	0.57	N-24°-W		玉: 3	
P-131	F1-62-49	"	0.90 × 0.60	0.89 × 0.49	0.88	N-71°-W			北西隅位置関係不明 頭骨検出
P-135	F1-63-60	"	1.05 × 0.75	0.90 × 0.61	0.70	N-55°-W			
P-138	"	"	0.79 × 0.67	0.65 × 0.45	0.89	N-43°-W			
P-138	F1-62-59 F1-63-60	"	0.91 × 0.63	0.86 × 0.45	0.63	N-42°-W			
P-139	F1-63-50	"	1.03 × 0.69	0.93 × 0.52	0.96	N-36°-W			
P-140	F1-62-59 F1-63-60	"	1.45 × 1.19	1.35 × 1.04	1.06	N-65°-W			北西隅位置関係不明 (2体合葬)
P-141	F1-62-69	円形	0.93 × 0.88	0.78 × 0.78	0.83	-			
P-142	"	楕円形	1.00 × 0.90	1.13 × 0.75	0.85	N-78°-W			
P-143	"	"	0.90 × 0.65	0.90 × 0.52	1.05	N-60°-W			
P-144	"	"	0.95 × 0.70	0.72 × 0.48	1.06	N-72°-W			
P-145	F1-63-50-60	"	1.55 × 1.06	1.33 × 0.83	1.13	N-59°-W			灰土層 土器IIIb-3: 4 器IV 2
P-148	F1-63-50	"	1.19 × 0.90	1.09 × 0.65	0.69	N-73°-W			
P-149	"	"	0.84 × 0.80	0.84 × 0.66	0.85	N-51°-W		注口土器1	
P-150	F1-63-60	"	0.90 × 0.57	0.84 × 0.54	0.74	N-81°-W		玉: 4	蹲葬(?)
P-157	F1-63-51-61	"	1.20 × 0.77	1.14 × 0.68	0.35	N-13°-W			
P-208	F1-62-69	"	1.07 × 0.76	0.94 × 0.67	0.37	N-26°-W			

P-107

北西壁でP-117と重複関係にあり、本遺構がP-117の覆土を切っている。墳底は平坦で、壁は墳口部で外反する。糊状の骨がわずかに認められた。西側壁から10cmほど内寄りの墳底から、玉が2個出土した。

位置	F1-62-59	平面形	楕円形
規模	1.10×0.92/0.79×0.48/0.70	長軸方向	N-84°-W
副葬品	玉: 2。I 1.20×1.10×1.12 (1.7)		*2 1.14×1.05×1.14 2.2
覆土	I 暗黄褐色 (II黒+EnL>d ₂)	II	明黄褐色 (EnL>d ₂)
	III 黒色 (II黒>d ₂)	IV	暗褐色 (II黒>EnL>d ₂)

P-108

小型ではあるが、比較的深度い土壌。墳底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、墳口部でわずかに外反する。墳底の北西隅から糊状の骨が検出された。

位置	F1-62-59	平面形	楕円形
規模	0.86×0.64/0.69×0.47/0.97	長軸方向	N-92°-W
覆土	I 明黄褐色 (EnL>d ₂)	II	黒褐色 (II黒+EnL)
	III 暗黄褐色 (EnL>III黒)		

P-114

P-121と墳口部でわずかに重複する。先後関係は明らかではない。南西側に近接して、長軸方向、規模が類似するP-122がある。墳底はEn-aバミス層直上にあり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。墳底中央部から、灰褐色の糊状の骨が検出された。北西-南東方向に4個並列する墓墳のうち最も北東に位置するもの。

位置	F1-62-59	平面形	楕円形
規模	1.16×0.74/1.00×0.65/0.66	長軸方向	N-58°-W
覆土	I 灰褐色 (II黒+EnL>d ₂)	II	黄褐色 (EnL>d ₂)
	III 黄褐色 (EnL>d ₂ +II黒)	IV	橙色 (d ₂ >EnL+II黒)
	V 黄褐色 (EnL>d ₂ +II黒)	VI	黒色 (II黒)
	VII 灰褐色 (EnL>III黒+d ₂)	VIII	黄色 (EnL>II黒+d ₂)
	IX 灰色 (III黒>d ₂)		

P-117

本群で一番浅い土壌。南東壁をP-107に切られる。壁は緩やかに立ち上がり、長軸方向北西側でわずかにオーバーハングする。覆土は黒色土を多く含む黒褐色土が充填されている。P-121と平面形、規模が類似している。

位置	F1-62-59	平面形	楕円形
規模	(0.85)×(0.50)/(0.85)×(0.39)/0.32	長軸方向	N-32°-W
覆土	I 茶褐色 (II黒+d ₂ +III黒)	II	黒褐色 (II黒>d ₂)

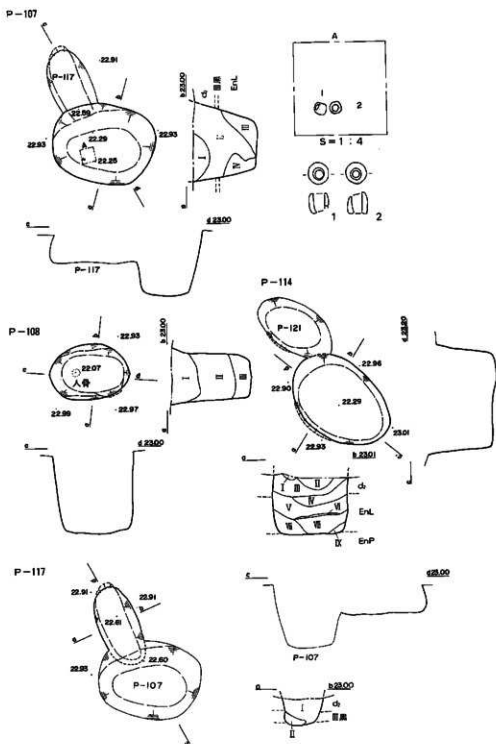


図43 P-107・108・114・117と遺物

P-121

Ta-d₂面で確認された。P-114と南東壁上部でわずかに重複する。本群中で、P-117と同様に規模が小さいもの。覆土は上層と下層で明瞭に異なり、上層にロームを多く含む黄褐色土、下層に黒褐色土が充填されている。墳底北西部から玉が2点出土した。扁平な半月形で中央やや偏った位置に孔が穿たれている垂飾と車玉である。墳底面の規模から考えると、墓墳とするには小さすぎる感もあるが、副葬されたと思われる玉の出土、覆土の状況から墓であると考えざるをえない。特別な方法で埋葬されたものかもしれない。

位置	F ₁ -62-59	平面形	楕円形
規模	0.90×0.60/0.64×0.40/0.70	長軸方向	N-67°-W
副葬品	玉: 2. 1 1.45×1.37×2.50 7.8 2 2.35×1.29×0.62 3.1		
覆土	I 灰褐色 (EnL>d ₂)	II 明灰褐色 (EnL>d ₂)	
	III 茶褐色 (EnL+d ₂ +II黒)	IV 灰褐色 (EnL+d ₂)	
	V 黒茶色 (II黒+d ₁)	VI 黒褐色 (II黒>d ₂)	

P-122

北東-南西方向に並列する土壌のひとつ。北東側に近接してP-114がある。平面形は円形に近い楕円形。墳底は平坦。壁は全周ほぼ垂直に立ちあがり、墳口部で外反する。覆土の状況は、墳口部中央にレンズ状に黒色土があり、南東壁際から墳底にかけては黒褐色土で埋まっている。遺体の残存状態は非常に悪く、灰褐色の糊状の骨が墳底中央部から検出されたのみである。

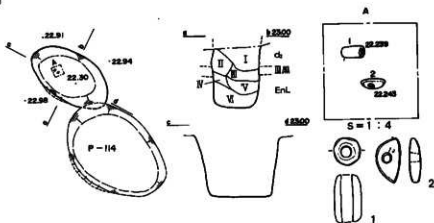
位置	F ₁ -62-59	平面形	楕円形
規模	1.07×0.92/0.88×0.70/0.77	長軸方向	N-54°-W
覆土	I 黒色 (II黒>EnP)	II 灰黒色 (II黒>EnL>d ₂)	
	III 黄橙色 (EnL>EnP+d ₂)	IV 灰黄橙色 (EnL+III黒>d ₂)	
	V 黄色 (EnL>d ₂)	VI 灰褐色 (EnL>d ₂ +II黒)	
	VII 茶褐色 (EnL+II黒>d ₂)	VIII 黒茶褐色 (II黒>EnL+d ₂)	
	IX 明黄褐色 (EnL>d ₂)		

P-123

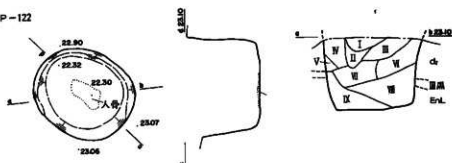
本群の北端に位置するやや大型のもの。Ta-d₁面で確認された。北東-南西方向にはほぼ等間隔に並ぶ5個の土壌のうち最も北西に位置する。壁は墳口部にむかってやや広がる。上層には、ロームを多く含む土がブロック状に堆積し、北東壁際では黒色土が流れ込むように堆積している。

位置	F ₁ -62-49	平面形	楕円形
規模	1.37×0.95/1.09×0.65/0.74	長軸方向	N-75°-W
覆土	I 茶褐色 (II黒+EnL)	II 黄橙色 (EnL>d ₂)	
	III 暗黄橙色 (EnL>d ₂ +II黒)	IV 黒褐色 (II黒>EnL>d ₂)	
	V 黒色 (II黒>EnL)	VI 灰黄色 (EnL>d ₂ +III黒)	
	VII 黒色 (II黒)		

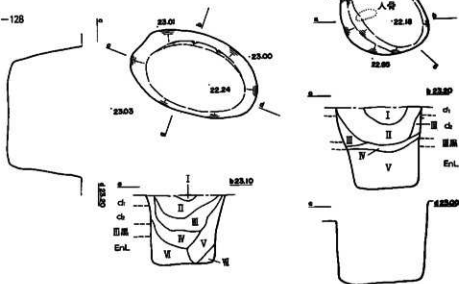
P-121



P-122



P-128



P-129

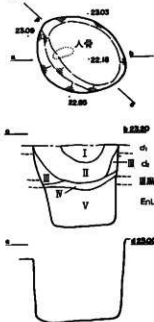


図44 P-121・122・128・129と遺物

P-129

Ta-d₁面で情円形のプランが確認された。北東側にP-181、南西側にP-139があり長軸方向をほぼ同じくして並んでいる。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。南西壁が開口部で広がる。南西壁際から灰褐色の糊状の骨が検出された。覆土上層(I層)から、後期中葉のIV群b類土器片が129点出土した。流れ込みによる遺物と考えられる。

位置 F₁-62-49

平面形 情円形

規模 0.97×0.80/0.83×0.63/0.85

長軸方向 N-56°-W

覆土 I 黒色(II黒>EnL)

II 明黄褐色(EnL)

III 暗黄褐色(II黒>EnL)

IV 黒色(II黒>d₂)

V 黒褐色(II黒+EnP>d₂)

遺物 覆土上部 土器IVb:129。図76-22~24 IVb。22は口唇の断面がやや丸みを帯び、刺突文が一条口縁部をめぐる。

P-130

本群の南東端に位置し、ほかの土壌基から少し離れている。覆土は、黒色土と黄褐色土との互層である。墳底はEn-aローム層をわずかに掘り込んで作られ、北東、南西壁は墳底から大きく膨らんで立ち上がり、中間部でくびれている。開口部はやや外反する。墳底北西隅から玉が2個、さらに中央寄りからも1個出土した。玉の穿孔はいずれも一方向からである。1は扁平でL字形の垂飾。孔はL字の角のところに穿たれ、表・裏面に擦痕がある。人骨は検出され

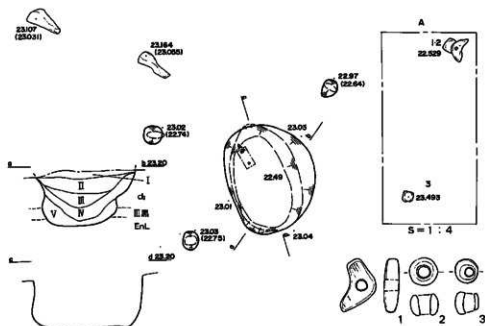


図45 P-130と遺物

なかった。

位置	F1-63-40	平面形	楕円形
規模	1.14×0.94/1.12×0.53/0.57	長軸方向	N-24°-W
副葬品	玉: 3. 1 1.42×1.27×0.74 5.7 2 1.47×1.45×1.10 3.6		
	3 1.30×1.20×1.10 3.0		
覆土	I 黒色 (II黒)	II	暗黄褐色 (III黒>d ₂)
	III 明黄褐色 (EnL>d ₂)	IV	黒色 (II黒>d ₂)
	V 暗黄褐色 (EnL>II黒)		

P-131

北東-南西方向に5個並列する土坑のひとつ。II黒混りのTa-d₁面で楕円形のプランが確認できた。坑底はわずかに凹凸がある。北西側の壁は、坑底でオーバーハングする。その位置から壁に貼りつく状態で頭骨が検出された。頭骨の残存状態が比較的良好であったので樹脂処理後取り上げた。また嚙状の骨が北西部の坑底3分の1を占める範囲で検出された。頭骨の状態から横臥屈葬と思われる。

位置	F1-62-49	平面形	楕円形
規模	0.90×0.60/0.89×0.49/0.88	長軸方向	N-71°-W
埋葬体位	北西頭位横臥屈葬		
覆土	I 黒色 (II黒)	II	明黄褐色 (EnL>d ₂)
	III 黒褐色 (II黒>EnL)	IV	黒色 (II黒+d ₂ >EnL)
	V 黒色 (II黒>d ₂)		

P-135

本群の南西端に位置しP-136と並んでいる。坑底はEn-aローム層中にあり平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。長軸方向西側の壁が坑口部でややオーバーハングする。覆土の状態は、坑口部中央にレンズ状の黄褐色土が堆積するほか、下部は黒褐色土で充填されている。

位置	F1-63-60	平面形	楕円形
規模	1.05×0.75/0.90×0.61/0.70	長軸方向	N-55°-W
覆土	I 黄色 (EnL>d ₂)	II	黒褐色 (II黒>d ₂)
	III 橙色 (d ₂ >II黒)	IV	茶褐色 (II黒+d ₂)

P-136

小型ではあるが比較深い。坑底はEn-aローム層中にあり平坦。壁は南東側でやや膨むほかは坑口までほぼ垂直である。覆土上層は黄褐色土、下層は黒褐色土が充填されている。

位置	F1-63-60	平面形	楕円形
規模	0.79×0.67/0.65×0.45/0.89	長軸方向	N-43°-W
覆土	I 黄色 (EnL)	II	黄橙色 (EnL>d ₂)

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| III 茶褐色 ($EnL + II黒 > d_2$) | IV 黒褐色 ($II黒 > EnL + d_2$) |
| V 暗黄色 ($EnL > II黒 > d_2$) | VI 黒褐色 ($II黒 > d_2 + EnL$) |
| VII 黒色 ($II黒 > d_2$) | |

P-138

北東-南西方向に4個並列する土壌のひとつ。北東側にP-122、南東側にP-149がある。墳底は中央部がややくぼむ。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土上層には、黄褐色土が充填されている。

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 位置 F ₁ -62-59, F ₁ -63-50 | 平面形 楕円形 |
| 規模 $0.91 \times 0.63 / 0.86 \times 0.45 / 0.63$ | 長軸方向 N-42°-W |
| 覆土 I 黄色 ($EnL > d_2$) | II 黄褐色 ($EnL > d_2$) |
| III 黒褐色 ($II黒 + d_2$) | IV 灰黄褐色 ($EnL + II黒 + III黒 + d_2$) |
| V 明黄褐色 ($EnL > d_2$) | VI 黒褐色 ($II黒 > d_2$) |

P-139

北東-南西方向に5個並列している土壌のひとつ。墳底はEn-aローム層中。西壁は墳口部までほぼ垂直であるが、ほかの壁は緩やかに外反する。

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 位置 F ₁ -63-50 | 平面形 楕円形 |
| 規模 $1.03 \times 0.69 / 0.93 \times 0.52 / 0.96$ | 長軸方向 N-36°-W |
| 覆土 I 黄褐色 ($EnL > d_2$) | II 黄褐色 ($EnP > EnL + II黒$) |
| III 灰黄色 ($EnP + III黒 + II黒$) | IV 灰褐色 ($EnL + d_2 > III黒 + EnP$) |
| V 茶褐色 ($II黒 > d_2 > EnL$) | VI 灰褐色 ($II黒 + EnP > d_2$) |

P-140

本群のほぼ中央に位置する。墳口部北側は一部削平されている。P-145とならび大型のもの。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。遺体の残存状態は非常に悪く原形をとどめない。墳底全面で灰褐色の糊状の骨が検出された。墳底北西部で頭部と思われる空隙と数個の歯冠が2か所から検出された。本群で唯一の2体合葬墓である。骨の状態から、2体とも横臥埋葬と思われる。副葬品はなかった。

- | | |
|---|------------------------------|
| 位置 F ₁ -62-59, F ₁ -63-50 | 平面形 楕円形 |
| 規模 $1.45 \times 1.19 / 1.35 \times 1.04 / 1.06$ | 長軸方向 N-65°-W |
| 埋葬体位 北西頭位横臥埋葬 (2体合葬) | |
| 覆土 I 明黄褐色 ($EnL > d_2$) | II 暗褐色 ($II黒 + EnL > d_2$) |
| III 明黄褐色 ($EnL > d_2$) | IV 明黄褐色 (EnL) |

P-141

ほぼ円形のプランを呈する。墳底はEn-aローム層中で中央部がややくぼむ。墳口部中央に黒褐色土が充填されている。

- | | |
|--------------------------|--------|
| 位置 F ₁ -62-59 | 平面形 円形 |
|--------------------------|--------|

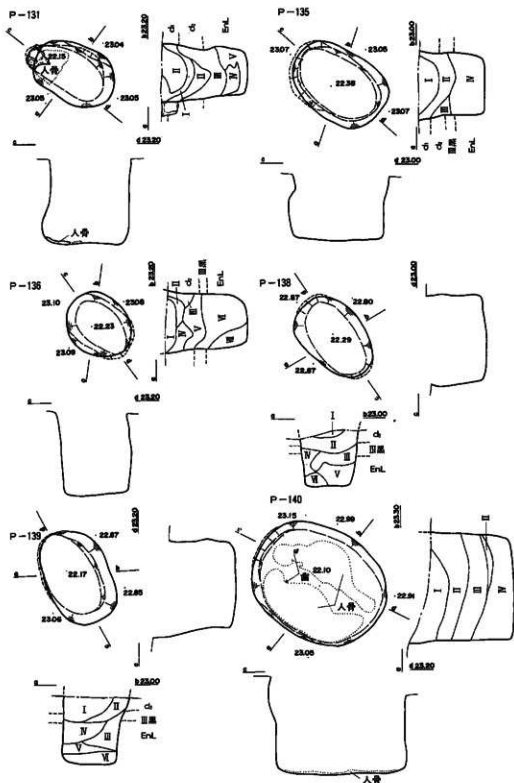


图46 P-131 · 135 · 136 · 138 · 139 · 140

規模 $0.88 \times 0.93 / 0.78 \times 0.78 / 0.83$

覆土 I 黒色 (II黒>d₂)

III 黒褐色 (EnL>II黒>d₂)

V 黄色 (EnL>d₂)

II 茶褐色 (EnL+II黒>d₂)

IV 黄褐色 (EnL>d₂)

VI 黄橙色 (EnL>d₂>II黒)

P-142

本群の西端に位置する。平面形は墳口で不整形であるが墳底では楕円形である。墳底はEn-aローム層中にあり凹凸している。北西・南東壁は中間部で大きく膨らむ。ほかの土壌と比べて覆土に黒色土が少ない。

位置 F1-62-69

規模 $1.00 \times 0.90 / 1.13 \times 0.75 / 0.85$

覆土 I 茶褐色 (EnL>II黒>d₂)

III 黄色 (EnL>d₂)

平面形 楕円形

長軸方向 N-78°-W

II 黄褐色 (EnL>d₂)

IV 灰褐色 (III黒+EnL>d₂)

P-143

本群の北西部に位置する。Ta-d1面で楕円形のプランが確認できた。墳底はEn-aローム層を70cmほど掘り込んで作られ平坦。壁の立ち上がりは全周でほぼ垂直である。覆土上層には黄褐色土、下層には黒褐色土が充填されている。

位置 F1-62-69

規模 $0.90 \times 0.65 / 0.90 \times 0.52 / 1.05$

覆土 I 灰褐色 (EnL>II黒)

III 黄色 (EnL>II黒)

平面形 楕円形

長軸方向 N-60°-W

II 黄色 (EnL>d₂)

IV 黒褐色 (II黒>EnL>d₂)

P-144

本群の最も北西に位置し、南東側には隣接してP-143がある。Ta-d1面で楕円形のプランが確認された。壁の立ち上がりはほぼ垂直で墳口部がやや外反する。ほかの土壌と比べて覆土中に黒色土が少ない。

位置 F1-62-69

規模 $0.95 \times 0.70 / 0.72 \times 0.48 / 1.06$

覆土 I 黒褐色 (II黒>EnL)

III 黄茶褐色 (EnL+II黒)

平面形 楕円形

長軸方向 N-72°-W

II 黄褐色 (EnL>d₂)

IV 茶褐色 (EnL+II黒>d₂)

P-145

Ta-d1面で楕円形のプランが検出された。本群で一番深い土壌である。壁は全周でほぼ垂直に立ちあがる。覆土上層には黒色土が充填されている。覆土IV層の黒褐色土から、縄文時代中期のIII群b-3類土器の破片が出土した。埋め戻しの際混入したものであろう。

位置 F1-63-50・60

規模 $1.55 \times 1.06 / 1.33 \times 0.83 / 1.13$

覆土 I 黒色 (II黒>EnP+d₂)

平面形 楕円形

長軸方向 N-59°-W

II 黄褐色 (EnL>d₂+EnP)

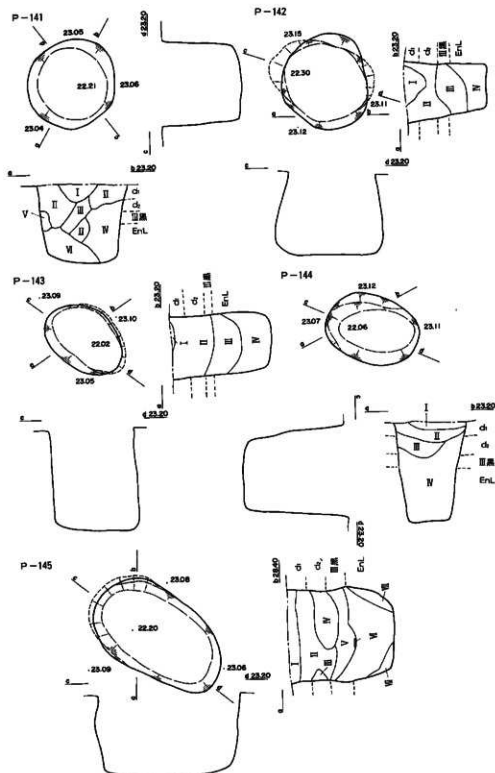


図47 P-141・142・143・144・145

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| III 橙色 ($d_2 > EnL$) | IV 暗橙色 (II黒+ $d_2 > EnL$) |
| V 黄褐色 ($EnL > II黒+d_2$) | VI 黒褐色 (II黒 $>d_2$) |
| VII 黄色 (EnL) | |

遺物 覆土 土器IIIb-3:4。礫片X1:2。図76-25・26 IIIb-3。

P-148

北東-南西方向に並ぶ5個の土壌のうち最も南西に位置するものである。Ta-d₁面で確認された。墳底はやや凹凸がある。長軸方向の壁が中間部でやや膨らむ。覆土上層には黄褐色土がレンズ状に堆積している。

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 位置 F ₁ -63-50 | 平面形 楕円形 |
| 規模 1.19×0.90/1.09×0.65/0.69 | 長軸方向 N-73°-W |
| 覆土 I 灰褐色 ($EnL+d_2$) | II 灰色 (II黒 $>EnL>d_2$) |
| III 黄色 (EnL) | IV IIと同じ |
| V 黄褐色 ($EnL>d_2$) | VI IIと同じ |
| VII 灰褐色 ($EnL>II黒+d_2$) | VIII 黄褐色 ($EnL>d_2$) |

P-149

Ta-d₁面で確認された。墳底はやや凹凸がある。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、壕口部でやや外反する。壕口北西部の覆土I層からIV群b類の手桶式の注口土器が出土した。土器は倒立し押しつぶされたような状態で埋納されており、土器の胴部から注口部には炭化物が少量に付着していた。本群で土器が副葬されていた唯一の墓である。この炭化物からは¹⁴C年代測定により、3240±130y.B.P (KSU-969)の年代が得られている(付2参照)。

- | | |
|---|------------------------------|
| 位置 F ₁ -63-50 | 平面形 楕円形 |
| 規模 0.84×0.80/0.84×0.66/0.85 | 長軸方向 N-51°-W |
| 副葬品 注口土器IVb:1。1 10.5×—×3.4 | |
| 胎土に小石が含まれており、焼成はあまり良くない。全面が研磨されており、胴部は強くはり出し底部は小さい。直線と曲線の沈線文様が胴部上半分に施されている。 | |
| 覆土 I 黒色 (II黒 $>d_1+d_2$) | II 黄褐色 ($EnL>EnP+d_2$) |
| III 灰褐色 ($EnL>II黒+d_2+EnP$) | IV 茶褐色 ($EnL+EnP+d_2+II黒$) |

P-150

本群の南端に位置し、隣接してP-187がある。壁は全周でほぼ垂直に立ち上がる。覆土上層の黄褐色土から2個、墳底北西部から2個、それぞれ玉が出土した。覆土中から玉が出土した唯一の例である。墓壙とするには規模が小さすぎる感もあるが、玉の出土、覆土の状況から墓と考えざるをえない。また玉が覆土中から出土したこと、規模が小さいことから、蹲葬のような埋葬体位が考えられる。

- | | |
|-----------------------------|--------------|
| 位置 F ₁ -63-60 | 平面形 楕円形 |
| 規模 0.90×0.57/0.84×0.54/0.74 | 長軸方向 N-81°-W |

埋葬体位 埋葬(?)

副葬品	玉: 4.	1	1.14×1.14×1.20	2.5	2	1.70×1.68×1.28	5.7
		3	1.48×1.14×0.83	2.0	4	2.00×2.00×3.44	22.1
覆土	I	灰褐色 (EnL>d ₂ +Ⅲ黒)			II	黄褐色 (EnL>d ₂ +EnP)	
	III	明黄褐色 (EnL>d ₂)			IV	黒褐色 (Ⅱ黒>d ₂)	
	V	黄色 (EnL>Ⅱ黒)			VI	黒色 (Ⅱ黒>EnL)	

P-187

Ta-d₂精査時に検出された。上部が削平されているので浅いが、本来はもっと深かったと思われる。本群の最も南西に位置し、北西側に近接してP-150がある。長軸方向はほかの土坑が集中する範囲(N-24°-W~N-92°-W)から大きくはずれる。

位置	F ₁ -63-51・61	平面形	楕円形
規模	1.20×0.77/1.14×0.68/0.35	長軸方向	N-115°-W
覆土	I 黒色 (II黒>d ₁ +EnL)	II	黒褐色 (II黒>d ₂ +EnL)
	III 灰褐色 (EnL+d ₂)	IV	灰褐色 (EnL>d ₂ +II黒)
	V 黄褐色 (d ₂ >EnL)	VI	茶褐色 (EnL+d ₂)

P-206

Ta-d₂精査時に検出された。北東側にP-143、南西側にP-142が長軸方向をほぼ同じにして並んでいる。墳底はEn-aローム層中をわずかに掘り込んで作られている。

位置	F ₁ -62-69	平面形	楕円形
規模	1.07×0.76/0.94×0.67/0.37	長軸方向	N-26°-W
覆土	I 灰褐色 (EnL>d ₂ +II黒)	II	灰褐色 (EnL>d ₂)
	III 灰褐色 (EnL>d ₂ +II黒)	IV	黒褐色 (II黒>d ₂ +EnL)
	V 黄色 (EnL>d ₂)	VI	灰褐色 (EnL>II黒>d ₂)

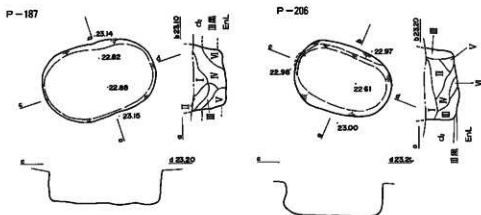


図49 P-187・206

第4群

本群は標高約23mの台地縁辺部にあり、6か所の土壌墓群のうち一番南に位置する。II黒層上面において、第6群ほど顕著ではないが、わずかなくばみが認められた。これは第6群との間および本群の南縁でII黒とTa-diとの混和した層が厚く堆積することによるもので、II黒層上面の等高線も本群付近で湾曲している。

本群は、20個の土壌墓によって構成され、東西10m・南北9mの範囲にある。それらの位置関係は、北西-南東方向に直線的に並ぶ6個の土壌墓をはさんで、北西部に4個が、北東部に5個が集中して存在する。その他、南西部に1個、西部に4個の土壌墓が点在している。

本群の著しい特徴は、墓同士の重複が多い点(54ページ18行目)である。また、墓群の周囲を含め配石が見られないことも、本群の特徴としてあげられる。

墳底の平面形態は、ほぼ円形のP-154・163のほか、楕円形を呈する。その長幅比は0.7~0.8(8個)を中心にばらつき、最小値はP-151の0.5である。また、長軸長と深さの関係からみると、長軸長70~90cm、深さ65~80cmの範囲にあるものが8個と多い。長軸長1m、深さ90cmを超える土壌墓が3個(P-151・153・200)あり、いずれも南西部に位置する。長軸方向からは、N-44°-W~N-59°-Wの間に11個(Iグループ)、N-22°-W~N-26°-Wの間に3個(IIグループ)、西に70°以上傾く2個(IIIグループ)、真北を向く2個(IVグループ)に分けられる。墓は確認面の位置やII黒層を合せた土層観察の結果、Ta-di層上面から掘り込まれたものである。覆土はEn-aを主とする黄褐色土と、Ta-di、II黒を主とする暗褐色土が交互に充填される傾向があり、P-159を除き前者で埋め戻しが完了している。P-151・153・

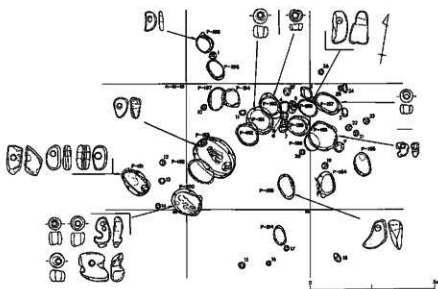


図50 第4群

155から人骨が検出されており、遺体の腐蝕による陥没の様子が窺える。墳底面は、P-156・198で若干凹面を呈する以外、平坦に作られている。壁は垂直あるいは外反ぎみのものが多いが、P-151・163・196は袋状を呈している。

墓群および周辺から小ピットが27個検出された。小ピット1～8は墓と同じTa-d₁層上面で確認されたもので、墓墳長軸線上に位置したり(1～3)、墓墳に重複している。周墳墓に伴う墓のような規則的位置関係はとらえられないが、墓に関連する可能性がある。9～27は、Ta-d₁層下部またはd₂層上面で確認されたもので、

深さが20cm以上のピット(10・12・15・16・18・24・26・27)は墓の集中するF₁-63-55区を取り囲むように分布している。これらの覆土は、II黒を主とする暗黒褐色土である。これ以外にP-153では墳内の長軸両端に柱穴様ピットが確認された。本群で墓に伴うことの明らかな遺構である。

人骨が検出された墓は4個あり、埋葬体位の識別できた2例(P-153・200)はいずれも下肢を強く折り曲げられた右横臥屈葬である。他の墓も形態から屈葬と考えられる。なおP-200は合葬の可能性もある。

副葬品は玉のみで、全墓墳の半数から16点検出された。この出土率は6土墳墓群中で最も高い。ただし、長軸方向Nグループの2個からは、玉の出土をみていない。

墓群および周辺のII黒層では、F₁-63-65区からN群b類土器、F₁-63-65区からN群c類土器がそれぞれややまとまって出土した。このほか、F₁-63-54交点付近からはN群b類の大型破片が得られている。なおP-163堀口からN群b類の浅鉢形土器が検出されたが、墓に伴うとは断言できない。

(田中哲郎・石川朗)

注1 美々4遺跡X-214など、周墳墓にも類似した構造をもつ例がある。

(北海道埋蔵文化財センター 『美沢川流域の遺跡群』Ⅶ 昭和58年度 162頁)

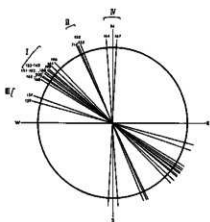


図51 長軸方向

表12 第4群土墳墓一覧

名称	位	重	平面形	規模 (m)			長軸方向	地上施設	副葬品	備考
				確認面	底面	最大				
P-Ⅲ	F ₁ -63-65		楕円形	1.20 × 0.78	1.20 × 0.60	0.90	N-54°-W		玉: 3	北西傾位(残存状態不詳)
P-Ⅲ	F ₁ -63-55		"	1.05 × (0.80)	1.05 × (0.75)	0.80	N-54°-W			P-153を切る
P-Ⅲ	"		"	1.88 × (1.25)	1.25 × 0.95	1.08	N-51°-W	墳内柱穴様ピット2	玉: 1	北西傾位右横臥屈葬P-152に切られる
P-Ⅲ	"		浅鉢形	0.70 × 0.65	0.58 × 0.54	0.67	—			P-167と重複
P-Ⅲ	F ₁ -63-45		楕円形	0.95 × 0.70	0.90 × 0.55	0.76	N-22°-W			北西傾位(白銅数本)
P-Ⅲ	F ₁ -63-45-55		"	0.64 × —	0.66 × —	0.44	N-26°-W			P-163に切られる

名称	位 置	平面形	規 模 (m)			長軸方向	地上施設	副葬品	備 考
			推 認 面	底 面	最大深				
P-151	F1-63-45	楕円形	1.10 × 0.77	0.90 × 0.60	0.75	N-71°-W		玉: 1	
P-152	F1-63-55	"	1.10 × 0.67	0.80 × 0.56	1.04	N-24°-W		玉: 1	
P-153	"	"	1.06 × 0.83	0.73 × 0.56	0.77	N-75°-W			
P-154	"	"	1.06 × (0.70)	0.70 × 0.58	0.77	N-53°-W		玉: 1	P-161に切られる
P-155	"	"	1.04 × (0.80)	0.85 × 0.65	0.78	N-47°-W		玉: 1	P-160を切り、P-162に切られる
P-156	"	"	1.05 × (0.75)	0.80 × 0.65	0.78	N-51°-W			P-161を切る
P-157	F1-63-45	出隅形	1.10 × —	1.15 × —	0.80	—		玉: 1	開口から床跡 (W群b組) P-156を切る
P-158	"	楕円形	0.92 × 0.75	0.74 × 0.55	0.68	N-4°-W			
P-159	F1-63-55	"	0.90 × 0.65	0.88 × 0.50	0.50	N-3°-W			P-154と重複
P-160	F1-63-45-55	"	0.85 × 0.67	0.75 × 0.67	0.73	N-59°-W			
P-161	F1-63-54	"	0.74 × 0.55	0.75 × 0.50	0.55	N-44°-W			
P-162	"	"	0.75 × 0.50	0.60 × 0.43	0.43	N-50°-W		玉: 1	
P-163	F1-63-55-56 -55-56	"	1.27 × 0.96	1.10 × 0.84	0.90	N-56°-W		玉: 5	北西側位右横臥埋葬 合葬?
P-164	F1-63-56	"	0.80 × 0.47	0.63 × 0.38	0.15	N-25°-W			

表13 小ピット一覧

名称	位 置	最大深(m)	名称	位 置	最大深(m)	名称	位 置	最大深(m)
1	F1-63-54	0.31	10	F1-63-55	0.33	19	F1-63-45	0.21
2	F1-63-45-55	0.21	11	"	0.15	20	F1-63-55	0.25
3	F1-63-45	0.15	12	F1-63-65	0.21	21	F1-63-45	0.19
4	F1-63-55	0.34	13	"	0.18	22	"	0.18
5	"	0.25	14	"	0.16	23	"	0.18
6	"	0.32	15	F1-63-56	0.33	24	"	0.26
7	"	0.18	16	"	0.20	25	"	0.13
8	"	0.53	17	"	0.17	26	F1-63-44	0.12
9	F1-63-45	0.56	18	F1-63-46	0.32	27	F1-63-55	0.28

P-151

本群の最西端に位置し、やや大型の土壌墓である。また、その平面形は、本群中で最も長い楕円形である。横断面形は、墳底からの立ち上がり部でわずかに袋状を呈し開口に向かって緩やかにひろく。墳底には、長軸上南端に径25cm・深さ10cmほどの小ピットがあり、P-153と同様なものであった可能性がある。しかし、セクション等で確認することはできなかった。

遺体は、頭部から脊椎までの部分がペースト状で検出された。また、副葬品として、墳底北東部から3点の玉が出土した。うち1点は、穿孔途中のものであり、今回の調査のなかで唯一の例である。

位置 F1-63-65

平面形 楕円形

規模 1.20×0.78/1.20×0.60/0.90

長軸方向 N-54°-W

埋葬体位 北西頭位

副葬品 玉：3。 1 2.76×1.42×1.64 10.5 2 2.44×1.45×0.80 4.6
3 2.39×1.40×1.22 7.5

覆土 I 黒褐色 (EnL+II黒) II 暗黄褐色 (EnL>d₂)
III 黒褐色 (EnL+II黒>d₂) IV 黄褐色 (EnP>EnL)
V 黒色 (II黒>d₂) VI 暗茶褐色 (II黒>d₂)

P-152

この土墳墓は、P-153の西端を切って構築されている。葬中位にやや膨みをもつ形態である。
覆土には、P-153と同じく黒色土の混りが少ない。

位置 F₁-63-55 平面形 楕円形
規模 1.05×(0.8)/1.05×(0.75)/0.80 長軸方向 N-54°-W
覆土 I 褐色 (EnL>黒色土+d₂) II 黒色 (黒色土>d₂)
III 暗褐色 (EnL>黒色土+d₂) IV 暗褐色 (EnL>d₂>黒色土)
V 暗褐色 (EnL+黒色土+d₂) VI 黄褐色 (EnL>EnP)
VII 暗黄褐色 (EnL+黒色土)

P-153

この土墳墓は、本群の中で長軸長・深さともに最大規模のものである。墳内の長軸両端からは、柱穴様の小ピットが検出され、覆土充填前に墓標として木柱が立てられていた可能性が高い。この2個の小ピットにはさまれたかたちで、北西頭位の右横臥屈葬の人骨が検出された。特に頭部の残存状態は良好であり、その前額部によって玉1点が出土した。

位置 F₁-63-55 平面形 楕円形
規模 1.88×(1.25)/1.25×0.95/1.08 長軸方向 N-51°-W

埋葬体位 北西頭位 右横臥屈葬

副葬品 玉：1。I 2.00×1.40×0.95 3.9

覆土土層図1 I 黒色 (II黒>d₂) II 褐色 (EnL>II黒+d₂)
III 黄色 (EnL) IV 暗褐色 (EnL+II黒+d₂)
V 黄色 (EnL+EnP) VI 黄褐色 (EnL>EnP)
VII 黒褐色 (II黒+EnL) VIII 黄褐色 (EnP)
IX 暗黄褐色 (EnL>II黒) X 黄褐色 (EnP>II黒)
覆土土層図2・3 I 暗黒褐色 (II黒>EnL) II 淡褐色 (EnL+EnP>II黒)
III 暗黄灰色 (EnL>II黒>d₂) IV 暗黄色 (EnL+EnP：粒径大)
V 暗黄色 (EnL+EnP) VI 暗黄灰色 (EnL>EnP)
VII 黒色 (II黒>EnL)

地上施設 柱穴様ピット：2 (墳内)

P-154

この土壌墓はP-167とともに、P-160~162・196・198の間を埋めるようなかたちで位置する。平面形は、ほぼ円形であり、他のものに比べて特異である。また、P-167と切り合い関係をもつが、新旧関係は不明である。

位置	F ₁ -63-55	平面形	ほぼ円形
規模	0.70×0.65/0.58×0.54/0.67		
覆土	I 黄褐色 (EnL+II黒>d ₂)	II	黄色 (EnL>d ₂)
	III 明黒褐色 (II黒+EnL)	IV	暗赤褐色 (II黒+d ₂ >EnL)
	V 黒褐色 (II黒+d ₂ >EnL)	VI	褐色 (II黒>EnL)

P-187

Ta-d₁層中で微量のd₁, d₂を含むEn-aロームの輪郭が確認された。墳底はEn-aローム層中に作られている。壁は、ほぼ垂直である。P-154と重複する。

位置	F ₁ -63-55	平面形	楕円形
規模	0.90×0.65/0.88×0.50/0.50	長軸方向	N-3°-W
覆土	I 暗灰黄色 (EnL>d ₁ >d ₂)	II	淡灰褐色 (EnL+d ₁)
	III 灰黄色 (EnL>d ₂)	IV	黒色 (II黒>d ₂)

P-155

本群の東端に位置する。やや縦長の楕円形プランをもつが、形態・規模ともに平均的なものである。横断面形は、西壁の中位が外側にやや膨らみ、段をもっている。

墳底北側で頭骨を確認したが、遺体の残存状態が悪く白歯を数本取り上げたにとどまる。遺物の出土はない。

位置	F ₁ -63-45	平面形	楕円形
規模	0.95×0.70/0.90×0.55/0.76	長軸方向	N-22°-W
埋葬体位	北西頭位		
覆土	I 暗黄褐色 (EnL>II黒+d ₂)	II	黒褐色 (II黒>EnL)
	III 赤褐色 (d ₂ >II黒)	IV	黄褐色 (EnL)
	V 明黒褐色 (II黒>EnL)	VI	暗赤褐色 (d ₂ +II黒)
	VII 黒色 (II黒>d ₂)	VIII	黒色 (II黒)

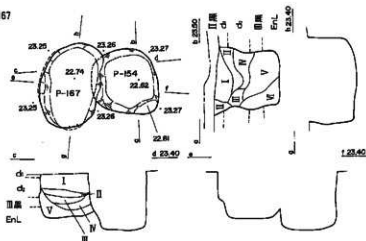
P-157

北東部に密集する5個の土壌墓のうちのひとつで、P-168と接して存在する。新旧関係はわからない。形態・規模ともに平均的なものである。長軸方向はIIIグループに属する。また、長軸線上の墳外には小ビット(2・3)が検出され、何らかの施設が存在が考えられる。

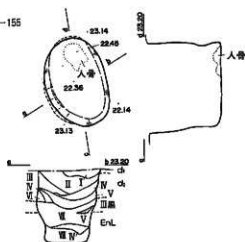
墳底から玉1点が出土した。

位置	F ₁ -63-45	平面形	楕円形
規模	1.10×0.77/0.90×0.60/0.75	長軸方向	N-71°-W

P-154-167



P-155



P-157

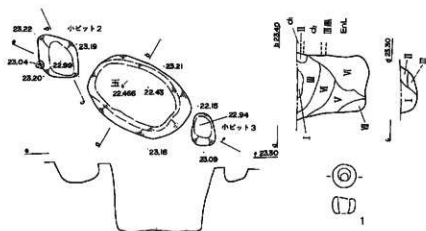


図53 P-154・155・157・167と遺物

副葬品 玉：1。 1 1.25×1.23×0.90 1.9

覆土 I 明黒褐色 (II黒+EnL)	II 黒褐色 (II黒>d ₂)
III 明黄褐色 (EnL>d ₂)	IV 明黒褐色 (II黒>EnL+d ₂)
V 暗黄褐色 (EnL>II黒+d ₂)	VI 暗赤褐色 (II黒+d ₂ >EnL)
VII 黒褐色 (II黒>EnL)	

地上施設 小ビット：2。 小ビット2 規模 0.50×0.40/0.40×0.25/0.21

小ビット3 規模 0.34×0.26/0.20×0.16/0.15

覆土 I 黒色 (II黒>d ₁)	II 灰褐色 (II黒>d ₂)
III 赤褐色 (d ₂ >II黒)	

P-158

この土墳墓は、東部に点にするもののうちの1個である。本群中で、平面規模が平均的なもののうち、最大深が1mを超える唯一の例である。断面形は、両壁中位が内側にくびれ下影れの形態を有する。長軸方向は、IIグループに属する。このグループに属する3個のうち、玉(1点)の出土をみたのは、この土墳墓のみである。玉は、「ノ」の字形を呈し、片側穿孔のものである。

位置 F1-63-55

平面形 楕円形

規模 1.1×0.67/0.80×0.56/1.04

長軸方向 N-24°-W

副葬品 玉：1。 1 2.86×1.60×1.22 9.1

覆土 I 黒色 (II黒>EnP)	II 黄褐色 (EnL)
III 明黒褐色 (EnL>II黒)	IV 暗黄褐色 (EnL>II黒)
V 黒色 (II黒)	VI 明黒褐色 (EnL+II黒)
VII 黒褐色 (II黒>d ₂)	

P-159

P-163・168に近接して存在する。形態・規模とも平均的なものであるが、墳口のプランは円形に近い。

位置 F1-63-55

平面形 楕円形

規模 1.06×0.83/0.73×0.56/0.77

長軸方向 N-75°-W

覆土 I 黒褐色 (II黒>d ₁ >EnL)	II 灰黄色 (EnL>d ₂)
III 暗黒褐色 (II黒>EnL)	IV 暗灰黄色 (EnL>II黒)
V 灰黄色 (EnL)	

P-160・161・162

北東-南西方向に重複する土墳墓である。その新旧関係は、P160→161→162の順で、北東側から順次構築されている。確認された掘り込み面(Ta-d1上面)や、規模・形態が非常に似かよっていることなどから、この3個の土墳墓に大きな時間差はないと考えられる。

P-160・161で各1点の玉が出土した。3個とも遺体は検出されていない。

(P-160)

位置 F₁-63-55 平面形 楕円形
 規模 $1.06 \times (0.7) / 0.7 \times 0.58 / 0.77$ 長軸方向 N-53°-W
 副葬品 玉: 1。 I $1.30 \times 1.10 \times 0.60$ 1.5
 覆土 I 灰黄褐色 (EnL > II 黒 > d₂) II 黄灰色 (EnL > d₂)
 III 黄色 (EnL + EnP) IV 暗黒褐色 (II 黒 > d₂ > EnL)
 V 黒色 (II 黒)

(P-161)

位置 F₁-63-55 平面形 楕円形
 規模 $1.04 \times (0.8) / 0.85 \times 0.65 / 0.78$ 長軸方向 N-47°-W
 副葬品 玉: 1。 I $1.42 \times 1.42 \times 1.20$ 3.5
 覆土 I 黄灰色 (EnL > d₂) II 黒褐色 (II 黒 > EnL + d₂)
 III 赤褐色 (EnL + d₂ > II 黒)

(P-162)

位置 F₁-63-55 平面形 楕円形
 規模 $1.05 \times (0.75) / 0.80 \times 0.65 / 0.78$ 長軸方向 N-51°-W
 覆土 I 灰黄褐色 (EnL > II 黒) II 灰黄褐色 (EnL > d₂)
 III 黄色 (EnL + EnP) IV' 灰黄褐色 (EnL > II 黒 + d₂)
 V 黒色 (II 黒)

P-163

Ta-d: 層上面で微量のII黒を含むEn-aの輪郭が確認された。プランは、ほぼ円形である。
 墳底はEn-a ローム層下位に作られる。断面は袋状を呈する。墳口から一部覆土I層に食い込
 んだ状態で浅鉢形土器が、また墳底のほぼ中央から玉が1点それぞれ出土した。

P-156を切り、南東部で小ピット9とわずかに重複する。

位置 F₁-63-45 平面形 ほぼ円形
 規模 $1.10 / 1.15 / 0.80$
 副葬品 玉: 1。 I $1.45 \times 1.45 \times 0.73$ 1.7
 覆土 I 暗灰黄色 (EnL > II 黒 > EnP) II 暗灰黄色 (EnL > II 黒 > EnP + d₂)
 III 暗灰黄色 (EnL > II 黒 > d₂) IV 灰黄色 (EnL)
 V 淡灰黄褐色 (EnL > II 黒) VI 灰茶色 (EnL > II 黒)
 VII 黒灰色 (II 黒 > EnL + d₂) VIII 暗灰黄色 (EnL)
 IX 暗灰黄色 (EnL > d₂ > II 黒) X 灰黄色 (EnL > d₂)
 XI 黒褐色 (III 黒 > II 黒 + d₂) XII 灰黄褐色 (EnL > d₂)
 XIII 灰黄色 (EnL)

遺物 覆土 土器IVb: 23。 図76-27

地上施設 小ピット：1。 規模 0.40/0.25×0.20/0.56

覆土 I 灰褐色 (EnL>II黒>d₁+d₂) II 黒色 (II黒)

III 灰褐色 (EnL>II黒>d₁+d₂) IV 暗灰黄色 (EnL>II黒+III黒+d₁+d₂)

P-156

北東部をP-163に切られる。立ち上がりは緩くカーブし、墳底面は凹面を呈する。

位置 F₁-63-45・55

平面形 楕円形

規模 0.64×——/0.66×——/0.44

長軸方向 (N-26°-W)

P-164

長軸が、ほぼ真北を向くIVグループに属する。南壁で、階段状の掘り込みが確認された。北側で検出された小ピット19はTa-d₂層上面で確認されたもので、墓壇長軸上に位置する。

位置 F₁-63-45

平面形 楕円形

規模 0.92×0.75/0.74×0.55/0.68

長軸方向 N-4°-W

覆土 I 灰黄褐色 (EnL>d₁+d₂>II黒) II 黒色 (II黒>d₁+d₂)

III 黄灰色 (EnL)

IV 灰黄褐色 (EnL>d₂>II黒+III黒)

V 暗黄灰色 (EnL>III黒)

地上施設 小ピット：1。 規模 0.24/0.06/0.21

P-168

東部でP-157とわずかに重複し、西部では、小ピット9と近接する。壁は、ほぼ垂直で、墳底中央部から玉が1点出土した。

位置 F₁-63-45・55

平面形 楕円形

規模 0.85×0.67/0.75×0.67/0.73

長軸方向 N-59°-W

副葬品 玉：1。 1 3.20×1.30×1.90 14.1

覆土 I 暗黄灰褐色 (EnL>II黒>d₂) II 灰褐色 (EnL>II黒+III黒>d₂)

III 灰黄色 (EnL)

P-166

Ta-d₁層上面から掘り込まれ、墳底はEn-aローム層中に作られている。壁は墳中でオーバーハングし、墳口に向かって開く。小ピット1を切る。

位置 F₁-63-54

平面形 楕円形

規模 0.74×0.55/0.75×0.50/0.55

長軸方向 N-44°-W

覆土 I 暗黄灰色 (EnL>II黒)

II 黒色 (II黒>d₁)

III 黒灰色 (II黒>EnL>d₁+d₂)

IV 黒色 (II黒>EnL)

V 灰褐色 (EnL>d₁+d₂>II黒)

VI 赤褐色 (d₂>II黒)

VII 赤褐色 (d₂>II黒)

VIII 黒色 (II黒>d₁+d₂)

IX 暗灰黄色 (EnL>II黒>d₂)

X 灰褐色 (III黒>d₁+d₂>EnL)

XI 淡黒色 (II黒+d₁>EnL)

地上施設 小ピット：1。 規模 $0.28/0.14 \times 0.10/0.31$

規模 $0.8 \times 0.8 \times 0.31$

覆土 I 黒色 ($\text{II黒} > d_1 > d_2$)

II 黒色 ($\text{II黒} > d_1$)

P-198

本群の中で最も北に位置する。Ta-d₂層上面でEn-aを含むTa-d₁の輪郭が確認された。墳底はEn-aローム層中に作られ、北側にやや傾斜する。長軸方向の墳底北隅から玉が1点出土した。小ピット1は、本土壌の長軸延長上に位置する。

位置 F₁-63-54

平面形 楕円形

規模 $0.75 \times 0.6 / 0.6 \times 0.43 / 0.43$

長軸方向 N-50°-W

副葬品 玉：1。 1 $1.85 \times 1.05 \times 0.35$ 1.2

覆土 I 暗灰褐色 ($d_1 > \text{EnL} > \text{II黒}$)

II 黒色 ($\text{II黒} > d_2$)

III 黒色 ($\text{II黒} > d_1$)

IV 暗灰黄色 ($\text{EnL} > \text{III黒} > d_2$)

V 暗灰黄色 ($\text{EnL} > \text{III黒}$)

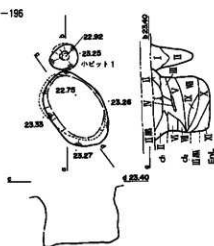
VI 黒色 ($\text{II黒} > d_1 > d_2$)

P-200

Ta-d₁層上面から掘り込まれている。墳底はEn-aバミス層を約7cm掘り下げ作られている。

壁は墳中でオーバーハングし、墳口に向かって開く。遺体の残存状態は悪く、体位は下肢を強く折り曲げた右横臥屈葬である。歯列が2箇所で見られ、合葬の可能性もある。玉は撒き散らしたように、後頭部から腕にかけて4点、折り曲げた下肢の間から1点出土した。

P-196



P-198

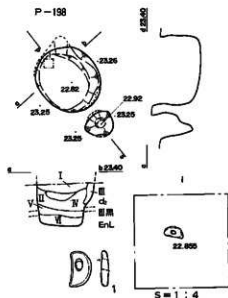


図56 P-196・198と遺物

位置 F₁-63-55・56・65・66

平面形 楕円形

規模 1.27×0.96/1.10×0.84/0.90

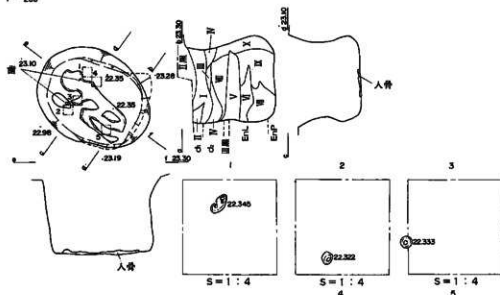
長軸方向 N-56°-W

埋葬体位 北西頭位右横臥屈葬

副葬品 玉: 5。 1 2.95×1.68×0.96 5.5 2 1.22×1.20×1.33 3.0
3 1.44×1.36×1.32 3.9 4 3.30×2.80×1.30 17.3
5 1.50×1.40×1.00 3.4

覆土 I 黄灰色 (EnL) II 暗灰黄色 (EnL>II黒>EnP)
III 赤褐色 (d₂) IV 暗黒灰色 (EnL+II黒>d₂)
V 暗黒褐色 (II黒>III黒+EnL>d₂) VI 黒色 (II黒>d₂>EnL)

P-200



P-214

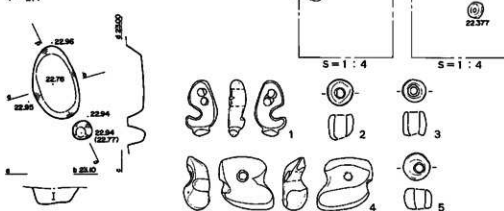


図57 P-200・214と遺物

VII 暗黒褐色 (II黒>III黒+EnL>d₂) VIII 明黄色 (EnL)

IX 暗灰黄色 (EnP+EnL>II黒) X 賞褐色 (EnP+EnL>II黒)

P-214

本群の中で最も南に位置する。Ta-d₂層上面で暗黒褐色の楕円形プランが確認された。墳底はTa-d₂層の最下位に作られている。土壌長軸上の南側に小ピットが存在する。

位置 F1-63-56

平面形 楕円形

規模 0.8×0.47/0.63×0.38/0.15

長軸方向 N-25°-W

覆土 I 暗赤褐色 (II黒>d₂)

地上施設 小ピット: 1。 規模 0.20/0.10/0.17

第5群

本群は台地の縁から25mほど隔った標高23m前後 (II黒層上面) の平坦部にあり、ほぼ南北に連なる第2-4、6群の東側に10mほどの空隙をもって隣接し、北側に位置する第1群とは20mほど離れている。また、本群の東側にはほぼ南北に浅い沢が刻まれている。

本群は、重機による確認調査の際のトレンチで礫が検出されたことにより、第6群とともに当初からその存在が予想されていたものである。さらに、Ta-c層除去後にも礫が検出され、F1-63-12区をほぼ中心とした直径10mほどのわずかにくぼんだ地形であることから、当初は周堤墓の可能性も考えられた。しかし、竖穴の掘り込みも周堤も認められず、各墓墳の掘り込み面がII黒層上面下5cmほどであること、墓墳上部の覆土中からIV群b類の土器片が多量に検出された例などから、他の土墳墓群同様、縄文時代後期中葉に作られた土墳墓群と判断された。

北西-南東方向に細長い20×10mほどの範囲内から27個の土墳墓が検出された。これは第2-4・6群が10×10m前後の狭い空間を利用し、効率的に墓墳を設けているのに比べ、墓墳の密集度も低くまとまりのない感じを受ける。

窪地内には18個があり、北東-南西方向に3個でそれぞれ列をなすP-172・179・176、P-178・182・173とその周囲にある5個が一群をなし、さらにこれらを取り囲むように8個の墓墳が西から南にかけて弧状に配置されている。窪地外には北西側に7個、南東および南西側にそれぞれ1個ある。

各土墳墓の平面形は、長幅比が0.6~0.7の楕円形のものが大半であるが、比較的幅広の楕円形のもの (P-172・179) や、幅の狭い楕円形のもの (P-195) もある。

長軸方向は、N-15°-WからN-106°-Wまでの91°内にある。このうち、22個がN-15°-WからN-64°-Wの範囲内に収斂する。

規模は、確認面で1.3×1.0m以上のものが8個、1.2×0.8m前後のものが8個、1.0×0.8m以下が11個ある。深さは、0.8m前後のものが多く、0.5~0.3mと非常に浅いもの (P-188・191・203・205・212) もある。本群中で最大のものは、平面の規模では1.55×1.05m (P-194)、深さでは1.03m (P-195) である。最小のものは0.8×0.55m、深さ0.3m (P-122)

である。このように、本群では規模や形状にかなりの変異が認められるが、窪地の内外から検出された墓墳のあいだに相違はみられない。

墓墳は、いずれもEn-a room層まで掘り込まれている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるものと一部オーバーハングするものがあり、墓墳上部はいずれもいくぶん外反する。覆土は、En-a roomを主とした黄褐色ないしは暗褐色を呈する土が墳口部を充填するものがほとんどである。これは他の土墳墓群にもみられるもので、埋め戻しの際に意識的に行われたものと考えてさしつかえないだろう。

墳底部にベンガラが認められたものはない。遺体の検出も4個(P-146・179・180・194)

で、このうち埋葬体位の判明したものは1例のみである。

P-194では、南西側の壁際から北西頭位の横臥埋葬の人骨が検出され、北東側の壁付近にも腐蝕が著しく進行した遺体の一部と思われるものがあったことから、合葬の可能性が大きい。頭位のわかる墓墳は、いずれも北西～西北西である。

副葬品を伴うものは9個(P-173・176・178・179・180・190・194・205・216)で、このうち8個は窪地内にある。P-178は埋土中に土器を伴う。他は玉および石鏃に限られ、すべて墳底から出土したものである。石鏃が副葬されたものは2個(P-180・194)で、このうちP-180では、33個の玉とともに南半部から散乱した状態で検出された。

墓墳の上部に何らかの施設をもつものは9個あり、いずれも窪地内に作られたものである。礎を伴うものは6個(P-172・178・179・180・188・189)で、墓墳の長軸上に2個を配したものの、長軸上的一端と短軸上的一端に配したもの、長軸の一端にのみ配したものがある。P-188には礎の下部に柱穴様のピットを伴う。このほかに柱穴様のピットを伴うものは3個(P-173・182・190)あり、P-173では覆土中に設けられている。

窪地の内外から検出された墓墳には、規模・形状等には差が認められず、墓墳間の新旧関係もとらえられなかった。しかし、副葬品や地上施設かと考えられるものを伴うものが、ほぼ窪地内に限られることから、いくつかに細分される可能性がある。ひとつには、北西側にある7個が、窪地内にあるものとは別の群を構成する可能性も考えられる。また、南西および南東端に位置するP-212・216は、本群に属さない単独の土墳墓として存在するものかもしれない。墓域確定のための何らかの作業によって形成されたと考えられる窪地内の墓墳に限ってみれば、礎を伴う例が多く、墓墳が弧状に配置されていることから、6群に非常に近いものと思われる。

(野中一宏)

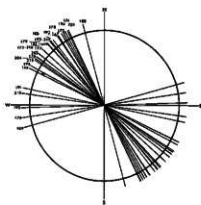


図58 長軸方向

表14 第5群土壌一覧

名称	位置	平面形状	面積 (m ²)			長軸方向	地上施設	調査品	備考
			楕円形	長径	短径				
P-14	F1-63-20	楕円形	1.20×0.90	1.00×0.60	0.85	N-64°-W			北西頂位
P-16	#	#	0.80×0.60	0.65×0.50	0.45	N-34°-W			
P-17	F1-63-02-12	#	1.50×1.25	1.25×0.95	0.85	N-43°-W	礎: 2		覆土上 土器b:71
P-17	F1-63-12-13	#	1.15×0.85	1.05×0.55	0.80	N-30°-W	柱穴様ビット:1	玉: 2	土器b:43-耳栓1
P-17	F1-63-02	#	0.95×0.80	0.70×0.45	0.70	N-27°-W			
P-17	F1-63-03-13	#	0.80×0.60	0.80×0.55	0.80	N-99°-W			
P-17	F1-63-12	#	1.30×1.00	1.00×0.70	0.80	N-55°-W		玉: 6	覆土上 土器b:1
P-17	F1-63-02	#	1.20×0.80	0.90×0.50	0.80	N-48°-W			土器b:24
P-17	#	#	1.25×0.90	0.90×0.65	0.80	N-31°-W	礎: 1		覆土中 土器b:462
P-17	F1-63-12	#	1.35×1.10	0.90×0.75	0.80	N-41°-W	礎: 2	玉: 3	覆土上 土器b:21
P-17	F1-63-22	#	1.40×1.00	1.10×0.75	0.70	N-38°-W	礎: 1	玉: 33	土器b:53
P-17	F1-63-02-12	#	1.50×1.10	1.35×0.90	0.80	N-43°-W	柱穴様ビット:1	石鉄:4	人々の一部焼出, 埋蔵年代は不明
P-17	F1-63-22	#	1.20×0.80	1.00×0.70	0.40	N-15°-W	礎: 1		覆土上 土器b:44
P-17	F1-63-11	#	1.40×1.00	1.05×0.70	0.85	N-100°-W	礎: 2		土器b:1
P-17	#	#	1.10×0.75	1.15×0.80	0.65	N-92°-W	柱穴様ビット:1	玉: 2	
P-17	#	#	1.00×0.65	0.85×0.45	0.50	N-78°-W			
P-17	F1-63-21	#	1.40×1.10	1.40×0.60	0.90	N-40°-W			
P-17	#	#	1.10×0.80	1.05×0.55	0.70	N-34°-W			
P-17	F1-63-11-21	#	1.55×1.05	1.35×0.85	0.75	N-28°-W		石鉄:6	覆土上 土器b:35 分層 1係は北西頂位段級原典
P-17	#	#	1.20×0.60	1.10×0.50	1.03	N-62°-W			覆土上 土器b:2
P-17	F1-63-11	不整形 円形	1.00×0.60	0.95×0.65	0.45	N-52°-W			
P-17	F1-63-01	楕円形	1.05×0.70	0.95×0.65	0.60	N-56°-W			
P-17	F1-63-03	#	1.00×0.70	0.85×0.55	0.50	N-26°-W		玉: 1	覆土上 土器b:36
P-17	F1-63-22-32	#	0.80×0.55	0.65×0.35	0.30	N-82°-W			覆土上 土器b:72
P-17	F1-63-01-02	#	1.00×0.70	1.00×0.65	0.30	N-57°-W			
P-17	F1-63-02-03	#	0.90×0.55	0.65×0.45	0.35	N-40°-W			
P-17	F1-63-03	#	0.95×0.65	0.75×0.45	0.35	N-43°-W		玉: 1	

P-146

本群の北西に位置する。墳底はEn-aローム層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。北西壁際から頭蓋の一部と歯が検出されたが、腐蝕が著しく進行している。墳中からの出土遺物はない。

位置 F1-60-20

平面形 楕円形

規模 1.20×0.90/1.00×0.60/0.85

長軸方向 N-64°-W

埋葬体位 北西頭位

覆土 I 黒色 (II黒>d₂)

II 黄色 (EnL>EnP)

III 灰褐色 (EnL+II黒>EnP)

IV 茶褐色 (EnL+II黒+d₂>EnP)V 黒褐色 (II黒>d₂>EnP)VI 黒色 (II黒>d₂)

P-147

本群の北西に位置する。墳底面はIII黒層にあり、小型で浅い土壌である。壁は南東側がオーバーハングしているほかはほぼ垂直に立ち上がる。遺体は検出されず、墳中からの出土遺物もない。

位置 F1-63-20

平面形 楕円形

規模 0.80×0.60/0.65×0.50/0.45

長軸方向 N-34°-W

覆土 I 茶褐色 (d₂+II黒+d₁)II 赤褐色 (d₂>II黒)III 黒色 (II黒>d₂)

P-172

本群のほぼ中央に位置する。重機による確認調査の際のトレンチに北半部がかかっており、壁上部は消失している。本群中では大型の類に属する。墳底面はEn-aローム層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、Ta-d₂層から上部がわずかに開く。遺体は検出されなかった。墓墳上部には、砂岩の石皿が2個検出された。長軸の延長上に配されており、地上施設かと思われる。北西側にあるものは、確認調査の際の重機によるトレンチ掘削時に動かされており、正確な位置は不明である。また、南東側の礎の下部にも柱穴様のピットはない。

覆土上のII黒層中にはIV群b類の土器片が散在していたが、墳中からの出土遺物はない。土器片は2個体分の破片で、本土墳とは関係ないものと思われる。

位置 F1-63-02・12

平面形 楕円形

規模 1.50×1.25/1.25×0.95/0.85

長軸方向 N-43°-W

覆土 I 黄褐色 (EnL)

II 暗褐色 (EnL+II黒>d₂)III 黄褐色 (EnL>d₂)IV 黒色 (II黒+d₁>d₂+EnL)V 暗褐色 (d₂+EnL>II黒+d₁)VI 暗黄褐色 (d₂+EnL+II黒)VII 黒褐色 (II黒+d₁>EnL+d₂)VIII 暗黄褐色 (d₂+EnL>II黒)IX 暗黄褐色 (d₂+EnL+II黒)X 黒褐色 (II黒+d₁>d₂)XI 黄褐色 (EnL>d₂)

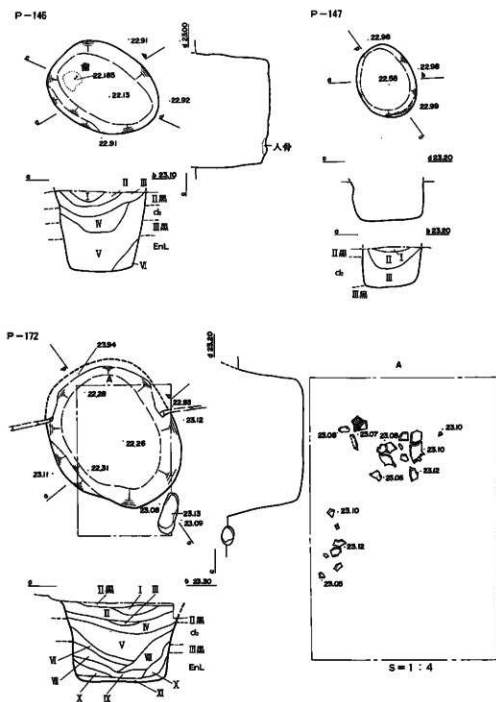


図60 P-146・147・172

地上施設 礎：2。図77-30 M 55.5×16.5×11.0 16.6kg Sa.

31 M 43.0×16.5×11.0 14.4kg Sa.

遺物 覆土上部 土器Ⅳb：71。図77-28・29 Ⅳb。いずれも深鉢の破片である。

P-173

本群の南端付近に位置する。墳底はEn-aローム層に達している。壁は北壁がわずかにオーバーハングしているほかは、ほぼ垂直に立ち上がり、Ta-dz層から上部で外反する。南壁付近の覆土上部で、I・II層を切る直径50cm、深さ25cmの円形と思われる小ビットの半分を検出した。遺体は検出されなかったが、北壁付近で2個の玉が出土した。また、墓壇上部のII黒層中からは、IV群b類の土器片、滑車形耳飾の破片が出土したが、本墓壇に伴うものではないと思われる。

位置 F₁-63-12・13

平面形 楕円形

規模 1.15×0.85/1.05×0.55/0.80

長軸方向 N-30°-W

副葬品 玉：2。1 1.17×1.16×0.55 1.3 2 1.15×0.94×0.63 1.2

覆土 I 褐色 (d₁>EnL+II黒+d₂)

II 黒色 (II>d₁+EnL粒)

III 黄褐色 (EnL>d₂)

IV 黒褐色 (II黒>EnL)

V 暗褐色 (II黒+EnL>d₂)

VI 暗褐色 (d₂+EnL)

VII 黒褐色 (EnL+d₂+II黒)

VIII 暗黄褐色 (EnL>d₂)

地上施設 柱穴様ビット：1 平面形 円形

規模 (0.5)/(0.3)/0.25

覆土 1 黒色 (II黒>d₁>d₂+EnL粒)

2 暗褐色 (II黒+d₁+d₂>EnL粒)

遺物 覆土上部 土器Ⅳb：43。耳飾：1。図77-32 滑車形耳飾、33-35 Ⅳb。33-35は同一個体の深鉢の破片で、口縁と頸部に刻み列が施されている。胴部には平行沈線を縦に区切るS字状の沈線が施されている。地文はLR斜行縄文である。

P-174

本群の東端に位置する。墳底はEn-aローム層に達する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部でわずかに開く。遺体は検出されず、墳中からの出土遺物もない。

位置 F₁-63-02

平面形 楕円形

規模 0.95×0.80/0.70×0.45/0.70

長軸方向 N-27°-W

覆土 I 黒色 (II黒>d₁+EnL粒)

II 黒褐色 (d₁>II黒+d₂+III黒)

III 暗黄褐色 (EnL+II黒)

IV 暗褐色 (d₂+III黒>EnL)

V 暗褐色 (d>II黒)

P-175

本群の南端に位置する。平面形はほぼ東西に長軸をもつ楕円形で、墳底はEn-aローム層に達する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺体は検出されなかった。また墳中からの出土遺物もない。

位置	F ₁ -63-03・13	平面形	楕円形
規模	0.80×0.60/0.80×0.55/0.80	長軸方向	N-99°-W
覆土	I 黒色 (II黒>EnL粒>d ₁ +d ₂)	II	暗褐色 (EnL+III黒)
	III 暗黄褐色 (EnL>II黒)	IV	黄褐色 (EnL)
	V 暗黄褐色 (II黒+EnL+d ₂)	VI	黒褐色 (II黒>EnL+d ₂)
	VI 黒色	VII	黄褐色
	IX 黒色	X	暗黄褐色
	XI 黒色 (II黒>d ₁ >EnL)	XII	黒褐色 (d ₂ +d ₁ >II黒)

P-176

本群の中央部に北東-南西方向に並ぶ3個の土壌墓のうちのひとつで、南西端に位置する。平面形は比較的幅広い楕円形で、墳底はEn-aローム層に達している。壁は、En-aローム層中でオーバーハングし、d₂層から上部が外反する2段構造である。遺体は検出されなかったが、西壁付近(A)から5個、北東壁付近(B)から1個、計6個の玉が出土した。西壁付近から出土したものは、連なっていた可能性が高い。また、覆土上部のII黒層からはIV群b類の土器片が1点出土した。

位置	F ₁ -63-12	平面形	楕円形
規模	1.30×1.00/1.00×0.70/0.80	長軸方向	N-55°-W
副葬品	玉: 6.		
	1 1.30×1.25×1.00 2.7	2 1.30×1.12×0.80 2.0	
	3 0.85×0.85×0.70 0.7	4 0.64×0.62×0.39 0.4	
	5 0.75×0.75×0.50 0.52	6 0.70×0.70×0.44 0.4	
覆土	I 橙褐色 (d ₂ +EnL)	II	褐色 (EnL>d ₂)
	III 黄褐色 (EnL>d ₂)	IV	暗褐色 (III黒)
	V 橙褐色 (d ₂ +EnL)	VI	暗黄褐色 (EnL>d ₂ +d ₁ +III黒)

遺物 覆土上 土器IVb: 1。図77-36 Nb。

P-177

窪地内の南東付近に位置する。墳底はEn-aローム層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、墳底から20cmほど上部で開く。遺体、副葬品は検出されなかったが、覆土上のII黒層からIV群b類の土器片が出土した。

位置	F ₁ -63-02	平面形	楕円形
規模	1.20×0.80×0.90×0.50/0.80	長軸方向	N-48°-W
覆土	I 暗黄褐色 (EnL+II黒)	II	黒色 (II黒>d ₁ +d ₂ +EnL粒)
	III 暗褐色 (EnL+III黒+d ₂)	IV	黒褐色 (II黒+EnL+d ₂)
	V 暗褐色 (EnL+III黒>d ₂)	VI	黄褐色 (EnL>d ₂)
	VII 暗黄褐色 (d ₂ +EnL)		

遺物 覆土上 土器IVb: 24。図77-37・38 Nb。

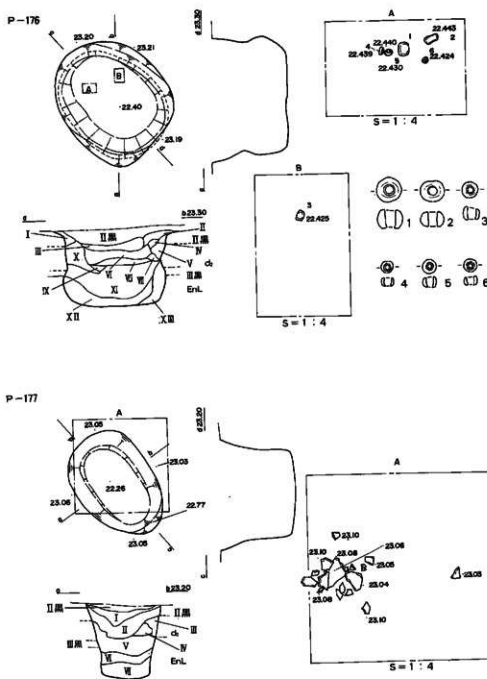


図62 P-176・177と遺物

P-178

本群の中央部やや南東寄りに位置する。P-173・182とで北東—南西方向に列をなすようにみえる。平面形はほぼ北西—南東方向を長軸とする楕円形で、墳底はEn-a ローム層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部が開く。遺体・副葬品は検出されなかったが、墳口南東部から安山岩の礫が検出された。地上施設と思われる。また、覆土Ⅰ—Ⅲ層からはⅣ群b類の土器片が多量に出土した。3個体分の破片で、本土壤に伴うものと思われる。

位置 F1-63-02

平面形 楕円形

規模 1.25×0.90/0.90×0.65/0.80

長軸方向 N-31°-W

覆土 Ⅰ 灰黄褐色 (EnL>Ⅱ黒)

Ⅱ 灰橙色 (EnL>Ⅱ黒+d₂)Ⅲ 黄褐色 (EnL>d₂)Ⅳ 灰褐色 (Ⅱ黒+d₂+EnL)Ⅴ 黄褐色 (EnL+Ⅱ黒>d₂)

Ⅵ 黄褐色 (EnL)

Ⅶ 灰橙色 (EnL>Ⅱ黒+d₂)Ⅷ 黒褐色 (Ⅱ黒>EnL+d₂)

地上施設 礫: 1. 37.5×13.5×7.0 5.6kg Sa.

遺物 覆土 土器Ⅳb: 462。図77-39~41 Ⅳb。 39 浅鉢 8.2×25.8cm ほぼ道を復元した。胎土には2mm大の小砂礫を含む。焼成は比較的良好で、表面が剥落している部分がみられる。4個の山形突起を有すると思われ、口唇は丸味をおびる。口縁と頸部に刻み列があり、その間は無文である。頸部から底面にかけては弧線文が連続して施されている。内面の口縁下にも横走沈線が一条認められる。

P-178

窪地のほぼ中央に位置する。P-172・176とで北西—南東方向に列をなす。平面形は比較的確度の楕円形で、墳底はEn-a ローム層に達している。壁は南東壁がオーバーハングしている。ほぼは、ほぼ垂直に立ち上がり、北西および南東壁上部が開く。墓壇上部では石皿が、長軸の南東側延長上30cmほどのところと南西側墳口から検出された。地上施設と考えられる。北側壁際で頭蓋と頸椎の一部が検出され、頭蓋の近くからは3個の玉が出土した。また墓壇上部のⅡ黒層からⅣ群b類の土器片が出土したが、本土壤には伴わないものと思われる。

位置 F1-63-12

平面形 楕円形

規模 1.35×1.10/0.90×0.75/0.80

長軸方向 N-41°-W

埋葬体位 北西頭位

副葬品 玉: 3. 1 1.34×1.26×0.90 2.5 2 1.15×1.05×0.62 1.3

3 0.83×0.76×0.43 0.4

覆土 Ⅰ 黒色 (Ⅱ黒)

Ⅱ 暗褐色 (EnL+Ⅲ黒>d₂)Ⅲ 黒褐色 (Ⅱ黒+EnL>d₂)Ⅳ 黄褐色 (EnL>d₂+EnL粒)Ⅴ 黒褐色 (Ⅱ黒+d₁>d₂)Ⅵ 黄褐色 (Ⅱ黒+d₁>d₂)Ⅶ 黒色 (Ⅱ黒>d₁>d₂)Ⅷ 暗黄褐色 (Ⅱ黒+EnL>d₂)Ⅷ 暗褐色 (Ⅱ黒+d₁+d₂+EnL粒)

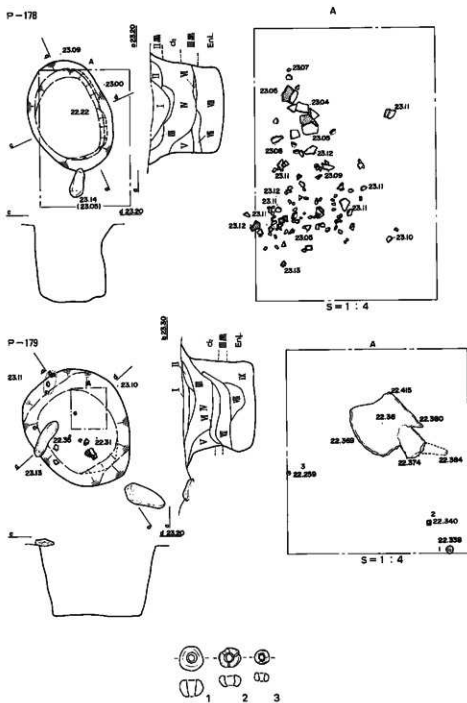


図63 P-178・179と遺物

地上施設 礎：2。図78-44 49.0×17.5×12.0 18.0kg Sa.

44.8×15.3×10.0 11.5kg Gni.

遺物 覆土上部 土器IVb：21。図78-42・43 IVb。

P-180

本群の西端付近に位置する。墳底面はEn-aローム層に達しているが、窪地内の中央付近にある墓壇と比較すると若干浅いものである。壁は北から西壁にかけてオーバーハングするほかは、ほぼ垂直に立ち上がり、Ta-ds層から上部が開く形態である。墓壇上部では長軸の端口北西側で大型の砂岩礫が検出された。地上施設と考えられる。この礫の周囲からはIV群b類の土器破片が出土したが、本土壤に伴うものではないと思われる。北壁際で人骨の一部が検出されたが、腐蝕が著しく進行しており、部位は不明である。また、中央部周辺から玉33個、石鏃4本が出土した。玉は硬玉製で、管玉様の形をした2点を除いてすべて小型の丸玉である。遺体を検出した地点から20cmほど中央寄りのところと南東壁付近にまどまっている。石鏃は、人骨の付近に1点、南東壁近くに3点ある。

位置 F1-63-22

平面形 精円形

規模 1.40×1.00/1.10×0.75/0.70

長軸方向 N-38°-W

副葬品 石鏃A7：4，玉：33。

1	2.3×1.4×0.3	0.5	Obs.	2	1.9×1.3×0.3	0.4	Obs.
3	1.8×1.3×0.4	0.4	Obs.	4	(1.6)×1.2×0.4	(0.5)	Obs.
5	1.20×1.14×0.90	1.70		6	1.10×1.10×0.85	1.50	
7	1.20×1.15×1.04	2.10		8	1.10×1.08×0.88	1.70	
9	1.10×1.10×0.80	1.40		10	1.15×1.15×0.80	1.82	
11	1.00×1.00×0.55	1.00		12	1.13×1.08×0.90	1.80	
13	1.00×1.00×0.50	0.80		14	1.10×1.00×0.70	1.00	
15	0.95×0.90×0.52	0.60		16	1.00×1.00×0.60	1.00	
17	0.98×0.98×0.68	1.00		18	1.00×0.95×0.70	1.10	
19	1.17×1.15×0.85	0.80		20	0.92×0.80×0.62	0.60	
21	0.95×0.92×1.25	1.60		22	0.92×0.84×1.30	1.70	
23	0.90×0.85×0.65	0.60		24	0.95×0.95×0.54	0.80	
25	0.90×0.90×0.50	0.70		26	0.92×0.91×0.57	0.80	
27	0.92×0.90×0.57	0.70		28	0.85×0.75×0.65	0.70	
29	0.95×0.87×0.60	0.90		30	0.90×0.90×0.53	0.70	
31	0.75×0.75×0.60	0.40		32	0.78×0.78×0.40	0.40	
33	0.74×0.74×0.40	0.40		34	0.75×0.75×0.40	0.40	
35	0.70×0.70×0.50	0.30		36	0.80×0.80×0.50	0.50	
37	0.85×0.78×0.55	0.50					

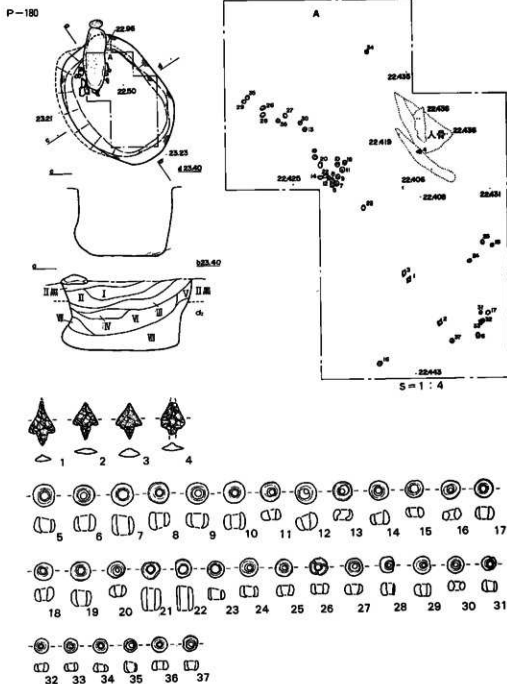


図84 P-180と遺物

覆土 I 橙褐色 (EnL+d ₂)	II 暗橙褐色 (II黒+EnL>d ₁ +d ₂)
III 黒褐色 (II黒+d ₁ >d ₂)	IV 黒色 (II黒>d ₁ >d ₂)
V 黒褐色 (II黒+d ₁)	VI 暗褐色 (EnL+d ₂ +II黒)
VII 黒褐色 (II黒+d ₁)	VIII 黄褐色 (EnL>EnL粒)

地上施設 礎：1。

遺物 覆土上部 土器IVb:53。図70-45・46 IVb。45は、口縁部から胴部上半にかけてほぼ度を復元した深鉢である。口径は推定で31cmである。胎土には2mm前後の小砂礫と繊維状のものを含む。焼成は非常に良いが、器面がかなり剥落している。口縁は平縁で、全体にLRの斜行縄文が施されている。

P-182

本群の中央部やや南寄りに位置し、P-173、178とで北東-南西方向に列をなしているようにみえる。墳底はEn-a ロームに達している。墓壇には、長軸の南東壁をわずかに切って深さ10cmほどの柱穴様のビットがある。付属施設と考えられる。ビットの覆土はII黒層とTa-d₁-d₂粒が混ざった黒色土である。遺体は検出されなかった。また、墳中からの出土遺物もない。

位置 F1-63-02・12	平面形 楕円形
規模 1.50×1.10/1.35×0.90/0.80	長軸方向 N-43°-W
覆土 I 黄褐色 (EnL>II黒)	II 黒褐色 (II黒>EnL粒)
III 暗褐色 (EnL粒+II黒>d ₁ >d ₂)	IV 黒色 (II黒+d ₁)
V 黄褐色 (EnL>d ₂)	VI 褐色 (d ₂ +II黒+EnL)
VII 黒褐色 (II黒+d ₁ +d ₂)	VIII 暗褐色 (EnL+III黒)
IX 暗黄褐色 (EnL>II黒+d ₂)	X 黒色 (II黒>d ₁ +d ₂ >EnL)
XI 褐色 (EnL>II黒+d ₂)	XII 暗褐色 (EnL+d ₂)
XIII 暗褐色 (EnL>d ₂)	

地上施設 柱穴様ビット：1

規模 (0.5)/(0.4)/0.1 平面形 円形？

P-188

本群の西端に位置する。墳底はEn-a ロームの最上部にある浅い土壌で、南東壁近くの底面がいくぶんくぼんでいる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、上部がわずかに開く。墓壇上部で砂岩礫が検出された。長軸の北西側延長上10cmほどのところにあり、その下には直径20cm、深さ30cmほどの円形の柱穴様のビットがあった。地上施設と思われる。また、墓壇の東側周辺からはIV群b類土器破片が出土したが、本土壇とは関係ないものと思われる。

位置 F1-63-22	平面形 楕円形
規模 1.20×0.80/1.00×0.70/0.40	長軸方向 N-15°-W
覆土 I 茶褐色 (II黒>d ₂)	II 黒褐色 (II黒>d ₂ +EnL)
III 暗褐色 (EnL>d ₂)	IV 黒色 (II黒>d ₂)

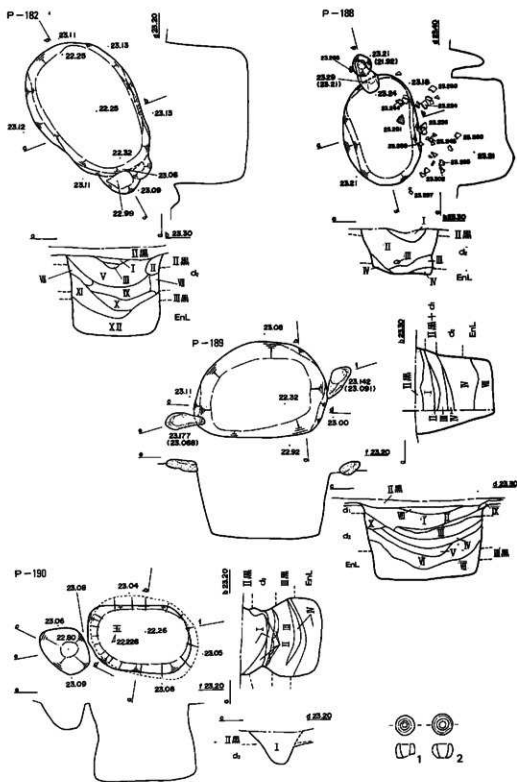


図65 P-182・188・189・190と遺物

地上施設 礎：1，柱穴様ビット：1。図78-51 M 36.5×16.0×8.5 7.6kg Sa.

柱穴様ビット 平面形 円形 規模 0.20/0.10×0.05/0.35

遺物 覆土上 土器IVb：44。図77-47～50 IVb。いずれも深鉢の破片。48～50には刻み列がみられる。

P-189

本群のほぼ中央部に位置する。墳底はEn-a ローム層に達している。壁は他の墓墳に比べてゆるく立ち上がる。墓墳上部では砂岩礫が検出された。長軸の両端にあり，上部施設と思われる。いずれも石皿を転用している。遺体は検出されず，墳中からの出土遺物もない。

位置 F1-63-11

平面形 楕円形

規模 1.40×1.00/10.5×0.70/0.85

長軸方向 N-106°-W

覆土 I 黄褐色 (EnL>III黒+EnP>d₂) II 黒褐色 (II黒>EnL+d₂)

III 暗褐色 (EnL+II黒>EnP+d₂) IV 暗褐色 (II黒+EnL>d₁>EnP)

V 黒色 (II黒+d₁>d₂>EnL) VI 橙褐色 (d₂>EnL)

VII 黒褐色 (II黒+d₁>d₂>EnL>EnP) VIII 暗褐色 (II黒>EnL>d₂+EnP)

IX 暗黄褐色 (EnL+II黒) X 暗褐色 (II黒>d₁>d₂)

地上施設 礎：2。図79-52 44.0×14.0×12.0 9.8kg Sa.

53 40.5×19.5×10.5 10.0kg Sa.

遺物 覆土上部 土器IVb：1。

P-190

II黒層を5cmほど掘り下げた面で発見した土墳である。墳底はEn-a ローム層中にあり平坦である。壁はオーバーハングしており土墳の断面形は袋状を呈する。しかしP-190の壁は風化した感じでもろく，とくにTa-d₂層とIII黒層の壁面は自然に崩落するような状態であった。あるいは掘りすぎの部分があるかもしれない。上面に露出していたEn-a ロームすなわち覆土I層は，上面から30cm位の深さまで土壌内に充填されていた。墳底西部から玉が2個並んで出土した。長軸の西側には附帯ビットと思われる落ち込みがあった。

位置 F1-63-11

平面形 楕円形

規模 1.10×0.75/1.15×0.80/0.65

長軸方向 N-92°-W

副葬品 玉：2。 1 1.10×1.10×0.76 1.4 2 1.06×1.06×0.78 1.2

覆土 I 明黄褐色 (EnL) II 黒色 (II黒>EnL)

III 暗黄褐色 (III黒>d₂+EnL) IV 黒色 (II黒>d₂)

地上施設 柱穴様ビット：1。

平面形 楕円形

規模 0.50×0.40/0.20×0.15/0.30

覆土 I 黒色 (II黒)

P-191

II黒層を5cm程掘り下げた面で発見した土墳である。本群の北端にあり，平面形は整った楕

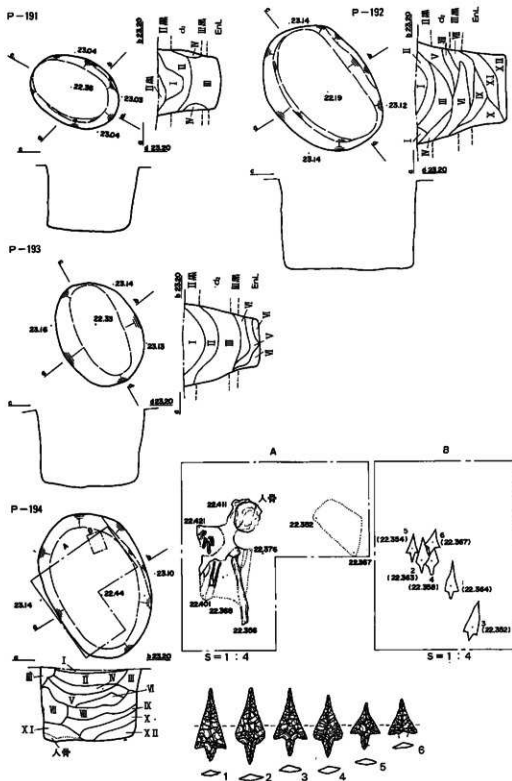


図6 P-191・192・193・194と遺物

円形を呈していた。墳底はEn-aローム層をわずかに掘り込んでつくられやや湾曲している。壁はほとんど垂直に立ち上る。Ta-d₂層中の壁はやわらかく、覆土にもその崩落がみられた。遺物はない。

位置	F1-63-11	平面形	楕円形
規模	1.00×0.65/0.85×0.45/0.50	長軸方向	N-78°-W
覆土	I 黒色 (II黒)	II	暗茶褐色 (II黒>EnL+d ₂)
	III 黒褐色 (II黒>d ₂ +EnL)	IV	黒色 (II黒>d ₂)
	V 赤褐色 (d ₂)		

P-192

II黒層を5cm程掘り下げた面で確認した土壌である。本群の北西側にありEn-aローム層がこの面に広範に露出しており確認は容易であった。墳底は、En-aローム層を掘り込んでつくられ平坦である。掘り込みは0.9mに達し本群ではP-195に次いで深い。壁はほとんど垂直に立ち上がるが、墳口部で若干外反する。遺物はない。

位置	F1-63-21	平面形	楕円形
規模	1.40×1.10/1.40×0.60/0.90	長軸方向	N-40°-W
覆土	I 黄灰色 (EnL>灰色+EnP)	II	灰色 (EnL+黒色>d ₂)
	III 黄色 (EnL>黒色+d ₂)	IV	黄褐色 (黒色>EnL+d ₂)
	V 灰褐色 (EnL>d ₂ +EnP)	VI	灰褐色 (黒色>EnL+d ₂)
	VII 灰色 (EnL+黒色+d ₂)	VIII	黄色 (EnL>d ₂ +EnP)
	IX 黒褐色 (黒色>d ₂ +EnL)	X	灰褐色 (d ₂ +EnL+黒色)
	XI 灰橙色 (d ₂ +EnL)	XII	黒色

P-193

II黒層を5cm程掘り下げた面で確認した土壌である。本群の北西側にあるもののひとつで、平面形は楕円形を呈する。墳底はEn-aローム層を掘り込んでつくられ、わずかに湾曲している。壁はしっかりしており、長軸の両側ではほとんど垂直に立ち上がる。短軸の両側の立ち上がりはややゆるやかである。遺物や副葬品は検出されなかった。

位置	F1-63-21	平面形	楕円形
規模	1.10×0.80/1.05×0.55/0.70	長軸方向	N-34°-W
覆土	I 明黄褐色 (d ₂ +EnL)	II	黒褐色 (II黒+EnL)
	III 暗黄褐色 (III黒+EnL>d ₂)	IV	黒色 (II黒>EnL)
	V 明黄褐色 (EnL)		

P-194

II黒層を5cm程掘り下げた面で確認した。本群中で最も大型のものである。墳底はEn-aローム層を掘り抜いてつくられ平坦である。壁は一部オーバーハングする部分がある他は、ほとんど垂直に立ち上がる。墳底面からは人骨と石鏃を6個検出した。人骨は土壌の長軸より西側

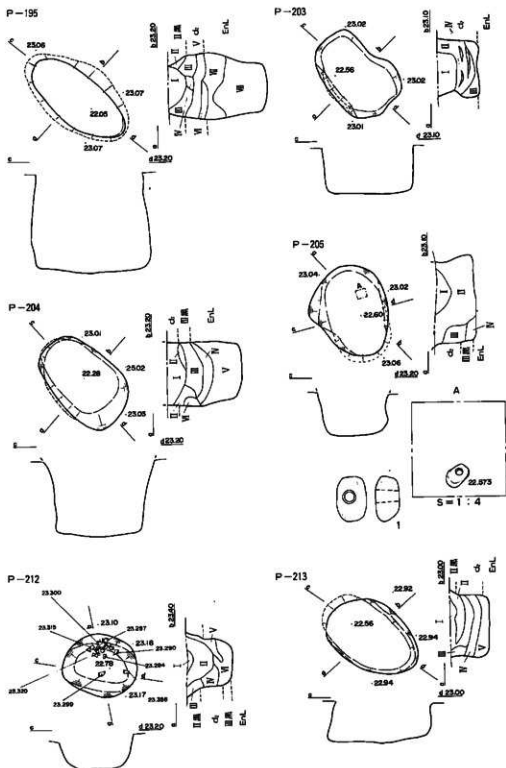


図67 P-195・203・204・205・212・213と遺物

に比較的残存のよいものが一体、東側には残存の悪い櫛状のものが一体あり、合葬のようである。西側の人骨は、各部の形状を識別できるものは少ないが、頭蓋、下顎、大腿骨等の位置が不自然で、散乱した感が強い。現状では北頭位で、屈葬と思われる。頭蓋はウレタン処理して取りあげている。副葬されたと思われる石鏃は、墳底の北側、櫛状の人骨のそばからまとまって出土した。6点の石鏃はいずれも先端を一方に向けており、矢柄を束ねた状態をよくあらわしている。矢柄は腐朽したらしく発見することができなかった。石鏃はすべて鏃身の両側縁がわずかに湾入し、有茎である。また土壌上面にIV群b類の土器片が散在していた。

位置 F₁-63-11・21

平面形 楕円形

規模 1.55×1.05/1.35×0.85/0.75

長軸方向 N-28°-W

副葬品 石鏃A7: 6. 1 3.8×1.6×0.3 1.0 Sh. 2 4.0×1.5×0.4 1.2 Aga.

3 3.6×1.7×0.4 1.0 Sh. 4 3.3×1.5×0.3 0.8 Sh.

5 2.5×1.5×0.3 0.5 Che. 6 (1.8)×1.5×0.2 (0.4) Obs.

「かえし」の鋭いもの(1・2・5・6)と、丸みを帯びたもの(3・4)がある。1・2は長幅比がほぼ1対1、3~6は1対2である。付着物はない。なお2の基部は取上げ時の不注意で折損した。

覆土 I 灰色(EnL+d₂)II 黒色(黒色>EnL+d₁+d₂)III 黄褐色(EnL>d₂+EnP)IV 灰黄褐色(EnL>EnP+d₂)V 灰茶褐色(EnL+黒色>d₂+EnP)VI 黒褐色(黒色>d₂+EnL)VII 黄褐色(EnL>d₂+EnP)VIII 灰黄褐色(EnL+d₂>EnP)IX 黄褐色(EnL>d₂)X 茶褐色(EnL+黒色>d₂+EnP)

XI 黄色(EnL)

XII 黄褐色(EnL>d₂)

遺物 覆土上部 土器IVb: 35。図79-54 IVb。深鉢の破片。口唇は丸味をおび、羽状縄文が施されている。

P-195

II黒層を5cm程掘り下げた面で確認した。土壌の掘り込みはEn-aバミス層にまで達している。本群のなかでは最も深い土壌であった。墳底はわずかに湾曲する。壁はTa-d₂層中でオーバーハンクしていた。墳中からの出土遺物はなく、墓坑上部からIV群b類の土器片が2点出土したのみである。

位置 F₁-63-11・21

平面形 楕円形

規模 1.20×0.60/1.10×0.50/1.03

長軸方向 N-62°-W

覆土 I 灰黄色(EnL>黒色+d₂+EnP)

II 灰黄色(EnL)

III 灰褐色(EnL+黒色>d₂)

IV 暗灰色(黒色>EnL)

V 黄色(EnL>d₂)VI 黄褐色(EnL+黒色>d₂)VII 灰褐色(EnL>黒色+d₂)VIII 黒褐色(黒色>d₂+EnL)

遺物 覆土上部 土器IVb: 2。図79-55 IVb。小型の深鉢の口縁部破片。口唇は切り出し

形で、口縁下に直径5mmほどの外から内への突瘤文が施されている。地文はLRの斜行編文である。

P-203

Ta-d₂層の上面で確認した土壌である。En-aローム層をわずかに掘り込んで墳底とする比較的浅い土壌で、いびつな平面観を呈する。壁はほとんど垂直に立ち上がるが、西壁の一部がオーバーハングする。Ta-d₂層の壁はもろく崩れやすい。遺物はない。

位置	F ₁ -63-11	平面形	不整楕円形
規模	1.00×0.60/0.95×0.65/0.45	長軸方向	N-52°-W
覆土	I 黄褐色 (d ₂ +EnL>II黒)	II	暗褐色 (II黒>d ₂ +EnL)
	III 黒色 (II黒)	IV	黒褐色 (II黒>EnL)

P-204

Ta-d₂層上面で確認した。墳底はEn-aローム層を掘り込んであり、湾曲している。壁はオーバーハングする部分があるほかは、ほとんど垂直に立ち上がる。遺物はない。

位置	F ₁ -63-01	平面形	楕円形
規模	1.05×0.70/0.95×0.65/0.60	長軸方向	N-56°-W
覆土	I 暗黄褐色 (II黒+EnL・P)	II	明褐色 (III黒+EnL>EnP)
	III 暗褐色 (III黒>II黒+EnL>d ₂)	IV	明黄褐色 (EnL)
	V 黒褐色 (II黒+III黒>d ₂)	VI	赤褐色 (d ₂ >EnL)

P-205

Ta-d₂層で確認した土壌である。開口すなわちTa-d₂層上面での平面形はやや歪んでいる。墳底はEn-aローム層をわずかに掘り込んであり、平坦である。平面形は整った楕円形を呈する。壁はほとんど垂直に立ち上がるが、南壁はオーバーハングしていた。遺体は検出されなかったが、中央部やや北寄りの位置から玉が1個出土した。また、覆土上部からはIV群b類の土器片が36点出土した。これらの土器片は本墓墳には伴わないものと思われる。

位置	F ₁ -63-03	平面形	楕円形
規模	1.00×0.70/0.85×0.55/0.50	長軸方向	N-26°-W
副葬品	玉: 1。I 2.36×1.55×1.20 8.0		
覆土	I 灰褐色 (黒色土>d ₂)	II	灰褐色 (黒色土>d ₂ +EnL)
遺物	覆土上部 土器IVb: 35。		

P-212

本群の南西端に位置する。本群中で最も小型の墓墳である。墳底はIII黒層とEn-aローム層の境目あたりにあり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がり上部で開く。遺体は検出されず、墳中からの出土遺物もない。しかし、覆土上部のII黒層中から72点のIV群b類土器片が出土した。これらの土器片は、同一個体のもので、口縁部から胴部下半にかけての4/5ほどを復元したが、本土墳に伴うものではないと思われる。

位置 F1-63-22・32

平面形 楕円形

規模 0.80×0.55/0.65×0.35/0.30

長軸方向 N-82°-W

覆土 I 茶褐色 (II黒>d₂)

II 黄褐色 (EnL+d₂>II黒)

III 茶褐色 (d₂>II黒)

IV 黒褐色 (II黒>d₂)

V 灰褐色 (EnL+II黒>d₂)

VI 黒色 (II黒>d₂)

遺物 覆土上部 土器IVb:72, 図79-56 IVb, 深鉢 図上復元したもので, 口径は推定43cmである。胎土には小砂礫を含む。焼成は非常に良く, 器面が剥落した部分が見られる。内面には炭化物が付着している。口縁はゆるやかな波状口縁で, 4か所の波頂部があると思われる。口唇は切り出し形で, 口縁と頸部に2列の刻み列が施されている。口縁下の刻み列の下部には外から内への円形刺突文がめぐり, 内面には明瞭に突瘤が見られる。地文は頸部以下に限られ, 羽状縄文である。

P-213

本群の西端に位置する。En-a ローム層をわずかに掘り込んで墳底とする非常に浅い土墳である。壁は北西壁がオーバーハングしているほかは, ほぼ垂直に立ち上がり, 上部が開く。遺体は検出されず, 出土物もない。

位置 F1-63-01・02

平面形 楕円形

規模 1.00×0.70/1.00×0.65/0.30

長軸方向 N-57°-W

覆土 I 褐色 (d₂+EnL>II黒)

II 黒褐色 (II黒>d₂)

III 暗褐色 (II黒+EnL)

IV 黒色 (II黒>d₂)

V 暗黄褐色 (EnL+d₂)

P-215

本群の精査時に確認された。従って確認面はTa-d₂層上面である。平面は90×50cmと小規模であるが, 平面形および覆土の状態から墓と判断される。墳底はIII黒 (一部En-a層) 中であり, 平坦である。

位置 F1-63-02・03

平面形 楕円形

規模 0.90×0.55/0.65×0.45/0.35

長軸方向 N-40°-W

覆土 I 暗褐色 (d₂>EnL+II黒)

II 暗黄褐色 (d₂+EnL)

P-216

P-215同様, 本群の精査時に確認された。確認面はTa-d₂層上面である。墓群の南端に位置している。墳底はTa-d₂層とIII黒層との境あたりにあり, 平坦である。西北壁寄りの覆土中 (底面から10cmほど浮いた状態) から玉が1点出土した。玉の出土および土壌の形状から墓と判断される。

位置 F1-63-03

平面形 楕円形

規模 0.95×0.65/0.75×0.45/0.35

長軸方向 N-43°-W

副葬品 玉: 1. 1 1.84×1.32×1.92 2.6

覆土 I 黒色 (II黒>da)

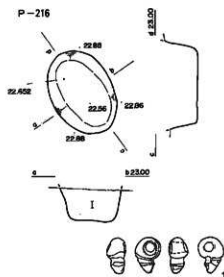
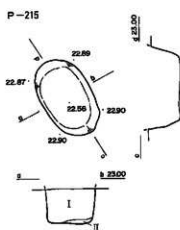


図68 P-215・216と遺物

第6群 (X-8)

本群は、他の5群とはやや異なった状況下で発見された。まず、50cmほどのTa-c層除去後のII黒層上面で一定の幅と高さをもった環状を呈する高まりの存在が確認された。この高まりの幅は約5m、外径は18-20mであり、高まりとこれに囲まれた内部との比高は15-20cmである(図70)。また、高まり内部では数個の礎の一部がII黒層上面に露出していた。これらのことから竪穴状の墓域に墓壇を設ける“周堤墓”を想定して調査が進められた。そのため本群は、現地調査時ではX-8と略称され、個々の墓についても他の墓群の墓の名称とは区別されている。以下、現地調査時の名称を踏襲する。

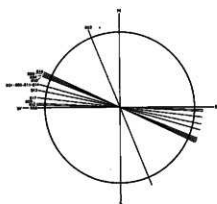


図69 長軸方向

周堤墓を前提として着手したので、竪穴および盛土(周堤部)の存在を確認するために、まず東西、南北にトレンチを設けたが、掘り込み、竪穴底面などの存在を窺わせる兆候はなかった。しかし環状の高まりとしてとらえられた部分の断面観察からは、明らかにII黒層とTa-d₁層が逆転している部分が認められたことや、高まり内部のII黒層が周囲の堆積状況と比較すると、若干薄いことも観察された。以上のことから、円形に範囲を画し、その部分にはわずかな掘り込みを伴った整地がなされ、排土が周囲に置かれたものと判断される。

環状の盛土で囲まれた内部から17個の墓壇が確認された。大半がII黒層上面から3-5cmほど掘り通んだところで墳口面が確認された。X-817は盛土内部のほぼ中央に位置し、他の墓壇はこれを取り囲むように配されている。この817を中央とすればその南側よりも北側に多くの墓が分布している。

墓壇平面形は、X-806・815が長楕円形で、これ以外は楕円形を呈している。X-806の底面はすみ丸長方形に近い。楕円形を呈する墓壇は平面形の規模、深さから大きく2つに分けることができる。X-811・812・814のように長軸長0.8m、短軸長0.4m、深さ0.40-0.55mと小さいグループと、長軸長1m、短軸長0.7m、深さ0.9mのグループとである。

楕円形および長楕円形を呈するこれらの墓壇の長軸方向は、X-802を除き東西線を中心とした南北15度の範囲に収斂する。

これらの墓壇は後世の掘乱等は認められず、埋葬時の状態を保っている。遺体はすでに腐蝕し切っているが、X-810からはかろうじて墳底面に細状になった遺体と歯の一部が検出された。横臥屈葬の状態である。このほかに頭部の痕跡であろうと思われる径20cmほどの球形の空隙が墳底すみで検出された墓が6例ある。頭位はX-802の北を除けば西である。

副葬品が出土した墓はX-806・814の2例で、いずれも玉2点である。X-814では球形の

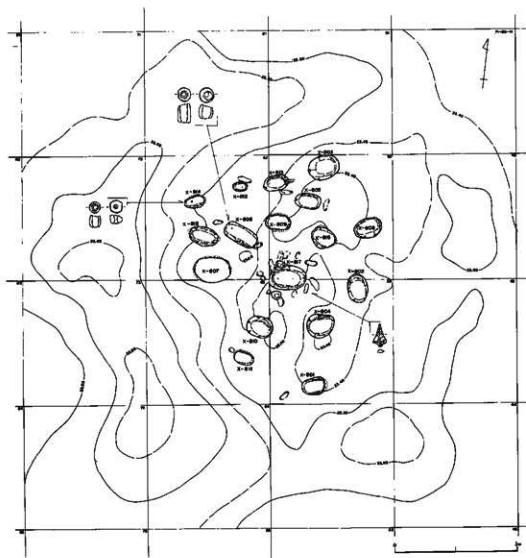


図70 第6群

頭部底に接するところから出土した。

墓壇確認面まで掘り下げたところ、II黒層上面にすでに露出していた礫のほかに新たな礫が検出された。これらの礫はすべて墓壇に関連するものである。中央部の墓X-817では墳口周辺をとり囲むように10点の礫が配され、X-801・805・806・811～813では墳口長軸両端あるいは一方に礫が検出されている。

墓壇に確実に伴う遺物は上記の玉以外にはないが、X-808・817の墳口で土器片の集中が認め

られた。いずれも埋め戻した土の直上での出土であり、流れ込んだものであったとしても墓構築と大きな時間差はないと判断される。後期中葉(IV群b類)の土器である。また、墓墳をとり囲んでいる環状の盛土の上部から出土した土器の大半はX-808・817の墳口出土土器と同時期のものである。

本群は、17個の土墳墓をとり囲む環状の高まりを伴い、中央の墓が特別に意識されていることなどから、調査着手時に予想したように周墳墓と共通した状況が認められる。しかしながら墓墳の形状や出土遺物からすると、他の第1～5群とは区別して考えることができない。

(青柳文吉)

表15 第6群土墳墓一覧

名称	位	重	平面形	規模 (m)			長軸方向	地上施設	副葬品	備考
				縦断面	断面	最大径				
X-801	F1-63-53	#	楕円形	0.97×0.68	0.93×0.52	0.70	N-74°-E			
X-802	#	#	#	1.19×0.80	0.92×0.61	0.84	N-22°-W			北北西頭位
X-803	F1-63-52	#	#	1.25×0.96	0.96×0.65	0.92	N-74°-E			
X-804	F1-63-53	#	#	1.23×0.89	1.08×0.69	0.83	N-67°-E			
X-805	F1-63-52	#	#	1.03×0.66	0.94×0.54	0.83	N-90°-W	礎: 2		
X-806	F1-63-62	#	長楕円形	1.43×0.67	1.47×0.62	0.68	N-66°-W	礎: 2	玉: 2	北西頭位
X-807	F1-63-62-63	#	楕円形	1.52×1.08	1.55×1.04	0.87	N-83°-E			
X-808	F1-63-52	#	#	1.15×0.80	1.03×0.64	0.92	N-66°-E			西南西頭位?
X-809	F1-63-52-62	#	#	1.02×0.71	1.00×0.68	0.69	N-87°-W			西頭位?
X-810	F1-63-63	#	#	1.10×0.83	0.95×0.60	0.88	N-68°-W			北西頭位横臥埋葬
X-811	#	#	#	0.83×0.50	0.86×0.52	0.40	N-74°-W	礎: 1		
X-812	F1-63-62	#	#	0.62×0.39	0.57×0.37	0.48	N-88°-E			
X-813	F1-63-52-53	#	#	1.06×0.65	0.79×0.42	0.86	N-78°-E	礎: 2		西南西頭位?
X-814	F1-63-62	#	#	0.84×0.50	0.82×0.45	0.56	N-74°-E		玉: 2	
X-815	#	#	#	1.21×0.75	0.97×0.42	0.84	N-78°-W			
X-816	F1-63-52	#	#	1.01×0.69	0.95×0.56	0.90	N-65°-W			北西頭位?
X-817	F1-63-52-53	#	#	1.48×0.96	1.18×0.68	0.98	N-83°-E	配石: 10, ビット: 1	石鏡: 1	西頭位?

X-801

本群中、最も南側に位置する。墳底はEn-a層中にあり平坦。壁の立ち上がりは急で墳口部はややオーバーハングする。覆土は踏み固められたように堅い。遺体は残存していないが埋め戻された状態の覆土であることから墓と判断される。副葬品はない。墓墳西側のやや離れたところから扁平な壺が出土した。

位置 F1-63-53

平面形 楕円形

規模 0.97×0.68/0.93×0.52/0.70

長軸方向 N-74°-E

覆土 I 黒色 (II黒>EnP+d₂)

II 黄褐色 (EnL>EnP+d₂)

III 褐色 (d₁)

IV 暗褐色 (II黒+EnL>d₂)

X-802

本群の東部に位置する。墳底はEn-a層中にある。壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが北側で段状をなしている。遺体は残存していないが、墳底北すみに頭部痕と思われる空隙が認められた。副葬品はない。他の墓墳と趣の異なる点かふたつある。ひとつは墓墳長軸方向について、大半は東西方向に取敢えるのに対して、本土墳は北北東-南南西であること。もうひとつは覆土中の黒色土混入量が多いことである。

位置	F ₁ -63-53	平面形	楕円形
規模	1.19×0.80/0.92×0.61/0.84	長軸方向	N-22°-W
埋葬体位	北北西頭位		
覆土	I 黒色 (II黒)	II	黒色 (II黒+d ₁)
	III 暗黄褐色 (EnL>d ₂)	IV	黄色 (EnL)
	V 黒褐色 (II黒+EnL+d ₂)	VI	淡黒色 (II黒>EnL)

X-803

本群の北端に位置する。隣り合った墓(X-805)との間に風倒木痕と思われる攪乱土があり、本墓墳はこれを切ってつくられている。

覆土上部は堅くしまり、墳底に近づくにしたがってボソボソとした感触の土に変化している。覆土中に黒色土の混入はほとんどない。

位置	F ₁ -63-52	平面形	楕円形
規模	1.25×0.96/0.96×0.65/0.92	長軸方向	N-74°-E
覆土	I 黒色 (II黒)	II	暗黄褐色 (EnL>II黒)
	III 黒色 (II黒+d ₁ +EnP)	IV	暗褐色 (II黒+d ₁ >d ₂)
	V 暗黄色 (EnL>II黒)		

X-804

墳底はEn-a層中にあり、平坦である。遺体は残存していないが覆土の状態から墓と判断される。副葬品はない。

位置	F ₁ -63-53	平面形	楕円形
規模	1.23×0.89/1.08×0.69/0.83	長軸方向	N-67°-E
覆土	I 黒褐色 (II黒+d ₁)	II	黄色 (EnL>EnP+d ₂)
	III 黄褐色 (EnL+II黒>EnP+d ₂)	IV	黒色 (II黒>d ₂)
	V 黄色 (EnL)		

X-805

風倒木痕による攪乱土を切って作られている。墳底はEn-a層中にあり、壁は直立する。覆土中に黒色土の混入は少なく、黄褐色を呈するEn-a層土が主体である。墳口部付近の覆土は堅くしまっている。遺体は残存していない。墳口部の長軸両端から50cmほどの細長い壁が出土している。そのうち1点には、台石、石皿として使用したと思われる痕跡がある。

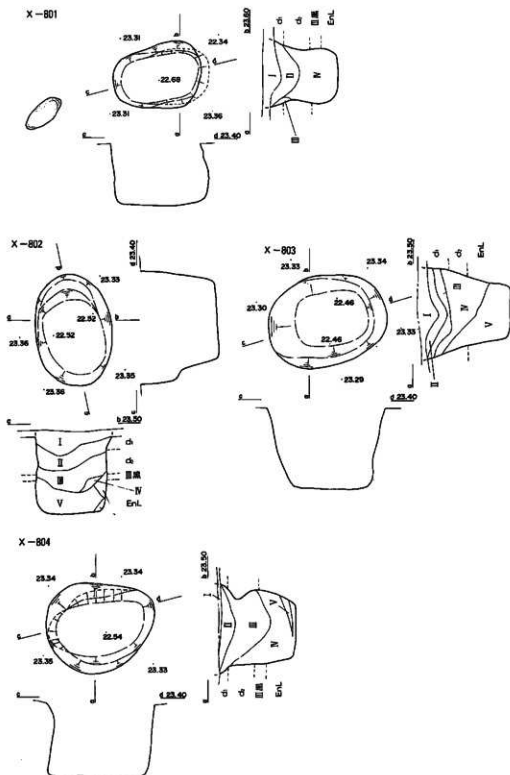


図71 X-801・802・803・804

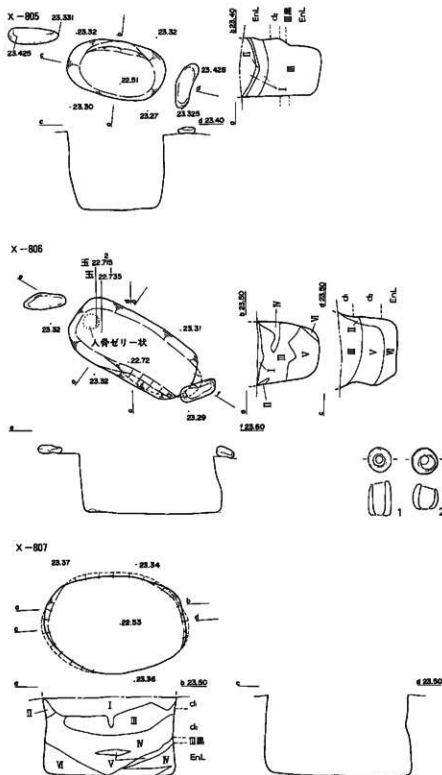


図72 X-805・806・807と遺物

位置	F1-63-52	平面形	楕円形
規模	1.03×0.66/0.94×0.54/0.83	長軸方向	N-90°-W
覆土	I 黄褐色 (EnL>EnP)	II	暗黄褐色 (EnL>EnP+II黒)
III	暗黄褐色 (EnL>EnP>II黒)		
地上施設	礎: 2点。図80-58	50.5×17.5×15.0	15.5kg Sa.
		54.5×16.0×12.5	15.0kg Apl.

X-806

平面形が長楕円をなす唯一の墓である。墳底はEn-a層中につくられ、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは急で、東側開口部はややオーバーハングしている。遺体は残っていないが、北西壁近くに頭部痕と思われる空隙が認められた。この空隙に接するところから玉が2点出土した。

位置	F1-63-62	平面形	長楕円形
規模	1.43×0.67/1.47×0.62/0.68	長軸方向	N-66°-W
埋葬体位	北西頭位		
副葬品	玉: 2。 1 1.29×1.25×1.78 4.7 2 1.37×1.36×1.33 3.0		
覆土	I 黒色 (II黒+d1)	II	黒色 (d1)
III	黄色 (EnL>d2+EnP)	IV	黒褐色 (II黒+EnL)
V	黄褐色 (EnL>d2+EnP)	VI	黒色 (II黒)
地上施設	礎: 2点。 図80-57	39.5×16.0×13.0	11.0kg Sa.
		39.0×13.5×13.0	11.8kg Apl.

X-807

本群中で平面規模が最も大きい墓である。En-a層までは垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。覆土上部は堅くしまっているが、下部になるにつれてやわらかくなる。遺体は残存していない。

位置	F1-63-62・63	平面形	楕円形
規模	1.52×1.08/1.55×1.04/0.87	長軸方向	N-83°-E
覆土	I 黄褐色 (EnL)	II	黒色 (d1)
III	暗褐色 (II黒+EnL>d2)	IV	黄色 (EnL>d2)
V	黒褐色 (II黒>d2)	VI	黒色 (II黒>d2)

X-808

本群の東端に位置する。開口部確認後間もなく中央部から西側にかけて土器が一括出土した。皿状をなす埋め戻し土の最上部であり、本墓墳に伴うかどうか判然としなが、墓墳構築の時期からあまり時間的な隔たりはないと思われる。

平面形は楕円形を呈し、壁の立ち上がりは急である。遺体は残存していないが墳底西すみで頭部痕と思われる球形の空隙が検出された。

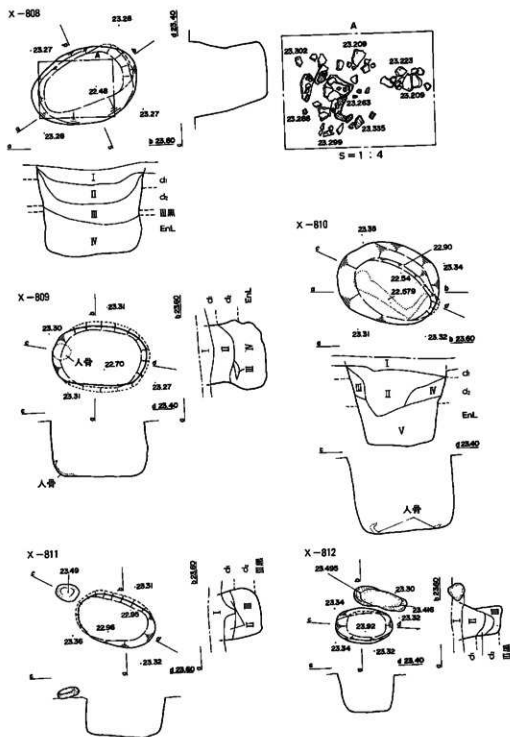


図73 X-808・809・810・811・812

位置 F₁-63-52

平面形 楕円形

規模 1.15×0.80/1.03×0.64/0.92

長軸方向 N-66°-E

埋葬体位 西南西頭位?

覆土 I 黒色 (II黒)

II 黄色 (EnL)

III 黄褐色 (EnL+d₂)

IV 黒褐色 (II黒+d₂>EnL)

遺物 覆土 土器IVb: 110, Nc: 39, Vc: 139, 石器01: 1。図80-59 IVb

X-809

墳底はEn-a層中にある。西壁寄りに頭部痕と思われる空隙が認められた。

位置 F₁-63-52・62

平面形 楕円形

規模 1.02×0.71/1.00×0.68/0.69

長軸方向 N-87°-W

埋葬体位 西頭位?

覆土 I 黒色 (II黒>d₁)

II 黄褐色 (EnL>d₂+EnP)

III 黄色 (EnL)

IV 暗褐色 (d₂>EnL+II黒)

X-810

墳底はEn-a層中にあり平坦。壁は墳中から墳底にかけてやや広がる。遺体は腐蝕し形状をとどめないほどであるが、頭骨がわずかに残っていた。北西に頭部を置いた横臥屈葬であることが判断された。

位置 F₁-63-63

平面形 楕円形

規模 1.10×0.83/0.95×0.60/0.88

長軸方向 N-68°-W

埋葬体位 北西頭位横臥屈葬

覆土 I 黒色 (II黒)

II 黄色 (EnL>d₂)

III 暗黄褐色 (EnL>II黒+d₂)

IV 暗褐色 (EnL+II黒>d₂)

V 黒褐色 (II黒>EnL+d₂)

X-811

平面規模は小さくつ浅い。墳底はわずかにIII黒層にとどんでいる。壁はほぼ垂直である。黒色土とTa-d₂層の土が混入した覆土の状況から墓と判断される。墳口北西側に接するところから風化した砂岩が出土している。

位置 F₁-63-63

平面形 楕円形

規模 0.83×0.50/0.86×0.52/0.40

長軸方向 N-74°-W

覆土 I 黒色 (II黒)

II 黒褐色 (II黒+d₂)

III 黒色 (II黒>d₂)

地上施設 礎: 1点 (測定不能)。

X-812

本群中で最も平面規模の小さい土墳である。墳底はTa-d₂層中にある。覆土は黒色土とTa-d₂をまじえたものであり、埋め戻された状況を呈している。同じく規模の小さいX-811・

は、その3分の1くらいを覆土上に載せている。もう1点は南西隣にあるX-805の西側に置かれたものであろう。

位置	F1-63-52・53	平面形	楕円形
規模	1.06×0.65/0.79×0.42/0.86	長軸方向	N-78°-E
埋葬体位	西南西頭位?		
覆土	I 黒色 (II黒)	II	暗黒褐色 (II黒>EnL)
	III 黄色 (EnL)	IV	黒色 (II黒)
	V 暗褐色 (II黒>d ₁ +d ₂ +EnL)	VI	暗黄褐色 (EnL>d ₂)
	VII 暗黄褐色 (EnL+d ₂ >II黒)		

地上施設 礎: 2点。55.0×19.5×16.0 26.2kg Mud. (1点は測定不能)

X-814

本群の西端に位置する。平面規模が小さく、浅い土壌のうちのひとつで、墳底はわずかにIII黒層にとどいている。覆土は黒色土を主体としこれに少しばかりのTa-d₂が混入している。壁の立ち上がりは急である。

墳底のやや西寄りから玉が2点出土した。遺体の痕跡は認められなかったが、玉の出土、覆土の状態などから墓と判断される。

位置	F1-63-62	平面形	楕円形
規模	0.84×0.50/0.82×0.45/0.56	長軸方向	N-74°-E
副葬品	玉: 2。I 1.05×1.05×1.18 1.9	2	1.17×1.17×0.77 2.1
覆土	I 黒色 (II黒)	II	黒色 (II黒>d ₁)
	III 褐色 (II黒+d ₂)	IV	黒色 (II黒)

X-815

X-806・807に近接した位置にある。墳底はEn-a層中にあり平坦である。壁の立ち上がりは墳底から墳口にかけて緩やかであるが、西東壁の墳中ではやや張り出す。遺体は残存していないが、覆土の状態から墓と判断される。覆土中より土器片が出土した。

位置	F1-63-62	平面形	楕円形
規模	1.21×0.75/0.97×0.42/0.84	長軸方向	N-78°-W
覆土	I 黒色 (II黒)	II	黒色 (d ₁)
	III 暗黒褐色 (d ₁ +d ₂ +EnL)	IV	暗黄褐色 (EnL>d ₂)

遺物 覆土 土器IVb: 9。図80-60~63 IVb

X-816

墳底はEn-a層中にあり平坦である。北西壁寄りで頭部痕と思われる球形の空隙が認められた。

位置	F1-63-52	平面形	楕円形
規模	1.01×0.69/0.95×0.56/0.90	長軸方向	N-65°-W

埋葬体位 北西頭位?

覆土 I 黒色 (II黒)

III 黄色 (EnL>d₂)V 暗褐色 (d₂+EnL>II黒)VII 褐色 (d₂>EnL)

II 黒褐色 (II黒>EnL)

IV 暗黄褐色 (d₂+EnL>II黒)VI 黄褐色 (EnL+d₂)

X-817

本墓壇は環状の高まり内部のほぼ中央に位置する。II黒層上面で、すでに検出されていた礎に囲まれるように楕円形の平面が確認された。塙口部確認後まもなく土器が出土した。X-808同様、埋め戻された土の最上部に載った状態であるため、墓壇構築との時間差は感じられない。

塙底はEn-a層中にあり、平坦である。壁の立ち上がりは急である。塙底西すみに頭部痕と思われる空隙が認められた。また、塙底中央からやや東寄りのところから石鏃が1点出土した。

塙口をとり囲むように置かれた礎は10点で、大きさ、石質ともまちまちである。また、塙口北部をわずかに切って小ピットが掘られている。墓壇に向うように斜めであり、小ピットの底面にはさらに小さなピットが認められた。

位置 F₁-63-52・53

平面形 楕円形

規模 1.48×0.96/1.18×0.68/0.98

長軸方向 N-83°-E

埋葬体位 西頭位?

副葬品 石鏃 A7:1。1(2.1)×1.3×0.3 (0.4) Sh.

覆土 I 黒色 (II黒)

II 黄色 (EnL)

III 黒色 (II黒>d₁)IV 褐色 (EnL>d₂)V 黄褐色 (d₂+EnL)

地上施設 礎:10点。39.0×23.0×7.50 4.2kg Apl. 39.0×22.0×13.5 13.3kg Apl.

40.0×22.0×18.0 18.0kg Apl. 31.0×20.0×13.5 10.8kg Apl.

59.0×19.0×18.5 32.4kg Apl. (5点は測定不能)

遺物 覆土 土器 IVb:84, Va:20。 礎:1。 図80-61 IVb

X-817

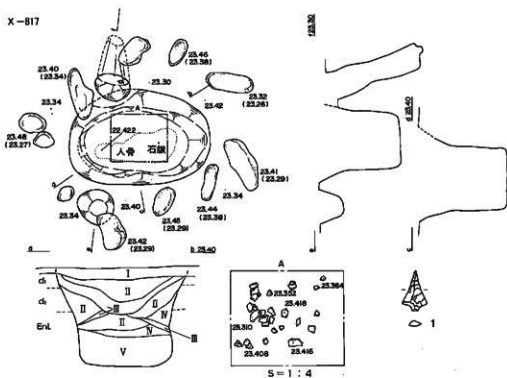


図75 X-817と遺物

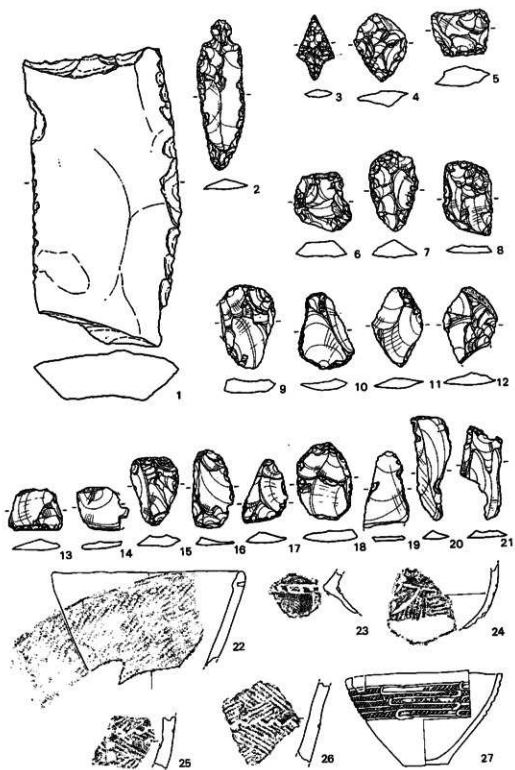


図76 第2・3・4群の遺物

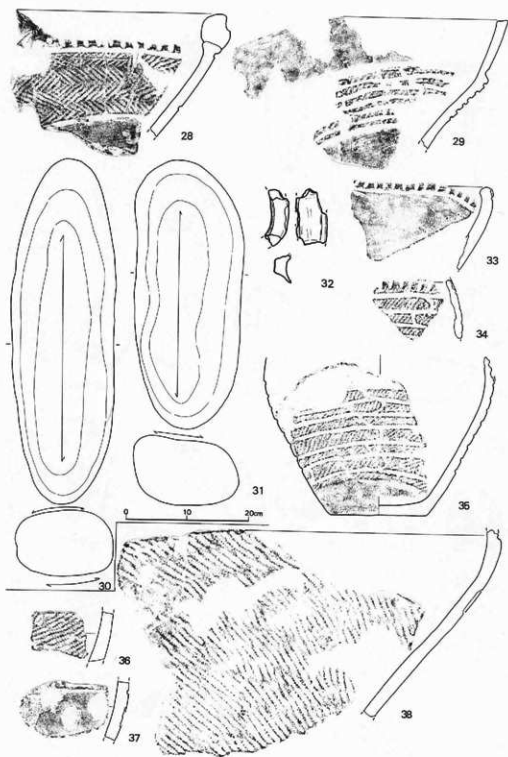


図77 第5群の遺物(1)

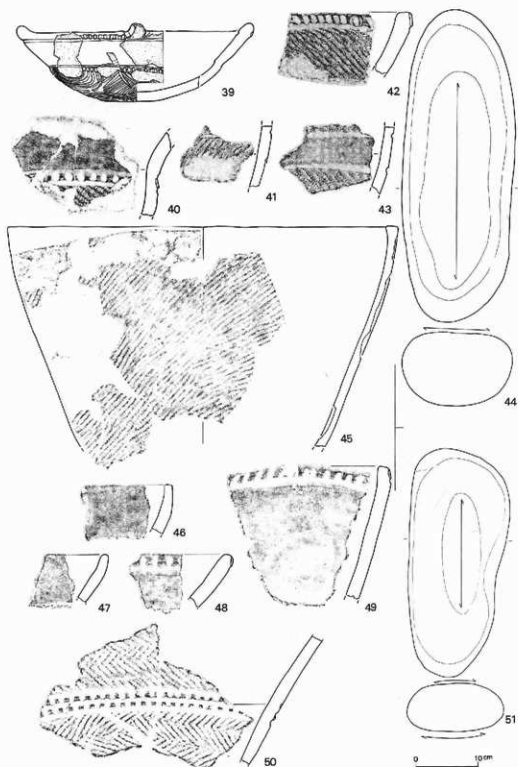


図78 第5群の遺物(2)

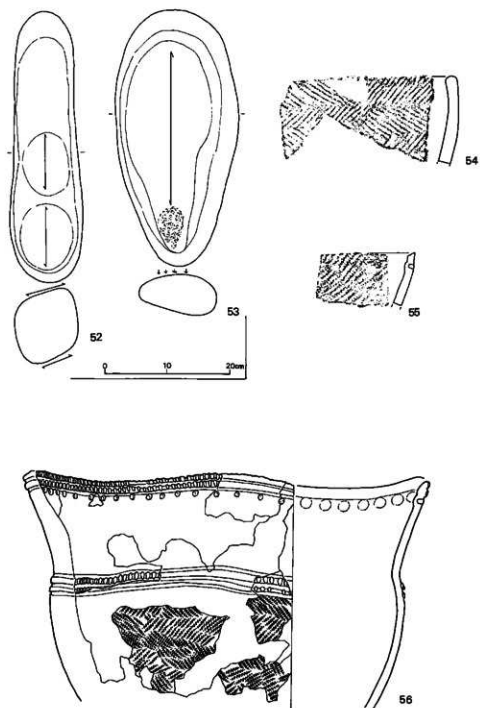


図79 第5群の遺物(3)

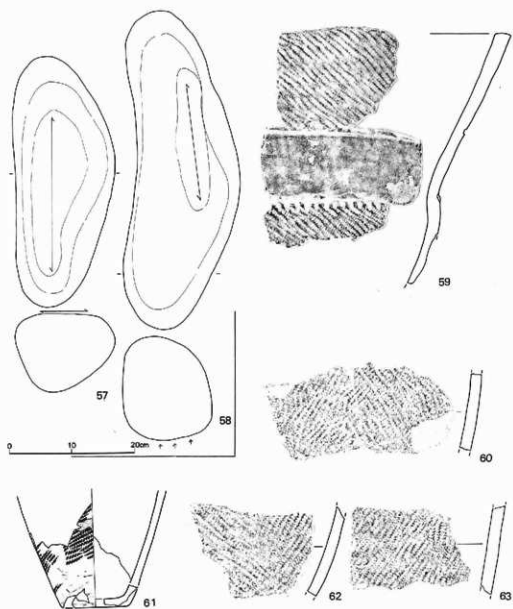


図80 第6群の遺物

単独の土墳墓

覆土の状況等から墓と判断される土墳で、墓群に属さないものを一括する。

台地平坦部の墓群からやや離れて3個(P-06・170・171)、調査地区東寄りの斜面から4個(P-133・181・217・218)の計7個が発見された。平坦部の3個は墓群を形成する墓墳と形状が似ている。P-06は重機による確認調査地区から検出されたもので上部は削平されている。

斜面から検出されたものはP-181を除いて平面形が円形で一般に深い。これらは58年度の調査地区西寄り、周堤墓(X-3)の盛土除去後に検出された墓墳P-345およびP-346に類似する。

表16 単独の土墳墓一覧

名称	位置	平面形	縦横比			長軸方向	備考
			縦	横	最大径		
P-06	F1-62-27	楕円形	0.98×0.65	0.95×0.48	0.30	N-26°-W	
P-133	E2-64-62	"	1.04×0.82	0.74×0.64	1.10	N-103°-W	西頭位
P-170	F1-63-35	"	1.00×0.84	0.90×0.72	0.32	N-8°-W	
P-171	F1-63-24・25	"	1.34×0.75	1.12×0.58	1.15	N-62°-W	
P-181	E2-64-74・84	長楕円形	1.20×0.66	1.10×0.50	0.70	N-60°-W	西頭位
P-217	E2-63-67	楕円形	0.69×0.60	0.40×0.31	0.74	N-7°-W	
P-218	E2-63-68	"	0.86×0.73	0.66×0.50	0.76	N-25°-W	

P-06

土墳墓群(第1群と第2群)の中間に位置する。墳底はEn-a層中にあり、平坦である。覆土の状況から墓と判断される。

位置 F1-62-27

平面形 楕円形

規模 0.98×0.65/0.95×0.48/0.30

長軸方向 N-26°-W

覆土 I 黒褐色(II黒>d₂+EnL)

II 橙褐色(d₂)

III 黄茶褐色(EnL+d₂>II黒)

IV 黒褐色(II黒+d₁+EnL)

V 暗黄褐色(II黒+d₂+EnL)

VI 暗褐色(II黒>d₂+EnL)

P-133

調査地区東部の斜面部分で発見した。Ta-d層上面で、En-a層が露出していたのが注目されたものである。墳底はEn-aバミス層に60cm程掘り込まれており、覆土はEn-a層を主体とする混土層であった。墳底は凹面をなしており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。西壁の中位に残存状態のよくない人骨が貼りつくようにしてあった。これは頭蓋と思われる。遺物はない。

位置 E2-64-62

平面形 楕円形

規模 1.04×0.82/0.74×0.64/1.10

長軸方向 N-103°-W

埋葬体位 西頭位

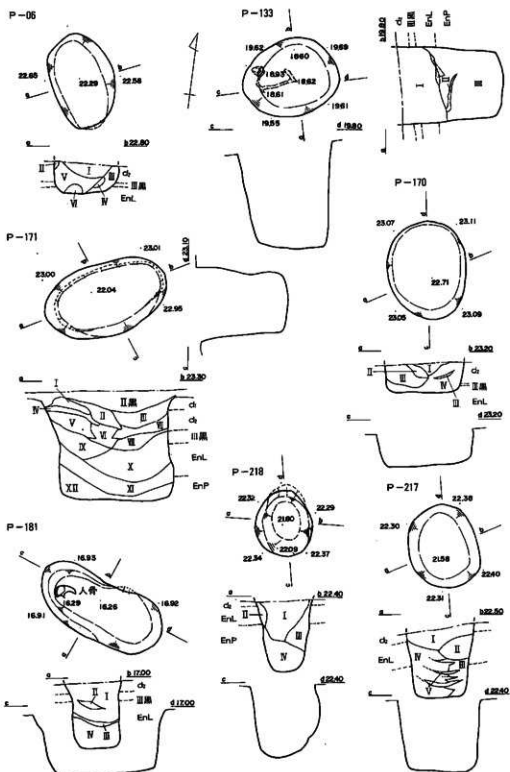


図81 P-06・133・170・171・181・217・218

- 覆土 I 黄茶褐色 ($d_2 + EnP > \text{II 黒}$) II 黄褐色 (EnP)
 III 明黄褐色 ($EnP > EnL$)

P-170

第4土壌墓群東端のP-155から約5m東に位置する。Ta-d₁層上面でほぼ円形のプランを確認した。墳底はEn-aローム層中に作られる。壁は垂直に立ちあがる。浅いがしっかりした土壌である。

- 位置 F₁-63-35 平面形 楕円形
 規模 1.00×0.84/0.90×0.72/0.32 長軸方向 N-8°-W
 覆土 I 暗褐色 (II黒>d₁) II 赤茶色 (II黒>d₂)
 III 黒褐色 (II黒+d₂) IV 赤褐色 (d₂)

P-171

P-170から約3.5m東に位置する。II黒層下部から掘り込まれ、墳底はEn-aバミス層中に作られる。III層上面のII黒は掲げ土であるEn-aバミスを含み、土壌西側に広がる。壁は墳中で緩くオーバーハングし墳口に向って広がる。人骨、副葬品は出土しなかったが、墓と考えられる。なお、土壌の南西部で直径30cmの範囲に焼土が認められた。

- 位置 F₁-63-24, 25 平面形 楕円形
 規模 1.34×0.75/1.12×0.58/1.15 長軸方向 N-62°-E
 覆土 I 暗褐色 (II黒>EnL) II 暗褐色 (II黒>EnL+d₁+d₂)
 III 暗褐色 (II黒>EnL+EnP>d₁+d₂) IV 黄褐色 (EnP>II黒)
 V 暗褐色 (II黒>EnL>d₂) VI 黒褐色 (II黒>EnL+d₂)
 VII 黒褐色 (II黒>EnP>d₂) VIII 暗黄褐色 (EnL+EnP)
 IX 黒色 (II黒>EnL+d₂) X 黄茶褐色 (EnL>d₂>II黒)

P-181

調査地区の最も南側で発見された土壌である。Ta-d₂層上面で確認した。覆土は黒色土を中心とした混合層が堆積しており、Ta-d₂層やEn-aローム層と対照的な色調を呈していた。墳底は平坦で、壁はしっかりしており、ほとんど垂直に立ち上がる。北側の壁が一部オーバーハングしていた。墳底部の長軸西端から頭蓋骨が出土した。残存状態は良くない。磨耗の進んだ切歯を1点のみ取りあげることができた。土壌の平面形は長楕円形で、伸展葬の可能性はある。遺物は出土していない。

- 位置 E₂-64-74・84 平面形 長楕円形
 規模 1.20×0.66/1.10×0.50/0.70 長軸方向 N-60°-W
 埋葬体位 西頭位
 覆土 I 黒色 (II黒>d₂) II 黒褐色 (II黒>d₂)

P-217

調査地区の東隅で発見した。確認面はTa-d₂層上面である。覆土は明らかに埋め戻されたもの

である。墳底はEn-aバミス層に掘り込まれており、墳底は凹面をなしている。壁は墳底との境界がはっきりしないが、北側の壁がオーバーハングするほかは、ほとんど垂直に立ち上がる。遺物はない。

位置	Ea-63-67	平面形	楕円形
規模	0.69×0.60/0.40×0.31/0.74	長軸方向	N-7°-W
覆土	I 黒色 (II黒>d ₂ +EnP)	II	明黄褐色 (EnL>d ₂)
	III 暗黄褐色 (II黒+EnL>d ₂)	IV	黄褐色 (EnP>II黒)
	V 黒褐色 (II黒+d ₂)		

P-218

調査地区の東隅で発見した。確認面はTa-ds層上面である。P-217と規模・形状が似ている。覆土は人為的に埋め戻されたもので、掘り込みはEn-aバミス層に達していた。墳底はわずかに凹面をなしており、壁は急角度で立ち上がる。遺物はない。

位置	Ea-63-68	平面形	楕円形
規模	0.86×0.73/0.66×0.5/0.76	長軸方向	N-25°-W
覆土	I 暗黄褐色 (II黒+EnP>d ₂)	II	暗褐色 (II黒>d ₂ >EnL・P)
	III 黒色 (II黒>EnP)	IV	黄褐色 (EnP>II黒)
	V 明黄褐色 (EnP)		

3) Tピット

台地平坦部から2個、斜面から4個の計6個が検出された。形態は、すべて溝状で掘り込みの深いものである。これらのうち、斜面上部にあるT-5・6は切り合い関係をもち、新しく構築されたT-5は、深さ2mを越す規模の大きいものである。

配置については、ともに規則性はみられないが、斜面にある4個はすべて調査地区東寄りの小さな沢にあり、昭和58年度に検出された2個と合わせ6個がこの沢に存在することになる。

表17 Tピット一覧

名 称	位 置	平面形	規 模 (m)			長軸方向	備 考
			幅	奥	深		
T-1	F1-62-65・66	溝 状	3.60×0.75	3.04×0.15	1.62	N-1°-W	
T-2	E2-63-89 E2-64-80	#	2.44×0.90	2.20×0.15	1.40	N-48°-W	
T-3	F1-64-04・14	#	2.80×0.80	2.57×0.13	0.85	N-34°-E	
T-4	E2-63-81・82・92	#	2.70×0.79	2.80×0.20	1.54	N-27°-W	
T-5	E2-63-77・78 87・88	#	3.50×0.79	3.39×0.21	2.10	N-42°-W	T-6を切る
T-6	E2-63-87・88	#	(3.30)×0.75	(3.20)×0.20	1.12	N-9°-W	T-5に切られる 黄土上部から埋

T-1

台地上から単独で検出された。En-aノミス層中に掘り込まれ平面形は溝状。長軸方向の両壁が底付近でオーバーハングしている。開口部で著しく崩落し、短軸断面はY字形を呈している。

位置 F1-62-65・66

平面形 溝状

規模 3.60×0.75/3.04×0.15/1.62

長軸方向 N-1°-W

覆土 I 黒褐色 (II黒+d₁+d₂)II 黒色 (II黒>d₁+d₂)III 暗橙色 (d₂>II黒)VI 橙色 (d₂)V 灰橙色 (EnL+d₂)VI 灰黄色 (III黒>d₂)

VII 黄褐色 (EnL+III黒)

VII 黄褐色 (EnL>III黒)

IX 黒褐色 (II黒+d₂)X 明黄褐色 (EnL>II黒+d₂)

XI 黒色 (II黒)

T-2

調査地区東部の浅い沢のなかにあり、長軸は沢とほぼ直交する。底面はEn-aノミス層にあり凹凸が激しい、やや幅広の溝状で開口部は全周で崩落している。斜面上側の長軸方向の壁が底付近でオーバーハングする。

位置 E2-63-89, E2-64-80

平面形 溝状

規模 2.44×0.90/2.20×0.15/1.40

長軸方向 N-48°-W

覆土 I 黒色 (II黒>d₁)II 黒色 (d₁>II黒)III 黒褐色 (II黒+d₂>d₁)IV 灰褐色 (II黒>d₂+EnL)

V 黒色 (II黒)

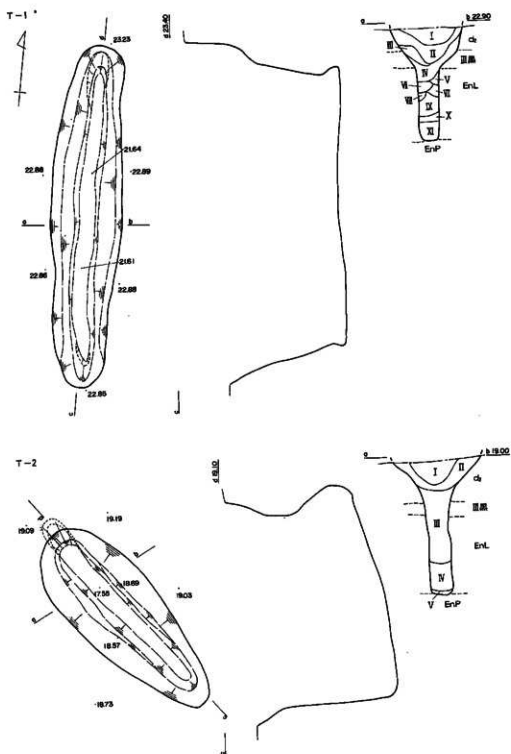


図82 T-1・2

T-3

T-2と同じく浅い沢のなかにある。長軸方向は沢筋とはほぼ平行する。En-aローム層中に掘り込まれ、平面形は溝状。確認面がTa-d₂面であるため最大深は1m足らずであるが、この周辺は沢の末端部に近くII黒層が相当に厚く、本来もっと深かったと思われる。

位置	F1-64-04・14	平面形	溝状
規模	2.80×0.80/2.57×0.13/0.85	長軸方向	N-34°-E
覆土	I 黄褐色 (d ₂ >II黒)	II	黒色 (d ₁ >II黒)
	III 橙色 (d ₂ >d ₁)	IV	黒色 (II黒>d ₁)
	V 暗赤褐色 (d ₂ >II黒)	VI	黒褐色 (II黒>d ₂)
	VII 黒色 (II黒)		

T-4

台地上にある。En-aバミス層を掘り込んで作られている。壁は凹凸が激しく、長軸方向の底付近で若干オーバーハングする。また両壁にもオーバーハングが認められる。

位置	E2-63-81・82・92	平面形	溝状
規模	2.70×0.79/2.80×0.20/1.54	長軸方向	N-27°-W
覆土	I 黒色 (II黒>d ₁ +d ₂)	II	灰橙色 (d ₂ >III黒+II黒)
	III 橙色 (d ₂ >II黒)	IV	灰色 (III黒>d ₂)
	V 黄褐色 (EnL>d ₂)	VI	灰褐色 (II黒+EnL+d ₂)
	VII 黒褐色 (II黒>d ₂ +III黒+EnL)	VIII	黄色 (EnP)
	IX 黒色 (II黒)		

T-5

T-6とともに浅い沢の沢頭付近にあり、長軸方向は沢筋とは斜めに交差する。2.1mの深さをもつ大型で、底はEn-aバミス層下のローム質粘土層に達し凹凸がある。開口部から中層部にかけての壁の崩落が著しい。斜面下部の南東側の壁が底付近でオーバーハングしている。覆土上層から礫が1点出土した。同じく溝状のT-6と重複関係にあり、T-5の方が新しい。

位置	E2-63-77・78・87・88	平面形	溝状
規模	3.50×0.79/3.39×0.21/2.10	長軸方向	N-42°-W
覆土	I 黒色 (II黒>d ₂ +EnP)	II	黄褐色 (EnL+d ₂ +II黒)
	III 茶褐色 (II黒+d ₁ >d ₂)	IV	橙色 (d ₂ >II黒+III黒)
	V 灰色 (III黒>EnL)	VI	黄色 (EnL>EnP)
	VII 黄褐色 (EnL>EnP)	VIII	黒褐色 (II黒+d ₂)
	IX 黄色 (EnL>d ₂ +EnP)	X	黒色 (II黒>EnL)
	XI 黄色 (EnL+EnP)		

遺物 礫X0:1。

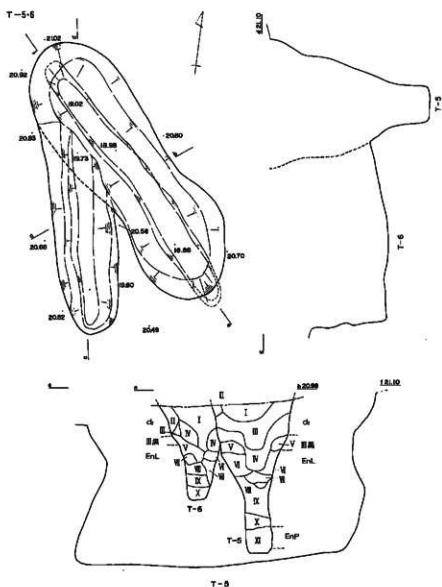


図84 T-5・6

T-6

北側開口部をT-5に切られている。底面はEn-aバミス層中にある。長軸長はT-5とあまり相違はないが、深さは半分しかない。開口部は大きく崩落している。長軸方向は、T-5とは異なり、沢筋にはほぼ平行する。

位置	E ₂ -63-87・88	平面形	溝状
規模	(3.30)×0.75/(3.20)×0.20/1.12	長軸方向	N-9°-W
覆土	I 茶褐色 (II黒+d ₁ >d ₂)	II	橙色 (d ₂)
	III 橙色 (d ₂ >II黒+III黒)	IV	橙色 (d ₂ >II黒)
	V 黒褐色 (II黒>d ₂)	VI	灰色 (III黒>EnL)
	VII 黄色 (EnL>d ₂)	VIII	灰橙色 (EnL+III黒>d ₂)
	IX 黄色 (EnL>d ₂)	X	黒褐色 (II黒+d ₂)

4) その他の土壌

用途の定かでない3個の土壌を、その他としてここに一括する。P-03、P-199はともに墓群中に混在するように検出された。覆土とともに自然堆積の様相を呈している。

表18 その他の土壌一覧

名称	位置	平面形	規模 (m)			長軸方向	備考
			横断	縦断	最大値		
P-03	F ₁ -62-07	楕円形	0.80×0.50	0.56×0.30	0.15	N-23°-E	
P-183	E ₂ -63-69	■	1.50×1.10	1.90×0.86	0.50	N-30°-E	覆土より硬1
P-199	F ₁ -63-56	円形	0.80×0.81	0.55×0.50	0.25	-	

P-03

墳底はTa-d₂層中にあり、平坦である。

位置	F ₁ -62-07	平面形	楕円形
規模	0.80×0.50/0.56×0.30/0.15	長軸方向	N-23°-E
覆土	I 黒色 (II黒)	II	黒褐色 (II黒+d ₂)
	III 暗茶褐色 (d ₂ >II黒)	IV	黒色 (II黒)
	V IIと同じ		

P-183

調査地区の東隅で発見した土壌である。風倒木痕を切っており、下層から貫入してきた En-a 層に掘り込まれている。確認面はTa-d₂層上面と同一レベルである。墳底は平坦で壁は急角度で立ち上がるが、開口部で外反する。墳底部から偏平な礫が一点出土した。

位置	E ₂ -63-69	平面形	楕円形
規模	1.50×1.10/1.90×0.86/0.50	長軸方向	N-30°-E
覆土	I 黒褐色 (II黒>EnP+d ₂)	II	明黄褐色 (EnP>II黒)

III 茶褐色 ($\text{II黒} > d_2 + \text{EnP}$) IV 黒色 ($\text{II黒} > \text{EnP}$)

遺物 X : 1。

P-199

P-158の揚げ土と考えられるEn-aノミスを含むII黒層の下位で、円形に近いプランを確認した。墳底はIII黒層下位に作られる。

位置 F1-63-56

平面形 円形

規模 $0.81 \times 0.80 / 0.50 \times 0.55 / 0.25$

覆土 I 黒色 ($\text{II黒} > d_1$)

II 灰茶褐色 ($\text{II黒} + d_1 > d_2$)

III 赤褐色 ($d_2 > \text{II黒}$)

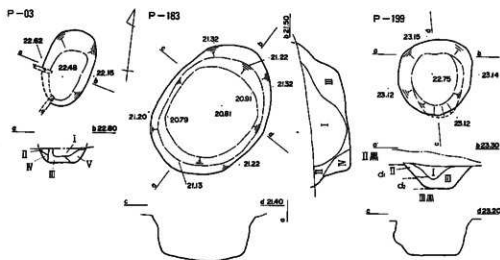


図85 P-03・183・199

5) 焼土

台地縁辺から斜面にかけて焼土のひろがり方が5か所で認められた。いずれもII黒層上面のつた状態で、下位に遺構はなかった。焼土中からはIV群c類、V群c類土器と被熱した黒曜石の切片が数点得られている。焼土の厚さは最大約8cmで、含まれる炭化物もごく微量なことから、焼土のみが投げ棄てられたものと考えられる。なお、F-5はP-171の南西側に近接するが、土壌の掘り込み面よりも上位であり関連性は認められない。F-5中より検出された土器はV群c類である。

出土遺物 F-1 土器IVc: 2, Vc: 5。 F-2 土器Vc: 2。

F-3 土器Vc: 3。切片01: 1。 F-4 土器Vc: 1。

F-5 土器Vc: 3。切片01: 7。 屑片02: 5。

(2) 遺物

1) 土器 (図87~85)

II黒層からは、II群~V群土器片が17,122点出土した。このうちIV群が全体の63%で、特にIV群b類が52%と卓越している。次いでV群が27%、III群が10%の割合で出土し、II群はわずかである。分類別には次のような分布傾向がある。IV群b類は、調査地区のうち台地の縁辺部から多く出土し、斜面部分には比較的少ない。このIV群b類の分布は墓群とはほぼ一致しており、両者に関連性があることをうかがわせる。V群a類とc類は斜面部分に多い。III群b~3類は調査区のほぼ全域から出土しているが、南西部に偏る。III群a類は、F2-63-25を中心とした比較的狭い範囲に集中する。

II群a~2類 (図90-1・2)

粘土に繊維を含有する土器である。1は口縁部破片で、内外面に縄文がある。

III群a類 (図87-1, 図90-3~11)

図90-3~10は口縁部破片で、内面が研磨され、貼付帯の上に密な撫糸圧痕文を施す土器である。貼付帯の間には半截竹管文がみられる。図90-3・4は口縁の弁状突起の破片で中央部に貫通孔があり、その周囲に環状の貼付帯がある。図90-11は底部で、結束の羽状縄文が施文されている。

III群b-1類 (図90-12・13)

半截竹管文のある土器である。11は口縁部破片で、口縁の肥厚帯が剥落しているが、半截竹管を横位に連続して押圧されている。図90-12は胴部破片で、貼付帯上を半截竹管で押し引きした例である。

III群b-2類 (図90-14)

刻みのある貼付帯をもつ土器である。表面は磨滅しているが、地文として縄文が施文されている。

III群b-3類 (図90-15~32, 図91-33~53)

図90-15~32, 図91-33~40は口縁部破片で、口縁に断面が三角形の肥厚帯があり、その下に円形の刺突文をもつ土器である。肥厚帯の上に竹管や刺突や、へら状施文具の押し引きを施した例が多い。ただし、図90-17・19, 図91-37のように肥厚帯が発達しないものや、図90-28~30, 図91-34のように円形刺突のないものもある。図91-41~53は胴部破片で、図91-41~43には複節の縄文が、図91-50~53には綾絡文がある。

IV群a類 (図91-54~56, 図92-57~61)

図91-54は2段の肥厚帯が口縁部に形成されている。図91-55・56は胴部破片で、図91-56の凸帯の上には縄文が認められる。図92-57は口縁部破片で、地文の縄文の上に沈線が施されている。図92-58~61は胴部破片で撫糸文のものである。

IV群b類 (図87-2, 図88-3~15, 図89-16~21, 図92-62~80, 図93-81~95, 図94-96~99)

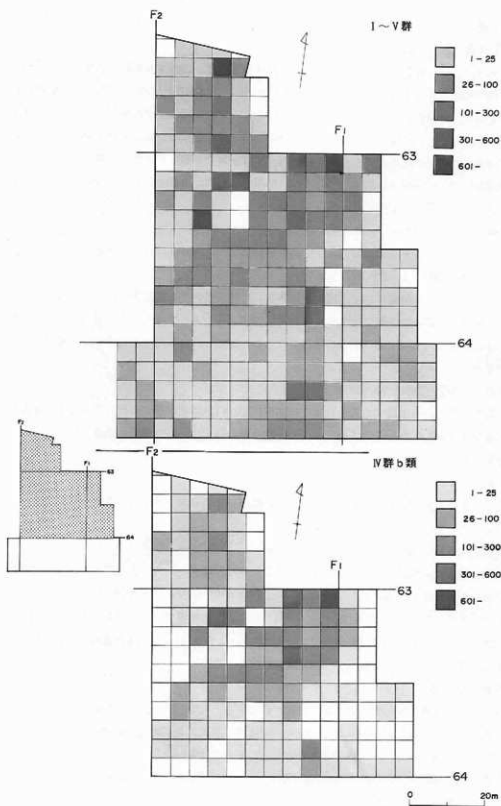


図86 II 黒層の土器出土頻度図

図92-67~72, 図94-99は、地文に縄文を施文した後、口縁や頸部に平行沈線をめぐらし、その間を鋸歯状の沈線で埋めたものである。図94-99は図92-67や68のような、外反する口縁をもった深鉢形土器の胴部に相当すると思われる。図87-2, 図88-3~15, 図89-16, 図92-73-80, 図93-81・82・84-87は、表面調整が良好で内面や無文帯が研磨された土器である。器形は、ほとんどが単純な鉢形で、浅鉢形のものや深鉢形のものがある。鉢形のほかに壺形(図88-13, 図89-16)、台付鉢(図88-12・15)の土器もあるが、数は少ない。文様は磨り消し帯が発達し、文様帯が胴部に限定される傾向が強い。この文様帯は、上下を沈線で区画され、縄文のみのものや図93-85・86のように鋸歯状沈線が施されたものもあるが、斜行縄文の上に数条の横走沈線を加えたモチーフが多数を占める。この沈線は、縦位の沈線で連結されることが多い。

図89-17・20, 図93-83・88・89・92~95, 図94-96は頸部のくびれた深鉢形で、大波状口縁の土器が多い。口唇や頸部のくびれた部分には、特徴的な短刻線列がみられる。また地文には羽状縄文が用いられている。

図93-95, 図94-97・98は鉢形または壺形土器の胴部大破片である。図93-90・91は、口縁部破片で、短刻線列と内側から外側への突瘤文がみられる。

IV群c類(図89-22, 図94-100~119)

深鉢形土器と注口土器がある。器壁はうすく焼きの良い土器である。口唇断面は器内面に向けて斜めに削られ、切り出し形を呈するものが多い。このほかに平らに成形されるもの、指頭等で押し潰したものがある。口縁部には器内面からの突瘤がめぐり、沈線とともに多用される。

図89-22は長頸の注口土器で体部は球形をなす。頸部の立ち上がり部には肥厚帯がめぐらされ、体部には円形の貼瘤が等間隔に配されている。図94-105・106・111は同一個体で、これも長頸の土器(注口土器?)かと思われる。切り出し形口唇の上に縄文が施されている。図94-111では沈線間にたての刻みがつけられ、図94-112には沈線に沿って棒状工具での刺突が配されている。図94-116~118は底部片で上げ底気味。図94-119は注口先端と体部に肥厚帯があり、縄文が施されている。赤色顔料がところどころに残存している。

V群a類(図95-119~126)

鉢形土器の破片である。口唇の形態には、平らに成形されるもの、口唇上が指頭等で押し潰されるもの、口唇にかけて薄身となるものなどがある。全例縄文地に爪などによる連続する文様が配されている。連続する文様は、単なる刻みとなるもの(図95-121・126)と、押し引きにより胎土のめくれとしてみられるもの(図95-120・122~125)とがある。図95-123には、器内面からの突瘤文が口縁をめぐっている。

V群c類(図95-127~143, 図96-144~148)

図95-127は口縁に2条の沈線をめぐらしたものである。口唇上には小さな突起がある。図95-128~143, 図96-144~148は縄線文や棒状施文具の押圧を多用するバラエティに富んだ文様をもつ土器で、深鉢形と浅鉢形の器形がある。図95-138・141~143は浅鉢形土器の口縁部

破片で、口唇上や口縁内面に縄線文が施文されている。図95-143には焼成前の貫通孔がある。ほか、深鉢形土器と思われ、無文のもの（図95-130、図96-145）、横走する沈線や縄線文をもつもの（図95-128・129・132・133・136・137）、弧状の沈線が向い合うもの（図95-131・134・135）などがある。図96-146は、胴部破片で、2つの隆帯上に等間隔に棒と指頭の押圧がみられる。図96-147・148は底部破片で縄文が施文されている。図96-144は深鉢形土器の口縁部破片で5条の横走沈線を口縁に配し、その下にジグザグ状のコンパス文を施したものの。この土器はV群c類とはやや異質のものであり、あるいは別分類に属するものかもしれない。

（青柳文吉・森 秀之）

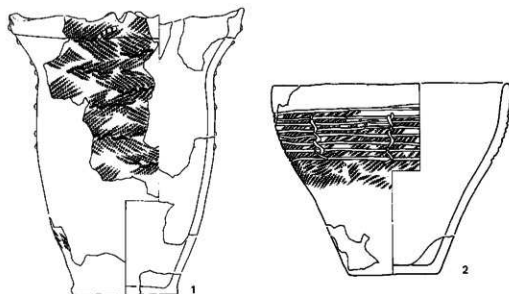


図87 II黒層出土の土器

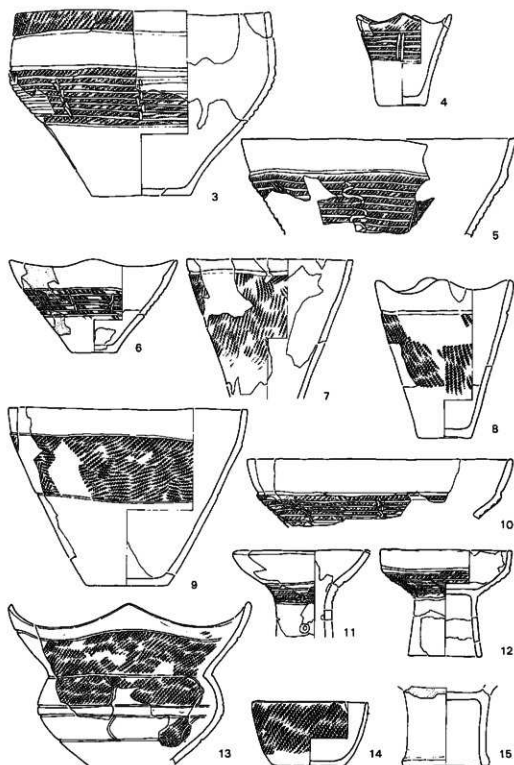


図88 II黒層出土の土器

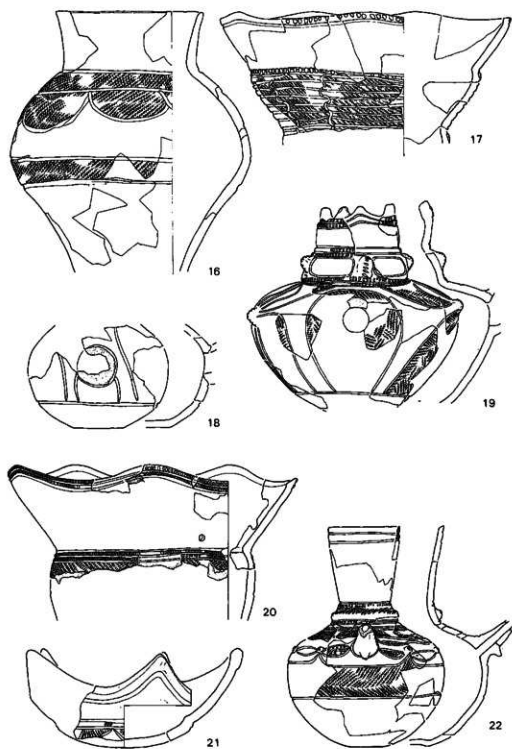


図89 II 鳳層出土の土器

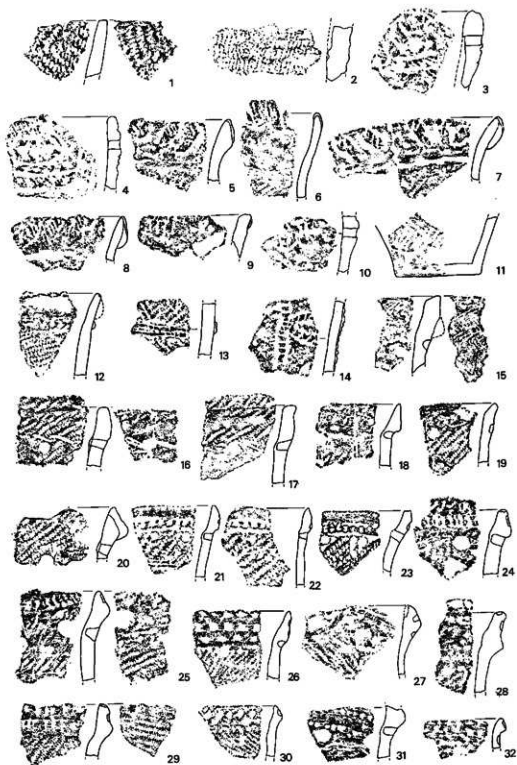


図90 II風層出土の土器

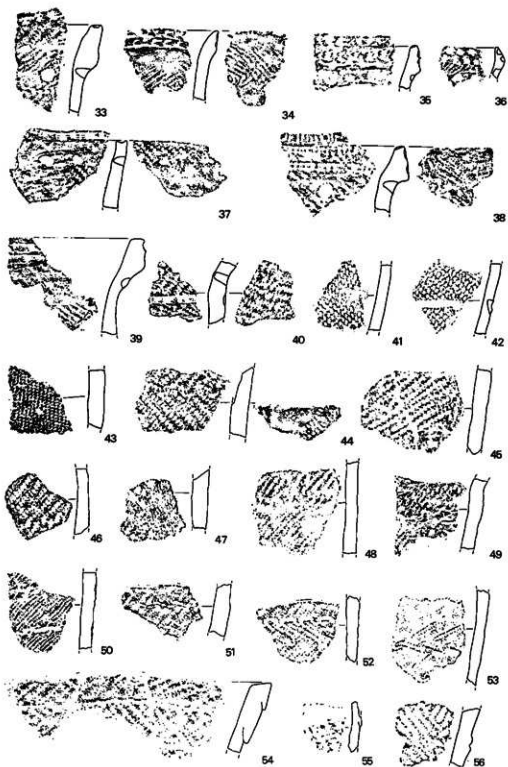


図91 II黒層出土の土器

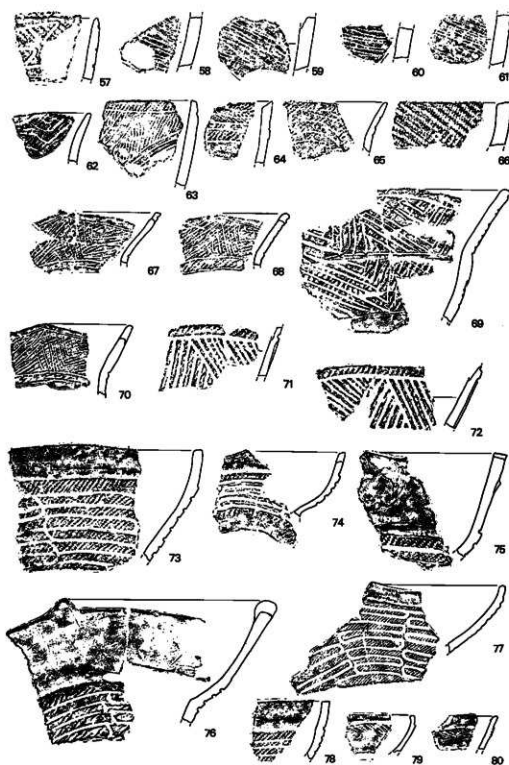


図92 II 黒層出土の土器

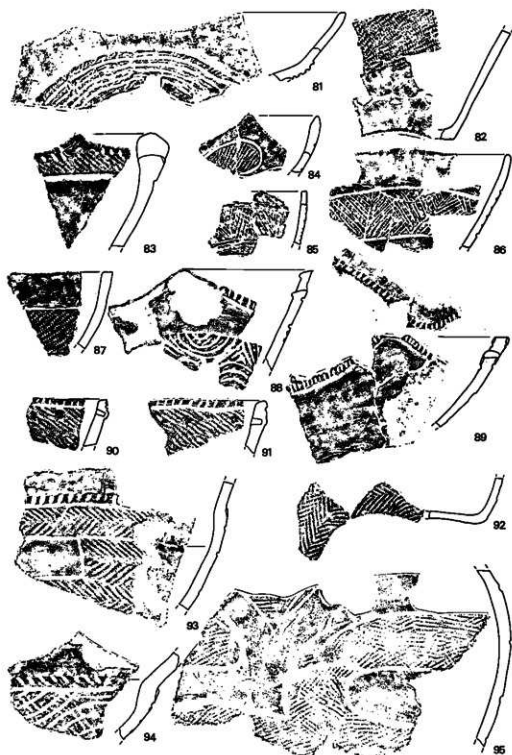


図93 II黒層出土の土器

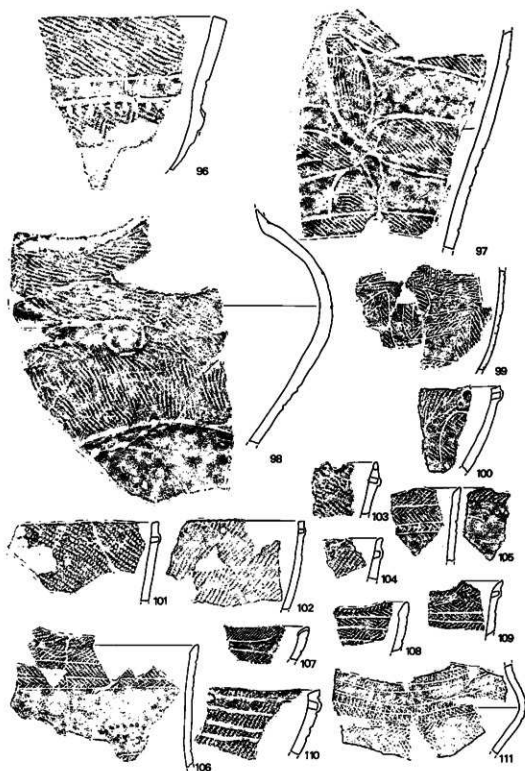


図94 II黒層出土の土器

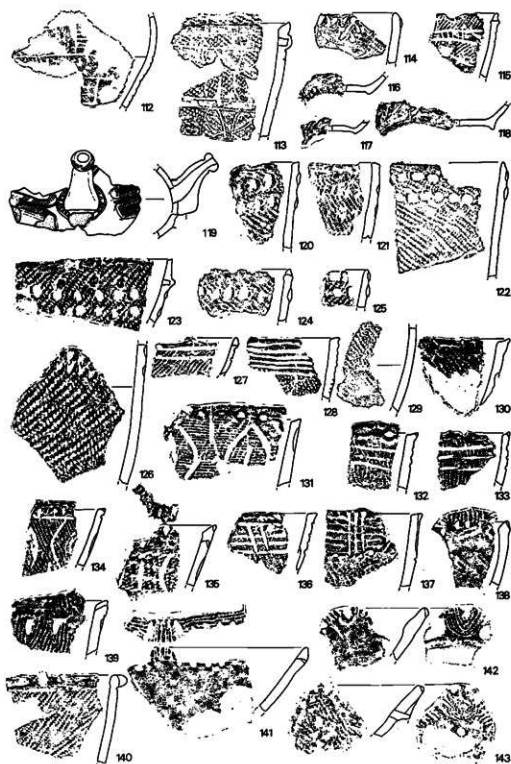


図95 II黒層出土の土器

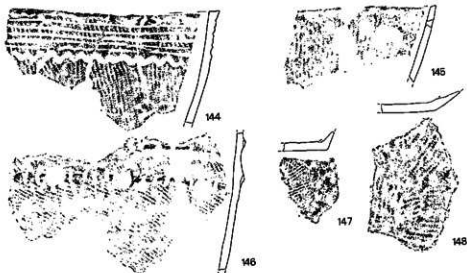


図96 II 黒層出土の土器

表19 掲載土器一覧
(実測図)

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (m)			備考	番号	名称	分類	発掘区	大きさ (m)			備考
				縦高	口径	底径						縦高	口径	底径	
1	深鉢	Ⅲa	F ₁ -63-75	29.9	24.9	11.0		12	台付鉢	Ⅱb	F ₁ -62-99	(11.4)	(14.0)	(7.8)	
2	"	Ⅱb	F ₁ -63-61	20.0	25.1	9.5		13	深鉢	"	F ₂ -64-04	—	(26.0)	—	図上復元
3	"	"	F ₁ -63-44	19.5	27.1	10.5		14	浅鉢	"	第6群基城	7.0	12.4	7.6	
4	"	"	F ₁ -63-61	9.8	10.2	5.0		15	台付鉢	"	F ₁ -63-51	—	—	(5.2)	
5	深鉢	"	F ₁ -63-23	—	(29.0)	—	図上復元	16	壺	"	F ₁ -62-91	(27.3)	(15.7)	—	
6	浅鉢	"	F ₁ -63-51	9.9	(7.9)	5.0		17	深鉢	"	F ₁ -63-25 64-65-75	—	(31.0)	—	図上復元
7	深鉢	"	F ₁ -62-76	(14.3)	17.6	—		18	注口土器	"	F ₁ -63-51	(10.8)	—	5.0	
8	"	"	F ₁ -62-65	16.7	14.8	5.8		19	"	"	F ₁ -64-24	(21.2)	(8.0)	—	図上復元
9	"	"	第6群基城	(18.7)	(25.5)	(8.7)	図上復元	20	深鉢	"	F ₁ -64-20	(12.0)	(30.7)	—	"
10	"	"	F ₁ -63-51	(7.0)	(28.2)	—		21	浅鉢	"	F ₁ -63-65	(10.8)	(22.8)	(14.5)	"
11	台付鉢	"	F ₁ -64-93	(9.3)	(14.6)	—		22	注口土器	Ⅱa	E ₂ -64-60 -61	(23.3)	(7.6)	(4.0)	"

(拓本)

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	Ⅱa-2	F ₁ -63-69	9	Ⅲa	E ₂ -63-80	17	Ⅲb-3	F ₁ -63-05
2	"	E ₂ -64-50	10	"	"	18	"	F ₁ -63-16
3	Ⅲa	E ₂ -63-80	11	"	F ₁ -63-89	19	"	F ₂ -64-04
4	"	"	12	Ⅲb-1	F ₂ -64-24	20	"	F ₂ -64-13
5	"	E ₂ -63-92	13	"	F ₂ -64-22	21	"	F ₁ -63-51
6	"	F ₁ -63-86	14	Ⅲb-2	F ₁ -63-58	22	"	F ₁ -63-95
7	"	E ₂ -63-92	15	Ⅲb-3	F ₂ -64-23	23	"	F ₁ -63-34
8	"	"	16	"	F ₁ -63-05	24	"	F ₁ -63-95

II 美々4道陸の調査

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
25	IIIb-3	F ₁ -63-17	67	IVb	F ₁ -63-65	109	IVc	F ₁ -64-71
26	"	F ₁ -64-91	68	"	F ₁ -63-25	110	"	F ₁ -64-22
27	"	E ₂ -63-80	69	"	E ₂ -64-91	111	"	E ₂ -64-74
28	"	F ₂ -64-24	70	"	F ₁ -63-45	112	"	F ₁ -63-01
29	"	E ₂ -64-84	71	"	F ₁ -63-73	113	"	F ₁ -62-65
30	"	F ₂ -64-11	72	"	"	114	"	E ₂ -64-84
31	"	F ₁ -63-76	73	"	F ₁ -62-76	115	"	F ₁ -63-26
32	"	F ₂ -64-20	74	"	F ₁ -62-77	116	"	F ₁ -64-34
33	"	F ₂ -64-04	75	"	F ₁ -64-74	117	"	F ₁ -64-11
34	"	F ₁ -63-70	76	"	F ₁ -63-01	118	"	F ₁ -64-35
35	"	E ₂ -64-24	77	"	F ₁ -63-42	119	Va	F ₁ -63-76-97
36	"	F ₂ -64-14	78	"	F ₁ -62-77	120	"	F ₁ -64-14
37	"	F ₁ -64-60	79	"	F ₁ -64-34	121	"	F ₁ -64-24
38	"	F ₁ -64-91	80	"	F ₂ -64-03	122	"	F ₂ -64-02
39	"	F ₁ -64-70	81	"	F ₁ -62-77	123	"	F ₁ -62-91
40	"	F ₂ -64-23	82	"	F ₁ -63-73	124	"	F ₁ -64-24
41	"	E ₂ -64-62	83	"	F ₁ -63-01	125	"	F ₁ -64-34
42	"	F ₁ -64-62	84	"	F ₁ -64-04	126	"	E ₂ -64-14
43	"	E ₂ -64-52	85	"	F ₁ -63-65	127	Vc	F ₁ -63-51
44	"	F ₂ -64-44	86	"	F ₁ -62-55	128	"	E ₂ -63-95
45	"	F ₂ -64-11	87	"	F ₁ -63-51	129	"	E ₂ -63-84
46	"	F ₂ -64-14	88	"	F ₁ -63-10	130	"	F ₁ -63-38
47	"	F ₂ -64-04	89	"	F ₁ -64-84	131	"	F ₁ -63-17
48	"	"	90	"	F ₁ -62-49	132	"	F ₁ -63-47
49	"	F ₁ -64-94	91	"	F ₁ -63-80	133	"	"
50	"	F ₂ -64-20	92	"	F ₁ -63-20	134	"	F ₁ -63-58
51	"	F ₁ -63-81	93	"	F ₁ -63-10	135	"	F ₁ -63-28
52	"	F ₂ -64-23	94	"	F ₁ -63-01	136	"	F ₁ -63-18
53	"	F ₁ -63-05	95	"	F ₁ -63-54	137	"	"
54	IVa	F ₁ -63-18	96	"	F ₁ -63-22	138	"	F ₁ -63-57
55	"	F ₁ -63-80	97	"	F ₁ -63-26	139	"	F ₁ -63-18
56	"	F ₁ -63-72	98	"	F ₁ -63-43	140	"	F ₁ -64-23
57	"	E ₂ -64-81	99	"	F ₁ -63-45	141	"	F ₁ -63-17
58	"	F ₁ -63-56	100	IVc	F ₁ -63-76	142	"	"
59	"	F ₁ -63-89	101	"	F ₁ -63-77	143	"	"
60	"	F ₁ -63-66	102	"	F ₁ -63-97	144	"	F ₁ -63-19
61	"	F ₁ -63-89	103	"	F ₁ -64-11	145	"	F ₁ -63-17
62	IVb	F ₁ -63-65	104	"	E ₂ -64-93	146	"	F ₁ -63-28
63	"	F ₁ -63-51	105	"	E ₂ -64-74	147	"	F ₁ -63-58
64	"	F ₁ -64-21	106	"	"	148	"	F ₁ -63-09
65	"	F ₁ -63-57	107	"	F ₁ -64-14			
66	"	F ₁ -63-34	108	"	F ₁ -64-11			

2) 石器等 (図97~101)

剥片石器273点、礫石器459点、石製品12点、土製品4点、石核・剥片・屑片11,776点。礫・破片1,020点が出土した。石器は調査地区ほぼ全域に散在するが、剥片(01)、屑片(02)の85%は5地点でまとまって出土した。すなわち、1)調査地区北西部の台地上F₁-62-77・78周辺で596点、2)調査地区南西部のH-2周辺から斜面にかけての5m×15mほどの範囲で2,715点、3)南東部の斜面F₁-63-18周辺の5m×5mの小範囲で1,640点、4)調査地区南端斜面下部のF-64-11・12周辺で2,302点、5)同じく斜面下部のF₁-64-43・44周辺で2,842点である。

剥片石器では石鏃(A)がもっとも多く、スクレイパー(E)、石槍またはナイフ(B)がこれに次ぐ。つまみ付きナイフ(D)、石錐類(C)はわずかである。礫石器では石斧(F)が多く、たたき石(G)がこれに次ぐ。なお、石斧、たたき石の破片が251点あり、これらは打割器(IV)の破片として一括してある。礫器(H)、すり石(J)、砥石(K)は破損品のみである。石錐(N)は片麻岩製の小破片が数点出土しただけである。以下に図示した遺物を中心に石器等の概略を述べる。

石鏃(1~45): 181点出土し、剥片石器の66%を占めている。有茎のA 7(15~44)が圧倒的に多く、薄身鏃A 3(1・2)、三角形鏃A 4(3~13)、木葉形鏃A 5(14)はわずかである。石質は2・4・15・40が頁岩製でほかは黒曜石製。1は柳葉形鏃A 3a。2は五角形鏃A 3b。いずれも二次加工は丹念である。三角形鏃には平基のA 4a(3~7)と基部が湾入するA 4b(8~13)がある。二次加工は4・8・11で周縁部にとどまるほかは、全面に施されている。4はほかのものに比べて先端が尖っている。13は大型で基部の湾入は深い。14は木葉形鏃A 5。二次加工はあまり丁寧ではない。有茎鏃A 7は、調査地区中央部の台地上から斜面に移る付近、南側の斜面下部、縄文時代後期IV群・晩期V群の土器が多く出土した地区に多い。かえしが不明瞭なもの(15~34)と、強く張り出す特徴的なもの(35~44)がある。いずれも二次加工は非常に丹念である。18は基部が比較的太く全体の器形が丸味を帯びているもの。27は基部が鏃身に比べて長い。32は方形の太い基部をもつ。44はほかのものと比べて狭長で茎が鏃身とほぼ同じくらいの長さがある。45は、左右対称の形をとらない特異なもので、二次加工は周縁にのみ施されている。先端と両側縁が磨耗していることから、石鏃あるいはスクレイパーとして分類される可能性もある。

石槍またはナイフ(46~59): 35点出土し、半数は破損品である。57がメノウ質頁岩でその他は黒曜石製。有茎のB1(46~55)、無茎のB2(56~58)木葉形のB4(59)がある。54~56以外は二次加工はあまり丁寧ではない。有茎のものでは54・55を除きかえしは明瞭ではない。かえしが左右で同位置ではないもの(46・49・50)、片方のかえしがほとんどみられないもの(47・48・53)がある。54~56は基部の両側縁の磨耗が顕著である。56は器部全体が湾曲する。

石錐(60~62): 5点出土した。図示した3点以外は破片である。60は刺突部が欠損している刺突器C 1。扁平な黒曜石の剥片を素材にして刺突部のみを作りだしたもの。61・62は棒状ドリルのC 2a。61は頁岩製で、断面は三角形を呈し両端を使用している。62は黒曜石製の大型

のもの。両先端の磨耗が著しく、回転によると思われる擦痕がみられる。

つまみ付きナイフ (63-69) : 14点出土し、すべて縦形である。68を除き、二次加工は粗雑である。主断面右側縁に調整痕をもつD1 (63)、片面周縁加工のD3a (64-67)、片面加工のD5a (68-69)がある。68は亀甲形の非常に小さいつまみ部が特徴的である。69は厚みがありつまみ部は太く小さい。64・65・67が頁岩製、ほかは黒曜石製。

スクレイパー (70-77) : 37点出土している。77以外は不定形の剥片を利用したもの。石質は74-76が頁岩製であるほかは黒曜石製である。尖頭形に近いもの (70-72)、横長剥片を利用したもの (74-76) などがある。70は直線的な部分と、挟り込みの部分に刃部がある。71は二側縁に刃部がある。72は断面が三角形で、左下側縁の磨耗が著しい。表面の同位置には無数の織状の使用痕がある。ナイフとしての機能もあわせもつものであろう。73は錯向する刃部をもつもので、全体が弓なりに外反する。74、75は一側縁、76は二側縁にそれぞれ刃部がある。77は二等辺三角形を呈する特異なもの。三側縁に急角度の刃部がある。

石斧 (90-101) : 85点出土している。図示した以外はほとんどが破損品である。打製石斧 (F1) が4点ある以外はすべて磨製石斧 (F2) である。敲打による整形のF2b (94)、全面磨製のF2c (95-101)が多い。打ち欠き整形によるF2c (90-93)は少ない。明瞭な使用痕があって、「手斧 (ちょうな)」と分類できたのは97のみである。92は楕円形の扁平な礫を素材としている。原形をあまり整形せずに、荒く打ち欠いた後、刃部とその周辺を研磨している。93は基部の整形が粗雑で凹凸がある。94は断面が楕円形の乳棒状石斧。基部の側縁が直線的で厚みがある。敲打による調整はあまり丁寧ではなく、刃部とごく一部のみ研磨されている。基部で破損している。97は小型で重量感があり刃こぼれがみられ片刃のもの。刃部に直交する線状の使用痕がみられた。101にも同様に刃部に直交する擦痕がみられたが、研磨痕か使用痕かは明瞭に区別できなかった。98は基部が張り出すもの。99は直刃に近い。100は基部、刃部ともに薄く狭長のもので刃こぼれがみられる。石材は99-100が片岩、101が黒色片岩でほかは緑色泥岩である。

たたき石 (102-109) : 67点出土した。石斧に次いで多い。扁平礫を素材にしたG2 (105) 球形礫素材のG3 (106-107)が多い。ほかに棒状礫素材のG1 (102-104)、くぼみ石 (G4)がある。102-104には両端に細かい敲打痕がある。102は珪岩、104は砂岩製。103には荒く打ち欠いた礫の端に敲打痕がある。カンラン岩製。106は安山岩製でほぼ全面に敲打痕がある。107は珪岩製で、荒い敲打痕が全面の3分の2ほどにある。108は丸みを帯びた直方体状のもので泥岩製。109には断面四角形の礫の表面に2か所、側面にも3か所敲打による連続した荒いくぼみがある。砂岩製。

すり石 (111) : 14点出土した。図示したほか13点が、北海道式石冠 (J4) の破損品・破片である。

砥石 (110) : 29点出土した。すべて破損品・破片で、砂岩製である。110には表裏面に平滑な砥面がある。表面には先の丸い棒状工具によると思われる直径8mm、深さ3~4mmの断面U字

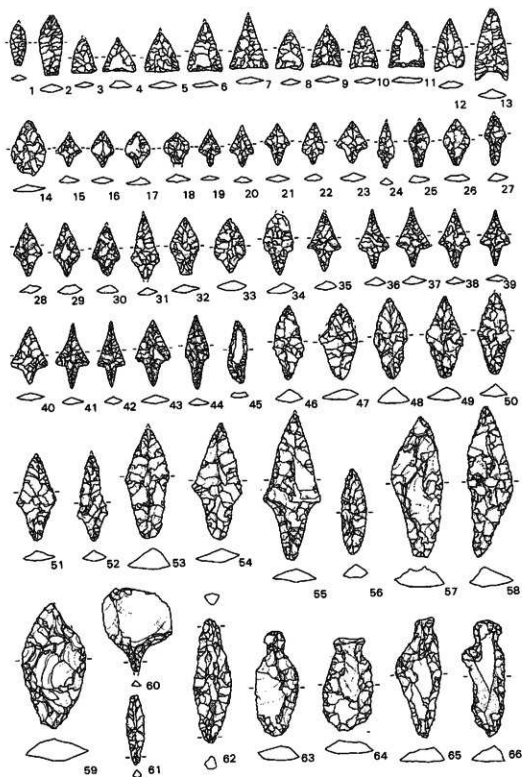


図97 II黒唇出土の石器

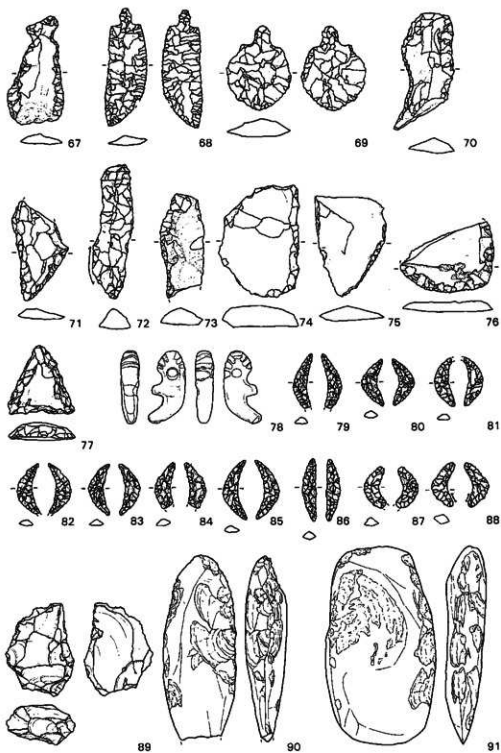


図98 II風層出土の石器等

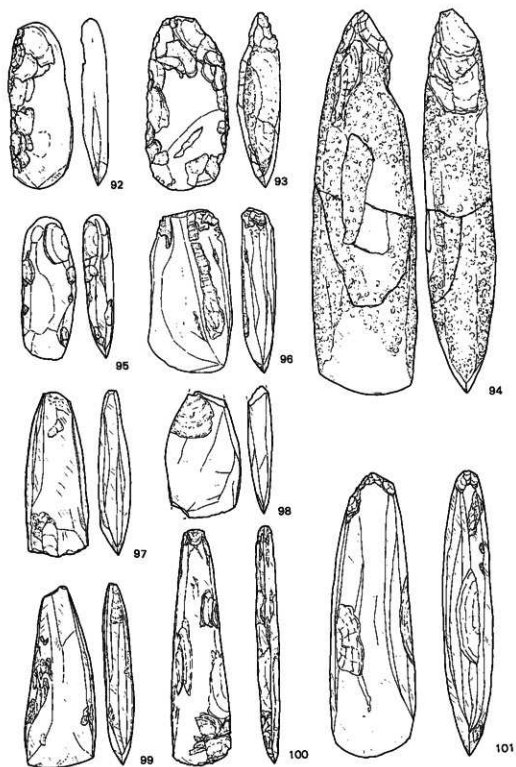


図99 II黒層出土の石器

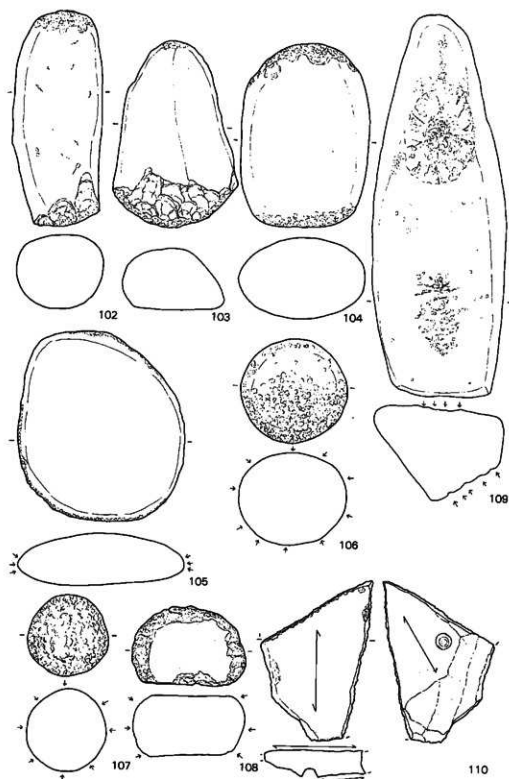


図100 II層出土の石器

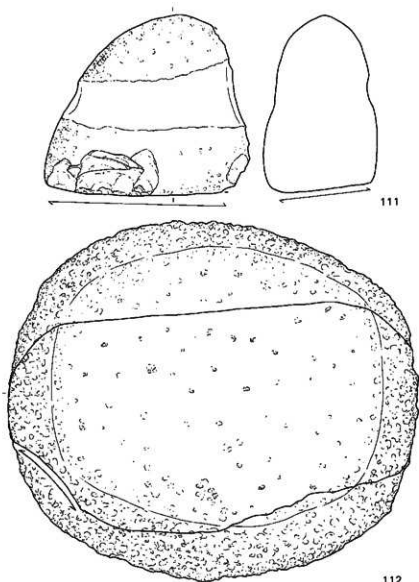


図101 II黒層出土の石器

形の孔がある。

台石・石皿（112）：7点出土した。完形品は図示した1点のみである。112は凝灰岩製。表面と裏面の一部に平滑な使用面がある。側面に1か所、研磨されややくぼんだ面がある。

石核（89）：14点出土した。いずれも黒曜石で小型である。

石製品（78～89）：12点出土した。78は第5群の墓城南東端のTa-da層面から出土した勾玉様のものである。頭部と尾の部分に刻み目がある。片側穿孔で表面はやや風化している。硬玉

製。

79~88は「三日月形石器」と称されているもの。いずれにも、二次加工がほぼ全面に細かく丹念に施されており、すべて黒曜石製である。81~86は第2群の墓域北西部、79・80はそこから少し離れた位置で、それぞれまとまって出土した。86の側縁がやや直線的であるほかは、両側縁はゆるやかに湾曲している。いずれにも使用された痕跡はみられない。87・88は第6群北東部盛土の上層から出土した。さきの8点に比べるとやや小型で外側縁の湾曲も大きい。2個とも先端が丸くなっており、側縁には磨耗痕がみられる。88は内側縁の磨耗が著しい。

土製品：4点出土している。同一個体と思われる滑車形耳飾の破片が3点出土した。

(遠藤香澄)

表20 掲載石器等一覧

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重量 (g)	材質	備考	番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)	重量 (g)	材質	備考
1	石 器	A3a	F1-Q2-26	(2.2) × 0.6 × 0.2	(0.3)	Obs.		26	石 器	A7	Ex-64-41	2.4 × 1.4 × 0.35	0.6	Obs.	
2	＊	A3b	F1-Q2-75	3.3 × 1.3 × 0.4	1.5	Sh.		27	＊	＊	F1-64-21	2.6 × 1.1 × 0.3	0.8	＊	
3	＊	A4a	F1-Q2-65	1.8 × 1.3 × 0.2	0.5	Obs.		28	＊	＊	F1-Q2-69	2.6 × 1.5 × 0.4	0.6	＊	
4	＊	＊	F1-Q2-45	1.8 × 1.7 × 0.3	0.6	Sh.		29	＊	＊	F1-Q2-17	2.8 × 0.3 × 0.4	1.1	＊	
5	＊	＊	Ex-Q2-91	2.1 × 1.8 × 0.3	1.2	Obs.		30	＊	＊	F1-Q2-69	2.6 × 1.5 × 0.4	1.1	＊	
6	＊	＊	F1-64-21	2.6 × 1.8 × 0.35	1.0	＊		31	＊	＊	F1-64-42	(3.4) × 1.3 × 0.4	(1.3)	＊	
7	＊	＊	F1-Q2-80	2.7 × 1.0 × 0.3	1.4	＊		32	＊	＊	F1-64-03	3.0 × 1.5 × 0.3	1.3	＊	
8	＊	A4b	F1-Q2-81	1.9 × 1.4 × 0.3	0.6	＊		33	＊	＊	F1-Q2-78	2.6 × 1.6 × 0.5	1.5	＊	
9	＊	＊	F1-Q2-41	2.0 × 1.6 × 0.3	0.7	＊		34	＊	＊	Ex-Q2-94	(3.2) × 1.5 × 0.5	(1.9)	＊	
10	＊	＊	F1-Q2-10	2.2 × 1.5 × 0.3	0.7	＊		35	＊	＊	F1-Q2-27	3.0 × 1.7 × 0.4	1.1	＊	
11	＊	＊	F1-Q2-04	2.4 × 1.9 × 0.2	1.0	＊		36	＊	＊	F1-Q2-68	3.1 × 1.6 × 0.4	0.9	＊	
12	＊	＊	Ex-64-91	2.8 × 1.5 × 0.3	1.2	＊		37	＊	＊	＊	3.1 × 1.7 × 0.3	1.0	＊	
13	＊	＊	F1-Q2-06	3.9 × 1.7 × 0.4	2.4	＊		38	＊	＊	F1-Q2-17	3.0 × 1.6 × 0.4	0.9	＊	
14	＊	A5	Ex-64-03	(2.9) × 1.8 × 0.3	(1.3)	＊		39	＊	＊	F1-Q2-61	2.9 × 1.5 × 0.3	0.6	＊	
15	＊	A7	F1-64-04	1.6 × 1.2 × 0.3	0.5	Sh.		40	＊	＊	Ex-64-50	3.0 × 1.9 × 0.4	1.4	Sh.	
16	＊	＊	F1-64-00	1.9 × 1.2 × 0.3	0.4	Obs.		41	＊	＊	F1-Q2-61	3.4 × 1.7 × 0.3	0.8	Obs.	
17	＊	＊	F1-Q2-86	1.9 × 1.4 × 0.4	0.7	＊		42	＊	＊	＊	3.4 × 1.4 × 0.4	0.7	＊	
18	＊	＊	F1-64-22	1.6 × 1.3 × 0.4	0.7	＊		43	＊	＊	F1-Q2-17	3.5 × 1.8 × 4.5	1.5	＊	
19	＊	＊	F1-Q2-45	1.9 × 1.2 × 0.2	0.3	＊		44	＊	＊	Ex-64-51	3.9 × 1.2 × 0.3	0.9	＊	
20	＊	＊	F1-Q2-18	2.1 × 1.2 × 0.3	0.4	＊		45	＊	A	F1-Q2-37	3.2 × 0.9 × 0.4	1.0	＊	
21	＊	＊	F1-Q2-17	2.1 × 1.3 × 0.3	0.5	＊		46	石輪またはナイフ	B1	F1-Q2-23	4.9 × 1.6 × 0.7	2.7	＊	
22	＊	＊	Ex-64-84	2.2 × 1.1 × 0.4	0.6	＊		47	＊	＊	F1-Q2-07	3.9 × 2.0 × 0.5	3.1	＊	
23	＊	＊	F1-64-11	2.2 × 1.6 × 0.4	0.9	＊		48	＊	＊	Ex-Q2-68	4.2 × 1.7 × 0.9	4.2	＊	
24	＊	＊	F1-64-00	2.3 × 0.8 × 0.3	0.3	＊		49	＊	＊	F1-64-51	4.3 × 1.9 × 0.9	4.3	＊	
25	＊	＊	F1-Q2-64	(2.4) × 1.1 × 0.3	(1.2)	＊		50	＊	＊	F1-Q2-76	4.2 × 1.7 × 0.7	3.2	＊	

II 英々4道跡の調査

番号	名 称	分類	発掘区	大 き さ (m)	直 径 (g)	材 質	備 考	番号	名 称	分類	発掘区	大 き さ (m)	直 径 (g)	材 質	備 考
51	お餅または ワイフ	B1	F1-63-75	4.6 × 2.0 × 0.6	3.0	Obs.		82	石 製 品	F1-62-47		(2.6) × 0.8 × 0.3	(0.7)	Obs.	三日月 石の類
52	#	#	F1-63-74	4.5 × 1.6 × 0.5	2.2	#		83	#	#	#	2.5 × 0.8 × 0.3	0.7	#	#
53	#	#	F1-64-90	5.7 × 2.3 × 1.1	11.1	#		84	#	#	#	(2.5) × 0.8 × 0.3	(0.7)	#	#
54	#	#	F1-63-10	6.1 × 3.6 × 0.8	7.4	#		85	#	#	#	2.1 × 0.8 × 0.3	0.7	#	#
55	#	#	F1-63-88	7.6 × 3.0 × 0.8	11.1	#		86	#	#	#	3.2 × 0.7 × 0.4	0.8	#	#
56	#	#	F1-64-23	4.5 × 1.3 × 0.7	3.7	#		87	#	#	F1-63-42	(2.2) × 0.8 × 0.4	(0.7)	#	#
57	#	B2	F1-64-64	7.3 × 2.7 × 1.2	18.5	Agg-Sh.		88	#	#	#	2.3 × 0.8 × 0.5	0.9	#	#
58	#	#	F1-63-85	7.9 × 2.4 × 1.0	14.7	Obs.		89	石 板	60	F1-64-14	5.0 × 3.3 × 1.4	25.1	#	#
59	#	B4b	F1-63-43	5.6 × 3.4 × 1.3	26.0	#		90	石 青	F2b	E1-64-92	9.7 × 3.9 × 1.8	100.0	Gr-Mnd.	
60	石 製	C1	E1-63-63	4.5 × 3.5 × 0.8	8.0	#		91	#	#	E1-64-93	10.5 × 5.8 × 1.9	190.0	#	
61	#	C2a	F1-63-85	3.7 × 0.9 × 0.6	1.9	Sh.		92	#	#	F1-63-86	8.6 × 3.1 × 1.2	61.3	#	
62	#	#	F1-62-66	6.5 × 1.9 × 0.9	12.8	Obs.		93	#	#	E1-64-92	5.2 × 4.4 × 2.2	130.0	#	
63	つまみ付 キワイフ	D1	E1-64-93	5.5 × 2.2 × 0.8	9.0	#		94	#	F2b	F1-64-14	19.9 × 5.4 × 3.8	61.5	#	
64	#	D3a	E1-63-76	(4.8) × 2.6 × 0.7	(11.2)	Sh.		95	#	F2b	F1-64-71	7.4 × 2.8 × 1.3	50.5	#	
65	#	#	E1-64-93	(6.3) × 2.4 × 0.9	(13.0)	#		96	#	#	E1-64-92	8.5 × 4.4 × 1.7	115.0	#	
66	#	#	F1-64-14	5.1 × 2.2 × 0.8	9.2	Obs.		97	#	#	F1-63-00	8.5 × 3.2 × 1.5	75.0	#	
67	#	#	F1-63-40	5.7 × 3.0 × 0.6	8.2	Sh.		98	#	#	E1-64-92	6.5 × 4.0 × 1.3	50.0	#	
68	#	D5a	F1-64-64	6.2 × 2.0 × 5.5	6.6	Obs.		99	#	#	F1-63-65	9.8 × 3.8 × 1.4	65.5	Sh.	
69	#	#	F1-63-30	4.4 × 3.4 × 0.9	11.2	#		100	#	#	E1-64-53	12.5 × 3.2 × 1.2	64.5	#	
70	スクリ イ (mm)	E	F1-64-14	5.1 × 2.7 × 0.7	13.4	#		101	#	#	F1-63-47	15.0 × 4.5 × 2.5	290.0	Bl-Sch.	
71	#	#	F1-64-24	5.2 × 2.7 × 0.8	7.2	#		102	たまり石	G1	F1-63-76	11.2 × 4.7 × 3.9	320.0	Obs.	
72	#	#	F1-64-80	7.0 × 2.0 × 1.0	15.4	#		103	#	#	E1-64-50	9.6 × 6.5 × 3.5	355.0	Per.	
73	#	#	F1-64-14	5.5 × 2.2 × 0.9	11.0	#		104	#	#	F1-64-70	3.7 × 6.7 × 4.0	48.5	Sa.	
74	#	#	F1-64-21	4.2 × 6.0 × 1.2	35.3	Sh.		105	#	G2	F1-63-06	10.5 × 8.7 × 2.7	390.0	Gal.	
75	#	#	F1-64-11	5.2 × 3.6 × 0.7	12.8	#		106	#	G3	E1-63-77	5.4 × 5.6 × 4.8	125.0	And.	
76	#	#	F1-64-20	5.2 × (3.3) × 0.7	(13.0)	#		107	#	#	E1-64-12	4.2 × 4.3 × 4.2	103.0	Che.	
77	#	#	F1-63-47	3.6 × 3.5 × 0.7	8.3	Obs.		108	#	G	E1-63-94	5.9 × 4.1 × 3.3	168.0	Med.	
78	五	#	F1-63-03	3.95 × 1.12 × 0.92	9.1	Jad.	75-64上層 品	109	#	G4	E1-63-03	20.3 × 7.0 × 5.8	1,000.0	Sa.	
79	石 製 品	F1	F1-62-77	(2.9) × 0.7 × 0.3	(0.7)	Obs.	三日月 石の類	110	麻 石	K1	F1-64-34	8.1 × 7.8 × 1.9	81.6	#	
80	#	#	#	2.4 × 0.8 × 0.3	0.5	#	#	111	予 石	J4	E1-64-60	9.5 × 11.2 × 5.9	(87.0)	#	
81	#	#	F1-62-67	2.5 × 0.8 × 0.3	0.7	#	#	112	金 石	M	E1-63-62	21.8 × 18.8 × 10.7	4,800.0	Ta.	

4 旧石器時代遺物の確認調査

(1) 概要

第I・第II黒色土層での調査を終えたのち、台地平坦部にトレンチを設定し、第III黒色土層(III黒層)およびEn-a層下位のローム質粘土層で遺物の確認調査を行なった。

トレンチはIII黒層面で幅10m、総延長80m、ローム質粘土層面で幅5m、総延長65mである(図102は、ローム質粘土層上面でのトレンチの位置を示したものである)。

まず、Ta-dz層をとり除いたところ、ローム面に50~60cmの円形のシミが密に現われた。III黒層と呼んでいる部分である。調査の結果、このIII黒層からは10点の黒曜石のチップが50cm四方くらいのところからまとまって検出された。

つぎに約3mの厚さがあるEn-a層を重機で除去したのち、現われたローム質粘土層での遺物確認を行なった。人力により1mほど掘り下げる過程で、黒曜石のフレイクを1点検出した。上面から約38cm下位である。

III黒層、ローム質粘土層とも出土地点周辺の拡張を実施したものの、遺物は出土しなかった。とくに後者では、来年度以降の調査区域に接しているため4mほどの拡張にとどまった。

これらの出土遺物から得られた黒曜石水和層測定による年代は付1に示すとおりである。

(2) 出土遺物

1~10はIII黒層出土のチップ、11はローム質粘土層出土のフレイク。石質はいずれも黒曜石。4・7は表側全体に、10は一部に熱を受けている。これらチップは0.1g以下で非常に薄く小さい。11は横長剥片で、背面の一部に原石面を残している。背面を打面として、小剥片を連続的に剝離しているためバルブはない。刃こぼれ状の痕跡が背面の両側縁にみとめられる。

表21 掲載遺物一覧

番号	名称	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	備考
1	チップ	F1-63-84	0.7×0.8×0.2		Obs.	水和層測定
2	"	"	0.2×0.7×0.1		"	水和層測定
3	"	"	0.5×0.9×0.1		"	
4	"	"	0.8×0.7×0.1		"	一部焼けている
5	"	"	0.3×0.4×0.1		"	
6	"	"	0.6×0.5×0.1		"	
7	"	"	0.3×0.8×0.2		"	一部焼けている
8	"	"	0.7×0.8×0.1		"	
9	"	"	0.4×1.0×0.2		"	
10	"	"	0.3×1.3×0.2		"	一部焼けている
11	フレイク	F1-62-88	6.7×3.5×1.7	28.6	"	水和層測定

※ 重さの空欄は0.1g以下のため計測不可能

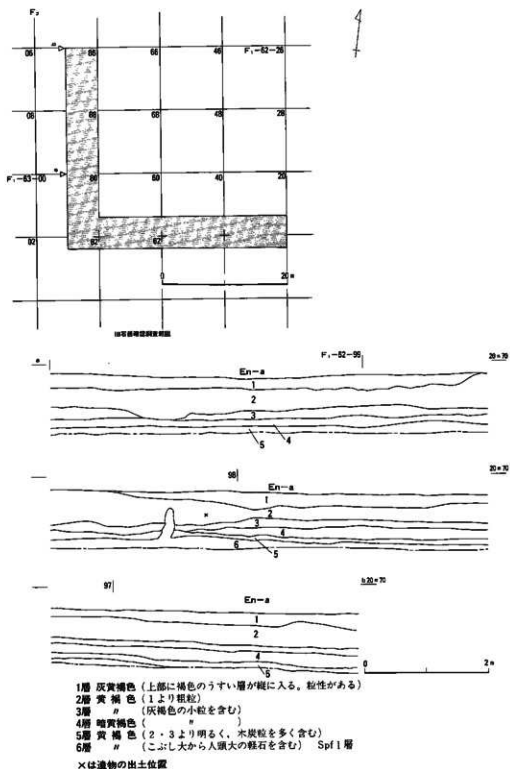


図102 旧石器層調査区と層序

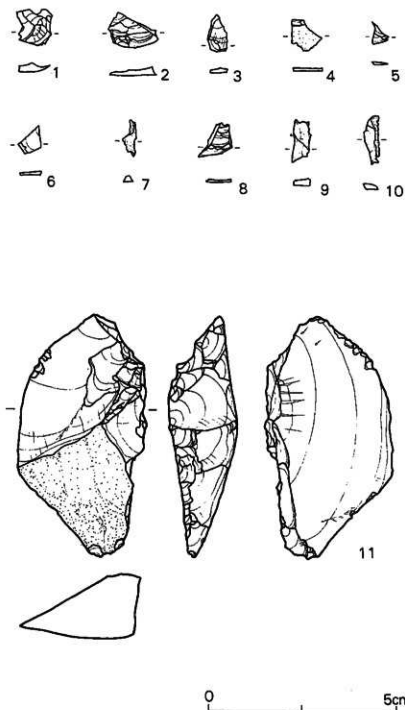


図103 III黒層とローム質土層出土の遺物

付1 美々4遺跡出土の黒曜石片の水和層年代

測定者 帯広畜産大学教授 近 堂 祐 弘

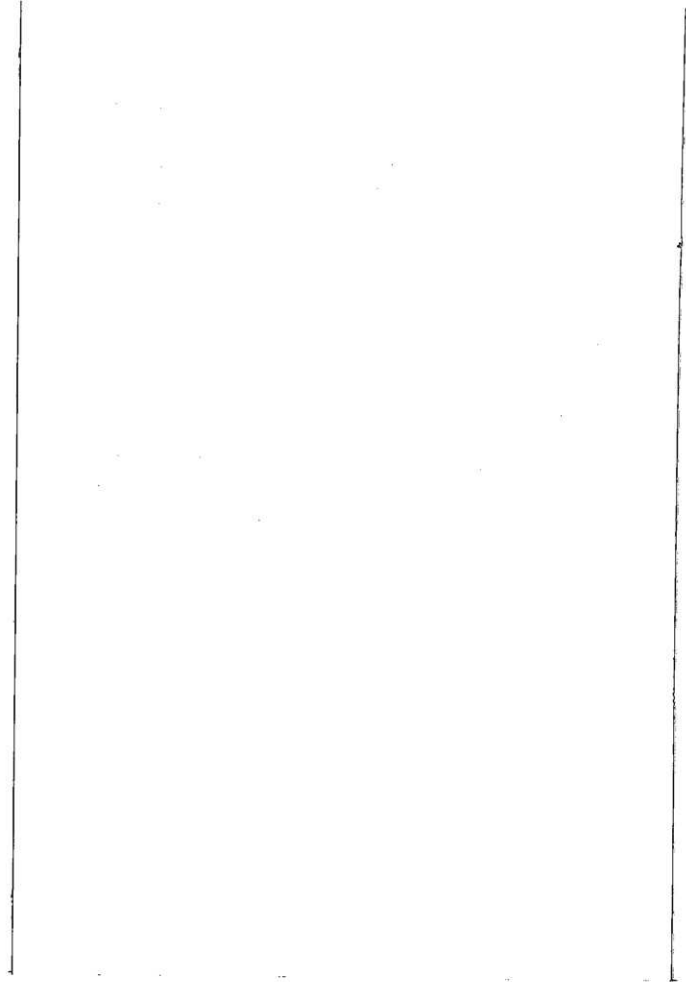
図番号	発掘区	層 位	Ti含量 (%)	黒 曜 石 原料産地	測 定 数	水和層厚 $\bar{X} \pm \sigma (\mu m)$	水和層年代* (B.P.年)
1	F ₁ -63-84	Ⅲ黒層(En-a チョコ帯)	—	十勝三股	16	4.36±0.10	11,900±500
2	F ₁ -63-84	Ⅲ黒層(En-a チョコ帯)	—	"	20	4.43±0.13	12,300±700
11	F ₁ -62-88	En-a 層下位ローム層	0.033	"	20	5.36±0.11	18,000±700

*水和層年代値は、十勝三股産黒曜石の7.5℃(後期旧石器時代)における水和速度1.60($\mu m^2/1000$ 年)として算出した。

付2 美々4遺跡出土木炭の液体シンチレーション炭素年代

測定者 京都産業大学教授 山 田 治

測定結果 KSU-969 3,240±130y.B.P. (P-149土壌上部)
KSU-970 3,460±35 y.B.P. (P-123覆土中)



III 美々5遺跡の調査

1 概 要

美々5遺跡は、美沢川の左岸南向きの急な斜面から標高25m前後の台地上に広がっており、西側で美々4遺跡と連続し、北東側で美々6遺跡に接近している。遺物包含層は、厚さ約50cmのTa-c層を挟んで上下に堆積するI黒層およびII黒層の二つの黒色土層である。この遺跡はすでに昭和51・53～54年度にわたり、16,130m²について発掘調査が行われている。53年度の調査では、I黒層から縄文晩期末葉の住居跡、土墳墓、II黒層からは縄文時代早期・前期・中期の住居跡、前期・後期の土墳墓、周堤墓、Tピットなどが発見されている。また、En-a層下の褐色ローム質粘土層から、黒曜石、頁岩製のフレイク・礫等の旧石器時代の遺物が発見されている。55年度には、II黒層から、早期・中期の住居跡、土墳墓、Tピットなどが発見されて

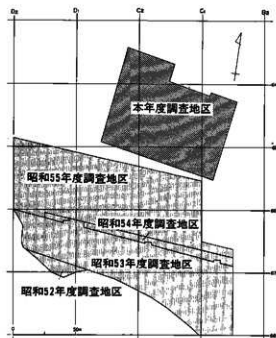


図104 美々5遺跡の調査地区

表22 美々5遺跡 遺構・遺物一覧

	名称・分類	I 黒層	II 黒層	名称・分類	I 黒層	II 黒層	名称・分類	I 黒層	II 黒層
遺構	土 墳 墓		1						
	墓の可能性ある土墳		4						
土器	I b-4		991	III b-3		23	V c	316	4
	II a-2		10	IV a		29	合 計	322	2,859
	II a		1	IV b		6	遺構内出土		7
	II b		6	IV c	316	1,558			
	III b-1		2	V a	6	229			
石器	石鏃 A 2		1	4 a		7	2		1
	3 a		5	4		2	4		7
	b		3	5 a		2	砥石 K 1		4
	3		2	D		2	石鏃 N		4
	4 a		9	スクレイパー E		14	剥片 O 1		155
	b		6	石斧 F 2 b		2	使用痕・加工痕有剥片 O 1 a		14
	5		1	c		6	屑片 O 2		5
	6		3	e		7	礫 X 0		113
	7		40	2		25	礫片 X 1		305
	A		3	3		3	石 製 品		1
	石槍またはナイフ B 2		1	F		5	合 計		796
	B		1	たたき石 G 1		1	遺構内出土		1
	石鏃 C 1		1	2		2			
	2		1	3		8			
	つみれナイフ D 1		10	G		3			
	3 a		10	すり石 J 1		1			

いる。

本年度の調査地区は、55年度の調査地区に隣接し、本遺跡の北端に位置する。調査面積は、I黒層が429.5㎡、II黒層が6489.5㎡である。En-a層下の褐色ローム質粘土層260㎡について、遺物確認調査を行なったが、遺構・遺物は発見されなかった。

I黒層から遺構は検出されなかった。出土遺物は土器片のみである。II黒層から混入したと思われる縄文時代晩期初頭のV群a類土器片数点を除けば、縄文時代晩期末葉のV群c類土器に限られている。これらは、5m×5mほどの小範囲から出土している。

II黒層からは、土墳墓1個、墓の可能性のある土壕4個、計5個の遺構が検出された。平面形・規模はたがいに類似している。伴出遺物はなく、構築時期は明らかではないが、P-1の覆土からIV群c類土器が出土したことから、縄文時代後期末葉以降に作られたと思われる。

包含層の出土遺物は、土器片および石器等である。土器片には縄文時代各時期のものがある。石器等は、74%が刮片・屑片・礫・礫片である。(遠藤香澄)

2 I黒層の遺物

I黒層から発見された遺物は、土器片のみである。

(1) 遺物

総数322点の土器片のうち、316点はV群c類で、これらは比較的狭い範囲から集中して出土した。土器片のいくつかは、Ta-ci層にもぐり込んでおり、遺構の存在が予想されたため周辺の精査を行った。その結果、風倒木痕と思われる自然の落ち込みを検出したが、遺構は認められなかった。このほかの6点はV群a類の土器で、II黒層出土の土器と接合したことから風倒木等、何らかの理由でII黒層から混入したものと思われる。

1) 土器

V群c類 (図106-1~9)

4・6は、口縁部に数条の平行沈線めぐらしたもので、口唇部の内面にも縄文がある。1・5・7は縄文のみのものである。1は大型の深鉢で、口縁が小波状を呈する。図上で輪郭を復元した。8・9には刺突文がみられる。2・10は深鉢の胴部破片である。(森 秀之)

III 美々5遺跡の調査

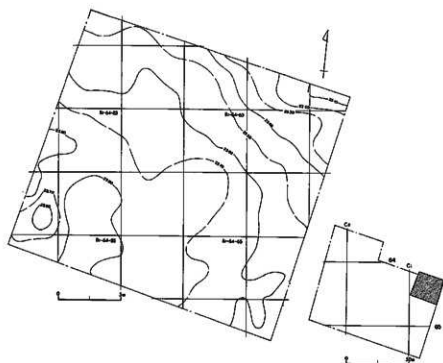


図105 I 黒層の調査地区

表23 掲載土器一覧
(実測図)

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)			備考	番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)			備考
				器高	口径	底径						器高	口径	底径	
1	深鉢	Vc	B2-64-63	(23.5)	29.3	—	図上復元	2	深鉢	Vc	B2-64-63	—	—	—	図上復元

(拓本)

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
3	Vc	S.58 B調	6	Vc	B2-64-63	9	Vc	B2-64-63
4	"	B2-64-63	7	"	S.58 B調			
5	"	"	8	"	B2-64-63			

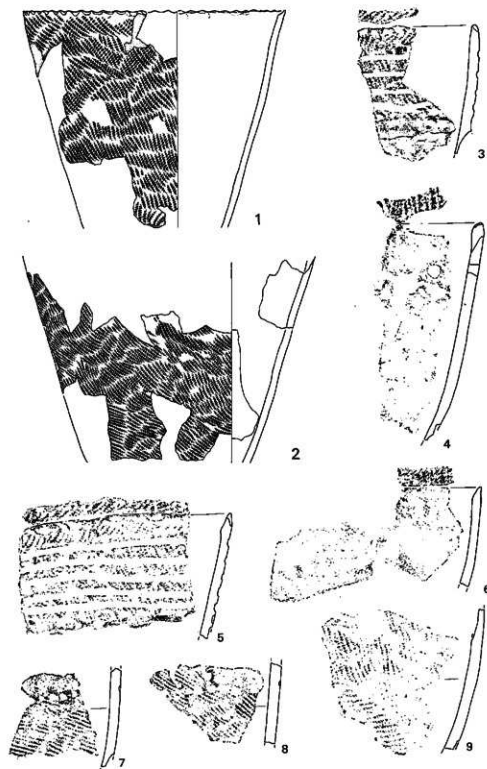


図106 I 層出土の土器

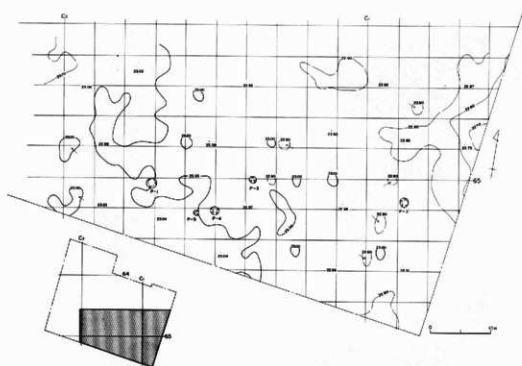


図107 II黒層の遺構分布

3 II黒層の遺構と遺物

II黒層からは、5個の土壌を検出した。出土遺物は、I群b類～V群c類の土器片と石器等および蛇紋岩製の垂飾である。

(1) 遺構

1) 墓および墓の可能性のある土壌

5個の土壌は、発掘区の65ラインより南に散在していた。これらは、II黒層上面が浅いくほみを呈していたため、土壌の存在が予想されていたものである。これらの土壌は、たかいに規模・形状が似かよっており、時期、用途もほぼ同じであろうと思われる。しかし、これらのうち、人骨が検出されたのはP-2のみで、ほかの土壌の用途については推測の域を出ない。時期については、伴出遺物がないため特定は困難であるが、P-1の覆土からIV群c類の土器片が出土しており、これらの年代は縄文時代後期末かそれ以降と考えられる。

P-1

基底はEn-aローム層を掘り込んでつくられ、平坦である。覆土中から土器片(図111-46・47)と石鏃(図113-46)が出土した。

位置 C1-65-70

平面形 円形

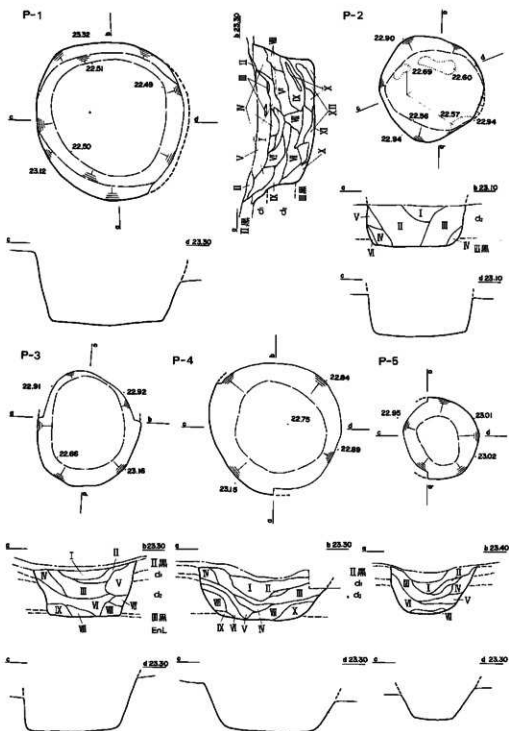


图108 遺構

規模 1.65×1.60/1.30×1.10/0.74

覆土 I 黒色 (I 黒)	II 茶褐色 (Ta-d ₁)
III 黄褐色 (Ta-c ₁)	IV 暗茶褐色 (II 黒+d ₁ >d ₂)
V 暗茶褐色 (II 黒>d ₁ +d ₂)	VI 暗茶褐色 (II 黒+d ₁ >d ₂)
VII 暗茶褐色 (d ₁ +d ₂ >II 黒)	VIII 黒褐色 (II 黒>d ₁)
IX 黒褐色 (II 黒>d ₁)	X 暗褐色 (d ₁ +d ₂ >II 黒)
XI 黒褐色 (II 黒<d ₁ <d ₂)	XII 黒褐色 (II 黒+d ₁)

遺物 土器 Nc: 4。石器 A7: 1。

図111-46・47: Nc 図113-46: A7 (1.8)×(1.3)×0.4 (0.9) Obs.

P-2

墳底はEn-a ローム層を掘り込んでつくられ平坦である。壁は急角度で立ち上がり、オーバ－ハングする部分がある。保存の悪い粉末状の骨片が検出された。遺体の頭位、姿勢等は不明である。

位置 B₂-65-80

平面形 円形

規模 1.1×1.07/1.06×0.82/0.43

覆土 I 黒色 (II 黒>d ₂)	II 黒褐色 (II 黒+d ₁ >d ₂)
III 褐色 (II 黒>d ₂)	IV 黒色 (II 黒>d ₁ >d ₂)
V 黒色 (II 黒>d ₁)	VI 黒褐色 (II 黒>d ₂ >d ₁)
VII 橙褐色 (d ₂ >II 黒)	VIII 暗褐色 (II 黒+d ₂)
IX 黒色 (II 黒+d ₂)	

P-3

En-a ローム層をわずかに掘り込んで墳底としている。墳底は平坦で、壁との境界は明瞭である。壁は急角度で立ち上がる。

位置 C₁-64-39, C₁-65-30

平面形 楕円形

規模 (1.11)×1.08/0.99×0.82/0.60

長軸方向 N-70°-W

覆土 I 橙褐色 (d ₂ >II 黒+d ₁)	II 黒色 (II 黒>d ₂)
III 黒色 (II 黒>d ₂)	IV 黒褐色 (II 黒>d ₁ >d ₂)
V 黒色 (II 黒>d ₁)	VI 黒褐色 (II 黒>d ₂ >d ₁)
VII 橙褐色 (d ₂ >II 黒)	VIII 暗褐色 (II 黒+d ₂)
IX 黒色 (II 黒+d ₂)	

P-4

En-a ローム層をわずかに掘り込んで墳底としている。墳底は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

位置 C₁-65-40・41・50・51

平面形 円形

規模 1.40×1.40/1.00×0.90/0.52

- 覆土 I 黒色 (黒色 $>d_2$) II 橙褐色 ($d_2>d_1$)
 III 褐色 (黒色 $>d_1$) IV 黒色 (黒色 $>d_2$)
 V 明褐色 ($d_1>$ 黒色 $+d_2$) VI 黒色 (黒色 (黒色 $+d_1$))
 VII 明茶褐色 ($d_2>$ 黒色) VIII 茶褐色 ($d>$ 黒色)
 IX 黒色 (黒色 $>d_1$) X 黒色 (黒色 $>d_1+d_2$)

P-5

墳底はTa-d₂層を掘り込んでつくられ、わずかに湾曲している。壁はゆるやかに立ち上がる。

- 位置 C₁-65-51 平面形 楕円形
 規模 0.85×0.75/0.52×0.40/0.42 長軸方向 N-30°-W
 覆土 I 黒色 (黒色 $>d_2$) II 茶褐色 ($d_1+d_2>$ 黒色)
 III 黒色 (黒色 $>d_2$) IV 褐色 (黒色 $>d_1$)
 V 橙褐色 ($d_2>$ 黒色) VI 黒褐色 (黒色 $>d_2$)
 VII 褐色 ($d_2>$ 黒色)

表24 遺構一覧

名称	位 置	平面形	規 模 (m)			長軸方向	備 考
			縦 断 面	横 断 面	縮大率		
P-1	C ₁ -65-70	円 形	1.65×1.60	1.30×1.10	0.74	—	覆土 土器: 4
P-2	B ₂ -65-80	n	1.10×1.07	1.06×0.82	0.43	—	墓 頭位等是不明
P-3	C ₁ -64-39 C ₁ -65-30	楕円形	(1.11)×1.08	0.99×0.82	0.60	N-7°-W	
P-4	C ₁ -65-40 C ₁ -65-51	円 形	1.40×1.40	1.00×0.90	0.52	—	
P-5	C ₁ -65-51	楕円形	0.85×0.75	0.52×0.40	0.42	N-30°-W	

(2) 遺物

II黒層からは、土器片2,859点、石器等795点、計3,654点の遺物が出土した。土器はIV群が全体の55%を占め、次いでI群が多く、35%を占める。IV群は発掘区の全域から出土し、I群は南側に偏る傾向がみられる。V群は、点数はやや少ないがC₁-64-84区から集中して出土している。II群・III群もわずかにみられる。石器等は、剥片や礫が大半を占め、定形的なものは20%に満たない。剥片石器では石鏃が多く、ナイフ・スクレーパー類がこれに次ぐ。礫石器では石斧が多い。

1) 土器

I群b-4類 (図110-7~20)

7~17は羽状の撫糸文を基調とする土器で、口縁部に原体の端を押圧するもの(9)、短縄文を付加するもの(10・11)がある。19・20の文様は魚骨文と思われる。

II群a-2類 (図110-21~25)

胎土に繊維を含有する厚手の土器である。21・25の縄文は組紐を用いたものと思われる。

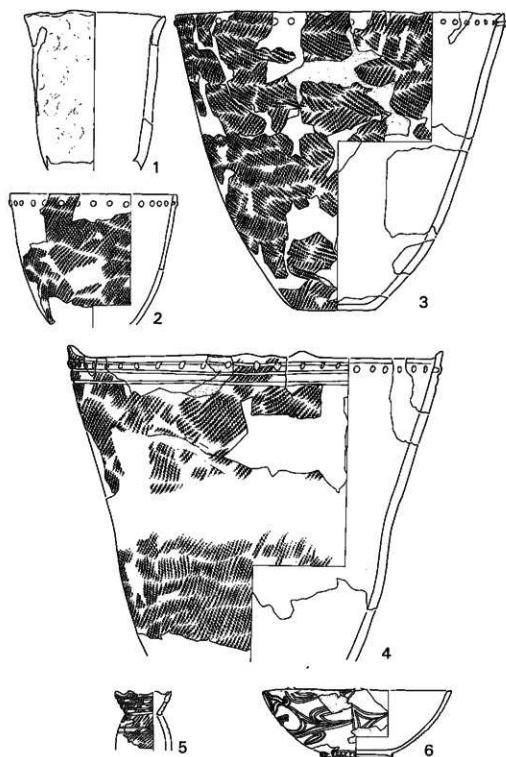


図149 II黒層出土の土器

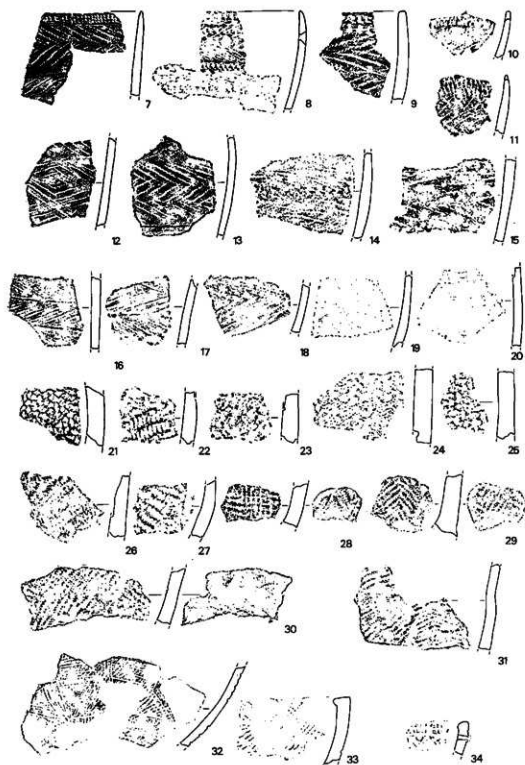


図110 II黒層出土の土器

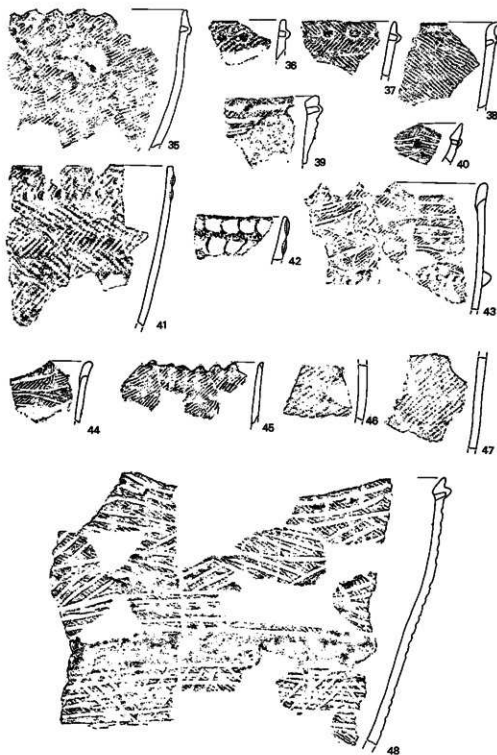


図111 II黒層出土の土器

II群b類(図110-26・27)

II群a-2類同様、胎土に繊維を含有している。内面は調整されてなめらかになっている。

III群b-3類(図110-28-31)

いずれも胎土に細砂粒を含むもので、器面調整は粗雑である。内外面に縄文がみられる。

IV群a類(図109-1)

粗製の無文土器である。器形は単純な筒形で、口縁は平坦でわずかに外反する。器面調整は粗雑で、内面には指頭の圧痕がみられる。

IV群b類(図110-32-34)

32は胴部破片で、縄文の上に平行・弧状の沈線文を描いている。33・34は口縁部破片で、口唇が内側に肥厚し、内面の調整は良好である。34は口唇直下に沈線で区画された2列の短刻線があり、内側から外側への刺突で突帯がつくられている。33は口縁部に羽状縄文が施文されている。

IV群c類(図109-2-4, 図110-35-40・48)

図109-2-3, 図110-35-38は地文と突帯文のみのもの、図109-4, 図110-39・40・48はそれに沈線が加わるものである。図109-4と図110-38は胴部がややくびれて、そこが無文帯になっている。

V群a類(図109-5・6, 図110-41-45)

図110-41・42は、口縁部に2段の爪形文のあるものである。図110-43には貼り瘤があり、変化に豊んだ曲線で区画された磨消文が施されている。図109-6は浅鉢形の土器で、器表面はよく研磨され、沈線でゆるやかな曲線を基調としたさまざまな文様が描き出されている。

表25 掲載土器一覧
(実測図)

番号	名称	分類	発掘区	口径 (cm)	底径 (cm)	備考	番号	名称	分類	発掘区	口径 (cm)	底径 (cm)	備考
1	深鉢	Ⅱa	C ₁ -64-82	—	15.1	—	4	深鉢	Ⅱc	Ca-64-14	(33)	40.3	—
2	鉢	Ⅱc	C ₁ -64-82	13.8	18.0	9.2	5	壺	Ⅱ	C ₂ -64-24	6.1	6.0	—
3	深鉢	Ⅱ	C ₁ -64-90-91	31.8	35.6	8.6	5	浅鉢	Va	B ₂ -64-82-84	7.2	20.3	7.7 縁部破片

(拓本)

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
7	Ib-4	C ₁ -65-90	12	Ib-4	B ₂ -64-77	17	Ib-4	C ₂ -65-90
8	Ⅱ	C ₁ -65-81	13	Ⅱ	C ₂ -65-00	18	Ⅱ	C ₂ -65-00
9	Ⅱ	B調No. 3	14	Ⅱ	B ₂ -65-72	19	Ⅱ	C ₂ -64-39
10	Ⅱ	C ₁ -65-62	15	Ⅱ	Ⅱ	20	Ⅱ	C ₂ -65-10
11	Ⅱ	C ₁ -65-90	16	Ⅱ	C ₁ -64-78	21	Ⅱa-2	C ₂ -64-38

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
22	IIa-2	C ₁ -64-23	31	IIIb-3	C ₂ -64-45	40	IVc	C ₁ -64-53
23	"	C ₂ -64-68	32	IVb	C ₁ -64-48	41	Va	C ₂ -63-19
24	"	C ₁ -64-86	33	"	C ₁ -64-92	42	"	C ₂ -63-07
25	"	C ₁ -64-23	34	"	C ₂ -64-19	43	"	C ₂ -64-36
26	IIb	C ₁ -65-43	35	IVc	C ₁ -64-31	44	"	"
27	"	C ₂ -64-44	36	"	C ₁ -65-60	45	"	B ₂ -64- ⁵⁵ ₅₆
28	IIIb-3	C ₂ -64-39	37	"	C ₁ -64-88	46	IVc	P-1
29	"	C ₁ -64-44	38	"	B調No. 6	47	"	"
30	"	C ₂ -64-39	39	"	B調No. 12	48	"	C ₁ -64-98

2) 石器

石鏃 (1~46)

73点出土したうち、有茎のA7類(17~30・33~45)が半数を占める。いずれも明瞭な「かえし」のないもので、2cm前後の小型のもの(17~22)、3cm前後のやや大型のもの(23~45)がある。これらは形態・分布からIV群の土器に伴うものが多いと思われる。ついで三角形のA4類(7~16)が多い。小型で正三角形に近いもの(7~9)、二等辺三角形のもの(10~16)があり、後者には基部の湾入するもの(15・16)がある。A3類(1~3・5・31)、A5類(4)、A6類(6)、A2類(32)は少数である。柳葉形の1~4は、早期の土器に伴うものと思われる。

石鏃 (47・48)

いずれも単独の尖頭部をもつもので、つまみ部のつくられた47と、棒状の48がある。

石槍またはナイフ (49・50)

49は片面調整で下半部が欠けている。50は側面観が湾曲している。これらは、刺突具というよりも刃器の機能をもつものと思われる。

つまみ付きナイフ (51~73)

33点出土した。剥片石器では石鏃について多い。そのうち黒曜石製のものが8点、メノウ製のものが2点で、他はすべて頁岩製であった。2次調整のちがいが、D1類(51~59)、D3a類(60~66)、D4a類(67~72)、D5a類(73)に分類される。D1a類のブランディング部分は、磨滅して光沢を帯びているものが多い。

スクレイパー (74~79)

14点出土した。つまみ付きナイフ同様ほとんどが頁岩製で、実際つまみ付きナイフの破損品を再利用したものもある。頁岩のほかには、黒曜石製が3点、メノウ製が1点ある。74・75は、2次調整が背面周縁に施されるもので、75は腹面に原石面を大きく残している。79は両面に原石面を残しており、小型で盤状の原石の周縁に調整を加えて弧状の刃部を作り出したものである。76は両面調整、77・78は片面調整である。

石斧 (80~86)

48点出土。礫石器のなかでは最も点数が多い。84は一部磨製のもので、いずれも整形のため剥離とベッキング痕がみられる。83・85・86は全面磨製の石斧である。85と86は刃縁の一端

を破損している。85は破損部に研磨を加えてなおも使用している。80・81は石のみとして分類できるもので、81は基端部にも破損がみられ、刃部損傷後、上下を逆にして再度利用したのと思われる。

たたき石 (87・88)

87は刃部を失った磨製石斧を転用したもの。88は石斧の未製品である可能性がある。

すり石 (89~90)

所謂「北海道式石冠」は7点出土した。ほとんどが破片で、完形に近いものは図示した2点(89・90)のみである。いずれも底面が使用によって滑らかになっており、周縁には敲打による剥離が認められる。91は、断面が三角形を呈するすり石である。図右半分は破損している。

石錘 (92・93)

4点出土したうち、完形の2点を図示した。偏平な河原石の長軸両端を打ち欠いたものである。

垂飾 (94)

蛇紋岩製の玉である。長軸下端の一部を除き全面が滑らかに磨かれている。両側から穿孔がおこなわれており、これとは別に片面には穿孔が中断された痕跡がある。穿孔には先端が円錐状の工具を用いたものと思われる。

(森 秀之)

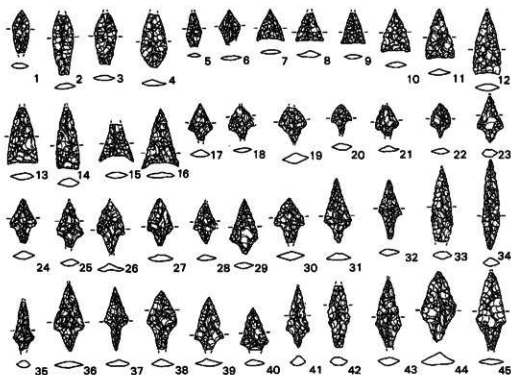


図112 II黒層出土の石器

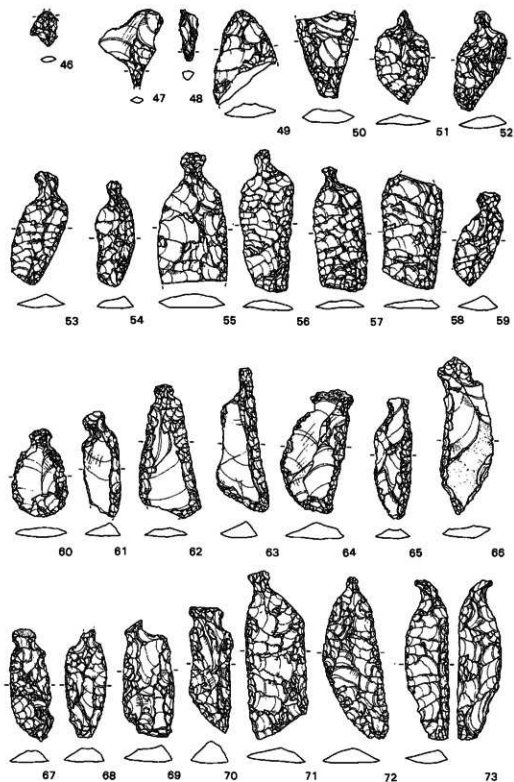


図113 II黒層出土の石器

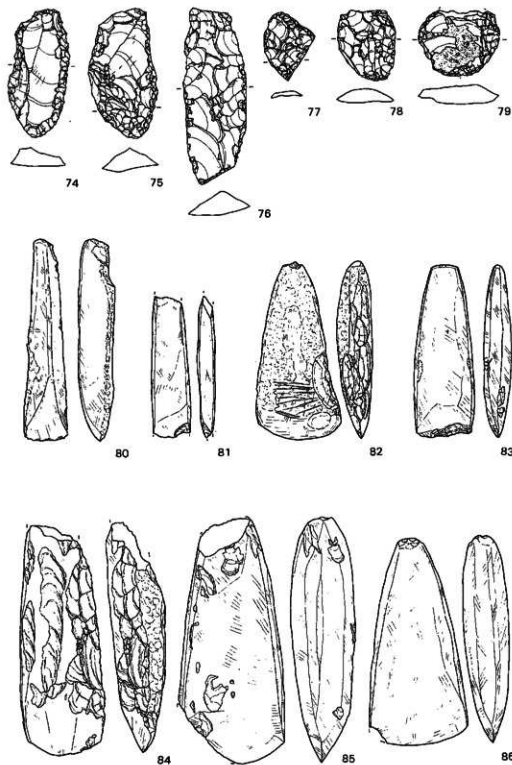


図114 II層出土の石器

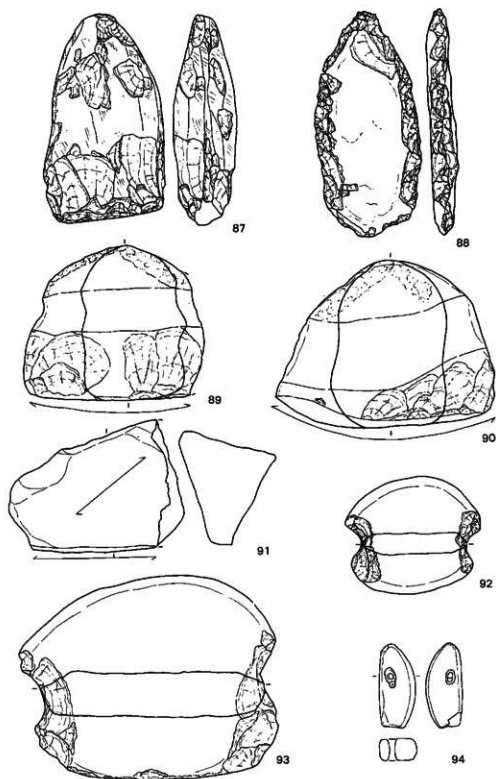


図115 Ⅱ黒層出土の石器等

表26 掲載石器等一覧

番号	名	分類	発掘区	大きさ (mm)	重量 (g)	材質	番号	名	分類	発掘区	大きさ (mm)	重量 (g)	材質
1	石 鏃	A3b	Cr-54-14	(2.2) × 0.9 × 0.2	(0.4)	Obs.	39	石 鏃	A7	Ci-64-53	(2.8) × 1.5 × 0.4	(1.2)	Sh.
2	?	A3a	Cr-55-10	(3.2) × 1.1 × 0.3	(1.1)	?	40	?	?	Ci-64-73	(2.2) × 1.5 × 0.4	(0.8)	Obs.
3	?	?	Cr-64-56	(2.7) × 1.2 × 0.3	(0.8)	?	41	?	?	Bu-65-41	(2.6) × 1.1 × 0.4	(0.7)	?
4	?	A5	Ci-64-33	(2.8) × 1.4 × 0.3	(1.1)	?	42	?	?	Ci-63-97	(3.3) × 1.1 × 0.4	(1.3)	?
5	?	A3b	Ci-65-50	(1.8) × 0.8 × 0.2	(0.3)	?	43	?	?	Ci-64-69	(3.6) × 1.3 × 0.4	(1.3)	?
6	?	A6	Ci-65-01	(1.6) × 1.1 × 0.2	(0.2)	?	44	?	?	Cr-64-44	(4.1) × 1.6 × 0.3	(1.4)	?
7	?	A4b	Cr-64-39	1.6 × 1.4 × 0.2	0.3	?	45	?	?	Ci-64-101	3.7 × 1.9 × 0.7	3.0	?
8	?	A4a	Bu-64-96	(1.5) × 1.4 × 0.3	(0.6)	?	46	?	?	P-1	(1.8) × (1.3) × 0.4	(0.9)	Obs.
9	?	?	Ci-64-39	(1.6) × 1.2 × 0.3	(0.3)	?	47	石 鏃	C2	Ci-63-17	(4.3) × 2.6 × 0.5	(4.3)	?
10	?	?	Bu-64-75	(2.1) × 1.5 × 0.3	(0.7)	?	48	?	C1	Ci-64-46	2.7 × 1.0 × 0.5	1.3	?
11	?	?	Ci-64-35	2.6 × 1.5 × 0.3	0.8	?	49	右側または ナイフ	B	Ci-64-09	(4.8) × 3.1 × 0.6	(7.8)	Sh.
12	?	?	Cr-64-11	(3.3) × 1.5 × 0.4	(1.8)	?	50	?	B2	Bu-65-82	(4.6) × 3.2 × 0.8	(9.6)	?
13	?	?	Ci-64-30	(2.9) × 1.7 × 0.5	(1.7)	?	51	つまみ付 ナイフ	D	Ci-65-90	4.9 × 2.5 × 0.6	8.8	?
14	?	?	Bu-64-74	(3.3) × 1.2 × 0.4	(1.5)	?	52	?	D1	Ci-62-10	5.3 × 2.3 × 0.7	8.6	?
15	?	A4b	Ci-63-29	(2.6) × 1.9 × 0.3	(0.6)	?	53	?	D	Ci-65-90	6.0 × 2.3 × 0.7	9.6	?
16	?	?	Ci-63-77	3.0 × 2.0 × 0.3	1.2	?	54	?	?	Bu-64-36	5.5 × 2.1 × 0.5	6.8	?
17	?	A7	Ci-64-32	(1.9) × 1.3 × 0.3	(0.5)	?	55	?	?	Bu-62-54	(6.8) × 2.7 × 0.7	(18.9)	?
18	?	?	Ci-64-34	(1.7) × 1.3 × 0.3	(0.4)	?	56	?	?	Ci-65-43	7.5 × 2.9 × 0.6	13.6	?
19	?	?	Cr-64-21	(1.9) × 1.4 × 0.5	(1.0)	Sh.	57	?	?	Ci-65-00	6.7 × 2.8 × 0.5	11.6	?
20	?	?	Ci-63-78	(1.5) × 1.1 × 0.3	(0.3)	Obs.	58	?	D1	Ci-64-49	5.4 × 2.3 × 0.5	13.5	?
21	?	?	Ci-65-43	(1.6) × 1.2 × 0.3	(0.5)	?	59	?	Da	Ci-65-00	5.1 × 2.1 × 0.7	6.7	?
22	?	?	Ci-64-34	1.8 × 1.1 × 0.3	0.4	?	60	?	D	Ci-64-38	4.7 × 2.9 × 0.6	7.6	Obs.
23	?	?	Cr-63-56	(2.4) × 1.4 × 0.4	(0.8)	?	61	?	?	Cr-64-33	5.6 × 1.9 × 0.7	7.7	Sh.
24	?	?	Ci-63-15	2.3 × 1.4 × 0.4	0.8	?	62	?	?	Ci-63-56	7.0 × 3.1 × 0.4	10.4	?
25	?	?	Cr-64-58	(2.4) × 1.4 × 0.4	(0.8)	?	63	?	?	Ci-65-42	7.5 × 2.6 × 0.7	13.3	?
26	?	?	?	(2.8) × 1.5 × 0.4	(1.0)	?	64	?	?	Cr-64-06	6.5 × 3.3 × 0.8	14.7	Obs.
27	?	?	Ci-64-29	2.5 × 1.4 × 0.4	1.0	?	65	?	?	Bu-65-94	6.4 × 2.0 × 0.5	7.0	Sh.
28	?	?	Ci-64-78	(2.2) × 1.1 × 0.4	(0.5)	?	66	?	DBa	Ci-64-02	8.1 × 2.7 × 0.7	17.7	Obs.
29	?	?	Ci-64-41	2.3 × 1.5 × 0.3	1.1	Sh.	67	?	D	Ci-64-95	6.0 × 2.1 × 0.7	7.5	?
30	?	?	Ci-64-73	(2.4) × 1.6 × 0.5	(1.2)	Obs.	68	?	?	Cr-65-11	(5.8) × 2.2 × 0.7	(9.3)	Sh.
31	?	A3a	Ci-63-87	(3.8) × 1.2 × 0.4	(1.7)	?	69	?	Da	Ci-64-24	6.2 × 2.7 × 1.0	15.5	Obs.
32	?	A2	Cr-64-49	4.8 × 1.0 × 0.5	1.6	?	70	?	DA	Bu-65-90	6.8 × 2.3 × 1.3	18.5	Sh.
33	?	A7	Ci-64-03	3.4 × 1.4 × 0.4	1.2	?	71	?	D	Ci-65-91	8.7 × 3.1 × 0.7	24.9	?
34	?	?	Ci-64-21	3.1 × 1.2 × 0.4	0.8	?	72	?	?	Bu-64-12	8.7 × 3.0 × 0.7	17.6	?
35	?	?	Ci-65-81	(3.2) × 1.2 × 0.5	(1.1)	?	73	?	?	Bu-65-93	8.5 × 2.3 × 0.7	13.7	?
36	?	?	Ci-64-61	(3.5) × 1.5 × 0.4	(1.3)	?	74	スプレッド ナイフ	E	Ci-64-05	6.9 × 3.1 × 1.0	27.0	?
37	?	?	Cr-64-21	3.3 × 1.2 × 0.4	0.7	?	75	?	?	Ci-64-29	6.8 × 3.7 × 1.6	25.0	Ag.
38	?	?	Ci-64-36	(3.0) × 1.5 × 0.4	(1.3)	?	76	?	?	Ci-65-90	9.2 × 3.3 × 1.4	50.0	Sh.

III 英々5遺跡の調査

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (m)	重さ (g)	材質	番号	名称	分類	発掘区	大きさ (m)	重さ (g)	材質
77	スクリュー	E	C1-65-91	3.6 × 2.6 × 0.4	3.6	S h	88	石 斧	F2c	C1-64-93	11.9 × 5.5 × 1.2	120.0	Gr-Mud
78	#	#	C1-65-90	2.9 × 3.1 × 0.7	8.8	#	89	すり石	J 4	C1-64-68	8.1 × (5.6) × 5.4	(585.0)	S a
79	#	#	B1-65-84	(3.5) × 4.2 × 0.9	(14.8)	Obs	90	#	#	C1-64-96	8.6 × 11.5 × 6.0	900.0	And
80	石 斧	F 3	C1-64-58	10.6 × 2.4 × 1.8	70.0	Gr-Mud	91	#	J 1	B1-65-85	6.3 × (9.1) × 6.4	(379.0)	#
81	#	#	C1-64-59	7.4 × 2.0 × 1.0	27.6	S l	92	石 鐮	H	C1-64-91	6.2 × 7.2 × 1.3	130.0	Gri
82	#	F25	C1-64-74	9.3 × 4.5 × 1.8	96.0	Gr-Mud	93	#	#	C1-64-93	10.8 × 12.5 × 2.3	650.0	#
83	#	F2a	C1-64-35	9.1 × 3.2 × 1.3	66.4	S l	94	磨 面 石製品	C1-64-39	4.4 × 1.9 × 1.1	17.4	Ser	
84	#	F2b	C1-65-80	12.3 × 4.4 × 2.4	220.0	Seh							
85	#	F2c	C1-64-28	13.0 × 5.7 × 3.1	350.0	Ser							
86	#	#	C1-64-37	11.0 × 5.2 × 2.3	195.0	Gr-Mud							
87	#	F2e	B1-64-96	11.0 × 5.4 × 3.1	365.0	#							

Ⅳ 若干の考察

1 美々4遺跡における区画墓の変遷について

1) はじめに

竪穴や溝で墓域を形成し、そこに単独あるいは複数の埋葬が行なわれる墳墓様式を「区画墓」と呼ぶ。

このような区画墓は、美々4遺跡から昭和55年度の調査で6基(BS-1～6)、58年度の調査で7基(X-1～7)発見されている。これらは伴出遺物から縄文時代後期末葉に編年されている(図116)。ここでは、これらを分類整理するかたわら、本年度発見の土壌墓群とを比較して、若干のまとめを行なうことにする。

2) 区画墓の分類

過去の調査で明らかにされた区画墓を、表27のように、その形態から大きく2つに分類し、さらにそのうちのひとつを2つに区分する。

まず、竪穴を構築して墓域を形成するものを「区画墓C」と呼ぶことにする。従来、周堤墓または、いわゆる環状土庫と呼称されているものである。本遺跡ではBS-1、2、X-1～

表27 区画墓の分類

分類	名称	墓 域		数	配 置	墓					墳	
		形 態	規 模			平面形	埋葬体位	副 葬 品	ベンガラ	地上施設		
C	BS-1	(竪 穴)	12.0×11.5m	9		長楕円形	北西向き (頭部・足部)	無	6墓域に有	礎		
	BS-2	(井)		4		長楕円形	北西向き (頭部・足部)	無	無			
	X-1	円形竪穴	9.7×9.2	2		井	北西向き (頭部・足部)	無	全墓域に有	墓域周縁に礎		
	X-2	井	15.9×15.6	15		井	北西向き (頭部・足部)	石柙・石柙	無	墓域周縁に礎、ピット		
	X-3	井形竪穴	11.3×9.5	7		井	北西向き (頭部・足部)	石柙・石柙・石柙	6墓域に有	無		
	X-4	(竪 穴)	径10～11	1	中央のみ	長楕円形	北西向き (頭部・足部)	無	有			
M	BS-3	環状溝	外径12.0×10.5	11	中央に1 溝に10	長楕円形	北西向き (頭部・足部)	石柙・王・弓	8墓域に有	墓域周縁に礎、ピット		
	X-5	馬蹄状溝	外径5.5×5.0	2	中央に1 溝に1	楕円形	北西向き (頭部・足部)	無	無			
	BS-4	環状溝	外径4.5×4.5	1		井	北西向き (頭部・足部)	無	無			
	BS-5	馬蹄状溝	外径3.2×3.2	1		井	北西向き (頭部・足部)	石柙	無			
	BS-6	環状溝	外径2.5×2.3	1		井	無	無	無			
	X-7	井	外径3.8×3.7	1		井	無	無	無			

注1
4の6基がこれにあたる（X-6は不確実な要素が多いため除く）。

10~16mの円形竪穴を構築し、その掘り上げ土を周囲にめぐらし周堤を形づくっている。竪穴の掘り込みの浅深によって、壁および底面が扱えられるものとそうでないものがある。BS-1, 2, X-4は浅い例で、環状のわずかな高まりが扱えられたにすぎないが、推定される区画形態はやはり径10mを超える円形である。

この区画墓Cの墓墳は、墓墳の数にはバラつきがあるものの区画のなかに整然と配され、表27に示したように形状、規模、埋葬体位、副葬品、地上施設、墓墳の配置等に強い規制のあったことが推定される。

次に、溝を環状または馬蹄形状にめぐらし墓域を画するものを「区画墓M」と呼称する。墓域の形態は区画墓Cとさほど変わらない。これらは、過去に環状溝墓、周溝付土墳墓と報告されたものである。これらを、さらに溝幅の違いと墓域の分布から「区画墓M₁」と「区画墓M₂」とに区分する。BS-3, X-5は前者に、BS-4~6, X-7は後者にはいる。

BS-3は幅3.5mほどの環状の溝をもち、溝の外周に周堤をめぐらしたものである。溝外径は12mを上回り、区画墓Cの竪穴規模と比べて遜色ない。中央の掘り残し部に1個と溝中に10個の墓墳がある。X-5は中央部と、南東部が途切れて馬蹄形をなす溝中にそれぞれ1個の墓墳をもっている。溝は前者に比べて小規模かつ幅も狭いが、溝中の墓が溝形成から時間的な隔たりが扱えられないことからM₁に含めておく。

BS-4~6, X-7は、単一の土壇墓をとり囲むように0.5~1.0m幅の溝がめぐるものである。溝はM₁と同様に、全周するもの（BS-5, 6, X-7）と、一部が途切れ馬蹄形状をなすもの（BS-4）とがある。

これらの中には時間的な関係が扱えられているものが2例ある。すなわち、BS-3（M₁）の周堤がBS-1（C）の一部を覆っており、また、X-7（M₂）がX-2（C）の周堤を切ってそれぞれ作られている。このことから、C→M₁、C→M₂という新旧がとらえられ、M₁, M₂は竪穴墓域が変化した形態と考えることが可能である。また、そのうちでもM₁は、区画墓Cにおいてときおり竪穴中央に高まりをもつ例も見られることなどから、これにより近い形態と考えることができ、「区画墓C」→「区画墓M₁」→「区画墓M₂」という編年が成り立つ。

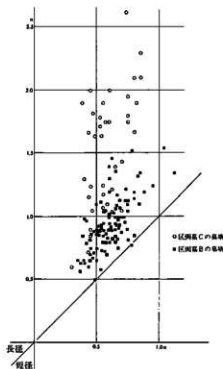


図117 墓域の長さとの相関

3) 区画墓としての土墳墓群

本年度の調査地区の台地平坦部で検出された土墳墓は、すべて縄文時代後期中葉の所産で、II章3-2)で述べたように数個から20数個がまとまり、群として扱われた。6群117個から成るこれらは、特定の群で墓墳の重複がみられるものの群同士の混在は認めることはできない。

これらの墓群では、何らかの区画作業があったことを窺わせるいくつかのことがから調査の過程で明らかにされている。第2, 3, 4群の位置するところの黒色土層(II黒層)は周辺部と比較して薄く、遺構掘り込み面はTa-d₁層直上でとらえられている。また、第4, 5, 6群はTa-c層除去後、ほぼ円形のくぼみとして墓域の存在がとらえられている。

以下、これらを「区画墓B」と呼ぶこととする。

次に区画墓Bとした第1~6群の墓墳について、区画墓Cに伴う墓墳と比較しつつ、若干詳しくみていくことにする。

区画墓Bの墓墳平面形は、楕円形あるいは円形を呈するものが圧倒的に多い。これを墓墳の長幅比で示すと、図118のように0.55~0.64に35個、0.65~0.74に37個が分布し、これらは全体の6割を占める。さらに長短径の大ききみと図117のように、規模の大小はあるものの円を示す線に沿って分布している。このことは遺体の埋葬体位にも大きく拘っており、区画墓Bでは屈葬が主対的といえる。

これに対して区画墓Cでは、長楕円形もしくは小判形の平面形を呈している。平面形および規模で、Bとは長幅比でのピークがずれ(図118)、大ききではとくに長径長に違いが見出される(図117)。これらのこと

は屈葬以外に伸展葬が現われてくることを示している。

遺体とともに墓墳から検出されるものに副葬品がある。Bでは土器、玉、石鏃で、このうち玉が副葬される墓がもっとも多く認められていること(117個中30個)に、この区画墓の特徴が見出される。玉を出土する墓墳の分布に片寄りはあるものの、どの群でも最低一個は存在している(玉については、別項で詳細を述べる)。

区画墓Cで副葬品が埋納される墓墳は極めて稀であ

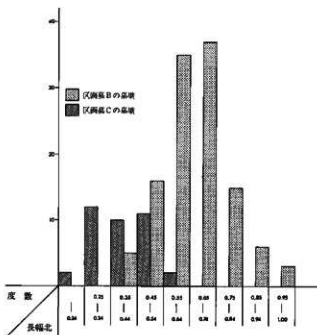


図118 度数分布図

り、BS-1, 2, X-1, 4では皆無である。X-2, 3の5個の墓域から石斧・石棒が出土している。遺体とともに検出されるベンガラはCに伴う墓に多く見出だされ(37個中35個)、一部には墳口にも散布されている。これに対して区画墓Bの墓域からベンガラが検出されたものは一例もないことは、Cとの際立った違いである。

次に墓域の配置と、地上施設についてであるが、区画墓Bでは数個が長軸方向を平行させ一定の間隔を保ちながら、あるいは重複しつつ列状にならぶものや、円形のくぼみ(区画)中央に配石を伴う墓域があり、その他の墓域はこれととり囲むように配されるものがある。これらの墓域のなかには、その存在を示すと思われる礎や小ピットが墳口付近で検出されているものがある。これに対して区画墓Cでは、区画中央の墓域が規模のうえからも他と比べて大きく作られ極めて象徴的な存在としてあり、特別の意味をもっているふしがある。また、それぞれの墓域には、墓域ごとに長軸方向がそろえられ、重複することはない。墳口の両端には礎が置かれるもの、小ピットが認められるものが多い。

このように区画墓Bの段階では、すでに墓域形成が認められ墓の配列や環状の盛土の存在から明らかに区画墓Cの祖型ともみなされる墓群も含まれている。しかし区画施設の構築作業は、次の段階にみられるものほど大がかりなものではなかった。また、墓域の規模、形状、埋葬体位、副葬品などに強い齊一性が認められることから、埋葬場所とともに墓域の構築、埋葬法にもすでに一定の規制が働いているとみなして差し支えないと思われる。

4) まとめ

北海道における縄文後期中葉の墓域形成の例としては、余市町西崎山、ニセコ町北栄の環状列石が知られる。径1~2mの環状に板状の礎を配し、この内部に円形あるいは矩形的土墳墓を作るもので、墳口には多量の河原石や割石を積んだものもいくつか認められている。

末葉になると大竪穴と周堤の存在が示すように、墓域を区画する施設そのものを明瞭に作り出す周堤墓が盛行する。これまで周堤墓は恵庭市柏木B(1~3号)、千歳市末広(ⅡK-1~3)そして美沢川を挟み本遺跡の対岸にある美沢1(JX-1~4, KX-1, 2)の各遺跡でその全容が調査されている。竪穴の規模は10m内外から15m(推定規模も含める)で、美沢1の1例以外はいずれもこの内部に複数の土墳墓が配されている。

これら以外に部分的な調査によってその存在が知られるものに、標津町伊茶仁、斜里町米円、芦別市野花南、千歳市キウスの周堤墓がある。

柏木Bの1号、米円では周堤内部に配石を伴う墓域が検出されている。また、キウスではこれまでに全面調査された周堤墓のどれよりもはるかに大規模な例がみられる。14基確認されているうちで最大のものは周堤内径33m、周堤頂と内部との比高は5.4mを計る。これは竪穴により墓域を画すること、併せて周堤を構築することにも主眼が置かれている。これらは、本遺跡の区画墓Cとしたものとは区別して考えられよう。

以上のような後期中葉から末葉にかけての本遺跡の区画墓群を含めた墳墓を次のように要約してまとめとする。

- 中葉の段階では、1. 墓域の明示作業が存在する。
2. 埋葬に際しての規制が認められる。
3. 2とも関連するが、墓域の存在を示す地上施設として礎を多用するものと、そうでないものが併存している。
- 末葉の段階では、1. 墓域が明瞭に示される。
2. 墓域を画するための堅穴構築から、周堤を顕著に作り出すもの、特定の埋葬を区画するものがある。
3. 埋葬に際しての規制が多岐にわたり、強化される。特に周堤墓に伴う墓では地上施設としての配石は一般化しない。

(青柳文吉)

- 注1. X-2, 3の墓域には、伴出遺物、形態等から周堤墓本来の墓と、これよりもやや時期を新しくする墓があることが明らかにされた。周堤墓が廃棄または放棄されたのちに作られている。X-2, 3に伴う墓域数はそれぞれ15個、6個である。また、X-1, 2では堅穴周囲の盛土にも墓域が作られているが、伴出遺物から堅穴内の新しい墓と同一時期とされる。
- 注2. BS-3の盛土上にも墓域が作られている。これらもやはり区画内部の墓よりも新しくとらえられている。

参考文献

- 宇田川洋 1981 『河野広道ノート』考古篇1 北海道出版企画センター
- 大谷敏三 1979 「環状土竈について」考古学ジャーナル156
- 〃 1983 「環状土竈」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 大場利夫 1967 『千歳遺跡』千歳市教育委員会
- 木村尚俊 1984 「周堤墓」『北海道の研究』1 清文堂
- 駒井和愛 1959 『音江』慶友社
- 瀬川拓郎 1980 「『環状土竈』の成立と解体」考古学研究27-3
- 〃 1983 「縄文後期～統縄文期墓制論ノート」北海道考古学19
- 永峯光一 1984 「墳墓の変遷」季刊考古学第9号 雄山閣
- 名取武光、松下亘 1978 「北海道」『新版 考古学講座』3 雄山閣
- 野村 崇 1974 「芦別市の先史遺跡」空知地方史研究協議会
- 林 謙作 1977 「縄文期の葬制―第II部・遺体の配列、とくに頭位方向」考古学雑誌63-3
- 恵庭市教育委員会 1981 『北海道恵庭市柏木B遺跡発跡調査報告書』
- 標津町教育委員会 1979 「標津の堅穴」II
- 千歳市教育委員会 1981 『末広遺跡における考古学的調査(上)』
- 〃 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』
- 北海道教育委員会 1979 『美沢川流域の遺跡群』III
- 跡北海道埋蔵文化財センター 1981 『美沢川流域の遺跡群』V
- 〃 1982 『美沢川流域の遺跡群』調査の概要
- 〃 1984 『美沢川流域の遺跡群』VI

2 美々4遺跡出土の「三日月形石器」について

本年度の調査で、美々4遺跡から、特異な形をした小型の石製品が10点出土した(図98-79~88)。平面観が弓なりに反った、押圧剥離による両面加工の石製品で、「三日月形石器」「半月形石器」などと俗称されているものである。これまでこの種の石製品は、一遺跡からせいぜい数点しか発見されていなかったのに、このようにまとまって出土したことは特筆すべきことと思われる。

これらの資料が出土した地点は、調査地区北西部の標高約23mの台地上にある。81~86は、第2群の墓域北西部から、87・88は、第6群北東部の盛土上部からそれぞれ出土した。また、79・80も前者からそれほど遠くないところから得られたものである。

石材はすべて黒曜石で、整形はきわめて丹念である。わずかに原石面・一次剥離面を残すものの(80・81)もみられるが、ほぼ全面にわたって二次加工が施されている。内外側縁の湾曲の度合い、磨耗痕の有無などにより形状はいくつかに分類できるようなのである。

79~85は、断面が楕円形を呈し、偏平で薄い。86の表裏面には、稜が作り出されており、断面が菱形を呈する。前者は、内外側縁がともに緩やかに湾曲するのに対し、後者はやや直線的である。これらの両端は尖っているが、いずれにも調整または使用による磨耗はみられない。これに対し、87・88の2点は全体が丸みを帯び、両先端は丸い。しかも、さきの8点とは異なり、両側縁には磨耗痕がみられる。とくに、88の実線で示した部分は磨耗が著しく、意図的な研磨が行われた可能性もある。

10点の資料中、長さは最大3.3cm(86)、最小2.2cm(87)で、平均長は2.6cm前後である。幅は0.7~0.8cmで、厚さは、やや厚めの88を除けば0.3~0.4cm。重さは、0.9gの88以外は、0.5~0.8gの間にある。

これらの石製品とほかの遺物の相伴関係は必ずしも明確ではない。しかし、石製品が発見された地点は、6つの土壌墓群から成る縄文時代後期中葉の墓域にあたっており、また、周辺から得られた土器片の90%以上はこの時期のIV群b類土器である。したがってこの限りにおいては、美々4遺跡の「三日月形石器」は縄文時代後期中葉の所産で、土壌墓に伴うものと判断せざるを得ない。

遺内では、これまでに表面採集品(札幌西高等学校郷土研究部1960)も含めて14の遺跡から28点の「三日月形石器」が報告されている(表28)。これらのうち、芦別市野花南矢野沢遺跡(2番目の大きさのもの)、美々4遺跡(谷口)、斜里町オクシベツ川遺跡出土のものは、ほかのものと形状がやや異なることから、それぞれ別種に分類される可能性も残る。また、斜里町尾河台地遺跡の資料は、二次加工が表裏面とも周縁のみにとどまるものである。

上記の4点を除けば、各地から出土した「三日月形石器」は、実測図・写真で見ると異なるが、美々4遺跡のものと互いによく似ている。とくに、千歳市末広遺跡、長沼町堂林遺跡

表28 道内三日月形石器出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	出土数	大 き さ(cm)	出土状況	時 期	文 献	文献番号
			長さ 幅 厚さ				
住 吉 町	函 館 市	1	3.0×1.2×0.5	混 入 (?)		児玉・大場1953	1)
日 吉	函 館 市	1	3.2×0.8×0.6	2 層	縄文後期(?)	千代 編1971	2)
美 沢 1	苫小牧市	3	3.6×0.5×0.4	墳墓(M-1)	縄文晩期初頭	北海道教育 委員会1977	3)
			3.6×0.6×0.4	"	"		
			3.8×0.6×0.4	"	"		
美 沢 1	苫小牧市	5	2.6×0.9×0.6	II 黒 層		北海道教育 委員会1978	4)
			3.0×0.9×0.5	"			
			2.8×0.9×0.4	"			
			2.6×0.9×0.6	"			
			3.5×0.8×0.6	"			
美々4(呑口)	千 歳 市	1	2.7×1.4×0.4	埋没床下の包含層		北海道教育委員会 1979	5)
美々 4	千 歳 市	1	2.6×0.4×0.2	II 黒 層		北海道教育委員会 新センダー 1981	6)
美々 4	千 歳 市	10	(2.9)×0.7×0.3	第2静置域北西層	縄文後期中葉	本 書	
			2.4×0.8×0.4	"	"		
			(2.5)×0.8×0.3	"	"		
			2.6×0.8×0.3	"	"		
			2.6×0.8×0.3	"	"		
			(2.5)×0.8×0.3	"	"		
			3.1×0.8×0.3	"	"		
			3.3×0.7×0.4	"	"		
			2.2×0.8×0.4	第6静置域上部	"		
			2.3×0.8×0.5	"	"		
美々 5	千 歳 市	1	2.7×0.6×0.4	II 黒 層		北海道教育委員会 1979	5)
永 広	千 歳 市	5	縦2.7×0.3×0.3	包 含 層		大谷・田村1982	7)
			縦3.0×0.3×0.3	"			
			縦3.0×0.3×0.2	"			
			縦3.2×0.3×0.4	"			
			縦3.6×0.4×0.4	"			
堂 林	長 沼 町	1	3.1×0.9×0.5	包 含 層	縄文後期末葉	野村・宇田川1967	8)
市 川	由 仁 町	1	縦3.9×0.7×0.3	第 4 層	続縄文初頭	野村・住家1966	9)
野花南丸谷	芦 別 市	1	3.0×0.6×0.4	1 層			
野花南矢野沢	芦 別 市	3	縦5.7×1.4	採 集 品		野 村1973	10)
			縦3.8×1.4	"		野 村 編1977	11)
			縦3.0×0.9	"			
沢 田 の 沢	東神楽町	1	0.3×0.5×0.2	包 含 層		斉 藤1983	12)
興 津	釧 路 市	1	縦0.4×0.6×0.3	第11号住居跡壁土		澤 ら1979	13)
尾 河 台 地	斜 里 町	1	縦0.4×0.5×0.2	表 土		金 盛ら1983	14)
オクシベツ川	斜 里 町	1	縦0.3×0.7×0.4	Vb 層		小・林ら1980	15)

※は、実測図・写真から計測したもの。()は破損部分

の資料は、大きさ、形状ともに「うりふたつ」と言ってもよい。また85のように内外側縁が直線のものは、かつて美々5遺跡から出土している。

さきにもふれたとおり、この種の石製品は検出数が少なく、遺構やほかの遺物と確かな共伴関係を示す例は多くはない。美々4遺跡と美沢川をはさんで対峙する、苫小牧市美沢1遺跡では、縄文時代晩期初頭の墳墓のマウンド中から3点がまとまって出土したことがある。また、包含層からの出土であるため、やや確証には乏しいところもあるが、堂林遺跡と由仁町市川遺跡からは、それぞれ縄文時代後期末葉と続縄文時代初頭の「三日月形石器」が報告されたことがある。

この石製品の機能について論じたものも少ない。函館市住吉町遺跡では「用途不明の作業具」とされ、堂林遺跡で「ノッチド・スクレイパーとしての用途」が論じられている。また、東神楽町沢田の沢田遺跡の報告書では「装身具的な意味あい」が指摘されている。

以上のように、「三日月形石器」に関する情報は、いまのところ十分であるとは言えない。しかし、これまで報告された資料は、一応全道的な分布が認められるものの、札幌～苫小牧低地帯南部に極端な集中を示していることがわかる。とくに、美沢川流域に所在する美沢1・美々4・同5遺跡からは、今回の資料を含めて合計21点が出土しており、これは全体の約57%に相当する数である。また、所属時期に関しては、縄文晩期を中心に、中期後半から続縄文時代にわたるとする説（上野1982）もあるが、後期中葉から晩期初頭と考えられるものが比較的多数を占めている。これらのことから、周墳墓に代表されるような区画（墓域）の形成を伴う墓の分布と無関係ではないことを暗示しているように思える。

機能についても推測の域を出ないが、形状や出土状態の若干の例からは、実用的な石器とは考えにくい。そして、これらの石製品が、縄文時代後期中葉から晩期初頭にかけて使用されたものとするれば、玉や漆製の装身具、石棒などの祭祀遺物と有機的な関係をもつことも考えられ、斎藤（斎藤1983）が言っているように、今後この視点からの検討が必要であろう。（遠藤香澄）

文献

- 1) 児玉作左衛門・大場利夫 1953 「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告書』8 北海道大学
- 2) 千代鑑編 1971 「函館市日吉遺跡発掘調査報告書」市立函館博物館
- 3) 北海道教育委員会 1977 「美沢川流域の遺跡群」Ⅰ
- 4) 北海道教育委員会 1978 「美沢川流域の遺跡群」Ⅱ
- 5) 北海道教育委員会 1979 「美沢川流域の遺跡群」Ⅲ
- 6) 北海道埋蔵文化財センター 1981 「美沢川流域の遺跡群」Ⅳ
- 7) 大谷敏三・田村俊之 1982 「末広遺跡における考古学的調査」下 千歳市教育委員会
- 8) 野村崇・宇田川洋 1967 「長沼町内堂林遺跡調査報告」『長沼町の文化財』2 長沼町教育委員会
- 9) 野村崇・佐藤勉 1966 「夕張郡由仁町市街・市川遺跡の調査」『シェーパロ』2 夕張東高等学校郷土研究部
- 10) 野村崇 1973 「芦別市の先史遺跡」空知地方史研究協議会

- 11) 野村崇編 1977 『石狩川中流域の先史遺跡』 空知地方史研究協議会
- 12) 斎藤隆 1983 『東神楽町沢田の沢遺跡発掘調査報告書』 東神楽町教育委員会
- 13) 澤西郎ら 1979 『釧路市興津遺跡発掘報告』Ⅲ 釧路市立郷土博物館
- 14) 金盛典夫ら 1983 『尾河台地遺跡発掘調査報告書』 斜里町教育委員会
- 15) 小林敬ら 1980 『オクシベツ川遺跡発掘調査報告書』 斜里町教育委員会
- 16) 札幌西高等学校郷土研究部 1960 「厚別野幌間表面採集による資料報告」『黒曜石』17
北海道青年考古学協議会
- 17) 上野秀一 1982 『石器』『縄文文化の研究』6 雄山閣

3 美々4遺跡出土の玉について

美々4遺跡では、台地上の30個の墓から98点、包含層から1点の玉が出土した。ここでは、その観察を通して、この遺跡のもつ意味を考えてみたい。

1) 出土状態

墓境内出土の玉は、墳底面またはそれより若干浮いた状態で検出されており、遺体の直上、直下から出土した例も少なくない。平面的には、墳底の北半ないし西半から出土した墓が26個ある。これは、頭位が判明した例から考慮すると、上半身、とくに頭部から胸部に相当する。しかし、墳底の南東部から出土した例(P-116・200)墳底一面から出土した例もあることから、すべてが遺体に装着されたものか否か明らかではないが、副葬品であることは論をまたない。

P-200は、歯列の検出状態から合葬の可能性が考えられた。この墓から玉は5点出土しているが、そのうち2点が親玉で(寺村1969)、しかも2か所の骨の拉がりの頭と肩と思われる部位から1点づつ検出されている。^(注1)

2) 形態

(注2)

まず玉は、親玉と小玉に分けられる。前者には、銃弾形・勾玉様・平面形が精円を呈するものがあり、後者には、管玉・薬玉に類するものを含み、孔を中心に放射状の刻みをもつ玉もある。墓群ごとに親玉と小玉の組み合わせ、割合は多少異なっている(表29)。

第1土墳墓群は、親玉のみ副葬されたものが1例ある。第2群と第3群は、親玉と小玉または小玉のみで、親玉だけの副葬がない点で共通する。第4群は、墓の半数から玉が出土し、親玉総数の40%を保有している。第5群は、親玉と小玉の組み合わせがない代りに、33個という突出した数の小玉を副葬した墓がある(P-180)。第6群は、小玉のみの副葬である。

3) 石質

99点の玉のうち、5点が滑石(1・6・23・24・25)3点が蛇紋岩(3・11・70)で、残りの91点は、一応硬玉と鑑定されている。^(注3)色調は、透明感のある明緑色を呈するものが大半を占め、全体が濃緑色を呈するもの、石英質母岩中にわずかに緑色部をもつものがそれぞれ少量ある。もし、これらが硬玉だとすれば、道内の一遺跡から得られた硬玉製品としては、恵庭市柏木B遺跡(木村1981)の136点に次ぐもので、北海道における副葬品の変遷や、当時の人間の移動を考える上で重要な意味をもつことは言うまでもない。そのためにも早急に、硬玉なのか否かを明確にする必要がある。

4) 穿孔

穿孔方向は、孔断面の観察から次のように分類される(寺村1972)。

A、一方向から穿孔されたもので、開孔径部が終孔部径より大きなもの。

B、両方向から穿孔されたもの。

表29 墓群ごとの玉の組み合わせ

	親 玉 の み	小 玉 の み	親 玉 と 小 玉	玉の出土した墓の数
1群	P-01 (1)			4墓中1墓
2群		P-113 (2) P-110 (1)	P-103(2・1) P-116(1・1) P-120(1・4) P-125(1・4)	24墓中6墓
3群		P-107 (2) P-150 (4)	P-121(1・1) P-130(1・2)	25墓中4墓
4群	P-151 (3) P-153 (1) P-158 (1) P-163 (1) P-168 (1) P-198 (1)	P-157 (1) P-160 (1) P-161 (1)	P-200(2・3)	20墓中10墓
5群	P-205 (1) P-216 (1)	P-173 (2) P-176 (6) P-179 (3) P-180 (3) P-190 (2)		27墓中7墓
6群		X-806 (2) X-814 (2)		17墓中2墓

※ () 内は個数

C、一方から穿孔されているが、終孔部において反対側から修正穿孔されているもの。

硬玉製の玉は、Aが33点、Bが5点、Cが51点で一方から穿孔が圧倒的に多い。Aのなかには、終孔の縁辺部に細かい剝離が認められるものがあるが、孔の内・外のどちら側から力が加わったものか識別できなかった。孔壁には、ほとんどのものに工具の回転痕が認められるが、浅く不鮮明である。むしろ平滑な感じで、なかには部分的に光沢をもつ例(18・87・89)や、縦方向の擦痕をもつ例(55・60・77・78・84・87・91・92)がある。これは、紐ずれなど使用にかかわる二次的要因も考えられるが、「孔サラエ」と呼ばれる孔内修正が行なわれた可能性もある。P-151からは穿孔途中の未製品が1点出土している。三角柱状を呈し、各面には研磨が施されている。孔の深さは約4mmで、穿孔は約4分の1の段階に相当する。孔断面は先細りのU字形を呈し、連続的な回転痕は認められない。これらのことから、工具は硬玉製大珠未製品から復元された管錐(寺村1972)ではなく、先端が丸味をもった棒錐が該当する。回転痕が認められないのは媒材の使われ方に起因するのかもしれない。

なお、滑石製の玉の穿孔方向はBのみで、縦方向の擦痕が一部に認められる。(23・24・25) 蛇紋岩製の玉はBとCである。両者ともに孔内はきわめて平滑である。

5) 課題

(注5)

ヒスイの原産地を考える上でまず整理しなければならないのは、日高町千栄産の軟玉についてである(香場1967a, b)。これは、透明感を欠く暗緑色を呈し、黒色の鉱物(クロム尖晶石・ク

ロム柘榴石)が斑点状に認められ、肉眼観察では明らかに識別される。^(注6)さらに、報告者は、成分組成・産状からこの軟玉に対して硬玉起源の可能性を暗示しているが、現時点では日高地方の遺跡においてヒスイ製装飾品や原石の出土は確認されていないことから、この「日高ヒスイ」は利用されていないと考えた方が妥当であろう。^(注7)

墓群ごとに玉の組み合わせが異なるのは、各墓群における土壌墓の配し方に関連するものかもしれない。すなわち、玉の組み合わせが類似する第2・3群は、長軸をそろえ墓横間に一定の間隔をおき、列状の配置を行う傾向がある。玉の出土率・親玉の保有率の高い第4群は長軸方向をある程度そろえながらも墓どうしの重複が著しい。多量の小玉を保有する第5群は、第2・3群の列状配置がやや崩れた様子がうかがえる。小玉のみ4点保有する第6群は、配石によって墓群中央の墓を意識し、それを取り囲むように他の墓を配している。滑石の親玉のみの第

表30 美沢川流域におけるヒスイ製装飾品

遺跡名	遺構	形態	個数	玉以外の副葬品	文献
美沢1遺跡	H-4	楕円形	1		I
"	JX-3, P-120 周墳墓	小玉	25	黒漆弓, 石棒, 石斧, 石鏃, 石斧原材	III
"	JX-4, P-108 "	勾玉様	1	石斧	III
"	II黒 包含層	小玉	2		II
美沢2遺跡	A P-6	"	2		"
美々4遺跡	B S-3 P-2 周墳墓	勾玉様	1		IV
"	B P-73	小玉	23		"
"	P-66	"	2	サメの歯, 漆器	"
"	M-7	勾玉様	1		I
"	X-209 周墳墓放棄後	小玉	1		VII
"	X-6	勾玉様	1		"
"	P-334 盛土墓	"	1	V群a類土器, 漆器	"
"	"	楕円形	1		"
"	P-342 盛土墓	勾玉様	1	すり石, 土製品, 孔あき石, 漆器	"
"	P-368 周墳墓放棄後	楕円形	1	漆器	"
"	P-375	小玉	2	石鏃	"
"	P-376 周墳墓放棄後	小玉	3	サメの歯, 石棒, 土製品	"
"	P-378 "	"	2	V群a類土器, 石斧, つまみ付きナイフ	"
"	P-386 "	"	3	石斧	"
"	P-390 "	管玉	1	銅	"
"	II黒 包含層	小玉	6		"
"	"	楕円形	1		"
"	"	小玉	11		IV
"	"	楕円形	1		"
"	"	"	2		I, III
"	"	薬玉	1		III
計			97		

※文献覧のI, II, III, IV, VIIは「美沢川流域の遺跡群」-を表わす

1群は、墓の配置に特別なきまりが認められない。墓の長軸方向や墓域の規模等は、各群ごとにさらに個性があるが、このような観点から、第2・3群の類似性、第1・4・5・6群の各特性が抽出される。

このような特性が、被埋葬者や墓群を形成した集団の性格を表わすものなのかどうかについては、さらに検討を重ねる必要がある。

美沢川流域ではこれまでに、ヒスイ製装飾品が97点検出されている。このうち副葬品として明らかなのは、周堤墓に伴う墓からの3例27点、周堤墓放棄後の墓からの7例13点、盛土墓からの2例3点、後期または晩期と考えられる土壘墓からの4例29点である。過去の調査例からは、周堤墓に伴う墓→同放棄後の墓→盛土墓という墓制の変遷に対応するように減少する傾向が一応認められる。しかし、今回得られた玉は、出土量においてまず異なり、時期的には、墓域を画する方法や墓に関係すると考えられる土器から、周堤墓の前段階に位置するものである。

本遺跡と同じ内容の副葬品をもつ例として音江環状列石(駒井1959)が挙げられる。このうちⅪ号墓からは、23点の小玉、13点の石鏃、朱塗り弓が副葬されており、弓は検出されていないがP-180の内容と一致する。さらに石鏃の形態は両者ともにやや末広がりの尖頭部をもつ有蓋鏃であり、時期を決定できるような良好な土器は得られていないが、近接した時期と考えられる。しかし、音江の周囲に土手をもつ墓(Ⅺ・Ⅻ・Ⅼ号)を除いて、配石墓に属するもので集団墓を区画するという性格とは異なる。音江Ⅺ・Ⅻ・Ⅼ号墓についても、墳底に石が敷き詰められており、石に対する意識は美々4遺跡とは差がある。このように、北海道における縄文後期中葉の集団は、副葬品については同じ志向を持ちながらも、墓の構築に対しては明らかに別の意識をもった二者が存在したと言える。さらに、これらの硬玉が新潟県原産だとすれば、本州集団の北海道への影響力がかなり強烈なもので、墓制を改変してしまうような事態を招いたとは考えられないだろうか。この点に関しては、美々4遺跡の玉の石質や原産地を解明するとともに、東日本の視野から配石墓・区画墓の発生と変遷を通して、集団の性格や移動を明らかにする必要がある。

(石川 朗)

- 注1. このような観点からも、合野が裏付けられるのかもしれない。
- 注2. 飾りの中心になるものとそうでないものの区別で、前者は「垂飾」と同じ意味である。直接関係しないが、アイヌ民俗例では、靱玉に対して「ヌムンタマ」、「ポロヌムンタマ」という名称で呼び分けている(杉山1936)。
- 注3. 石質の肉眼鑑定は、北海道大学地質鉱物研究室助手 渡辺順氏による。
- 注4. 寺村は、靱玉製大珠の場合、貫通寸前で穿孔作業を止め、反対側から軽くたいて孔を貫くと考察している(寺村1969)。
- 注5. ここでは、軟玉も含める。第30表も同様である。しかしネフライトと報告されているものには、日高千栄産と肉眼鑑定されたものはない。
- 注6. 竹田輝雄氏、中村千春氏所蔵の資料による。
- 注7. その後の情報収集で穂別町福山の鮫川流域で黒色鉱物を全く含まないヒスイ類似の転石が採集されていることを付記する。

参考文献

- 寺村光晴 1969 『翡翠(ひすい)ー日本のヒスイとその謎を探る。』 養神書院
- 木村英明 1981 『北海道恵庭市柏木B遺跡発掘調査報告書』 柏木B遺跡発掘調査会
- 寺村光晴 1972 『石工(玉工) 攻玉上の基礎的前提』 『新版考古学講座』第9巻中 雄山閣出版株式会社
- 杉山壽榮男 1936 『アイヌたま』 1974 北海道出版企画センター 復刻
- 番場猛夫 1967a 『北海道日高産軟玉ヒスイ』 『調査研究報告会講演要旨録』No18 工業技術院地質調査所北海道支所
- " 1967b 『北海道日高地方における(Nephrite Jade)の発見』 『地質調査所月報』第18巻3号
- 駒井和愛 1959 『音江』 北海道環状列石の研究 慶友社
- 北海道教育委員会 1977 『美沢川流域の遺跡群』I
- " 1978 『 " 』II
- " 1979 『 " 』III
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 1981 『美沢川流域の遺跡群』IV
- " 1984 『 " 』VII

表31 五一覽

第1群

遺構	図番号	大きさ (cm)	重さ (g)	開孔部径mm	終孔部径mm	穿孔方向	石質
P-01	6	4.70×1.70×1.24	15.0	0.70×0.60	0.70×0.60	B	Ta.

第2群

P-100	4	1.82×1.28×1.00	3.5	0.68	0.40	C	Jad.
"	13	1.80×1.12×0.78	2.5	0.65	0.47	A	"
"	89	1.80×1.68×1.06	5.9	0.48	0.35	A	"
P-110	62	1.20×1.20×0.85	2.1	0.51	0.30	C	"
P-113	44	0.90×0.90×0.55	0.6	0.42	0.30	C	"
"	49	0.90×0.90×0.55	0.7	0.44	0.30	C	"
P-115	20	5.43×1.70×	28.2	0.75	0.75	A	"
"	98	1.93×1.93×3.70	23.0	0.70	0.70	A	"
P-120	55	1.10×1.03×0.76	1.5	0.54	0.30	C	"
"	23	0.74×0.74×0.62	0.5	0.25	0.25	B	Ta.
"	24	0.64×0.60×0.68	0.4	0.30	0.30	B	"
"	25	0.77×0.75×0.60	0.6	0.30	0.30	B	"
"	7	1.87×1.55×1.47	5.5	0.66	0.40	C	Jad.
P-125	14	2.20×1.25×0.53	2.8	0.60	0.45	C	"
"	93	1.25×1.16×1.55	4.0	0.65	0.40	C	"
"	64	1.20×1.18×0.90	2.1	0.52	0.42	C	"
"	84	1.43×1.35×1.26	3.7	0.68	0.40	C	"
"	94	1.60×1.42×1.78	6.8	0.60	0.50	C	"

第3群

P-107	78	1.14×1.05×1.14	2.2	0.60	0.45	C	Jad.
"	75	1.20×1.10×1.12	(1.7)	0.60	0.50	A	"
P-121	96	1.45×1.37×2.50	7.8	0.60	0.60	A	"
"	2	2.35×1.29×0.62	3.1	0.50	0.40	A	"
P-130	83	1.47×1.45×1.10	3.6	0.72	0.60	C	"
"	11	1.42×1.27×0.74	5.7	0.55	0.55	C	Ser.
"	77	1.30×1.20×1.10	3.0	0.50	0.45	C	Jad.
P-150	79	1.14×1.14×1.20	2.5	0.63	0.50	A	"
"	90	1.70×1.68×1.28	5.7	0.65	0.48	C	"
"	97	2.00×2.00×3.44	22.1	0.80	0.70	A	"
"	70	1.48×1.14×0.83	2.0	0.67	0.67	B	Ser.

第4群

P-151	99	2.76×1.42×1.64	10.5	0.60			Jad.
"	3	2.44×1.45×0.80	4.6	0.60×0.55	0.55×0.50	C	Ser.

W 若干の考察

遺 標	図番号	大きさ (cm)	重さ (g)	開口部径 ϕ	終孔部径 ϕ	穿孔方向	石 質
P-151	8	2.39×1.40×1.22	7.5	0.70	0.60	A	Jad.
P-153	5	2.00×1.40×0.95	3.9	0.55	0.37	C	"
P-157	73	1.25×1.23×0.90	1.9	0.65	0.50	A	"
P-158	12	2.86×1.60×1.22	9.1	0.60	0.47	C	"
P-159	37	1.30×1.10×0.60	1.5	0.63	0.50	A	"
P-161	88	1.42×1.42×1.20	3.5	0.55	0.50	A	"
P-163	15	1.45×1.45×0.73	1.7	0.50	0.36	C	"
P-168	10	3.20×1.30×1.90	14.1	0.65	0.50	C	"
P-188	1	1.85×1.05×0.35	1.2	0.55×0.45	0.55×0.45	B	Ta.
P-200	85	1.22×1.20×1.33	3.0	0.60	0.40	C	Jad.
"	18	2.95×1.68×0.96	5.5	$\phi > 0.50$	$\phi > 0.40$	C	"
"	86	1.44×1.36×1.32	3.9	0.59	0.42	A	"
"	17	3.30×2.80×1.30	17.3	0.61	0.42	C	"
"	82	1.50×1.40×1.00	3.4	0.50	0.42	C	"

第5群

P-173	34	1.17×1.16×0.55	1.3	0.46	0.35	C	Jad.
"	65	1.15×0.94×0.63	1.2	0.55	0.35	C	"
P-176	48	0.85×0.85×0.70	0.7	0.47	0.32	C	"
"	27	0.64×0.62×0.39	0.4	0.35	0.25	A	"
"	28	0.75×0.75×0.50	0.5	0.30	0.25	C	"
"	81	1.30×1.25×1.00	2.7	0.60	0.40	C	"
"	66	1.30×1.12×0.80	2.0	0.45	0.44	A	"
"	26	0.70×0.70×0.44	0.4	0.32	0.22	A	"
P-179	37	0.83×0.76×0.43	0.4	0.37	0.37	B	"
"	35	1.15×1.05×0.62	1.3	0.50	0.50	A	"
"	74	1.34×1.26×0.90	2.5	0.55	0.40	A	"
P-180	36	0.75×0.75×0.40	0.4	0.30	0.25	C	"
"	29	0.70×0.70×0.50	0.3	0.40	0.25	C	"
"	42	0.95×0.87×0.60	0.9	0.40	0.23	C	"
"	33	0.92×0.91×0.57	0.8	0.40	0.30	A	"
"	31	0.85×0.75×0.65	0.7	0.42	0.22	A	"
"	43	0.92×0.90×0.50	0.7	0.45	0.30	A	"
"	39	0.80×0.80×0.50	0.5	0.30	0.25	A	"
"	32	0.90×0.90×0.53	0.7	0.43	0.40	B	"
"	53	1.00×1.00×0.50	0.8	0.50	0.50	B	"
"	58	1.17×1.15×0.85	0.8	0.50	0.38	A	"
"	91	0.95×0.92×1.25	1.6	0.45	0.40	A	"
"	46	1.00×0.95×0.70	1.1	0.50	0.35	C	"
"	68	1.15×1.15×0.80	1.8	0.45	0.35	C	"
"	51	1.00×1.00×0.55	1.0	0.42	0.35	C	"

遺 構	図番号	大きさ (cm)	重さ (g)	開孔部径mm	終孔部径mm	穿孔方向	石 質
P-100	67	1.10×1.10×0.80	1.4	0.60	0.40	C	Jad.
"	80	1.20×1.15×1.04	2.1	0.60	0.50	C	"
"	69	1.10×1.08×0.88	1.7	0.45	0.40	A	"
"	60	1.20×1.14×0.90	1.7	0.65	0.45	C	"
"	61	1.13×1.08×0.90	1.8	0.50	0.25	C	"
"	92	0.92×0.84×1.30	1.7	0.49	0.46	C	"
"	56	1.10×1.00×0.70	1.0	0.50	0.32	C	"
"	50	0.90×0.85×0.65	0.6	0.50	0.45	A	"
"	45	0.95×0.90×0.52	0.6	0.50	0.45	A	"
"	41	0.90×0.90×0.50	0.7	0.45	0.25	C	"
"	48	0.95×0.95×0.54	0.8	0.42	0.25	C	"
"	52	0.98×0.98×0.68	1.0	0.42	0.35	A	"
"	38	0.75×0.75×0.60	0.4	0.40	0.30	C	"
"	30	0.78×0.78×0.40	0.4	0.30	0.20	C	"
"	21	0.74×0.74×0.40	0.4	0.30	0.20	A	"
"	72	1.10×1.10×0.85	1.5	0.60	0.40	A	"
"	22	0.85×0.78×0.55	0.5	0.40	0.25	C	"
"	54	1.00×1.0 ×0.60	1.0	0.45	0.40	B	"
"	40	0.92×0.80×0.62	0.6	0.50	0.20	C	"
P-190	57	1.10×1.10×0.76	1.4	0.45	0.30	A	"
"	59	1.06×1.06×0.78	1.2	0.60	0.34	C	"
P-205	9	2.36×1.55×1.20	8.0	0.75	0.50	A	"
P-216	16	1.84×1.32×1.92	2.6	0.60	0.50	C	"

第6群

X-806	95	1.29×1.25×1.78	4.7	0.58	0.40	C	Jad.
"	87	1.37×1.36×1.33	3.0	0.76	0.50	C	"
X-814	76	1.05×1.05×1.18	1.9	0.53	0.40	C	"
"	71	1.17×1.17×0.77	2.1	0.40	0.40	B	"

包含層

F1-63-03	19	3.95×1.12×0.92	9.1	0.63	0.45	A	Jad.
----------	----	----------------	-----	------	------	---	------

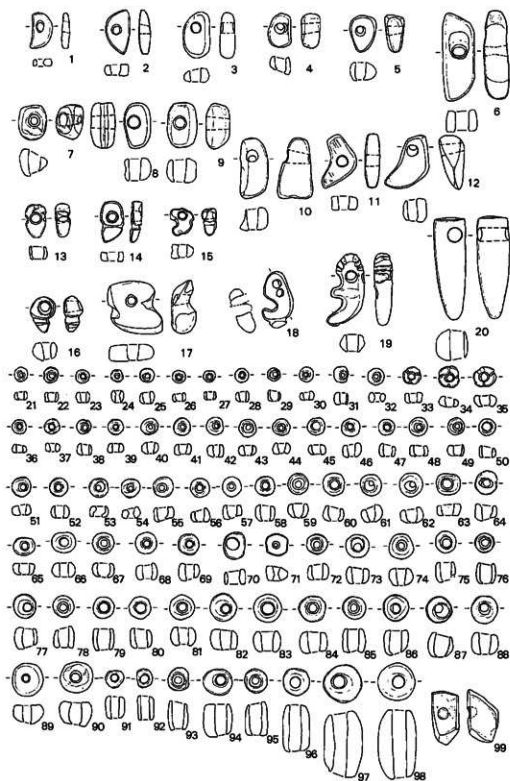
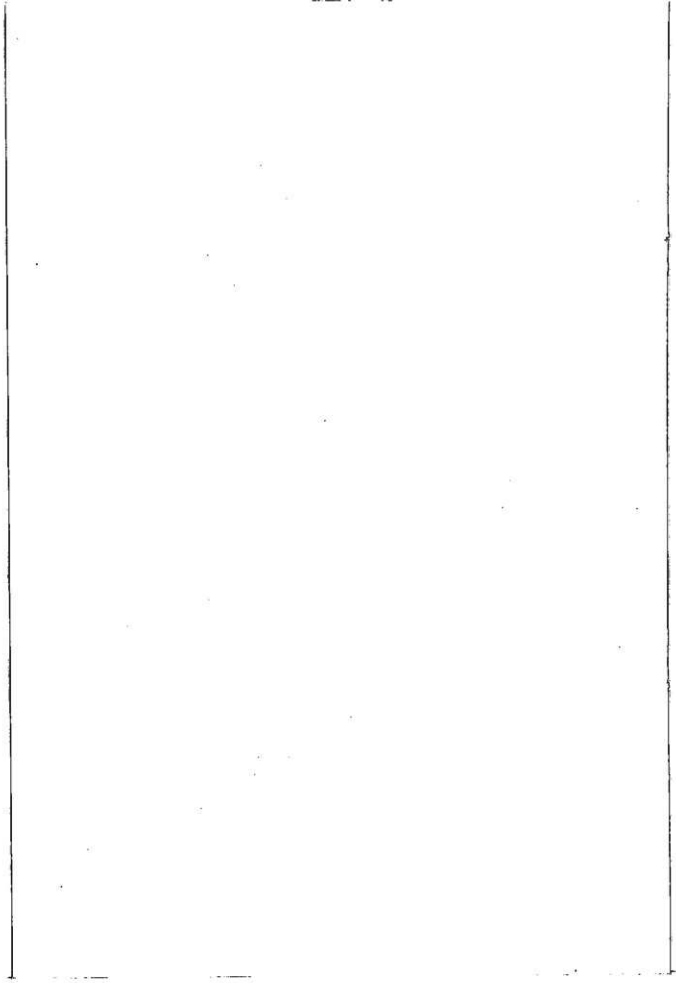


図119 美々4遺跡出土の玉

写真図版

美々4遺跡……………図版1～38

美々5遺跡……………図版39～44





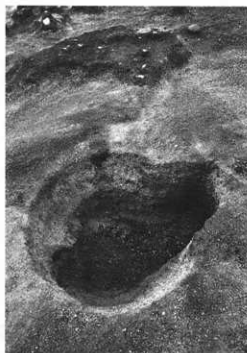
1. 美々4道跡全景



2. I 黒層調査状況



1. P-1 完掘状況



2. P-12 完掘状況



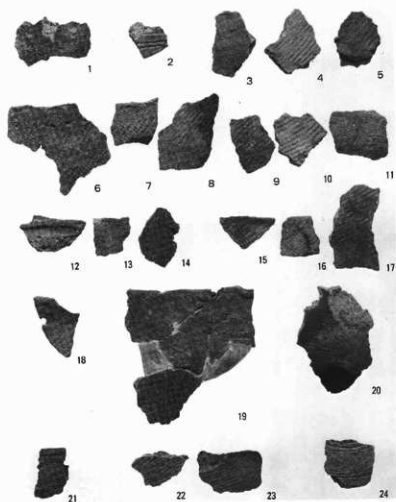
3. P-13 完掘状況 (後方 P-7・8)



4. P-26 人骨検出状況



1 黑層完掘狀況



注)

1-P7

2-P8

3~5, 9~11

-P12

6~8-P13

12~14-P15

15~17-P16

18-P17

19-P18・17

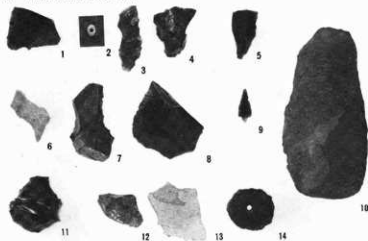
20-P18

21-P25

22・23-P32

24-P31

1. 1 黒層遺構出土土器片



注)

1-P12

2~4-P13

5-P15

6~8-P17

11-P26

12-P31

2. 1 黒層遺構出土土器類



1.



2.



3.

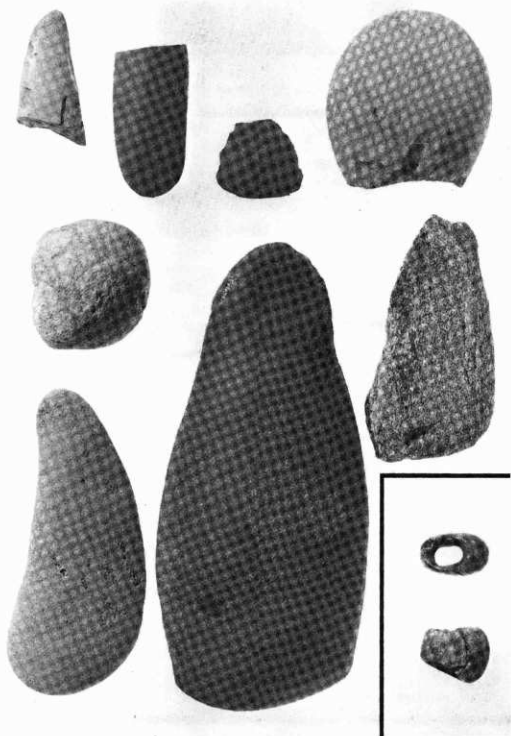


4.

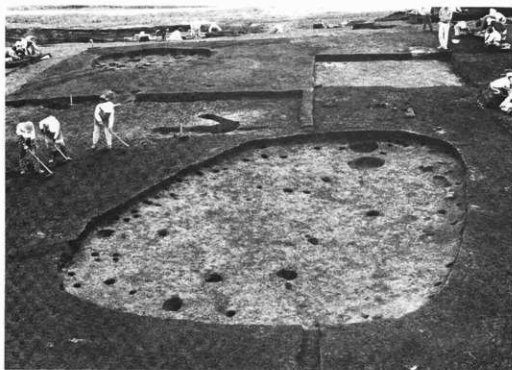
I 黑屋出土土器



I 黑層出土石器



1 黑层出土石器類



1. H-1 完掘状況 (左後方H-2)



2. H-1 完掘状況



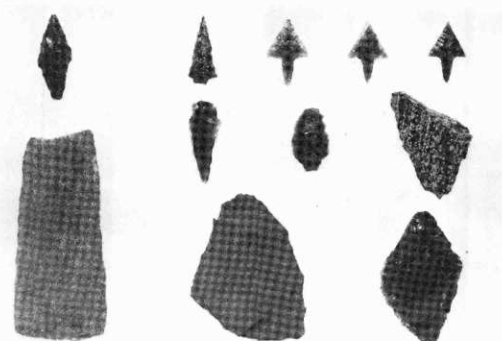
3. H-1 土器出土状況



1. H-1 出土土器 (床面)



2. H-1 出土土器 (覆土)



3. H-1 出土石器 (左床面出土)



1. H-2 完掘状况



2. H-2 石組炉



3. H-2 出土土器 (床面)



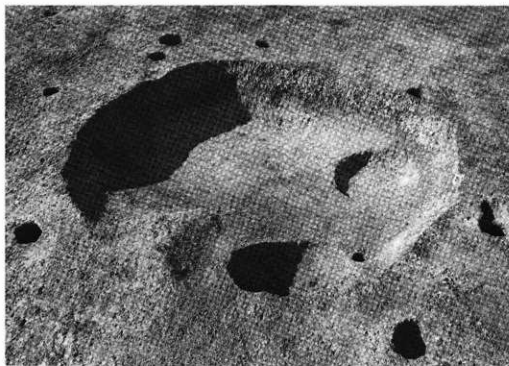
4. H-2 出土石器



1. H-2 土器出土状況 (覆土)



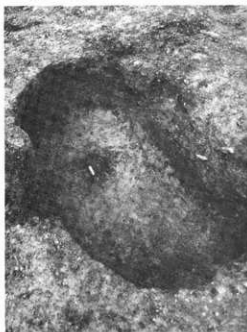
2. H-2 出土土器 (覆土)



3. H-3 完掘状況



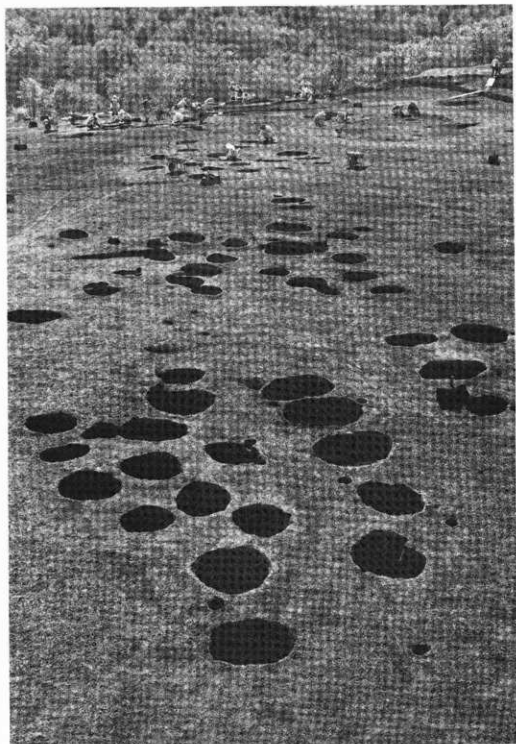
1. 第1土壤群完掘状况



2. P-01完掘状况



3. P-01出土状况



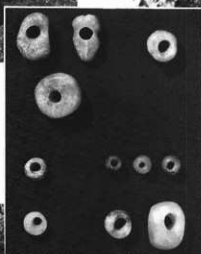
1. 第2土墳墓群完掘状況（後方に第3・6群）



1. P-103

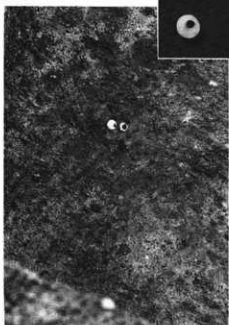


2. P-110



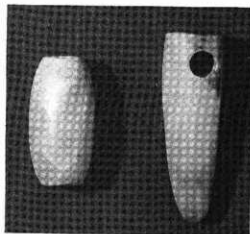
3. P-113

4. P-120





1. P-116完掘状况



2. P-116出土玉



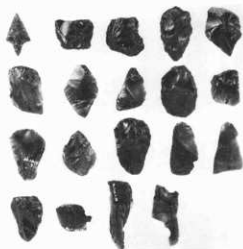
3. P-123立石検出状况



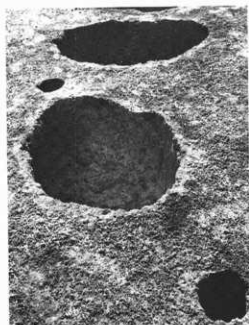
4. P-123炭化材検出状况



1. P-124人骨出土状况



2. P-132出土石器



3. P-125完掘状况



4. P-125玉出土状况



5. P-125出土玉



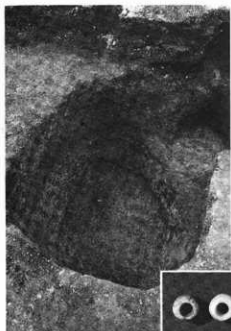
1. 第3土坑墓群完掘状况



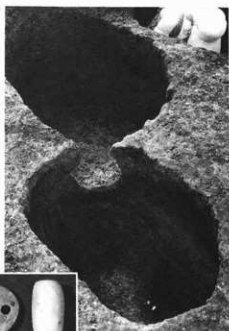
2. P-131完掘状况



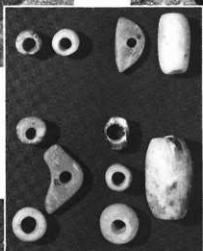
3. P-131人骨出土状况



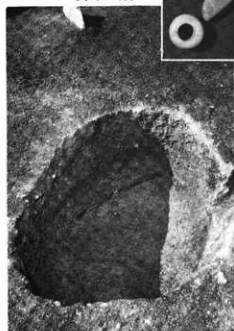
1. P-107



2. P-121(上P-114)



3. P-130

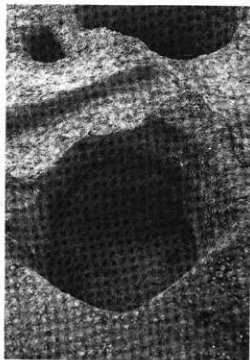


4. P-150





1. P-148完掘状況(後方P-149)



2. P-148完掘状況



3. P-148土器出土状況



4. P-148出土土器



1. 第4土坑墓群完掘状况



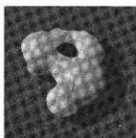
2. P-151出土玉



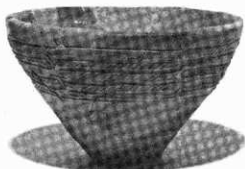
3. P-153出土玉



4. P-153完掘状况



1. P-163出土玉



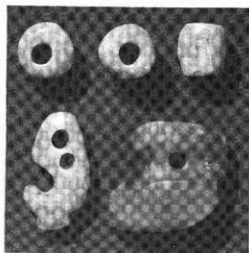
2. P-163出土土器



3. P-163土器出土状况



4. P-200完掘状况



5. P-200出土玉



1. 第5土墳墓群完掘状況



2. P-176完掘状況



3. P-176出土玉



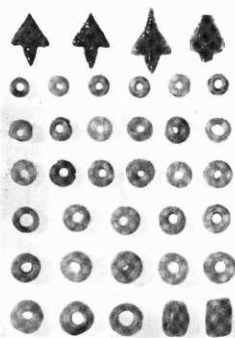
4. P-176出土土器



1. P-100確認状況



2. P-100出土土器



3. P-100出土石・玉



4. P-100完掘状況



1. P-188完掘狀況



2. P-190完掘狀況



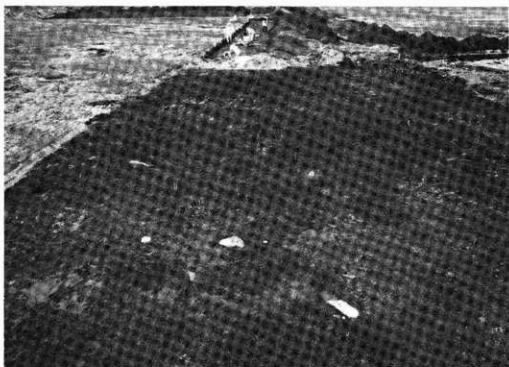
3. P-194完掘狀況



4. P-194石鏃出土狀況



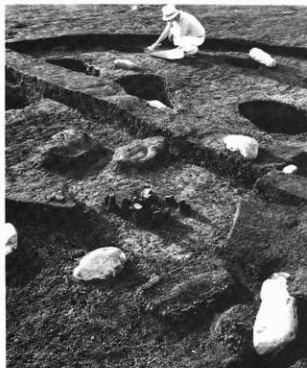
5. 石鏃



1. 第6土墳墓群(X-8) II黒上面の状況



2. 第6土墳墓群完掘状況



1. X-817確認状況



2. X-817出土石鏃



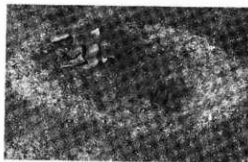
3. X-817出土土器



4. X-817完掘状況



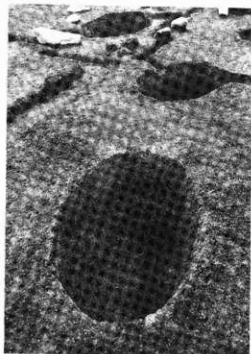
5. 柱穴セクション(上X-817)



1. X-808確認状況



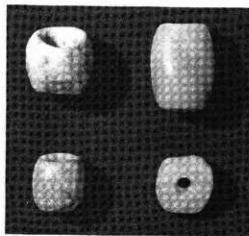
2. X-808出土土器



3. X-808完掘状況



4. X-806完掘状況



5. 出土玉(上段X-808 下段X-814)



1. T-5・6 完掘状況



2. T-5・6 セクション



3. T-1 完掘状況



4. T-3 完掘状況



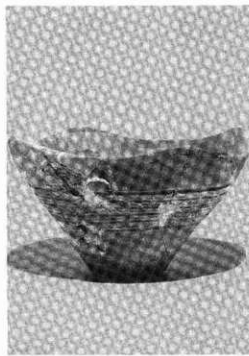
1.



2.



3.



4.

II 黑層出土土器



1.



2.



3.



4.

II 黑陶出土土器



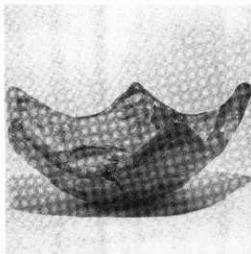
1.



2.



3.

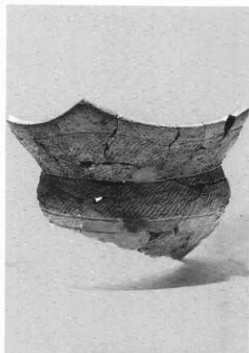


4.

江黑層出土土器



1.



2.

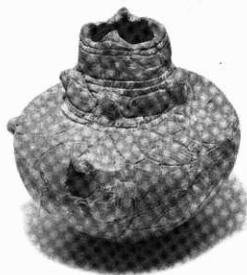


3.



4.

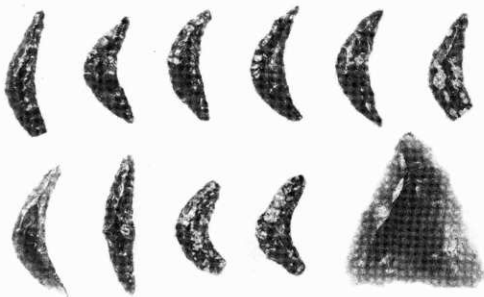
II 黑唇出土土器



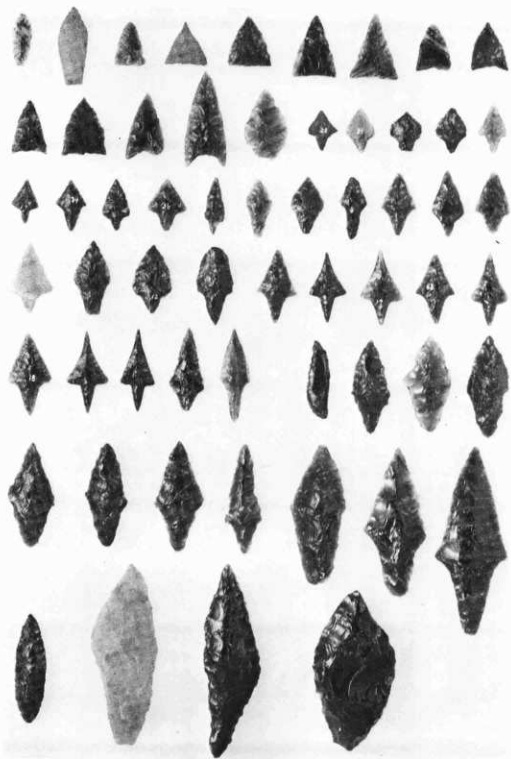
1. Ⅱ黑層出土土器



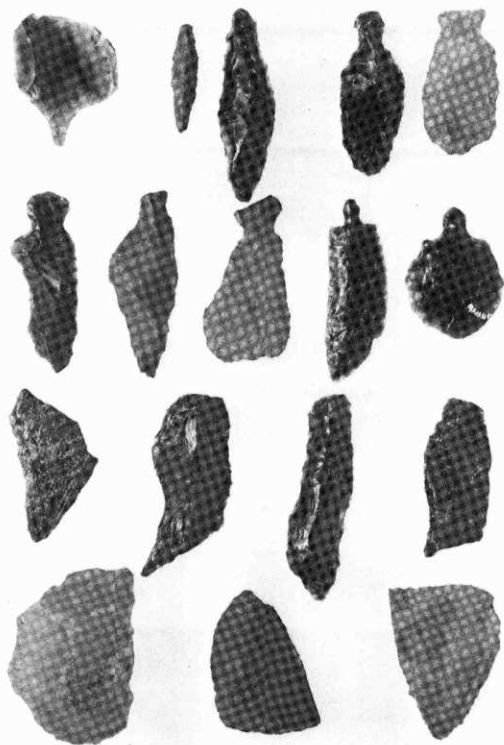
2. Ⅱ黑層出土土器



3. Ⅱ黑層出土異形石器



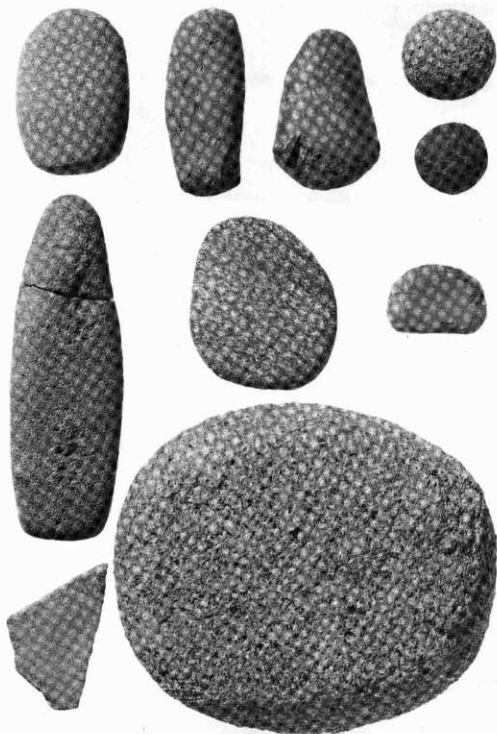
II 黑層出土石器



II 黑層出土石器



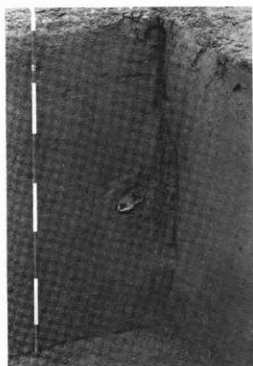
II 黑層出土石器



II 黑層出土石器



1. 旧石器確認調査状況



2. 旧石器出土状況



3. 旧石器



1. 美々5道路遠景



2. I 黒層調査状況



1. I 黑層遺物出土狀況



2. I 黑層出土土器



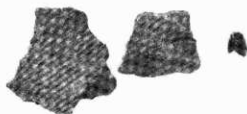
3. I 黑層出土土器



1. II 黑層完掘状況



2. P-1 完掘状況



3. P-1 出土遺物



4. P-3 完掘状況



1.



2.



3.



4.

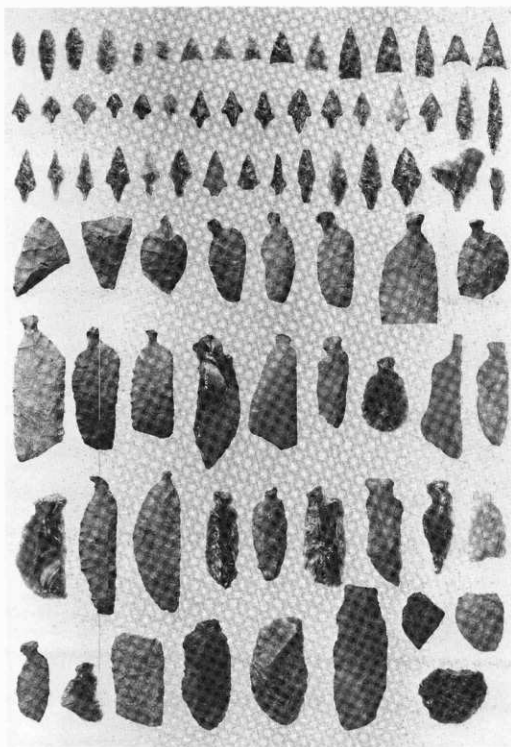


5.

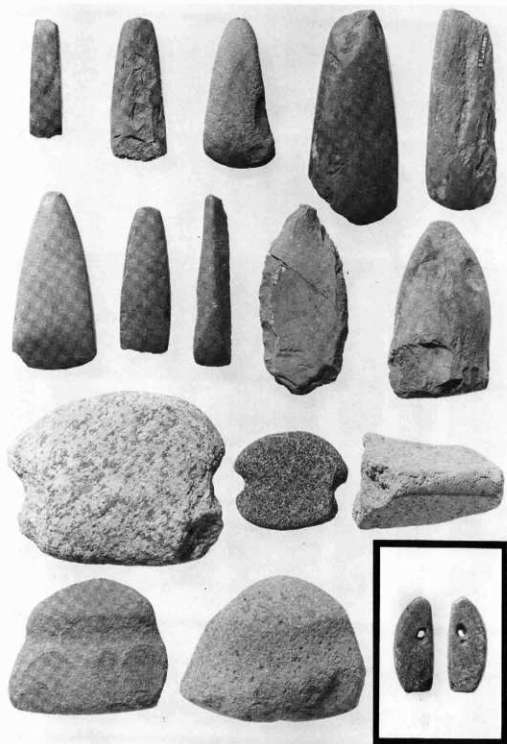


6.

II 黑屋出土土器



II 黑層出土石器



II 黑層出土石器等

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告第17集

美沢川流域の遺跡群 VII

—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和60年 3 月26日 発行

編集 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

印刷 富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西 9 丁目

Tel (011)531-4711

